

秋田県文化財調査報告書534集

赤 塚 遺 跡

—国道13号横堀道路事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 I—

第1分冊 本文（第1・2・3章）編

2024・3

秋田県教育委員会

シンボルマークは、北秋田市白坂（しろざか）遺跡出土の「岩鏡」です。
縄文時代晩期初頭、1992年8月発見、高さ7 cm、凝灰岩。

あか つか
赤 塚 遺 跡

—国道13号横堀道路事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 I—

第1分冊 本文（第1・2・3章）編

2024・3

秋田県教育委員会

序

本県には、これまでに発見された約5,200か所の遺跡をはじめとして、先人の遺産である埋蔵文化財が豊富に残されています。これら埋蔵文化財は、県民が地域の歴史や伝統を理解し、ふるさと秋田への誇りや愛着を高めていく上で、欠くことのできないものであります。

一方、東北中央自動車道をはじめとする高速交通体系の整備や国道の建設は、地域が活発に交流・連携する秋田の創造をめざす開発事業の根幹をなすものであります。本教育委員会では、これら地域開発との調和を図りながら、埋蔵文化財を保存し、活用することに鋭意取り組んでおります。

本報告書は、国道13号横堀道路事業に先立って、令和元年度・3年度に湯沢市において実施した赤塚遺跡の発掘調査成果をまとめたものです。

調査の結果、縄文時代中期後半の複式炉を伴う堅穴建物跡をはじめ、土坑・配石遺構などが見つかり、当該期の土器・石器などが出土し、当時の人々の生活の一端が明らかになりました。

本書がふるさとの歴史資料として広く活用され、埋蔵文化財保護の一助となることを心から願うものであります。

最後になりましたが、発掘調査及びに本報告書の刊行にあたり、御協力いただきました国土交通省東北地方整備局湯沢河川国道事務所、湯沢市教育委員会など関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

令和6年3月

秋田県教育委員会

教育長 安田 浩 幸

例 言

1 本書は、国道13号横堀道路事業に伴い、令和元・3年度に調査した、湯沢市所在の赤塚遺跡の発掘調査報告書である。調査内容については、すでにその一部が埋蔵文化財センター年報などによって公表されているが、本報告書を正式なものとする。

2 調査要項

遺跡名	赤塚遺跡（あかつかいせき）
遺跡略号	9AT
遺跡所在地	秋田県湯沢市横堀字赤塚174ほか
調査期間	令和元年7月16日～11月15日 令和3年6月7日～10月7日 調査面積6,720㎡（令和元年2,921㎡・令和3年3,799㎡）
調査主体者	秋田県教育委員会
調査担当者	宇田川浩一（秋田県埋蔵文化財センター中央調査班 副主幹）令和元年 山村 剛（秋田県埋蔵文化財センター中央調査班 学芸主事）令和元・3年 富樫那美（秋田県埋蔵文化財センター調査班 文化財主任）令和3年 安田 創（秋田県埋蔵文化財センター調査班 文化財主事）令和元年 森谷康平（秋田県埋蔵文化財センター調査班 文化財主事）令和3年
総務担当者	大坂真弓（秋田県埋蔵文化財センター総務班 副主幹）令和元・2年度 小松恵美子（秋田県埋蔵文化財センター総務班 副主幹）令和3～5年度
調査協力機関	国土交通省東北地方整備局湯沢河川国道事務所、湯沢市教育委員会

3 第5図は、国土交通省国土地理院発行の1/25,000電子地形図『湯沢』・『横堀』（令和4年度発行）、第6図は、国土交通省東北地方整備局湯沢河川国道事務所提供の1/1000工事用図面をそれぞれ元に作成した。

4 発掘調査及び整理作業における以下の作業は、下記の業者に委託した。

水準測量及び方眼杭設置業務：(有)羽後測量設計事務所

掘削管理業務：(株)山一建設

遺跡空中写真撮影：(株)みどり光学社

5 理化学分析は放射性炭素年代測定を、(株)バリノ・サーヴェイに、樹種同定を(株)バリノ・サーヴェイ及び(株)吉田生物研究所、黒曜石産地同定を(株)パレオ・ラボに委託した。また土器実測は(株)シン技術コンサル、(株)ラング、(株)一測設計に、石器は(株)ラングに委託し、一部を実測した。

6 本書の執筆は、第2章及び第5章2（3）を富樫が、他は山村が行った。第4章は委託分析調査報告を山村が編集して掲載した。

7 発掘調査及び整理作業において、ご指導・ご助言を賜った以下の方々に記して感謝申し上げます。

能登谷宜康 本間宏（五十音順）

凡 例

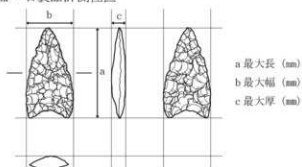
- 1 本報告書に掲載した平面図（遺構実測図）の方位は、世界測地系平面直角座標大第X系による座標北を示す。
- 2 遺構番号は、その種類ごとに略記号を付し、検出順に連番とした。これらの中には、精査と整理作業の過程で欠番としたものもある。遺構に用いた略記号は下記のとおりである。
 SI：堅穴建物跡 SKI：堅穴建物跡（炉なし） SKF：フラスコ状土坑
 SQK：配石土坑 SK：土坑 SQ：配石遺構 SR：土器埋設遺構 SN：焼土遺構
 SL：河川跡 P：柱穴様ピット
- 3 遺跡基本層序はローマ数字で、遺跡内層位はアラビア数字で表記した。また土色記述には農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖2005年版』を参照した。
- 4 遺構・遺物の法量について、[] や () 内の数値は、それぞれ推定値、残存値を表す。
- 5 遺構実測図及び遺物実測図には、それぞれスケールバーを付して縮尺を表示した。
- 6 遺構実測図中に十字記号とともに併記されるグリッド記号の「+」以下の英数字は、各グリッド杭からの方向及び距離を示している。それぞれEWSNは東西南北を示し、例えば「MA50+W2.0m」であれば、MA50杭から真西に2mの地点であることを示す。
- 7 土器及び陶磁器破片の実測図中の拓影及び写真は、平置した遺物を垂直撮影したものであり、必ずしも本来の傾きに対応したものではない。また、土器・陶磁器の破片実測図は、縄文土器については左から外面―断面―内面の順で記載しているが、中世以降の陶磁器に関しては、内面―断面―外面の順で掲載している。
- 8 遺構図・遺物図の網フセ、調整等の凡例は、次のとおりである。これ以外の場合は、各挿図中に凡例を示した。また、遺構図中の土器は赤色で表記した。



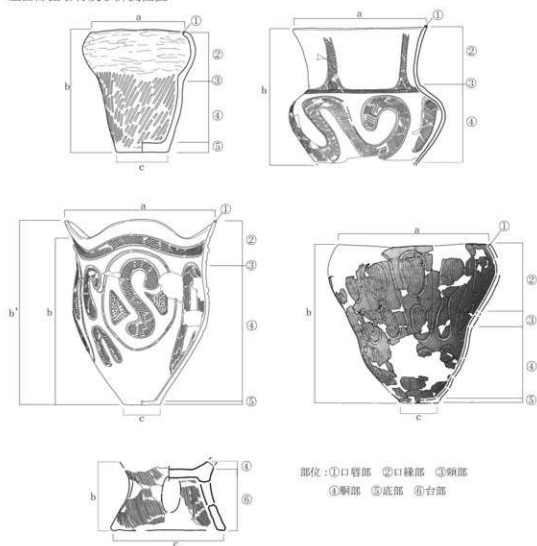
複式戸部位名称



石器・石製品計測位置



土器部位名称及び計測位置



計測位置：a 口径 b 器高 (b' 最大器高) c 底径

総目次

本文目次

第1分冊 本文(第1・2・3章)編

序	i
例言	ii
凡例	iii
目次	v
挿図目次	vi
表目次	ix
図版目次	x
第1章 調査の経過	1(1)
第1節 調査に至る経緯	1(1)
第2節 発掘調査の経過	2(2)
第3節 整理作業の経過	5(5)
第2章 遺跡の位置と環境	6(6)
第1節 地理的環境	6(6)
第2節 歴史的環境	9(9)
第3章 調査の方法と成果	14(14)
第1節 調査の方法	14(14)
1 発掘調査	14(14)
2 整理作業	14(14)
第2節 基本層序	14(14)
第3節 遺物の分類	22(22)
第4節 検出遺構と遺物	30(30)
1 概要	30(30)
2 遺構と遺構内出土遺物	40(40)
①竪穴建物跡	40(40)
②竪穴建物跡(伊なし)	93(93)
③フラスコ状土坑	96(96)
④配石土坑	98(98)
⑤土坑	98(98)
⑥配石遺構	118(118)
⑦土器埋設遺構	120(120)
⑧焼土遺構	122(122)
⑨河川跡	130(130)
⑩柱穴様ビット	131(131)
3 遺構外出土遺物	132(132)

第2分冊 本文(第4・5章)、図版編

第4章 理化学的分析	1(379)
第1節 放射性炭素年代測定	1(379)
第2節 出土炭化物の樹種調査結果	12(390)
第3節 黒曜石産地同定	13(391)
第4節 土壌分析	17(395)
第5節 赤色顔料の分析	22(400)
第5章 総括	26(404)

図版

報告書抄録

付図

挿 図 目 次

第1分冊 本文(第1・2・3章) 編

第1図 一般国道13号横駆道路と関連遺跡	1(1)	第35図 S I45・SK I15竪穴建物跡、SK80土坑	154(154)
第2図 遺跡位置図	6(6)	第36図 S I46竪穴建物跡(1)	155(155)
第3図 遺跡周辺の地形区分図・地形分類図	7(7)	第37図 S I46(2)・47(1)竪穴建物跡	156(156)
第4図 遺跡周辺の表層地形図	8(8)	第38図 S I47竪穴建物跡(2)	157(157)
第5図 赤塚遺跡と周辺遺跡位置図	10(10)	第39図 S I48竪穴建物跡	158(158)
第6図 調査区と周辺地形図	15(15)	第40図 S I56・SK I42竪穴建物跡、SK94・95土坑	159(159)
第7図 基本層序図(1)	17(17)	第41図 S I58竪穴建物跡	160(160)
第8図 基本層序図(2)	18(18)	第42図 S I60竪穴建物跡、SK141・142土坑、 SN447・448焼土遺構	161(161)
第9図 基本層序図(3)	19(19)	第43図 S I62・64竪穴建物跡	162(162)
第10図 基本層序図(4)	20(20)	第44図 S I63竪穴建物跡(1)	163(163)
第11図 基本層序図(5)	21(21)	第45図 S I63竪穴建物跡(2)	164(164)
第12図 出土縄文土器形状分類図	26(26)	第46図 S I73竪穴建物跡	165(165)
第13図 出土中期縄文土器文様凡例図(1)	27(27)	第47図 S I75竪穴建物跡(1)	166(166)
第14図 出土中期縄文土器文様凡例図(2)	28(28)	第48図 S I75竪穴建物跡(2)	167(167)
第15図 出土中期縄文土器文様凡例図(3)	29(29)	第49図 S I81竪穴建物跡	168(168)
第16図 調査区全体の遺構配置と割り付け	31・32(31・32)	第50図 S I91竪穴建物跡	169(169)
第17図 遺構配置図(1)	33(33)	第51図 S I98竪穴建物跡	170(170)
第18図 遺構配置図(2)	34(34)	第52図 S I100竪穴建物跡	171(171)
第19図 遺構配置図(3)	35(35)	第53図 S I101竪穴建物跡	172(172)
第20図 遺構配置図(4)	36(36)	第54図 S I102竪穴建物跡	173(173)
第21図 遺構配置図(5)	37(37)	第55図 S I103竪穴建物跡	174(174)
第22図 遺構配置図(6)	38(38)	第56図 S I105竪穴建物跡(1)	175(175)
第23図 遺構配置図(7)	39(39)	第57図 S I105竪穴建物跡(2)	176(176)
第24図 S I103竪穴建物跡(1)	143(143)	第58図 S I106・132・179竪穴建物跡	177(177)
第25図 S I103竪穴建物跡(2)	144(144)	第59図 S I112竪穴建物跡(1)	178(178)
第26図 S I104(1)・72竪穴建物跡	145(145)	第60図 S I112竪穴建物跡(2)	179(179)
第27図 S I104(2)竪穴建物跡	146(146)	第61図 S I120竪穴建物跡、SK152土坑	180(180)
第28図 S I10・12竪穴建物跡	147(147)	第62図 S I122竪穴建物跡、SN244焼土遺構	181(181)
第29図 S I11竪穴建物跡	148(148)	第63図 S I139竪穴建物跡	182(182)
第30図 S I114竪穴建物跡	149(149)	第64図 S I148竪穴建物跡	183(183)
第31図 S I26竪穴建物跡(1)・P201柱穴様ビット(1)	150(150)	第65図 S I150・151・175竪穴建物跡(1)	184(184)
第32図 S I26竪穴建物跡(2)・P201柱穴様ビット(2)	151(151)	第66図 S I150・151・175竪穴建物跡(2)	185(185)
第33図 S I27竪穴建物跡	152(152)	第67図 S I153竪穴建物跡	186(186)
第34図 S I41竪穴建物跡	153(153)		

第68図	S I 157 竪穴建物跡	187 (187)	第115図	S K 423・424・425・433・436 土坑	234 (234)
第69図	S I 164 竪穴建物跡 (1)	188 (188)	第116図	S K 437・438・440・1003・1142・1520 土坑、 P 1672 柱穴様ビット	235 (235)
第70図	S I 164 竪穴建物跡 (2)	189 (189)	第117図	S Q 05・88・90・183・193・229 配石遺構	236 (236)
第71図	S I 188 竪穴建物跡 (1)	190 (190)	第118図	S Q 230・231・412 配石遺構、S R 09・19・ 83・235・434 土器設置遺構	237 (237)
第72図	S I 188 竪穴建物跡 (2)	191 (191)	第119図	S N 21・22・29・30・76・79・104・114・123・124 焼土遺構、P 1025・1026 柱穴様ビット	238 (238)
第73図	S I 196 竪穴建物跡 (1)	192 (192)	第120図	S N 125・126・127・130・131・135・136・ 137・149・155・158 焼土遺構	239 (239)
第74図	S I 196 (2)・197・212・218 竪穴建物跡	193 (193)	第121図	S N 162・167・173・174・181・208・217 焼土 遺構、P 1267・1274 柱穴様ビット	240 (240)
第75図	S I 202 竪穴建物跡	194 (194)	第122図	S N 304・413・427 焼土遺構、P 1550 柱穴様ビット	241 (241)
第76図	S I 225 竪穴建物跡	195 (195)	第123図	遺構内出土土器 (1)	242 (242)
第77図	S I 236 竪穴建物跡	196 (196)	第124図	遺構内出土土器 (2)	243 (243)
第78図	S I 301 竪穴建物跡 (1)	197 (197)	第125図	遺構内出土土器 (3)	244 (244)
第79図	S I 301 竪穴建物跡 (2)	198 (198)	第126図	遺構内出土土器 (4)	245 (245)
第80図	S I 302 竪穴建物跡 (1)	199 (199)	第127図	遺構内出土土器 (5)	246 (246)
第81図	S I 302 竪穴建物跡 (2)	200 (200)	第128図	遺構内出土土器 (6)	247 (247)
第82図	S I 306 竪穴建物跡 (1)	201 (201)	第129図	遺構内出土土器 (7)	248 (248)
第83図	S I 306 竪穴建物跡 (2)	202 (202)	第130図	遺構内出土土器 (8)、土製品 (1)	249 (249)
第84図	S I 307 竪穴建物跡	203 (203)	第131図	遺構内出土土器 (9)	250 (250)
第85図	S I 312 竪穴建物跡	204 (204)	第132図	遺構内出土土器 (10)	251 (251)
第86図	S I 314 竪穴建物跡	205 (205)	第133図	遺構内出土土器 (11)、土製品 (2)	252 (252)
第87図	S I 318 竪穴建物跡 (1)	206 (206)	第134図	遺構内出土土器 (12)、土製品 (3)	253 (253)
第88図	S I 317・318 (2) 竪穴建物跡	207 (207)	第135図	遺構内出土土器 (13)、土製品 (4)	254 (254)
第89図	S I 403 竪穴建物跡 (1)、S K 442・444 土坑、 S N 443 焼土遺構	208 (208)	第136図	遺構内出土土器 (14)	255 (255)
第90図	S I 403 竪穴建物跡 (2)	209 (209)	第137図	遺構内出土土器 (15)	256 (256)
第91図	S I 407 竪穴建物跡	210 (210)	第138図	遺構内出土土器 (16)、土製品 (5)	257 (257)
第92図	S I 410・418 (1) 竪穴建物跡	211 (211)	第139図	遺構内出土土器 (17)、土製品 (6)	258 (258)
第93図	S I 418 竪穴建物跡 (2)	212 (212)	第140図	遺構内出土土器 (18)	259 (259)
第94図	S I 420 竪穴建物跡	213 (213)	第141図	遺構内出土土器 (19)	260 (260)
第95図	S I 426 竪穴建物跡 (1)	214 (214)	第142図	遺構内出土土器 (20)、土製品 (7)	261 (261)
第96図	S I 426 竪穴建物跡 (2)	215 (215)	第143図	遺構内出土土器 (21)	262 (262)
第97図	S I 435 竪穴建物跡 (1)	216 (216)	第144図	遺構内出土土器 (22)	263 (263)
第98図	S I 435 竪穴建物跡 (2)	217 (217)	第145図	遺構内出土土器 (23)	264 (264)
第99図	S I 435 竪穴建物跡 (3)	218 (218)	第146図	遺構内出土土器 (24)、土製品 (8)	265 (265)
第100図	S I 435 竪穴建物跡 (4)	219 (219)	第147図	遺構内出土土器 (25)	266 (266)
第101図	S K I 25 竪穴建物跡 (1)	220 (220)	第148図	遺構内出土土器 (26)	267 (267)
第102図	S K I 25 (2)・207 竪穴建物跡、 P 1059 柱穴様ビット	221 (221)	第149図	遺構内出土土製品 (9)	268 (268)
第103図	S K I 405 竪穴建物跡、P 414	222 (222)	第150図	遺構内出土土器 (27)	269 (269)
第104図	S K F 216・219・305・406 フラスコ状土坑、 S K 411 土坑、P 1667 柱穴様ビット	223 (223)	第151図	遺構内出土土器 (28)	270 (270)
第105図	S K F 422 フラスコ状土坑、S Q K 93・113・133 配石土坑、S K 06・08・13・242 土坑	224 (224)	第152図	遺構内出土土器 (29)	271 (271)
第106図	S K I 7・18・20・28・40 土坑、P 1272 柱穴様ビット	225 (225)	第153図	遺構内出土土器 (30)、土製品 (10)	272 (272)
第107図	S K 36・37・38・43・50・52・89 土坑、 P 1273・1409・1410 柱穴様ビット	226 (226)	第154図	遺構内出土土器 (31)	273 (273)
第108図	S K 92・107・108・118・121・134 土坑、 P 1044・1061・1265 柱穴様ビット	227 (227)	第155図	遺構内出土土器 (32)	274 (274)
第109図	S K 140・144・145・147・154 土坑、 P 109 柱穴様ビット	228 (228)	第156図	遺構内出土土器 (33)	275 (275)
第110図	S K 159・160・169・171・177・178・180 土坑	229 (229)	第157図	遺構内出土土器 (34)	276 (276)
第111図	S K 186・187・189・190・191・195・198 土坑	230 (230)	第158図	遺構内出土土器 (35)	277 (277)
第112図	S K 204・206・211・214・220・240 土坑	231 (231)	第159図	遺構内出土土器 (36)	278 (278)
第113図	S K 221・226・227・232・233・246・248・249 土坑、 P 1048 柱穴様ビット	232 (232)	第160図	遺構内出土土器 (37)	279 (279)
第114図	S K 250・310・311・408・415・419・441 土坑、 P 1669 柱穴様ビット	233 (233)	第161図	遺構内出土土器 (38)	280 (280)
			第162図	遺構内出土土器 (39)	281 (281)
			第163図	遺構内出土土器 (40)	282 (282)
			第164図	遺構内出土土器 (41)	283 (283)
			第165図	遺構内出土土器 (42)	284 (284)
			第166図	遺構内出土土器 (43)	285 (285)
			第167図	遺構内出土土器 (44)	286 (286)
			第168図	遺構内出土土器 (45)	287 (287)

第169回	遺構内出土土器 (46)	288 (288)	第201回	遺構内出土土器 (1)	320 (320)
第170回	遺構内出土土器 (47)	289 (289)	第202回	遺構内出土土器 (2)、石製品 (1) ...	321 (321)
第171回	遺構内出土土器 (48)、土製品 (11) ...	290 (290)	第203回	遺構内出土土器 (3)	322 (322)
第172回	遺構内出土土器 (49)、土製品 (12) ...	291 (291)	第204回	遺構内出土土器 (4)	323 (323)
第173回	遺構内出土土器 (50)	292 (292)	第205回	遺構内出土土器 (5)、石製品 (2) ...	324 (324)
第174回	遺構内出土土器 (51)	293 (293)	第206回	遺構内出土土器 (6)	325 (325)
第175回	遺構内出土土器 (52)	294 (294)	第207回	遺構内出土土器 (7)	326 (326)
第176回	遺構内出土土器 (53)	295 (295)	第208回	遺構内出土土器 (8)	327 (327)
第177回	遺構内出土土器 (54)	296 (296)	第209回	遺構内出土土器 (9)	328 (328)
第178回	遺構内出土土器 (55)、遺構外出土土器 (1)	297 (297)	第210回	遺構内出土土器 (10)	329 (329)
第179回	遺構外出土土器 (2)	298 (298)	第211回	遺構内出土土器 (11)	330 (330)
第180回	遺構外出土土器 (3)	299 (299)	第212回	遺構内出土土器 (12)	331 (331)
第181回	遺構外出土土器 (4)	300 (300)	第213回	遺構内出土土器 (13)、石製品 (3) ...	332 (332)
第182回	遺構外出土土器 (5)	301 (301)	第214回	遺構内出土土器 (14)	333 (333)
第183回	遺構外出土土器 (6)	302 (302)	第215回	遺構内出土土器 (15)	334 (334)
第184回	遺構外出土土器 (7)	303 (303)	第216回	遺構外出土土器 (1)	335 (335)
第185回	遺構外出土土器 (8)	304 (304)	第217回	遺構外出土土器 (2)	336 (336)
第186回	遺構外出土土器 (9)	305 (305)	第218回	遺構外出土土器 (3)	337 (337)
第187回	遺構外出土土器 (10)	306 (306)	第219回	遺構外出土土器 (4)	338 (338)
第188回	遺構外出土土器 (11)	307 (307)	第220回	遺構外出土土器 (5)	339 (339)
第189回	遺構外出土土器 (12)	308 (308)	第221回	遺構外出土土器 (6)	340 (340)
第190回	遺構外出土土器 (13)	309 (309)	第222回	遺構外出土土器 (7)	341 (341)
第191回	遺構外出土土器 (14)	310 (310)	第223回	遺構外出土土器 (8)	342 (342)
第192回	遺構外出土土器 (15)	311 (311)	第224回	遺構外出土土器 (9)	343 (343)
第193回	遺構外出土土器 (16)	312 (312)	第225回	遺構外出土土器 (10)	344 (344)
第194回	遺構外出土土器 (17)	313 (313)	第226回	遺構外出土土器 (11)	345 (345)
第195回	遺構外出土土器 (18)	314 (314)	第227回	遺構外出土土器 (12)	346 (346)
第196回	遺構外出土土器 (19)	315 (315)	第228回	遺構外出土土器 (13)	347 (347)
第197回	遺構外出土土器 (20)	316 (316)	第229回	遺構外出土土製品 (1)	348 (348)
第198回	遺構外出土土製品 (1)	317 (317)	第230回	遺構外出土土器 (14)	349 (349)
第199回	遺構外出土土製品 (2)	318 (318)	第231回	遺構外出土土器 (15)	350 (350)
第200回	遺構外出土土製品 (3)	319 (319)	第232回	遺構内外出土陶磁器、銭貨	351 (351)

第2分冊 本文 (第4・5章)、図版編

第233回	暦年較正結果 (1)	7 (385)	第249回	遺構変遷図 (2) 大木9 a 式期	44 (422)
第234回	暦年較正結果 (2)	7 (385)	第250回	遺構変遷図 (3) 大木9 b 式期	45 (423)
第235回	樹種同定顕微鏡写真 (1)	8 (386)	第251回	遺構変遷図 (4) 大木9 ~ 10 a 式期	46 (424)
第236回	樹種同定顕微鏡写真 (2)	9 (387)	第252回	遺構変遷図 (5) 大木9 b・10 a 式期	47 (425)
第237回	樹種同定顕微鏡写真 (3)	10 (388)	第253回	遺構変遷図 (6) 大木10 a 式期	48 (426)
第238回	樹種同定顕微鏡写真 (4)	11 (389)	第254回	赤塚遺跡遺構外出土土器出土分布図 ...	49 (427)
第239回	出土炭化物サンプル写真	12 (390)	第255回	赤塚遺跡複式炉・土器埋設炉・石圍炉の集成 (1)	50 (428)
第240回	黒曜石産地分布図 (東日本)	13 (391)	第256回	赤塚遺跡複式炉・土器埋設炉・石圍炉の集成 (2)	51 (429)
第241回	黒曜石産地推定判別図 (1)	16 (394)	第257回	赤塚遺跡複式炉廃絶後の状況分類集成 (1)	52 (430)
第242回	黒曜石産地推定判別図 (2)	16 (394)	第258回	赤塚遺跡複式炉廃絶後の状況分類集成 (2)	53 (431)
第243回	花粉分析プレパラートの状況・植物珪酸体	21 (399)	第259回	赤塚遺跡の土坑墓の礎の位置と出土状況	54 (432)
第244回	試料採取位置と採取試料の生物顕微鏡写真	24 (402)			
第245回	採取試料の蛍光X線分析結果	25 (403)			
第246回	竪穴建物跡変遷図	37 (415)			
第247回	赤塚遺跡竪穴建物跡消長図	40 (418)			
第248回	遺構変遷図 (1) 大木9 a 式期 (8 b 式期含む)	43 (421)			

表 目 次

第1分冊 本文(第1・2・3章) 編

第1表	赤塚遺跡周辺の遺跡一覧表(1)	12(12)	第40表	S I 302柱穴一覧表	200(200)
第2表	赤塚遺跡周辺の遺跡一覧表(2)	13(13)	第41表	S I 306柱穴一覧表	202(202)
第3表	柱穴様ビット一覧表(1)	139(139)	第42表	S I 307柱穴一覧表	203(203)
第4表	柱穴様ビット一覧表(2)	140(140)	第43表	S I 318柱穴一覧表	207(207)
第5表	柱穴様ビット一覧表(3)	141(141)	第44表	S I 403柱穴一覧表	209(209)
第6表	柱穴様ビット一覧表(4)	142(142)	第45表	S I 420柱穴一覧表	213(213)
第7表	S I 103柱穴一覧表	144(144)	第46表	S I 426柱穴一覧表	214(214)
第8表	S I 104柱穴一覧表	145(145)	第47表	S I 435柱穴一覧表	216(216)
第9表	S I 110柱穴一覧表	147(147)	第48表	S K I 25柱穴一覧表	221(221)
第10表	S I 112柱穴一覧表	147(147)	第49表	S K I 405柱穴一覧表	222(222)
第11表	S I 114柱穴一覧表	149(149)	第50表	土器一覧表(1)	352(352)
第12表	S I 26柱穴一覧表	151(151)	第51表	土器一覧表(2)	353(353)
第13表	S I 27柱穴一覧表	152(152)	第52表	土器一覧表(3)	354(354)
第14表	S I 41柱穴一覧表	153(153)	第53表	土器一覧表(4)	355(355)
第15表	S I 46柱穴一覧表	155(155)	第54表	土器一覧表(5)	356(356)
第16表	S I 47柱穴一覧表	157(157)	第55表	土器一覧表(6)	357(357)
第17表	S I 48柱穴一覧表	158(158)	第56表	土器一覧表(7)	358(358)
第18表	S K I 42柱穴一覧表	159(159)	第57表	土器一覧表(8)	359(359)
第19表	S I 58柱穴一覧表	160(160)	第58表	土器一覧表(9)	360(360)
第20表	S I 60柱穴一覧表	161(161)	第59表	土器一覧表(10)	361(361)
第21表	S I 63柱穴一覧表	164(164)	第60表	土器一覧表(11)	362(362)
第22表	S I 73柱穴一覧表	165(165)	第61表	土器一覧表(12)	363(363)
第23表	S I 75柱穴一覧表	167(167)	第62表	土器一覧表(13)	364(364)
第24表	S I 81柱穴一覧表	168(168)	第63表	土器一覧表(14)	365(365)
第25表	S I 91柱穴一覧表	169(169)	第64表	土器一覧表(15)	366(366)
第26表	S I 101柱穴一覧表	172(172)	第65表	土器一覧表(16)	367(367)
第27表	S I 102柱穴一覧表	173(173)	第66表	土器一覧表(17)	368(368)
第28表	S I 179柱穴一覧表	177(177)	第67表	土器一覧表(18)	369(369)
第29表	S I 112柱穴一覧表	179(179)	第68表	土器一覧表(19)	370(370)
第30表	S I 120柱穴一覧表	180(180)	第69表	土製品一覧表	371(371)
第31表	S I 122柱穴一覧表	181(181)	第70表	石器・石製品一覧表(1)	372(372)
第32表	S I 139柱穴一覧表	182(182)	第71表	石器・石製品一覧表(2)	373(373)
第33表	S I 148柱穴一覧表	183(183)	第72表	石器・石製品一覧表(3)	374(374)
第34表	S I 150柱穴一覧表	185(185)	第73表	石器・石製品一覧表(4)	375(375)
第35表	S I 151柱穴一覧表	185(185)	第74表	石器・石製品一覧表(5)	376(376)
第36表	S I 164柱穴一覧表	189(189)	第75表	陶磁器一覧表	377(377)
第37表	S I 225柱穴一覧表	195(195)	第76表	銭貨一覧表	377(377)
第38表	S I 236柱穴一覧表	196(196)			
第39表	S I 301柱穴一覧表	198(198)			

第2分冊 本文(第4・5章)、図版編

第77表	樹種同定結果	4(382)	第89表	赤塚遺跡検出型穴建物跡一覧表(2)	39(417)
第78表	放射性炭素年代測定結果(1)	5(383)	第90表	赤塚遺跡検出土坑一覧表(1)	41(419)
第79表	放射性炭素年代測定結果(2)	6(384)	第91表	赤塚遺跡検出土坑一覧表(2)	42(420)
第80表	出土炭化物同定表	12(390)	第92表	A型I類(複式炉)時期別集計表	52(430)
第81表	分析対象黒曜石	13(391)	第93表	A型II類(複式炉)時期別集計表	52(430)
第82表	東日本黒曜石産地の判別群	14(392)	第94表	B型(石圍炉)時期別集計表	52(430)
第83表	測定値および産地推定結果	15(393)	第95表	赤塚遺跡検出土坑墓一覧表	54(432)
第84表	土壌分析試料	17(395)	第96表	報告書掲載土器口縁分類分布表(1)	54(432)
第85表	花粉分析結果	18(396)	第97表	報告書掲載土器口縁分類分布表(2)	54(432)
第86表	植物性酸体分析結果	19(397)	第98表	報告書掲載土器口縁分類分布表(3)	54(432)
第87表	赤色分析対象遺物および分析結果	23(401)	第99表	報告書掲載土器口縁分類分布表(4)	54(432)
第88表	赤塚遺跡検出型穴建物跡一覧表(1)	38(416)			

図 版 目 次

第2分冊 本文(第4・5章)、図版編

図版1 赤塚遺跡空撮(1976年)	図版41 縄文土器(1)
図版2 遺跡遠景	図版42 縄文土器(2)
図版3 遺跡近景(1)	図版43 縄文土器(3)
図版4 遺跡近景(2)	図版44 縄文土器(4)
図版5 遺跡近景(3)	図版45 縄文土器(5)
図版6 基本土層(1)	図版46 縄文土器(6)
図版7 基本土層(2)	図版47 縄文土器(7)
図版8 S 103・04	図版48 縄文土器(8)
図版9 S 104・10・11・12	図版49 縄文土器(9)
図版10 S 114・27・41	図版50 縄文土器(10)
図版11 S 145・46・47	図版51 縄文土器(11)
図版12 S 148・58・60	図版52 縄文土器(12)
図版13 S 162・63・64・72・73	図版53 縄文土器(13)
図版14 S 175・81・91	図版54 縄文土器(14)
図版15 S 198・100・101・102	図版55 縄文土器(15)
図版16 S 1102・103・105	図版56 縄文土器(16)
図版17 S 1106・112	図版57 縄文土器(17)
図版18 S 1120・122・132・139	図版58 縄文土器(18)
図版19 S 1148・150・151・153・175	図版59 縄文土器(19)
図版20 S 1157・164・179・188	図版60 縄文土器(20)
図版21 S 1188・196・197・218	図版61 縄文土器(21)
図版22 S 1202・212・218	図版62 縄文土器(22)
図版23 S 1225・236・301	図版63 縄文土器(23)
図版24 S 1301・302・306	図版64 縄文土器(24)
図版25 S 1306・307・312	図版65 縄文土器(25)
図版26 S 1312・314・317	図版66 縄文土器(26)
図版27 S 1318・403・407	図版67 縄文土器(27)
図版28 S 1407・410・418	図版68 縄文土器(28)
図版29 S 1420・426・435	図版69 縄文土器(29)
図版30 S 1435	図版70 縄文土器(30)
図版31 S K 115・42・405、S K F 216・219・305	図版71 縄文土器(31)
図版32 S K F 406・422、S Q K 93・113・133、 S K 06・242・411	図版72 縄文土器(32)
図版33 S K 08・13・17・18・20・28・36・37・40	図版73 縄文土器(33)
図版34 S K 43・50・89・92・121・134・140、 S Q 88・90	図版74 縄文土器(34)、土製品(1)
図版35 S K 144・159・171・177・178・180・221・227	図版75 縄文土器(35)、土偶
図版36 S K 226・232・310・311・415・419・423・424	図版76 土製品(2)、石器・石製品(1)
図版37 S K 425・433・436・437・438・440、 S Q 05・88	図版77 石器・石製品(2)
図版38 S Q 90・183・193・229・230・231・412、 S R 09	図版78 石器・石製品(3)
図版39 S R 19・83・235・434、S N 29・30・130・135 ・173	図版79 石器・石製品(4)
図版40 S N 181・208・304・413、S L 316、見学会の 様子	図版80 石器・石製品(5)
	図版81 石器・石製品(6)
	図版82 石器・石製品(7)、陶磁器

付図

付図1 赤塚遺跡遺構配置図(調査区東) 200分の1	付図2 赤塚遺跡遺構配置図(調査区西) 200分の1
----------------------------	----------------------------

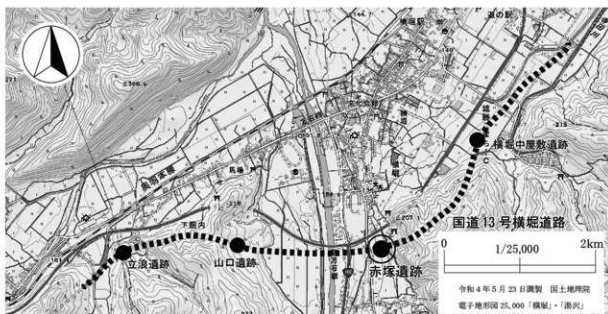
第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯

一般国道13号は、福島市を起点とし秋田市に至る総延長303.7kmの主要幹線道路として、重要な役割を果たしてきた。しかし、近年湯沢・横手両市街地を中心に、交通量の増加と車両の大型化に伴う交通渋滞が慢性化し、騒音・振動などによる沿道住民の生活環境の悪化も指摘されていた。このような諸問題を解消するために、1984（昭和59）年度には横手南バイパス、1985（昭和60）年度には湯沢バイパスの建設事業が着手された。その後種々検討が加えられて、一般国道13号湯沢横手道路が高規格幹線道路として整備が進められてきた。この道路は冬季の安全性向上、走行安定性の向上、速度低下による時間損失の解消と災害に強いネットワークの形成を図るものである。湯沢横手道路は、横手IC～十文字IC間、十文字IC～湯沢IC間、湯沢IC～雄勝こまちIC間、上院内IC～下院内IC間が順次に開通し、全線で共有を開始している。

横堀道路も高規格幹線道路で、起点の雄勝こまちICから終点の下院内ICの3.7kmのバイパスである。平成15年から事業化され、現在も工事進行中である。

計画路線内には埋蔵文化財が包蔵されている可能性があることから、工事に先立って国土交通省東北地方整備局湯沢河川国道事務所（以下、湯沢河川国道事務所）より、文化財保護法に基づく埋蔵文化財包蔵地の確認と今後の対応について秋田県教育委員会に調査の依頼があった。これを受けて秋田県教育委員会は、計画路線内の分布調査及び確認調査を平成30年9月から10月にかけて実施し、区間内に赤塚遺跡をはじめ、横堀中屋敷遺跡等を確認した。その後、平成30年9月25日～10月4日まで秋田県埋蔵文化財センターが行った赤塚遺跡の確認調査の結果を受け、秋田県教育委員会は湯沢河川国道事務所に工事区域内の6,720㎡の発掘調査が必要であることを通知した。湯沢河川国道事務所と秋田県教育委員会は協議を行い、令和元・3年に秋田県埋蔵文化財センターが赤塚遺跡の発掘調査を実施することとなった。



第1図 一般国道13号横堀道路と関連遺跡

第2節 発掘調査の経過

調査は令和元年8月5日～11月15日、令和3年6月7日～10月7日に行われた。掘削作業管理業務を委託し、令和元年度は調査員3人、現場代理人1人、作業員39人、令和3年度は調査員3人、現場代理人1人、作業員42人の体制で本調査を実施した。なお、本調査に先立ち、重機による表土除去を令和元年7月16日(火)～24日(水)、令和3年5月17日(月)～6月1日(火)に実施した。本発掘調査の経過は以下の通りである。

令和元年度

【第1週】8月5日(月)～8月8日(木)

5日、発掘調査の開始。発掘機材の搬入、環境整備を実施。6日～8日にかけて、ベルトコンベアを設置。用水路切り回しに伴い、調査区東側先行区(用水路東)の表土除去、確認調査時に設置されたトレンチの掘り起こし及び精査。6日、遺跡測量システムの講習。

【第2週】8月19日(月)～22日(木)

確認調査時に設置されたトレンチの掘り起こし及び精査。調査区東側先行区で土器が多量に出土するS I 04竪穴建物跡を、調査区北西端でS I 03竪穴建物跡の複式炉を検出。今週の見学者計3名。

【第3週】8月26日(月)～30日(金)

調査区北西端でS R 19土器埋設遺構を検出。また、周辺の土器出土状況から複数棟の竪穴建物跡の検出が予想される。調査区南西端でS I 15竪穴建物跡、北東端でS I 11竪穴建物跡を検出。30日湯沢河川国道事務所、文化財保護室、高修興業が用水路切り直しに関する協議のため来跡。

【第4週】9月2日(月)～9月6日(金)

調査区北端でS I 41竪穴建物跡を、調査区東側先行区で複式炉を伴うS I 45竪穴建物跡を検出。S I 04竪穴建物跡が北側で別の竪穴建物跡(S I 72)と重複するのを確認。また、S L 252河川跡に続く平坦面で、洪水堆積土を掘り下げて検出されたS I 48竪穴建物跡を精査。周辺の状況から複数棟の建物跡の検出が想定される。今週の見学者計1名。

【第5週】9月9日(月)～13日(金)

調査区北西端のS R 19土器埋設遺構から赤彩土器が出土。調査区北側S K 17・28土坑を精査。調査区南東、S L 252河川跡付近にトレンチを設定。地山面と想定した面から、さらに下30cmで土器が出土。S I 73・81竪穴建物跡を検出。

【第6週】9月17日(火)～9月20日(金)

18日～20日、高修興業による用水路切り直し工事。調査区北西端で合計17棟、同じく調査区南東S L 252河川跡付近の平坦部でも10棟の竪穴建物跡を検出。調査区北西端、竪穴建物群南西側でS Q 88・90配石遺構及び、S K 89土坑を検出。調査区北では、S K 92土坑の精査、埋土から大木8 b式期の深鉢土器が出土。

【第7週】9月24日(火)～27日(金)

24日～26日、高修興業による用水路切り直し工事及び、用水路下を重機による表土除去。用水路下は攪乱のため遺構検出の可能性が低い。U字溝を取り外し後の土層断面から、S I 122・179竪穴建物跡を検出。またS I 47竪穴建物跡の精査及びS I 112竪穴建物跡の検出及び精査。

【第8週】9月30日(月)～10月4日(金)

調査区北西及び南東の竪穴建物跡群の精査。S I 104竪穴建物跡の直下からS I 140竪穴建物跡を検出。調査区西側の粗掘り開始。3日、湯沢市文化財審議委員会10名来跡。今週の見学者15名。

【第9週】10月7日(月)～11日(金)

7日、空中写真撮影。大仙市ベアール講座受講者19名見学のため来跡。S I 47竪穴建物跡周辺の調査終了。S I 105竪穴建物跡から土偶、S I 112竪穴建物跡から磨製石斧が出土。台風19号に対する現場養生。今週の見学者計21名。

【第10週】10月15日(火)～18日(金)

ベルトコンベアの移設及び一部撤去。重機によるS L 252河川跡の深掘り調査及び土層断面の写真撮影。下層にやや未発達の高植土層を確認。遺物は散見するが、遺構はないため調査完了とした。今週の見学者計1名。

【第11週】10月21日(月)、23日(水)～25日(金)

調査区西側でのトレンチの土層断面より、調査区南東同様、遺物包含層が洪水堆積土の間に入り込んでいる状態を確認。見学会準備。今週の見学者計1名。

※26日(土)遺跡見学会を開催、見学者95名が来跡。27日(日)秋田魁新聞に遺跡見学会についての記事が掲載。

【第12週】10月28日(月)～11月1日(金)

S I 112竪穴建物跡に付属する複式炉が精査により2時期あることが判明。MC 47以西を重機で掘り下げ、板状土偶が出土、他土坑及び焼土遺構を数基検出。今週の見学者計1名。

【第13週】11月5日(火)～8日(金)

調査区西側で検出した竪穴建物跡の精査。S K 199土坑から有孔石製品が出土。S K 235土器埋設遺構の精査。5日、雄勝高校教員及び生徒計24名が見学のため来跡。8日、秋田魁新報取材のため来跡。今週の見学者計28名。

【第14週】11月11日(月)～15日(金)

12日、調査終了写真撮影。調査区内の一部埋め戻し。撤収作業。14日、湯沢河川国道事務所、文化財保護室が現地引き渡し協議のため来跡。15日、発掘機材の搬出。

令和3年度

【第1週】6月7日(月)～11日(金)

7日、発掘機材の搬入。環境整備。7～9日、ベルトコンベアの配線工事。9日、遺跡測量システムの講習。基本土層の設定及び掘削。

【第2週】6月14日(月)～18日(金)

調査区北西S I 301・302竪穴建物跡の検出及び精査。調査区南東での基本土層の精査。今週の見学者計1名。

【第3週】6月21日(月)～24日(木)

S I 301・403・405竪穴建物跡、S K 406土坑の精査。S I 301・403竪穴建物内から複式炉を検出。

【第4週】6月28日(月)～7月2日(金)

S I 301竪穴建物跡から壁溝を、S I 302竪穴建物跡からは複式炉を検出。S K 406土坑はオーバハンクしていることから貯蔵穴と推定。今週の見学者計2名。

【第5週】7月5日(月)～9日(金)

7日、湯沢市教育委員会による送電設備撤去工事の立ち会い。重複するS I 306・307竪穴建物跡を検出。S I 302竪穴建物跡の完掘写真撮影。S I 403建物跡の土層断面図作成。基本土層観察用トレンチから、複式炉の石組を検出し、S I 407竪穴建物跡とした。

【第6週】7月12日（月）～16日（金）

13日、調査区東側河川跡付近の扱いについて、湯沢河川国道事務所と協議を行い、遺物・遺構の検出の可能性が低いことから、調査対象範囲から外すこととなった。S I 306・307・403竪穴建物跡に付属する複式炉の調査。S I 407竪穴建物跡の調査終了。

【第7週】7月19日（月）～21日（水）

調査区北東で複式炉のみを検出、S I 312竪穴建物跡とした。S I 418竪穴建物の検出及び精査。調査区南西の昭和電工借地部分の表土除去及び粗掘り。今週の見学者計4名。

【第8週】7月26日（月）～29日（木）

S I 312・418・420竪穴建物跡に付属する複式炉の精査。LG59-LF59ラインの深掘りトレンチ（基本土層⑨）を入れ土層観察を行った。

【第9週】8月2日（月）～6日（金）

S I 306・307竪穴建物跡の精査終了。S I 426竪穴建物跡の検出。調査区東側の第II層土の掘り下げ。夏季休暇前の調査区及びヤード周辺の養生。

【第10週】8月17日（火）～20日（金）

S I 312・314・418・426竪穴建物跡の精査。S I 312竪穴建物跡の調査終了。調査区北西竪穴建物跡群の写真撮影。

【第11週】8月23日（月）～27日（木）

湯沢河川国道事務所、インターシップによる岩手大学生2名を連れ来跡。S I 301竪穴建物跡の精査終了。S I 317竪穴建物跡の検出及び精査。LH53付近で基本土層を設置及び精査。今週の見学者計3名。

【第12週】8月30日（月）～9月3日（金）

S I 314・418竪穴建物跡の調査終了。調査区東側でS I 435竪穴建物跡、S R 434土器埋設遺構を検出。今週の見学者2名。

【第13週】9月6日（月）～9月9日（木）

調査区北東で、S L 316河川跡の掘り下げ中、堆積土中から縄文時代晩期の浅鉢土器が出土。S I 318竪穴建物跡の調査終了。S I 435竪穴建物跡の精査。今週の見学者計1名。

※10日（金）、職員研修を赤塚遺跡で実施。

【第14週】9月13日（月）～9月17日（金）

15日、空中写真撮影。S I 318竪穴建物跡の精査終了。S I 435竪穴建物跡の複式炉1号の精査。河川跡の掘り下げ。

【第15週】9月22日（火）～23日（水）

S I 302・435竪穴建物跡の複式炉の精査。

【第16週】9月27日（月）～10月1日（金）

撤収作業開始。S I 302竪穴建物跡、河川跡の精査終了。

【第17週】10月4日（月）～7日（木）

撤収作業。S I 435建物跡の精査終了。6日、湯沢河川国道事務所、文化財保護室が来跡し、現地引き渡しに関する協議を行った。7日、発掘機材の搬出。今週の見学者計2名。

第3節 整理作業の経過

整理作業は令和元年11月から令和6年3月まで実施した。令和4年11月まで、遺物洗浄、注記、土器接合作業、11月から翌5年8月まで遺物の集計・計量・分類及び実測・写真撮影を行った。デジタルトレースは、令和5年8月から9月までの期間で行った。またこの間、遺物の実測を委託している。

図面関係については、令和元年11月から令和4年11月まで、遺構第2原図の作成を行い、11月から翌5年12月までの期間に、編集作業を行った。令和5年1月から翌3月までは、收藏のためのデータ作成、整理を行った。

参考文献

国土交通省東北地方整備局湯沢河川国道事務所 2016『国道13号横樞道路 安心を生む道づくり』

註

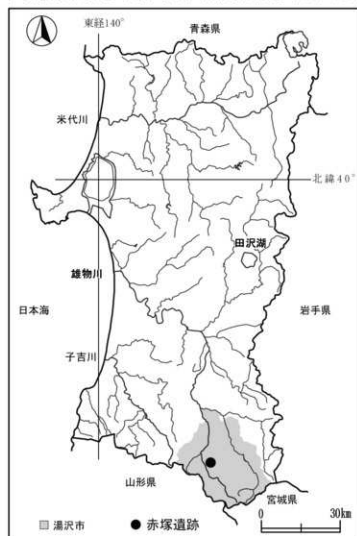
註1・2 秋田県教育委員会 2019『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第515集

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

赤塚遺跡は、秋田県湯沢市横堀字赤塚に所在する(第2図)。遺跡の所在する湯沢市は、山形、宮城両県に隣接し、秋田県の最南東部に位置する。横堀地区では、町を東西に二分するように役内川が北流し、JR横堀駅の西約1.5kmで北流する雄物川に合流する。役内川は幾度か流路を変えており、今回の調査でも旧河道を検出した。現在、河川周辺は豊かな水田地帯として利用されている。

遺跡は、北緯 $39^{\circ} 34' 33''$ 、東経 $140^{\circ} 26' 59''$ 、役内川右岸の標高158~159m、河川の氾濫により形成された自然堤防上に立地する。『土地分類基本調査 湯沢』によると、遺跡周辺の地形は、山地・火山地、丘陵地、低地の3つからなり、本遺跡は南北に延びる役内川低地(IIIc)にある。役内川低地は、高松川低地(IIIb)とともに、断層谷であると同時に河川によって形成された河谷低地である。河川の氾濫により流路が変化する際にはその影響を受け、旧河道の縁辺部に沖積段丘崖を形成している。また、役内川低地を囲むように、北に雄物川低地(IIIa)、北東に小比内山火山山麓地(Ir)、南東に小比内山火山地(Iq)、西に烏帽子山山地(I1)が広がっている(第3図)。

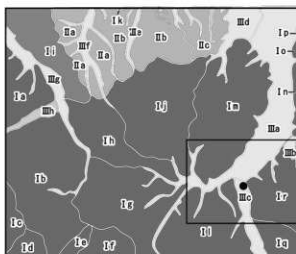


第2図 遺跡位置図

遺跡周辺の地質は、白亜紀の神室山花崗岩類を基盤とし、下位から新第三紀の変質輝石安山岩及び火山砕屑岩を主とする湯ノ沢川層(Ya)、変質輝石安山岩火山砕屑岩及び礫岩を主とする雄物川層(Oe・Ow)、図幅外だが石英安山岩を主とする皿川層、かんらん石玄武岩を主とする飯沢層(Ia)、酸性凝灰岩・火山礫凝灰岩及び安山岩火山砕屑岩を主とする畑村層(IIb)、砂岩及び礫岩を主とする須郷田層(Ss)、硬質泥岩を主とする女川層(Om・Ot・An1)がある。これらはいわゆる緑色凝灰岩で、各種火山岩類や火山砕屑岩類から構成されている。続く三途川層(Sm)は、主として泥岩・砂岩・酸性凝灰岩の互層からなり、礫岩や安山岩角礫岩が挟在する。第四紀は洪積世の段丘堆積物(tr)と母沢安山岩、川井山石英安山岩、沖積世は沖積低地堆積物(sa)、現世河川堆積物(rs)により構成されている(第4図)。

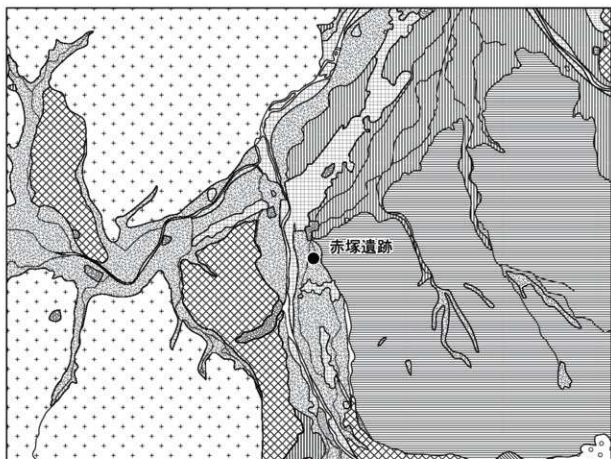
参考文献

秋田県 1980『土地分類基本調査 湯沢』



地形区分図

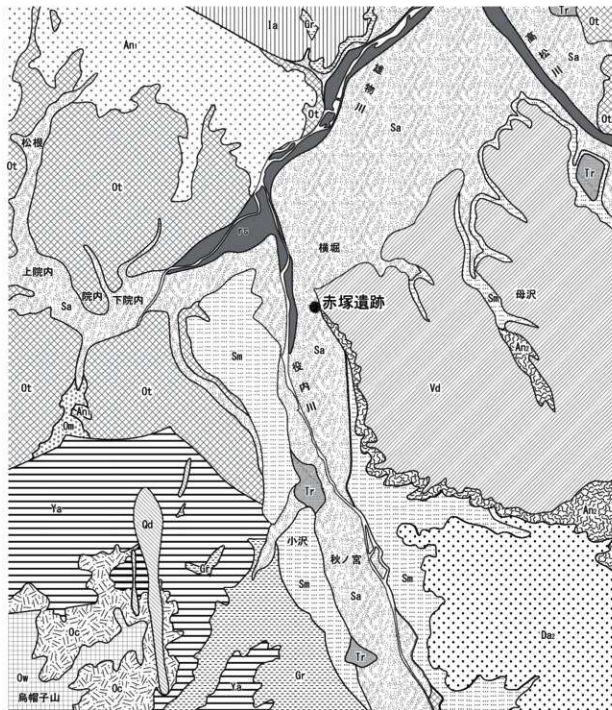
- | | |
|----------------|---------------|
| I 山地・火山 | II 丘陵地 |
| Ia 朝日森山地 | IIa 鎌漣丘陵地 |
| Ib 大森山地 | IIb 龍沢丘陵地 |
| Ic 草山山地 | IIc 田沢丘陵地 |
| Id 加勢山地 | |
| Ie 瀬山山地 | III 低地 |
| If 須森山地 | IIIa 雄物川低地 |
| Ig 大森山地 | IIIb 高松川低地 |
| Ih 姥形山地 | IIIc 段内川低地 |
| Ii 薄倉山地 | IIId 森内川低地 |
| Ij 大黒森山地 | IIIe 森内川低地 |
| Ik 太平山地 | IIIf 鎌漣川低地 |
| Il 角瀬子山地 | IIIg 狹子川低地 |
| Im 松山山地 | IIIh 了川低地 |
| In 東島南山地 | |
| Io 三木山地 | |
| Ip 御岳山地 | |
| Iq 小北内山次山地 | |
| Ir 小北内山次山麓地 | |
- 赤塚遺跡



地形分類図

- | | | | |
|---------------------|-------------------|-------|-------|
| 中起伏山地 (起伏量400~200m) | 小起伏山地 (起伏量200m未満) | 人工改定地 | 谷底平野 |
| 扇状地 | 丘陵 | 火山山麓地 | 河川砂礫地 |
| 中起伏火山地 | | | |

第3図 遺跡周辺の地形区分・地形分類図



未固結堆積物

rs: 現世河川堆積物

Sa: 礫・砂および泥

Tr: 礫・砂および泥

固結堆積物

Sm: 酸性軽石凝灰岩および火山礫凝灰岩（泥岩を伴う）

Ow: 礫質泥岩（塊状泥岩・酸性凝灰岩および砂岩を伴う）

Ot: 酸性軽石凝灰岩および火山礫凝灰岩（泥岩を伴う）

Oa: 角閃石黒雲母石英火山岩堆積凝灰岩・凝灰岩および火山礫凝灰岩

Oc: 実質無石英火山岩火山砂層岩および礫岩（酸性凝灰岩などを伴う）

火山性岩石および深成岩

Vd: 火山岩火山岩層

An2: 角閃石石英火山岩火山砂層岩

An1: 実質無石英火山岩およびその火山砂層岩

Ia: 輝石火山岩およびその火山砂層岩

Qd: 角閃石石英閃緑岩

Gr: 角閃石黒雲母花崗閃緑岩および麻状花崗閃緑岩

第4図 遺跡周辺の表層地質図

第2節 歴史的環境

湯沢市では縄文時代から近世にかけての遺跡が確認されており、その多くが縄文時代と中世のものである。これらは雄物川とその支流である役内川流域の低地や丘陵地、山麓等に立地している。ここでは、赤塚遺跡周辺を中心に、その歴史と周辺遺跡を概観する。なお、文中の番号は表中・図中の番号に対応し、表中の「207-66-70」等の表記は、『秋田県遺跡地区情報』及び『秋田県遺跡地区（湯沢・雄勝地区版）』に掲載された遺跡の地区番号と一致する（第5図、第1・2表）。

1 旧石器時代の遺跡

当前期の遺跡は、赤塚遺跡周辺では確認されていない。しかし、湯沢市宇西金掘沢所在の東山寺墓地上遺跡からは、特徴的な船底形石器をはじめ、ナイフ型石器、搔器、削器、石匙、石核等が出土している。

2 縄文時代の遺跡

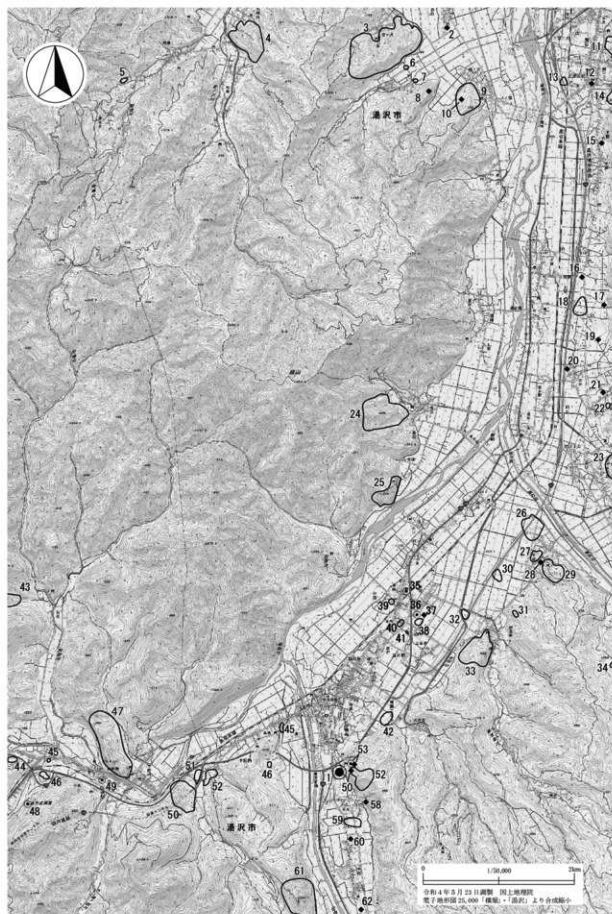
当該期の遺跡は、堰畠遺跡（13）、堀ノ内遺跡（18）、長戸呂遺跡（30）、横堀中屋敷遺跡（42）、岩井堂洞窟遺跡（48）、白館跡（50）等がある。堰畠遺跡は、縄文時代中期末葉を中心とした集落遺跡である。複式炉を伴う竪穴住居跡や土坑等を検出しており、縄文土器の他、板状土偶等の土製品、石器が出土している。集落は弧状を呈しており、住居内の炉の向きには規則性があることが判明している。堀ノ内遺跡は、縄文時代後期末葉から晩期前葉の墓域・祭祀域を検出した遺跡である。墓域は土坑・土器埋設遺構と配石遺構で構成され、「ヒト」に対する葬送儀礼が行われた場所であったと推測され、それに対し、祭祀域は「モノ」に対する供養が行われていた場所であったと推測されている。遺物は土器や石器の他、土偶や石棒等のいわゆる「第二の道具」が出土している。岩井堂洞窟遺跡は、縄文時代、弥生時代、古代の3時期の複合洞窟遺跡であり、1978（昭和53）年に国指定史跡に指定されている。凝灰岩壁に形成された4つの洞窟が調査され、縄文時代早期・前期・後期・晩期の土器が出土している。早期の押型文や貝殻沈線文の土器は、県内において数少ない貴重な資料である。白館跡は、縄文時代前期中葉・中期後葉・後期中葉・晩期末葉に渡って営まれた遺跡である。遺構は竪穴建物跡を検出しており、そこから砥磨器や磨製石斧の未製品が出土したこと等から、磨製石斧製作遺構の可能性が指摘されている。遺物は主に縄文時代前期中葉の大木2b式期に帰属するものが出土している。上院内字小沢からは魚形文刻石が出土し、県指定有形文化財となっている。

3 弥生時代の遺跡

当該期の遺跡は、前出の岩井堂洞窟遺跡がある。遺構は確認されていないが、復元可能な1個体分の弥生土器が出土している。

4 古代の遺跡

当前期における当地域は、『続日本紀』から動向を窺い知ることができる。雄勝の地名が最初に登場するのは737（天平5）年の「從陸奥国達出羽權、道經男勝行程迂遠」の中で、「男勝」と記載されている。また、奈良時代の733（天平5）年には出羽權が庄内地方から秋田清水岡に遷置され、横手盆地にも律令制度がおよび、雄勝郡が建郡されたこと、759（天平宝字3）年には雄勝城の築城や、有屋峠が通じて雄勝町にも横河駅家が設けられたことが記されている。横河駅家の所在に関しては、未だ特定されていないが、寺沢地区には大伝馬の地名や糖塚があり、その名残りとも考えられている。当該期の遺跡は、市内全体を見渡してみてもわずかで、堀ノ内遺跡、岩井堂洞窟遺跡、山口遺跡（54）等がある。堀ノ内遺跡では、土坑や焼土遺構を検出し、土師器、須恵器、中国産磁器が出土している。岩井堂洞窟遺跡及び山口遺跡からは土師器が出土している。



第5図 赤塚遺跡と周辺遺跡位置図

5 中世の遺跡

当該期における当地域は、下野国都賀郡小野寺保を本拠地とする御家人で、雄勝郡地頭職であった小野寺氏の影響下にあった。史料や板碑、系図、社寺縁起等を手がかりに辿っていくと、小野寺氏は遅くとも鎌倉末期までにはその勢力を雄勝郡内に浸透させていたことが推測できる。そして、小野寺氏はその勢力の拡大に成功し、中世を通して影響力を維持し続けていた。当地域にはそうした時代背景に関連する城館跡が多数存在する。堂ヶ沢館跡(3)、八幡林館跡(4)、上の宿館跡(9)、関口城跡(11)、窟沢館跡(14)、相川城跡(23)、泉沢館跡(24)、小野城跡(25)、新屋敷遺跡(26)、鶴沼城跡(27)、平城館跡(29)、御返事北館跡(31)、御返事館跡(33)、桐木田館跡(38)、松根城跡(43)、法館跡(47)、白館跡、草井崎城跡(57)、館堀城跡(59)、浅萩館跡(61)、等がそれにあたる。小野城跡は、小野寺氏の入部に伴い文治年間(1185～1190)に築城された山城である。南と東は急峻な崖で、北の緩斜部には空堀や畝状空堀群が造られている。館堀城跡は、二重の堀がめぐる平城である。13～15世紀の火葬墓を36基検出し、そこから被熱した骨や木炭片が出土した。調査者はそれらについて、焼土が坑内に混在し、壁・底面が焼けているか否かで2類に分類している。その結果、遺体を土坑内で焼いた後、そのまま直に埋葬して墓としている1類が5基、別の場所で火葬した遺体を使用しなくなった土坑、建物跡の柱穴、柱穴椽ビット、堅穴状遺構等に納骨して墓としている2類が31基で、大半が2類であることが判明した。遺物は中国産または国内産の陶磁器や、銭貨等が出土している。長戸呂遺跡では、遺構は作業小屋のような機能を持つと考えられる掘立柱建物跡や柱穴椽ビットを検出し、中世陶磁器が出土している。また、当地域にはトラ坊姫碑(8)、正和5年碑(17)、貞和3年碑(18)、貞和4年碑(22)、桐善寺紀年碑(31)、磨崖(55)等の板碑も多数存在している。

6 近世の遺跡

当該期における当地域は、小野寺氏が最上氏との戦いに敗れた後に改易され、その大部分が最上氏の領地となり、最上氏改易後は佐竹領として明治まで続く。当該期の遺跡は、堀ノ内遺跡、白館跡がある。堀ノ内遺跡では、17世紀初頭に生産された初期伊万里の碗や銭貨が出土している。白館跡では、土坑4基を検出し、折縁の口縁部を持つ磁器皿の破片が出土している。

第1・2表 文献(表中の番号は文献番号に対応する)

- 1 秋田県教育庁生涯学習課文化財保護室ホームページ『秋田県遺跡地図情報』
- 2 秋田県教育委員会 2005『秋田県遺跡地図(湯沢・雄勝地区版)』
- 3 秋田県教育委員会 2019『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県埋蔵文化財調査報告書第515集
- 4 湯沢市史編さん会事務局編 1965『湯沢市史』
- 5 秋田県教育委員会 1981『秋田県の中世城館』秋田県埋蔵文化財調査報告書第86集
- 6 秋田県教育委員会 2002『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県埋蔵文化財調査報告書第342集
- 7 秋田県教育委員会 2004『埋蔵遺跡』秋田県埋蔵文化財調査報告書第367集
- 8 秋田県教育委員会編・富樫泰時監修 2004『秋田の史跡・考古』カッパンブラン
- 9 秋田県教育委員会 2003『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県埋蔵文化財調査報告書第365集
- 10 秋田県教育委員会 2008『堀ノ内遺跡』秋田県埋蔵文化財調査報告書第432集
- 11 戸部正直著・今井義孝校注 2005『奥羽水滸軍記』無明舎出版
- 12 雄勝町郷土史編纂委員会 1988『雄勝町史』国書刊行会

第1表 赤塚遺跡周辺の遺跡一覧表(1)

番号	遺跡地図番号	遺跡名	時期	遺構・出土遺物等	参考文献
1	207-66-70	赤塚	縄文	【縄文時代】竪穴建物跡・土器埋設遺構・フラスコ状土坑・土坑・柱穴様ビット、縄文土器・石器【中～近世】陶磁器	1・3・本書
2	207-7-30	無紀年碑	縄文	種子・胎藏界大日(アーン)	1・2・4
3	207-7-66	堂ヶ沢館	中世	郭・堀	1・2・5
4	207-7-55	八幡林館	中世	郭・堀・竪穴空堀群	1・2・5
5	207-7-10	水沢	縄文	縄文土器	1
6	207-7-13	土沢Ⅰ	縄文	縄文土器・石器	1・2・4
7	207-7-14	土沢Ⅱ	中世	縄文土器・石器	1・2・4
8	207-7-31	トウ坊地蔵碑	中世	種子・月輪にバク・延文5年4月28日の銘	1・2・5
9	207-7-57	上の宿館	縄文・中世	郭・堀	1・2・5
10	207-7-32	無紀年碑	中世	種子・キリク・サ・サク	1・2・4
11	207-7-58	関口城	中世	郭・空堀・堀	1・2・5
12	207-7-33	無紀年碑	中世	種子・胎藏界大日(アーン)	1・2・4
13	207-7-64	泉堂	縄文	竪穴建物跡・溝跡・埴土遺構・土坑・土器埋設遺構・配石遺構・柱穴様ビット、縄文土器・土製品・石器	1・2・6・7・8
14	207-7-59	幽沢館	中世	郭・堀	1・2・5
15	207-7-34	無紀年碑	中世	種子・赤陀(キリク)	1・2・4
16	207-7-35	立石	中世	銘文	1・2・4
	207-7-36	正和5年碑	中世	種子・月輪に胎藏界大日(アーン)	1・2・4
	207-7-37	貞和3年碑	中世	種子・赤陀(キリク)	1・2・4
	207-7-38	延文5年碑	中世	種子・赤陀(キリク)	1・2・4
18	207-7-65	塚ノ内	縄文・古代・中世・近世	【縄文時代】埴土遺構・土坑・フラスコ状土坑・土器埋設遺構・配石遺構・柱穴様ビット、縄文土器・土製品・埴土・石器・石器・自然遺物【古代】土師器・須恵器【中世】陶磁器・石製品【近世】陶磁器・土製品・金属製品	1・2・9・10
19	207-7-39	建武元年瓦式碑	中世	種子・陀(キリク)・蓮台・蓮部元年8月の年紀あり	1・2・4
20	207-7-40	貞和4年碑	中世	種子・釈迦(バク)・貞和4年の銘	1・2・4
21	207-7-41	無紀年碑	中世	種子・赤陀(キリク)・迦(バク)	1・2・4
	207-7-42	無紀年碑	中世	種子・赤陀三尊(キリク・サ・サク)・蓮台	1・2・4
22	207-7-15	中山	縄文	縄文土器・石器	1・2
23	207-7-60	相川城	中世	郭・空堀	1・2・5
24	207-66-38	泉沢館	中世	—	1・2・5
25	207-66-39	小野城	中世	郭・堀・竪穴空堀群	1・2・5・11・12・25・26
26	207-66-65	新造敷	縄文・中世	【縄文時代】縄文土器・石器【中世】竪穴建物跡・竪穴建物跡・井戸跡・埴土遺構・溝跡・土坑・柱穴列、陶磁器・土製品・石製品・鉄製品・金属製品	1・2・28
27	207-66-34	鴨沼城	縄文・中世～近世	【縄文時代】縄文土器・石器【中～近世】竪穴建物跡・井戸跡・土坑・堀跡・溝跡、陶磁器・石製品・木製品・鉄製品・金属製品	1・2・8・12・13・14
28	207-66-15	阿彌寺紀年碑	中世	板碑3基	1・2
28	207-66-16	無紀年碑	中世	阿弥陀・金剛界大日	1・2・12
29	207-66-35	平城館	中世	郭・土塁	1・2・5・14
30	207-66-66	長戸呂	縄文・中世・近世	【縄文時代】竪穴建物跡・土器埋設遺構・配石遺構・柱穴様ビット、縄文土器・石器【中～近世】竪穴建物跡・柱穴様ビット、陶磁器・金属製品	1・2・9・15
31	207-66-69	御区事北館	中世	竪穴空堀群・切岸	1・2
32	207-66-67	清水館	古代	土師器	1・2・9
33	207-66-37	御区事館	中世	堀・段塹	1・2・5・11
34	207-66-17	三ツ村	縄文	石器	1・2
35	207-66-10	小野原野神社	縄文	縄文土器	1・2
36	207-66-13	榎木田の井戸	古代	井戸	1・2
37	207-66-14	姥ヶこ石	中世	板碑3	1・2
38	207-66-36	榎木田館	中世	堀・土橋・土塁	1・2・12
39	207-66-11	小野Ⅰ	縄文	縄文土器・石器	1・2
40	207-66-12	小野Ⅱ	縄文	縄文土器	1・2
41	207-66-68	小野館	縄文	縄文土器	1・2
42	207-66-74	横塚中屋敷	縄文	柱穴様ビット、縄文土器	1・2・3・16
43	207-66-41	松根城	中世	空堀・土塁	1・2・5・11
44	207-66-5	荒町	縄文	縄文土器・石器	1・2
45	207-66-7	釜ノ上	縄文	縄文土器・石器	1・2

第2表 赤塚遺跡周辺の遺跡一覧表(2)

番号	遺跡地区番号	遺跡名	時期	遺構・出土遺物等	参考文献
46	207-66-8	釜ノ上皿	縄文	縄文土器・石器	1・2
47	207-66-40	法爾館	中世	郭・堀	1・2・5・11
48	207-66-①	岩井堂洞窟	縄文・弥生・古代	—	1・2
	207-66-6	岩井堂	縄文・弥生・古代	【縄文時代】洞窟住居跡・伊弉、縄文土器・石器【弥生時代】弥生土器、 【古代】土師器・自然遺物	1・2・8・17・18・19
49	207-66-24	魚形文写石出土地	縄文	—	1・2・8
50	207-66-42	白館跡	縄文・中世・近世・近現代	【縄文時代】壑穴建物跡・竪立柱建物跡・土坑・土坑墓・フラスコ状土坑・炭土遺構、縄文土器・石器・石製品【中世】臥伏空堀跡、堀、礎石 【近世】礎石【近現代】土坑・鉄製品	1・2・5・11・20・21
51	207-66-72	柳原	縄文	柱穴様ビット	1・3
52	207-66-73	立浪	縄文	土坑・溝跡・柱穴様ビット、縄文土器・石器	1・3
53	207-66-9	下馬場	縄文	縄文土器・石器	1・2
54	207-66-71	山口	古代	溝跡、土師器	1・3
55	207-66-①	磨崖	中世	—	1・2
55	207-66-22	磨崖碑	中世	角閃玄山岩	1・2・22
56	207-66-18	嘉暦元年碑	中世	金剛界大日・胎藏界大日	1・2・12・23
57	207-66-54	草井崎城	中世	郭・空堀	1・2・5・11
58	207-66-19	貞和碑	中世	—	1・2・12
59	207-66-55	館塚城	縄文・中世	【縄文時代】石面【中世】郭・堀立柱建物跡・壑穴建物跡・配石遺構・空堀・溝跡・柱穴列・柱穴様ビット、陶磁器・土製品・石製品・木製品・金属製品・自然遺物	1・2・5・8・11・24・25
60	207-66-18	嘉暦元年碑	中世	金剛界大日・胎藏界大日	1・2・12・23
61	207-66-56	浅萩館	中世	郭・空堀・土塁	1・2・5・12
62	207-66-21	応永7年碑	中世	梵字・阿弥陀三尊	1・2・12・23

- 13 秋田県教育委員会 1979 『秋田県遺跡分布調査報告書』秋田県埋蔵文化財調査報告書第60集
- 14 秋田県教育委員会 1980 『鶴沼城跡』秋田県埋蔵文化財調査報告書第73集
- 15 秋田県教育委員会 2005 『長戸呂遺跡』秋田県埋蔵文化財調査報告書第390集
- 16 秋田県教育委員会 2024 『横堀中屋敷遺跡』秋田県埋蔵文化財調査報告書第535集
- 17 秋田県教委・雄勝町教育委員会 1969 『岩井堂岩陰遺跡』秋田県埋蔵文化財調査報告書第16集
- 18 秋田県教委・雄勝町教育委員会 1970 『岩井堂岩陰遺跡 第4 洞窟』秋田県埋蔵文化財調査報告書第21集
- 19 雄勝町教育委員会 1971 『岩井堂岩陰遺跡 第7次』
- 20 秋田県教育委員会 2010 『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県埋蔵文化財調査報告書第456集
- 21 秋田県教育委員会 2012 『白館跡』秋田県埋蔵文化財調査報告書第474集
- 22 深沢多市 1933 『秋田史壇』
- 23 深沢多市 1933 『秋南古碑考』
- 24 秋田県教育委員会 1999 『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県埋蔵文化財調査報告書第291集
- 25 秋田県教育委員会 2001 『館塚城跡』秋田県文化財調査報告書第320集
- 26 雄勝町 1961 『雄勝町史』
- 27 秋田県教育委員会 2005 『新屋敷遺跡』秋田県埋蔵文化財調査報告書第389集

第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

1 発掘調査

発掘調査は、令和元年度・3年度の2か年に渡り行われ（第6図）、それに伴う施設架設や発掘作業員による掘削業務及び安全管理について「掘削作業管理業務」として、一括して外部委託した。

調査は、グリッド法で行った。MA50（世界測地系平面直角座標第X系 X=105260.000 Y=33200.000）を原点として、4m×4mのメッシュを組み、その交点に方眼杭を打設した。方眼の南北線をMA、同じく東西線を50とし、南北線はアルファベットを西に向かって昇順となるよう、東西線は数字を北に向かって昇順となるよう符号を付した。この4m四方の区画は、南東隅に当たる杭の南北と東西の符号を組み合わせ、MA50のように呼ぶことにした（第16図）。

調査区内の掘り下げは、第I層（表土）から第II層（遺物を包含した洪水堆積層）上面までを重機で、第III層（無遺物洪水堆積層）及び第IV層（基盤層）までを人力、一部重機で掘り下げた。

遺構は柱穴様ピットとそれ以外の遺構に分け、柱穴様ピットは検出順に1001番から、それ以外の遺構は01番からの通し番号を付し、遺構の略記号と組み合わせで呼称し、中には精査の過程で柱穴様ピットに変更したものは、番号をそのまま使用した。調査の記録は、平面図・断面図及び写真で記録した。平面図はトータルステーションを用いた遺構システムにより作成するとともに、必要に応じ、手実測による1/10・1/20の縮尺での作図も併用した。

遺物は、グリッドもしくは遺構、層位、年月日を記録して取り上げを行った。収納については、チャック付ポリ袋及び土嚢袋に入れ、コンテナに収納した。

写真撮影は、デジタルカメラを用いて行った。

2 整理作業

遺物は、洗浄、注記の後、土器・土製品については、必要に応じて接合作業を行った。土器・土製品・石器・石製品は、接合作業後に種類及び器種に分類し、それぞれの重量を計量した。その後掲載遺物を抜き出した。

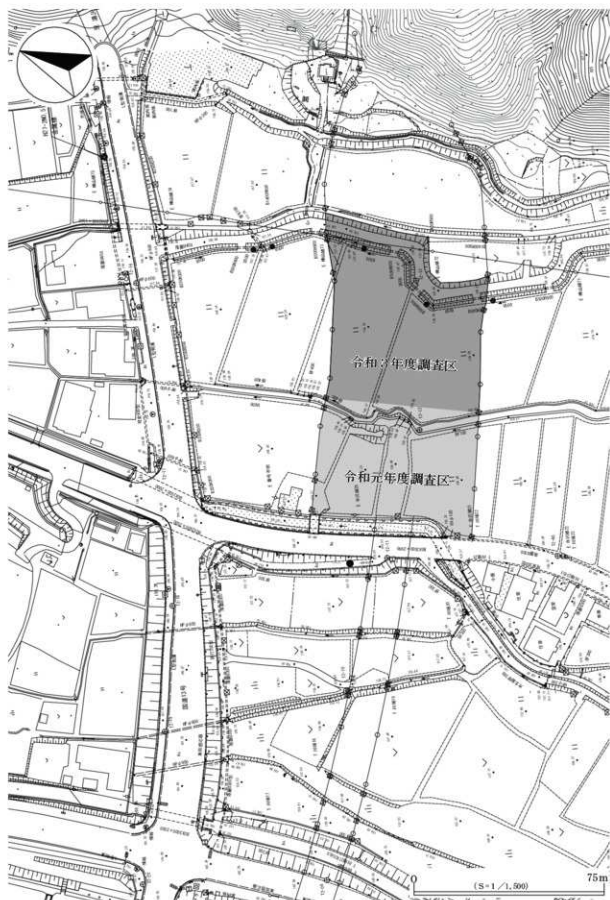
報告書掲載遺物については、実測委託を行うとともに、一部手実測を行った。手実測作成後、当該図をスキャニングして下図とし、ドローイングソフトを用いてデジタルトレースした。必要に応じ、拓本も作成し、同様にスキャニングしてトレース図を組み合わせた。

遺構等の図面に関しては、遺構測量ソフト及び遺構トレースソフトを用い、遺構システムにより現場で作成した図を元に平面図を作成し、手実測による土層断面図をスキャニングし下図としたデジタルトレース図と組み合わせ全体を調整し、作成した。

遺構・遺物等のデジタルトレース図は、最終的にドローイングソフトを用いてレイアウトし、挿図原稿を作成した。

第2節 基本層序

遺跡は役内川右岸に形成された自然堤防上に立地し、周囲の水田面には役内川の旧河道による高低差が見られる（第6図）。遺跡の試掘及び確認調査前の状況は、水田及び畑地であった。遺跡内は堅



第6図 調査区と周辺地形図

穴建物跡等の遺構が構築された標高158.0～159.2mの高位地と、西側調査区（令和元年度調査区）南側、東側調査区（令和3年度調査区）北東側の旧河道標高156.8～158.0mの低位地に分かれる。高位地は、圃場整備の影響で平坦に削平されているが、本来は起伏を伴い旧河道へなだらかに下る地形であったと推測される。

遺跡の基本層序は、トレンチを13か所設定して観察した（第7～11図、図版6・7）。遺跡全体を覆う堆積層は役内川の氾濫に起因する洪水堆積土である。このため各地点により堆積状況が様様ではない。よって遺跡全体での統一した層名を付けることは困難なことから、遺物包含の有無や遺構検出面を押さえ、基本層序を設定することとした。

以下、遺構の検出状況が土層断面から比較的観察しやすい、基本土層①と基本土層⑤（第7・9図）を基準にし、概要を述べることとする。なお、Ⅰ～Ⅳ層は大区分で、各層はさらに細分される。

第Ⅰ層：表土または盛土や水田耕作土を含む造成土である。第Ⅰa・b層の2層に分けた。第Ⅰa層は、現代の盛土である。第Ⅰb層は、水田耕作土に由来する。圃場整備後に、第Ⅱ・Ⅲ層土を攪拌した造成土で、グライ化により変色している。基本土層⑤では、基本土層①と比較し、厚く盛られている。縄文時代・中世～現代の遺物を包含している。

第Ⅰa層：層厚 基本土層①で2～35cm

礫層及びにぶい黄褐・にぶい黄橙色（10YR4/3・7/3）シルト・粘土質シルト しまり強
粘性弱～中

第Ⅰb層：層厚 基本土層①で8～42cm、⑤で10～44cm

にぶい黄褐色（10YR4/3）粘土質シルト～砂 しまり強 粘性中
暗オリーブ褐～オリーブ褐色（2.5Y3/3～4/4）粘土質シルト・砂 しまりやや強～強
粘性中

第Ⅱ層：縄文時代の遺物を包含した洪水堆積層で、グライ化による変色も認められる。地点により層上面及び層中より遺構が検出されている。基本土層①では暗褐色土、基本土層⑤では浅黄橙・にぶい黄褐・褐色土を基質とする。また、基本土層⑤西端では、下位でラミナ状の堆積が見られた。

基本土層①：層厚4～23cm

暗褐色（10YR3/3）砂質シルト しまり中 粘性弱

基本土層⑤：層厚8～52cm

浅黄橙色（2.5Y7/3）粘土質砂 しまり強 粘性弱
にぶい黄褐色（10YR4/3）砂質シルト～砂 しまり強 粘性弱
褐色（10YR4/4）砂 しまり強 粘性弱【ラミナ状に堆積】

第Ⅲ層：無遺物洪水堆積層である。旧役内川の氾濫による堆積状況を示す。このため、地点により多少の変化はあるが、基本的には、下位から上位にかけ、細砂から粗砂への推移が見られる。

基本土層①：層厚22～100cm以上

暗褐～褐色（10YR3/4～4/4）砂～砂質シルト～砂質粘土 しまり中～強 粘性弱～やや強

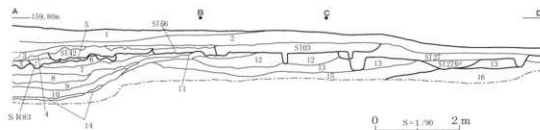
基本土層⑤：層厚4～62cm以上

にぶい黄褐色（10YR7/4）細砂・砂 しまり強 粘性弱
浅黄橙色（2.5Y7/3）粘土質砂 しまり強 粘性弱
黄褐色（2.5Y5/4）砂 しまり弱 粘性弱【川砂】

第Ⅳ層：遺跡の基盤層である。礫を多量に含む。

褐～黄褐（10YR4/6～5/6）砂～粗砂 しまり強 粘性弱

基本土層①(MG~MH56, MI55・56, MJ55)



基本土層①

第I層 1 緑褐色、またはにぶい黄褐色(10YR7/3)シルト しまり強 粘性弱【現代の盛土】

2 暗オリーブ褐色(2.5Y3/2)粘土質シルト しまりやや強 粘性中

第II層 3 暗褐色(10YR3/3)砂質シルト しまり中 粘性弱 混入物：炭化物粒φ5mm3%

4 暗褐色(10YR3/3)砂質シルト しまり中 粘性弱 混入物：炭化物粒φ1~5mm1%

5 暗褐色(10YR3/4)砂質シルト しまり中 粘性弱 混入物：炭化物粒φ5~20mm5%

第III層 6 褐色(10YR4/0)砂質シルト しまり強 粘性中

7 褐色(10YR4/0)砂 しまり強 粘性中

8 にぶい黄色(2.5Y6/3)砂 しまりやや強 粘性弱

9 暗褐色(10YR3/4)砂質シルト しまり中 粘性弱

10 褐色(10YR4/0)砂質粘土 しまり強 粘性中

11 褐色(10YR4/0)砂質粘土 しまり強 粘性やや強

12 褐色(10YR4/0)砂~砂質シルト しまり強 粘性中

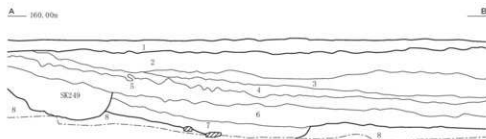
13 褐色(10YR4/0)砂~砂質粘土 しまり強 粘性やや強

14 暗褐色(10YR3/4)砂質シルト しまり中 粘性弱

15 褐色(10YR4/0)砂 しまり中 粘性弱

第IV層 16 黄褐色(10YR5/6)砂 しまり強 粘性弱 混入物：礫φ10~40mm70%

基本土層②(LR42・43, LS42)



基本土層②

第I層 1 暗オリーブ褐色(2.5Y3/2)粘土質シルト しまりやや強 粘性中

第II層 2 にぶい黄褐色(10YR7/3)砂質シルト しまりやや強 粘性中

3 にぶい黄色(2.5Y6/3)砂 しまり中 粘性弱 混入物：礫φ10~50mm40%

4 にぶい黄褐色(10YR7/3)砂 しまりやや強 粘性中

5 無色(10YR5/2)粘土質シルト しまり中 粘性強【遺構後出露】

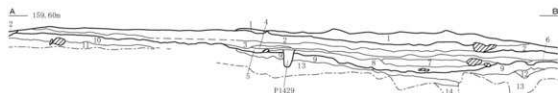
6 にぶい黄褐色(10YR7/3)砂~砂質粘土 しまりやや強 粘性中

7 にぶい黄褐色(10YR5/3)粘土質シルト しまり中 粘性強

第III層 8 にぶい黄褐色~オリーブ灰色(10YR7/3~2.5Y5/1)砂~砂質粘土 しまりやや強 粘性中【河砂】

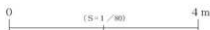
第7図 基本層序図(1)

基本土層③(MG47～50)

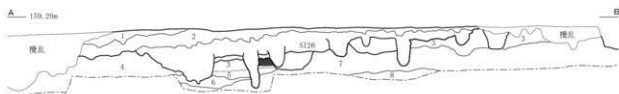


基本土層③

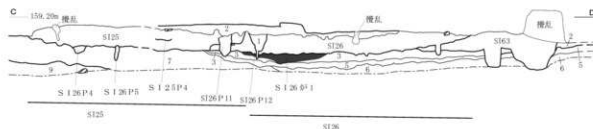
- 第I土層 1 黒褐色～黄灰色(2.5Y3/1～5/1)砂質シルト～砂 しまりやや強 粘性やや弱
 第II層 2 暗灰黄～黄褐色(10YR5/2～5/4)砂 しまりやや強 粘性やや弱
 3 暗灰～黄灰色(10YR4/1～2.5Y4/1)砂質シルト しまりやや強 粘性やや弱
 4 黒褐色(10YR3/1)砂質シルト しまりやや強 粘性やや弱 混入物：炭化物少量【遺物多量】
 5 灰黄褐色(2.5Y5/2～6/2)砂質シルト～砂 しまりやや強 粘性やや弱 混入物：炭化物粒φ3mm少量
 6 暗灰黄褐色(10YR4/2～2.5Y4/2)砂質シルト～砂 しまりやや強 粘性やや弱 混入物：炭化物中量
 7 暗灰黄～灰黄色(2.5Y5/2～6/2)砂 しまり しまりやや強 粘性やや弱 混入物：炭化物中量
 8 黒褐色(10YR3/1)砂質シルト～砂 しまりやや強 粘性やや弱 混入物：炭化物粒φ3～10mm多量【遺物多量】
 第III層 9 にぶい黄色(2.5Y6/3)砂 しまりやや強 粘性やや弱
 10 暗灰黄(2.5Y5/2)砂 しまりやや強 粘性やや弱
 11 黄褐色(2.5Y5/3)砂 しまりやや強 粘性やや弱
 12 暗灰黄～灰黄色(2.5Y5/2～6/2)砂 しまりやや強 粘性やや弱
 13 灰オリーブ(S5B/2)砂 しまり強 粘性やや弱
 14 灰オリーブ(S5B/2)砂質シルト～砂 しまり強 粘性やや弱



基本土層④-1(MG54～MJ54)

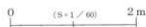


基本土層④-2(M152～55)



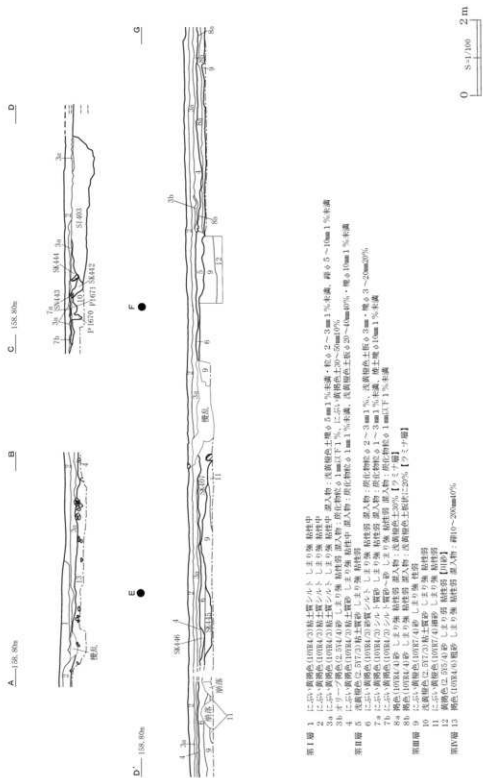
基本土層④-1・④-2

- 第II層 1 にぶい黄褐色(10YR7/4)砂質シルト しまり中 粘性弱
 2 褐色砂(10YR4/4)砂 しまり中 粘性弱
 第III層 3 にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質シルト しまり中 粘性弱
 4 にぶい黄褐色(10YR6/3)砂質シルト しまり強 粘性中
 5 黒褐色(10YR3/3)砂質シルト しまり中 粘性中
 6 にぶい黄色(2.5Y6/3)砂 しまり中 粘性弱
 7 にぶい黄褐色(10YR6/3)砂質シルト しまり強 粘性中
 8 にぶい黄色(2.5Y6/3)砂 しまり中 粘性弱
 第IV層 9 にぶい黄褐色(10YR5/4)砂礫 しまり中 粘性弱



第8図 基本層序図(2)

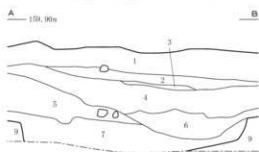
基本土層⑤ (L・E・L F47、L・G・L H46、L I 45・46、L J～L L45、L M44)



- 第I層 1 2.5%黄褐色(103R42)粘土質シルト しまり強 粘性强
 2a 2.5%黄褐色(103R42)粘土質シルト しまり強 粘性强
 2b オア→フ褐色(2.314/4)砂 しまり強 粘性强 膠状物 膠状物 1mm以下1%、2.5%黄褐色土30～50mm²%
 3 2.5%黄褐色(103R42)粘土質シルト しまり強 粘性强 膠状物 膠状物 1mm以下1%、黄褐色土30～50mm²%
 4 2.5%黄褐色(103R42)粘土質シルト しまり強 粘性强 膠状物 膠状物 1mm以下1%、黄褐色土30～50mm²%
 5 2.5%黄褐色(103R42)粘土質シルト しまり強 粘性强 膠状物 膠状物 1mm以下1%、黄褐色土30～50mm²%
 6 2.5%黄褐色(103R42)粘土質シルト しまり強 粘性强 膠状物 膠状物 1mm以下1%、黄褐色土30～50mm²%
 7a 2.5%黄褐色(103R42)シルト質砂 しまり強 粘性强 膠状物 膠状物 1～3mm1%、黄褐色土30～50mm²%
 7b 2.5%黄褐色(103R42)シルト質砂 しまり強 粘性强 膠状物 膠状物 1～3mm1%、黄褐色土30～50mm²%
 8a 褐色(103R44)砂 しまり強 粘性强 膠状物 膠状物 1mm以下1%、黄褐色土30～50mm²%
 8b 褐色(103R44)砂 しまり強 粘性强 膠状物 膠状物 1mm以下1%、黄褐色土30～50mm²%
 9 2.5%黄褐色(103R74)砂 しまり強 粘性强 黄褐色土30～50mm²%
 第II層 10 黄褐色(2.317/2)粘土質シルト しまり強 粘性强
 11 2.5%黄褐色(103R74)砂 しまり強 粘性强
 12 2.5%黄褐色(103R74)砂 しまり強 粘性强
 第IV層 13 褐色(103R44)砂 しまり強 粘性强 膠状物 膠状物 1mm以下1%、黄褐色土30～50mm²%

第9図 基本層序図(3)

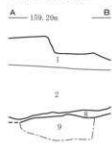
基本土層⑥(L R53・54)



基本土層⑦(L S57・58)



基本土層⑧(L L60)



基本土層⑥・⑦・⑧

- 第I層 1 褐色(10YR4/4)粘土質シルト しまり強 粘性強 混入物：礫φ5～200mm40%
 2 に近い黄褐色(10YR4/3)粘土 しまり強 粘性強 混入物：炭化物粒φ10mm5%
 3 に近い黄褐色(10YR4/3)粘土 しまり強 粘性強
 4 に近い黄褐色(10YR4/3)粘土 しまり強 粘性強 混入物：浅黄色土塊φ10～30mm10%
 5 に近い黄褐色(10YR4/3)粘土 しまり強 粘性強 混入物：浅黄色土塊φ20%
 6 に近い黄褐色(10YR4/3)砂質シルト しまり中 粘性中 混入物：黒褐色土塊φ10～30mm10%
 7 に近い黄褐色(10YR4/3)砂質シルト しまり中 粘性中 混入物：黒褐色土塊φ10～30mm10%
 第II層 8 浅黄色(2.5Y7/4)砂質シルト しまり弱 粘性弱
 第III層 9 浅黄色(2.5Y7/4)砂質シルト しまり弱 粘性弱



基本土層⑩(L H52～54)



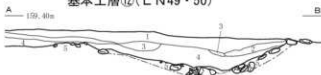
- 第I層 1 黒褐色(10YR3/2)シルト しまり強 粘性弱 混入物：炭化物粒φ1～5mm1%未満、に近い黄褐色土粒φ5～20mm1%、礫φ40～300mm20%
 2 褐色(10Y4/3)シルト質砂 しまり強 粘性弱 混入物：炭化物粒φ2～5mm1%未満、黒褐色土20%、礫φ40～150mm1%未満
 第II層 3 褐色(10YR4/4)砂 しまり強 粘性弱
 4 褐色(10YR4/4)粗砂 しまり強 粘性弱
 第IV層 5 褐色(10YR4/6)粗砂 しまり強 粘性弱 混入物：礫φ20～300mm30%

基本土層⑪(L J46・47)

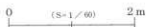


- 第I層 1 に近い黄褐色(10YR5/3)砂 しまり強 粘性弱
 第II層 2 に近い黄褐色(10YR5/3)砂 しまり強 粘性弱
 3 に近い黄褐色(10YR6/3)細砂 しまり中 粘性弱

基本土層⑫(L N49・50)

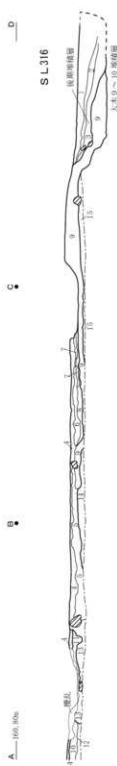


- 第I層 1 に近い黄褐色～灰白色(10YR7/2～8/2)細砂 しまり強 粘性や中弱 混入物：炭化物粒φ1以下～5mm1%未満
 2 浅黄褐色～黄褐色(10YR6/4～8/6)細砂 しまり強 粘性弱
 3 浅黄褐色～黄褐色(10YR6/4～8/6)細砂 しまり強 粘性弱 【4に比し強いしまり】
 4 浅黄褐色～黄褐色(10YR6/4～8/6)細砂 しまり強 粘性弱
 第IV層 5 黄褐色(10YR5/6)砂 しまり強 粘性弱 混入物：礫φ10～100mm60%



第10図 基本層序図(4)

基本土層⑨(L E59 ~ L L59)



- 第I層 1. 褐色色(2.5Y5.5/0.8)砂質シルト、しまり弱、粘粒強、混入物：腐植物10%、腐植土柱状10%
 2. 灰黄色(2.5Y6.5/1.2)粘土質シルト、しまり中、粘粒強、混入物：腐植物6.1~2mm10%
 3. 灰黄色(2.5Y6.5/1.2)砂質シルト、しまり弱、粘性中、混入物：腐植物6.1~2mm5%、腐植土柱状5%
 4. 褐色(10YR4/0.8)砂質シルト、しまり弱、粘性弱、混入物：腐植土柱状20%、腐植土柱状20%
 5. 暗灰色(2.5Y4.2/0.6)粘土質シルト、しまり中、粘粒強、混入物：腐植土柱状20%
 6. 暗灰色(2.5Y4.2/0.6)粘土質シルト、しまり中、粘粒強、混入物：腐植土柱状20%
 7. オリーブ褐色(2.5Y4.0/0.6)砂質シルト、しまり中、粘粒強
 8. オリーブ褐色(2.5Y4.0/0.6)砂質シルト、しまり弱、粘粒中、混入物：腐植物6.0、5mm5%
 9. オリーブ褐色(2.5Y4.0/0.6)砂質シルト、しまり中、粘粒中、混入物：腐植土柱状20%
 10. 灰黄色(2.5Y6.5/1.2)砂質シルト、しまり弱、粘粒強、混入物：腐植土柱状20%
 11. 灰黄色(2.5Y6.5/1.2)砂質シルト、しまり弱、粘粒強、混入物：腐植土柱状20%
 12. 灰黄色(2.5Y6.5/1.2)砂質シルト、しまり弱、粘粒強、混入物：腐植土柱状20%
 13. オリーブ褐色(2.5Y4.0/0.6)砂質シルト、しまり弱、粘粒強、混入物：腐植土柱状20%、【粗砂】
 14. 暗灰色(2.5Y4.2/0.6)砂質シルト、しまり弱、粘粒強、混入物：腐植土柱状20%、腐植土柱状10%
 15. 暗灰色(2.5Y4.2/0.6)砂質シルト、しまり弱、粘粒強、混入物：腐植土柱状10%

第11図 基本層序図(5)

第3節 遺物の分類

(1) 縄文土器・土製品、陶磁器の時期区分

時期区分は以下のように分けた。

I群 縄文時代中期後葉（大木8式に相当）

粘土紐貼付による隆帯文及び口縁突起部に透かし彫りがある。

II群 縄文時代中期後葉（大木9式に相当）

II α群 大木9 a 式に相当

口縁～頭部に凹凸の激しい隆沈線による渦巻文や突起部を持つ。胴部には縦位の楕円系文を持つ。

II β群 大木9 b 式に相当

II α群と比較し、隆沈線による凹凸が目立たない。沈線により、縦位の楕円系文や相対渦巻文等が描かれている。

III群 縄文時代中期末葉（大木10式に相当）

横位に展開するC字状渦巻文やS字状波状文等が沈線により描かれている。

IV群 縄文時代後・晩期（十穀内・亀ヶ岡式に相当）

後期は、沈線により弧状や菱形状文が、晩期は、口縁部に羊歯状文、体部に沈線・充填・磨消による雲形文が描かれている。

※地文・無文土器について：本来はI～IV群に入れるべきであるが、時期区分が困難であるため、地文（縄目・櫛掻き）のみのものを地文土器、調整のみで素焼の土器群を無文土器と呼称することとする。また縄文土器の時期区分について、II α群とII β群の区別が難しいものはII群、II群とIII群の区別が難しいものは適宜II・III群またはII β・III群と表記している。

V群 中世

中国龍泉窯青磁器、須恵器系中世陶器、瀬戸美濃陶器等がある。

VI群 近世

肥前陶磁器が大多数を占めるが、在地系のもも含まれる。

(2) 土器・陶磁器の器種分類

①縄文土器の器種分類

基本的には以下の通りとする。深鉢形土器か鉢形土器かの区分が難しい土器片は、深鉢形土器に含めることとした。

深鉢：器高が口径の2/3以上。

鉢①：器高が口径の1/2以上～2/3未満。

鉢②：器高が口径の1/2以上～2/3未満。胴部が張り、口縁部が狭まる。頭部を持たない。

浅鉢：器高が口径の1/2未満。

②中近世陶磁器の器種分類

碗・皿・鉢・壺・甕・播鉢・火入れ等、様々な器種がある。

(3) 縄文土器・土製品の形状分類

深鉢形土器・鉢形土器①：口縁部形状から以下のように細分した（第12図）。

A類：口縁部が外反する。

1：まっすぐに外反して立ち上がる。

2：1に比べやや外傾、または頭部から湾曲気味に立ち上がる。

3：2と比較し、頸部で「く」字状に緩やかに湾曲気味に外反する。

a：平状口縁である。 b：波状口縁である。

B類：頸部で「く」字状に強く外反する。

1：頸部が長く伸びるもの（全体形状が壺型を呈する）。

2：頸部が短く外反するもの。

a：平状口縁である。 b：波状口縁である。

C類：口縁部が内湾するもの。

1：口縁部が大きく内湾する。

2：口縁部がわずかに内湾する。

3：胸部からまっすぐ口縁部にかけて内傾する。

4：口縁部が内湾し、口縁部先端が水平に近く折れ曲がる。

a：平状口縁である。 b：波状口縁である。

D類：口縁部が垂直に近い立ち上がりをする。

1：胸部から垂直に近い立ち上がりをする。

2：頸部が外傾し、再び垂直に近い立ち上がりをする。

3：胸部が内湾し、頸部より再び垂直に近い立ち上がりをする。

a：平状口縁である。 b：波状口縁である。

鉢形土器②・浅鉢形土器：口縁部形状から以下のように細分した（第12図）。

A類：口縁部がやや内湾気味、ないし外傾するもの。

B類：口縁部が内湾する。

ミニチュア土器：小型の土器である。おおよそ器高5～6cmで、手びねりで成形されたものを扱うこととした。深鉢形、鉢形土器①・②がある。

土偶：製作工程から2種類に分けた。

A類：粘土塊からそのまま成形したもの。

B類：中を中空にして成形したもの。

土製品：動物形、キノコ形、靴形、石斧状、円盤状の土製品が見られる。

（4）縄文時代中期の土器・土製品の文様分類

I～III群の太木式土器8b～10a式期の文様について、遺跡内で確認された文様については代表的なものは第13～15図に抽出、図示し、それぞれ呼称を付した。また類例が少ないものも、それぞれ適宜呼称を付した。

（5）石器・石製品の分類

石鏃：全面に調整が施されたものがほとんどで、扁平な三角形状及び木葉状の石器である。

A：器体が三角形で、基部が作出されないもの（無茎）。

a：基部が凹状のもの（凹基）。 b：基部がほぼ水平のもの（平基）。

c：基部が凸状のもの（凸基）。

B：器体が三角形で、基部が作出されるもの（有茎）。

a：器体が左右対称で、基部が凸状のもの（凸基）。

b：器体が左右対称で、基部がほぼ水平のもの（平基）。

C：器体が木葉形で、基部が作出されるもの。

石鏃：断面が菱形や三角形の尖頭部を持つ石器である。

A：基部と錐部の境が明瞭で、丁寧な調整により基部が作出されるもの。錐部は先細りの棒状である。

- a：基部が左右対称で、基部上端が平坦なもの。
- b：基部が左右対称で、基部上端が凹状のもの。
- c：基部が左右対称で、抉りをいれつまみ部を作出しているもの。

B：基部と錐部の境が不明瞭なもの。

- a：基部の全面に調整を施す。
- b：基部の一部に調整を施す。
- c：基部に調整を施さない。

C：基部と錐部の境が明瞭なもののうち、基部の調整が粗雑もしくは調整を加えないもの。

石匙：つまみ部を持つ石器である。

A：つまみ部を縦にした場合、器体の長軸が縦方向のもの。

- a：先端が円刃状を呈する。
- b：先端が尖る。
- c：先端が直刃状を呈する。
- d：先端は無調整。

B：つまみ部を縦にした場合、器体の長軸が横方向のもの。

- a：左右の先端が円刃状を呈する。
- b：左右の先端は一方が円刃状で他方が尖る。
- c：先端片側のみ加工。

C：つまみ部を縦にした場合、器体の長軸方向が定まらないもの。

- a：先端が円刃状を呈する。
- b：先端が尖る。
- c：先端に明確な刃部としての調整がない。

石籠：長方形のいわゆるへら状を呈した石器。

異形石器：器体の長軸が横位で、両端を全面的調整し、刃部を作出した石器である。

スクレイパー：剥片の側縁に二次調整による刃部を持つ石器。Ⅰ類は、剥片の打点と対極の縁辺を調整し、刃部として利用したもの。Ⅱ類はその特徴を持たないものである。

I A：素材剥片が縦長のもの。

- a：打点の対極端部辺が円刃状の刃を作出する。
 - 1：左右均等に刃部を作出する。
 - 2：左右不均等に刃部を作出する。
 - 3：片刃状の刃部を作出する。
 - 4：円刃状の刃部を作出し、側縁部に突起を作出する。
- b：打点の対極部辺及びその周辺に尖頭状の刃を作出する。
 - 1：左右均等に刃部を作出する。
 - 2：左右不均等に刃部を作出する。
- c：打点の対極部辺が台形及びバチ状を呈す。
 - 1：左右均等に刃部を作出する。
 - 2：左右不均等に刃部を作出する。
 - 3：対極部辺のみ刃部を作出する。
- d：形態がa～cに当てはまらない、不定形なもの。

I B：素材剥片が横長のもの。

- a：長軸端部のいずれかに調整を施す。
- b：長軸端部に調整を施さない。

II A：素材剥片が丸みを持つ三角形態で、素材剥片が縦長のもの。

- a：側縁1辺に刃部を作出する。
- b：両側縁部に刃部を作出する。

II B：素材剥片が、方形及び撥状形のもの。

- a：打点に対し、片側側縁1辺に刃部を作出する。
- b：打点に対し、両側縁部に刃部を作出する。

II C：打点の対極側が、三角形を呈するベース形及び逆三角形のもの。

a：打点に対し、片側側縁1辺に刃部を作出する。

b：打点に対し、両側縁辺に刃部を作出する。

II D：円形及び楕円形のもの。

a：打点に対し、片側側縁1辺に刃部を作出する。

b：打点に対し、両側縁辺に刃部を作出する。

II E：細長く打点の対極側に尖った先端部を作出したもの。

a：打点に対し、片側側縁1辺に刃部を作出する。

b：打点に対し、両側縁辺に刃部を作出する。

II F：上記A～Eにあてはまらないもの。

a：打点に対し、片側側縁1辺に刃部を作出する。

b：打点に対し、両側縁辺に刃部を作出する。

嘴状石器：三日月状で、先端が尖った石器。

楔形石器：剥片の上下両端部からの剥離が認められる石器。

打製石斧：完成品が打製の手法による斧形の石器。

A：自然素材を多く残し、基部・刃部先端のみ加工。

B：全体的に、打撃による加工を施し整形。

磨製石斧：完成品が磨製の手法による斧形の石器。

有孔石製品：薄石を磨いて薄い楕円形に整形し、孔を穿ったもの。

石皿：多くは平坦な礫を用いて幅広の平坦面を形成する石器。

I：加工したもの。 II：無加工なもの。

台石：石皿のような扁平な礫で、使用面に複数の敲打痕がある礫石器。

敲打石：敲打痕のある礫石器。

磨石：擦痕のある礫石器。

凹石：平らな面に打撃痕による凹みを持つ礫石器。

石棒：全面的に磨かれた棒状を呈する石製品。

角柱状石製品：石棒と似て細長である。いくつかの角面を持つ石製品。

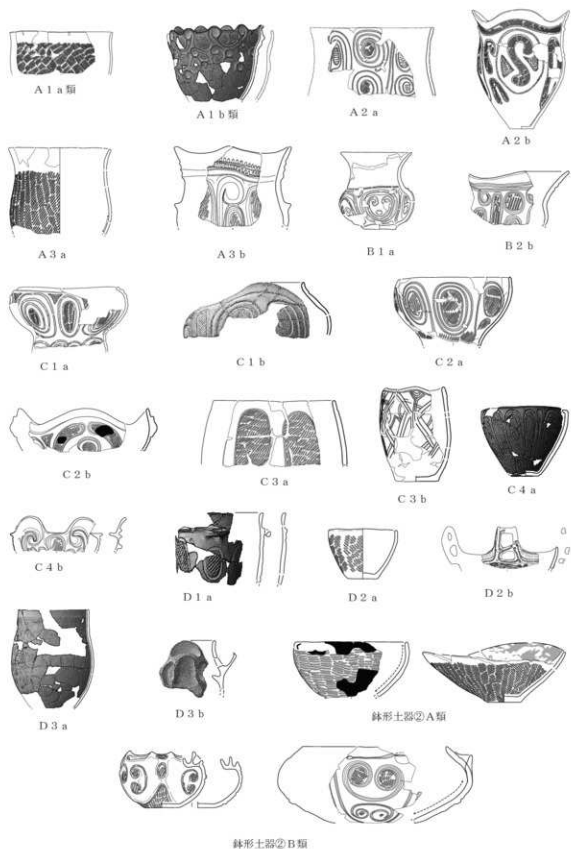
石核：剥片素材を得るための母材。

※礫石器に関しては、例えば磨石で使用していた礫を、凹石として再利用する痕跡が確認される。その際には、最終的に使用された状態の呼称で分類することとした。

以上、縄文土器、特に大木式土器については中野幸大、森幸彦の両氏著作を、土器の文様分類については『花沢A遺跡 第Ⅲ次』（米沢市2019）を、石器・石製品分類については『漆下遺跡』（秋田県2011）を参照した。

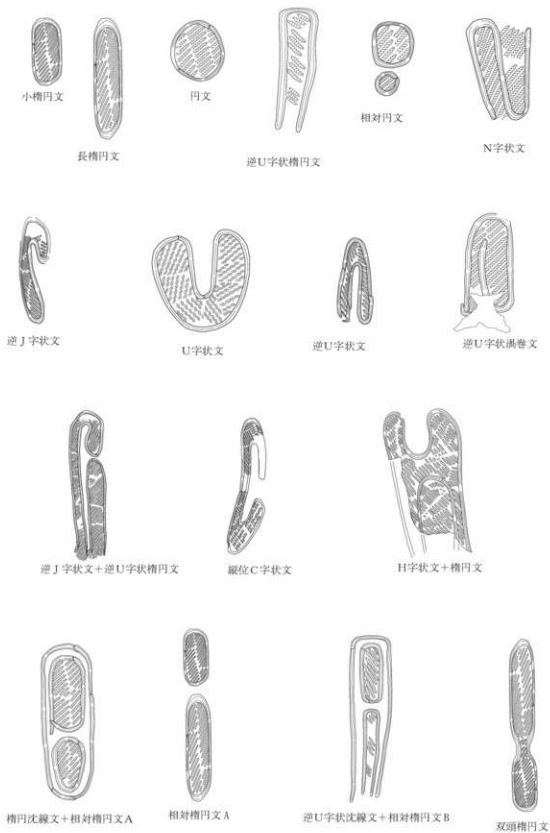
参考文献

- 中野幸大 2008「大木7a～8b式土器」小林達雄編『総論 縄文土器』アム・プロモーション
 森幸彦 2008「大木9・10式土器」小林達雄編『総論 縄文土器』アム・プロモーション
 秋田県教育委員会 2011『漆下遺跡』秋田県埋蔵文化財調査報告書第464集
 米沢市教育委員会 2019『花沢A遺跡 第Ⅲ次』米沢市埋蔵文化財調査報告書第114集



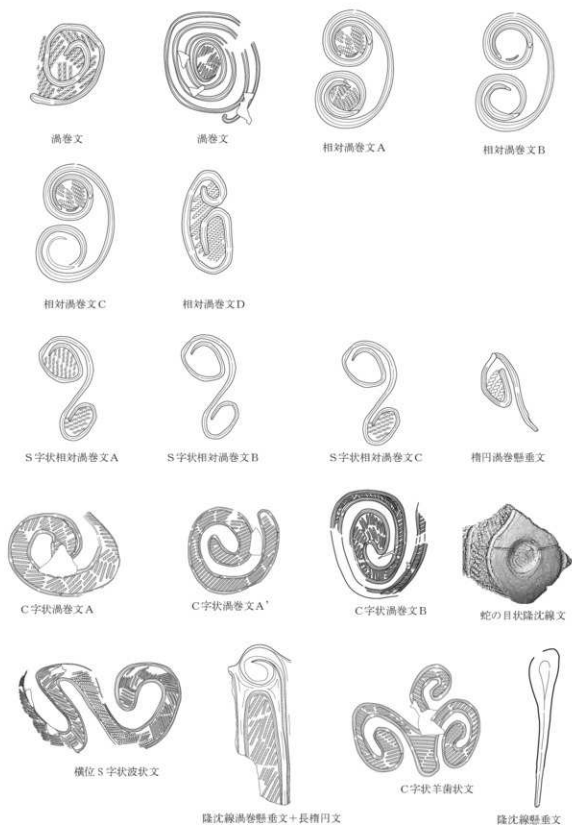
第12図 出土縄文土器形状分類図

円文及び楕円文系統



第13図 出土中期縄文土器文様凡例図(1)

渦巻・波状文系統



第14図 出土中期縄文土器文様凡例図(2)



横位相對渦卷文A+槽円文



横位S字状渦卷文A+長槽円文2本
+隆沈線渦卷懸垂文



懸垂槽円連続文



内円単位文 (横位隆沈線相對渦卷文B・円文)
密隆沈線、指頭による。



内円単位文 (S字状文・交互相對三角形文)



隆沈線相對槽円文C+変形隆沈線相對槽円文A



塔状文+円文+塔状文



入組波状文

第15図 出土中期縄文土器文様凡例図(3)

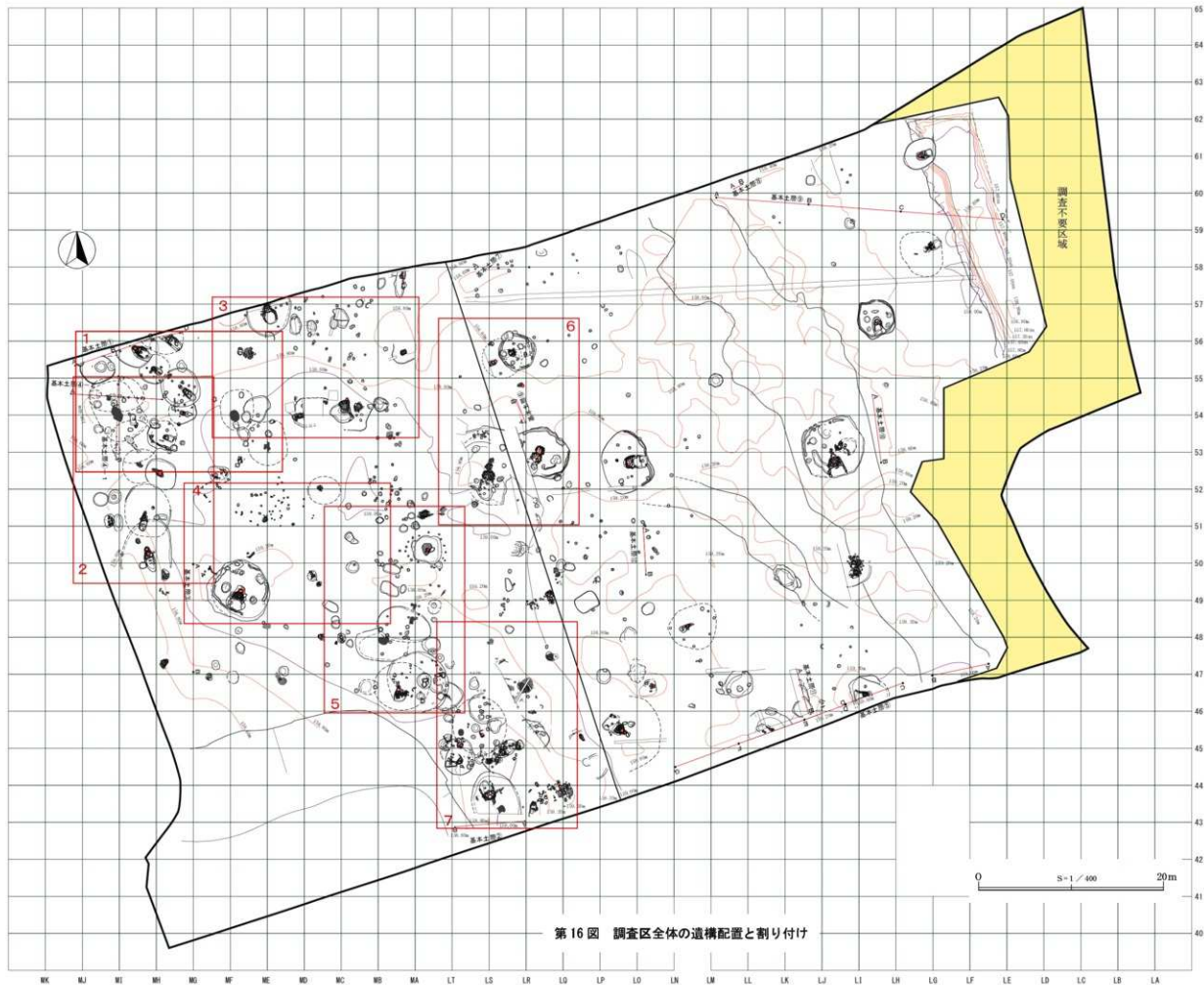
第4節 検出遺構と遺物

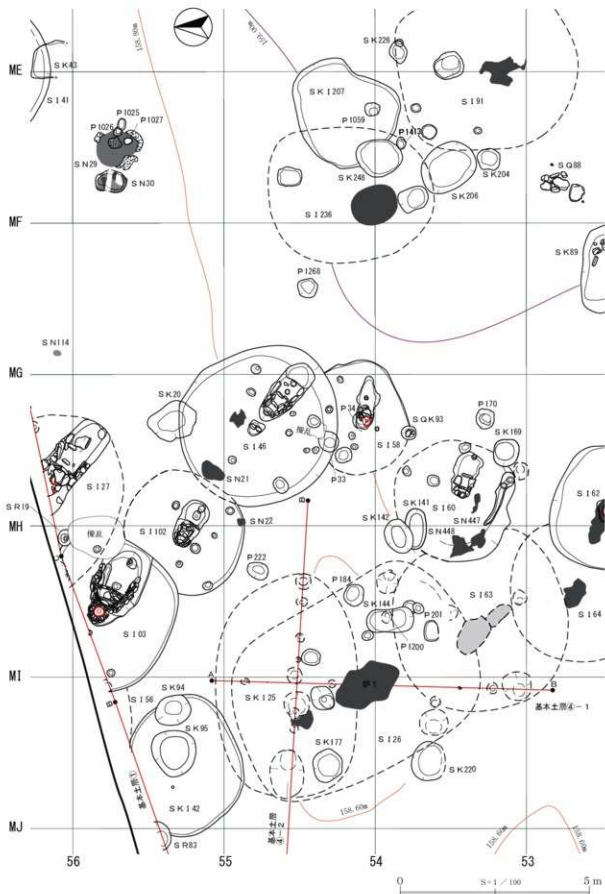
1 概要

調査で検出した遺構は、堅穴建物跡72棟、フラスコ状土坑5基、配石土坑8基、土坑85基、配石遺構9基、土器埋設遺構5基、焼土遺構34基、河川跡3条、柱穴様ビット307基である。なお堅穴建物跡の記号はS1とSK1に分けた。S1は炉を伴うあるいはその可能性が高い建物跡、SK1は炉を伴わない建物跡として区分した。なお、遺跡内は、堅穴建物跡の数が多く、壁の立ち上がりや平面形を明確に把握できない現状から、掘り下げながら、竪の配置や焼土の存在により、炉の存在を確認したものも少なくなかった。掘り下げ中に平面形を認めた際には、ベルトを設定し、最終的には断面で堅穴建物跡の立ち上がりの把握に努めたが、輪郭は明確に捉えられず、平面的に新旧関係を確認した上での掘り下げは困難を極めた。またフラスコ状土坑、配石土坑、土坑の分類について、フラスコ状土坑(SKF)は、掘り込みが一部でもオーバーハングしているものを、配石土坑(SQK)については、①柱穴様ビット状の掘り込みに立石が組まれているものや②堅穴建物の付属施設として、土坑状の内側に、意図的な配石や集石を行ったものを扱うこととし、それ以外の掘り込みは石を伴うものも含めて土坑(SK)として区分した。また土坑に対しては、そのいくつかは土坑墓であったと想定される。よって、①土坑底面あるいは埋土中～上位に副葬品がある。②土坑底面に竪が配される。③確認面に配石や集石あるいは1点の竪が配される。④埋土上部に第Ⅲ層土由来土が堆積する。⑤周囲の状況及び規模・形状が他の土坑墓と類似する。⑥土坑底面が平坦である。以上6つの基準のうち、一つでも合致するものに関しては、所見にその旨を記した。

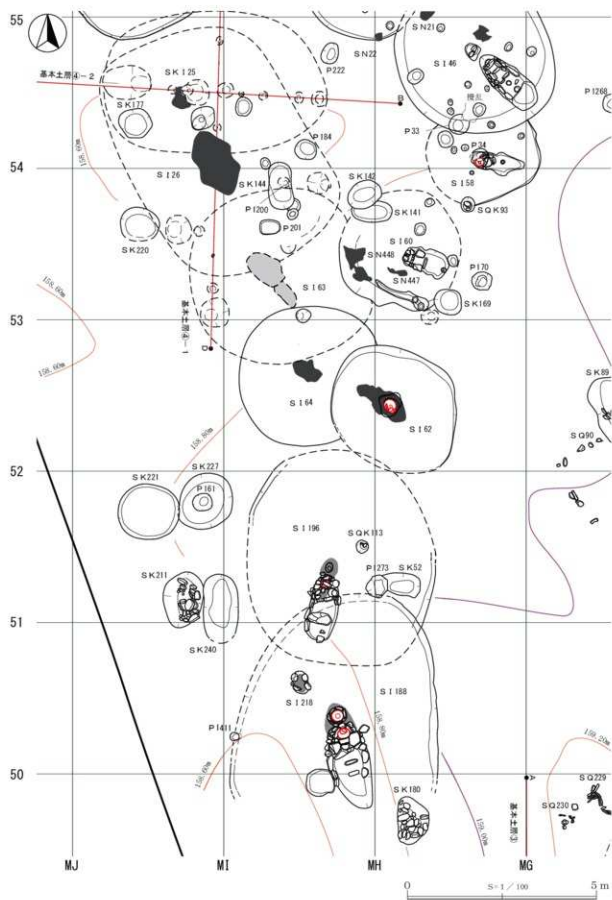
遺跡の堆積層については、遺跡が、旧役内川沿岸の洪水堆積層上に立地することから、各遺構の埋土が人為的か自然堆積かの判断が難しいものが多々あった。由来の判断が難しい遺構に関しては、各遺構の《埋土》及び《掘方埋土》、《層序》の項目にそれぞれ、その旨を記述した。また併せて各遺構の埋土については、極力遺跡内の堆積土中からその由来を記述することに努めたが、第Ⅱ層土及び第Ⅲ層土は両層ともに洪水堆積土を基質とするものであり、遺物の包含の有無で分層したことは本章第2節にも記した。よって、遺構埋土である第Ⅱ層土及び第Ⅲ層土の基質土は、非常に似通った土質であり、その由来の判断が難解な遺構も多々認められた。したがって、そのような遺構埋土の由来については、以下「洪水堆積土を基質」と一括して表記することとした。

遺構内出土遺物(SL252・316含む)は、縄文土器11,453点568,500.2g(赤彩土器69点7,219.7g含む)・土器細片5,404.8g、土偶7点355.9g、円盤状土製品17点386.7g、靴形土製品1点94.2g、キノコ形土製品1点25.7g、不明土製品9点166.6g、石鏃10点9.1g、石錐8点108.7g、石匙18点204.0g、磨製石斧7点1,085g、小型磨製石斧1点3g、打製石斧1点229.1g、異形石器1点9.2g、有孔石製品1点3.4g、楔形石器5点50.4g、嘴状石器1点4.1g、スクレイパー76点1,199.2g、石皿102点681,970g、磨石78点57,160g、凹石34点27,160g、敲石18点12,760g、台石3点7,150g、石棒3点7,760g、多角状石製品1点1,820g、RF23点212g、剥片669点5,559.5g、石核77点57,060g、ベンガラ1点181.2g、奇石3点1,360g、石棒原材3点7,800g、中世須恵系系陶器1点37.8g、近世陶器碗1点8.4g・鉢1点21.9g・播鉢1点19.4g、近世磁器碗1点8.9gである。(このうち本報告書に掲載した遺構内出土土器は、縄文土器378点、土偶・土製品19点、石鏃10点、石錐8点、石匙17点、異形石器1点、スクレイパー50点、嘴状石製品1点、楔形石器5点、打製石斧1点、磨製石斧5点、小型磨製石斧1点、有孔石製品1点、石皿2点、磨石1点、台石3点、敲石2点、凹石5点、石棒2点、多角状石製品1点、石核2点、中世須恵系系陶器1点である。掲載した出土遺物の法量及

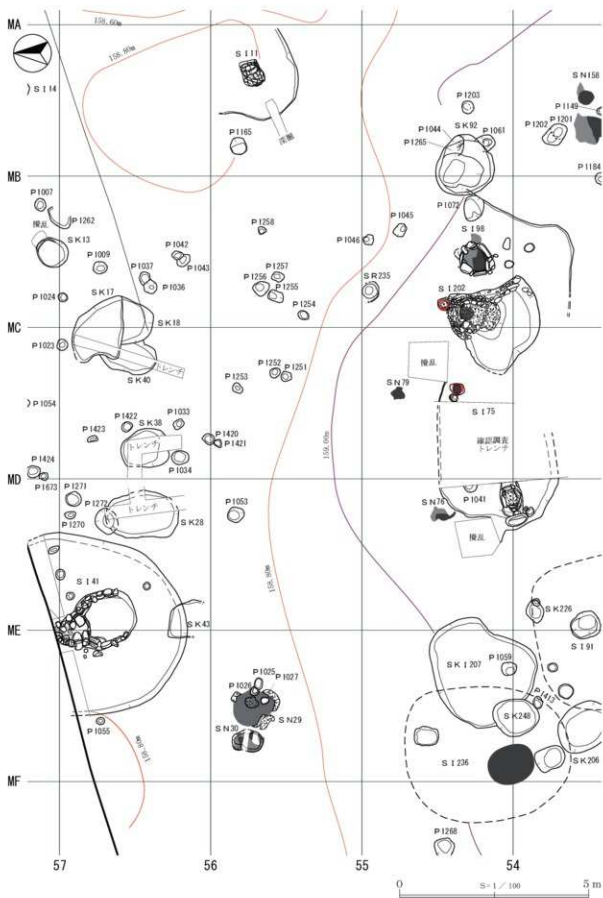




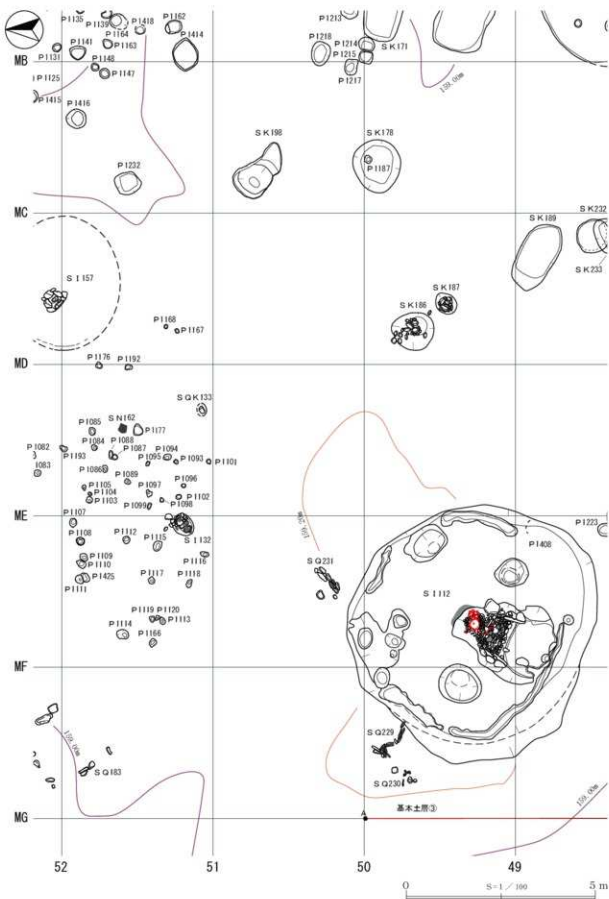
第17図 遺構配置図(1)



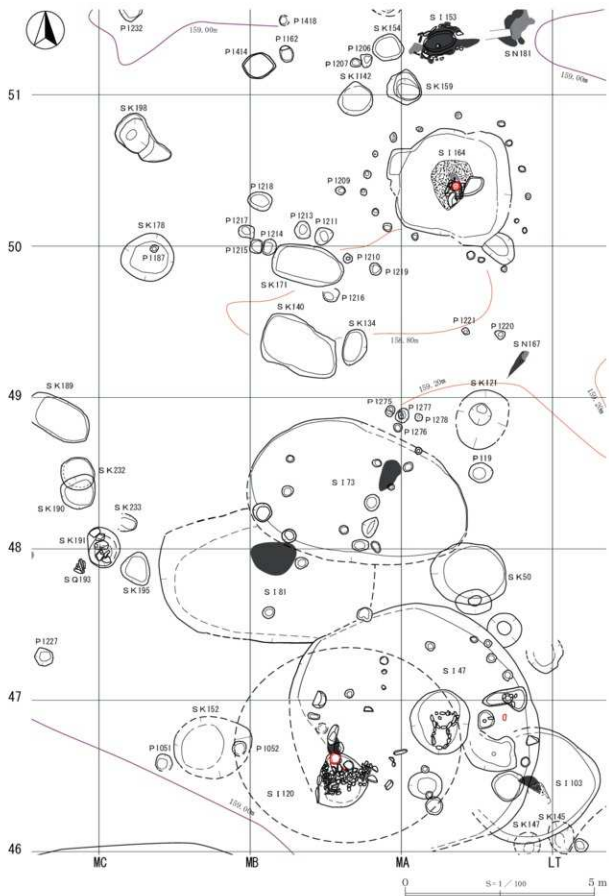
第18図 遺構配置図(2)



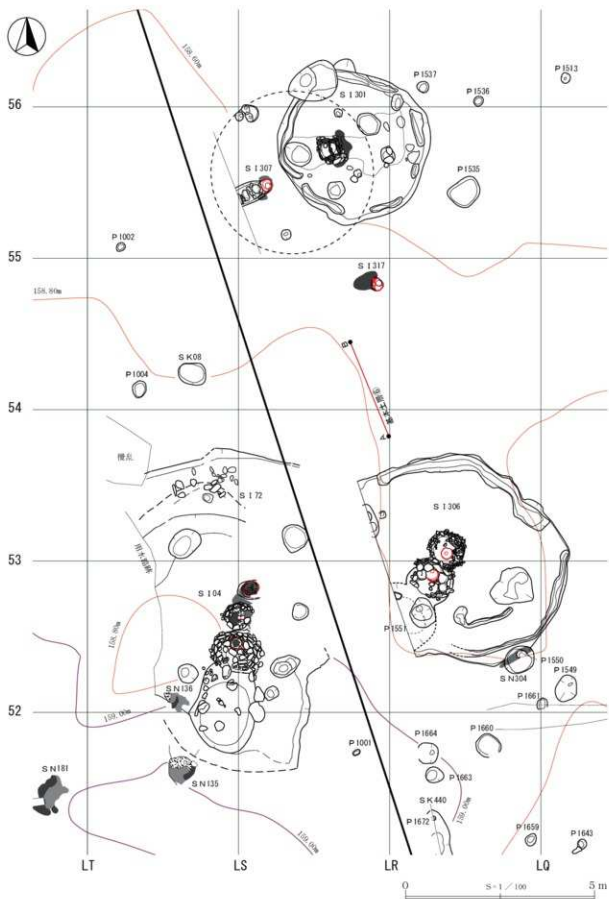
第19図 遺構配置図(3)



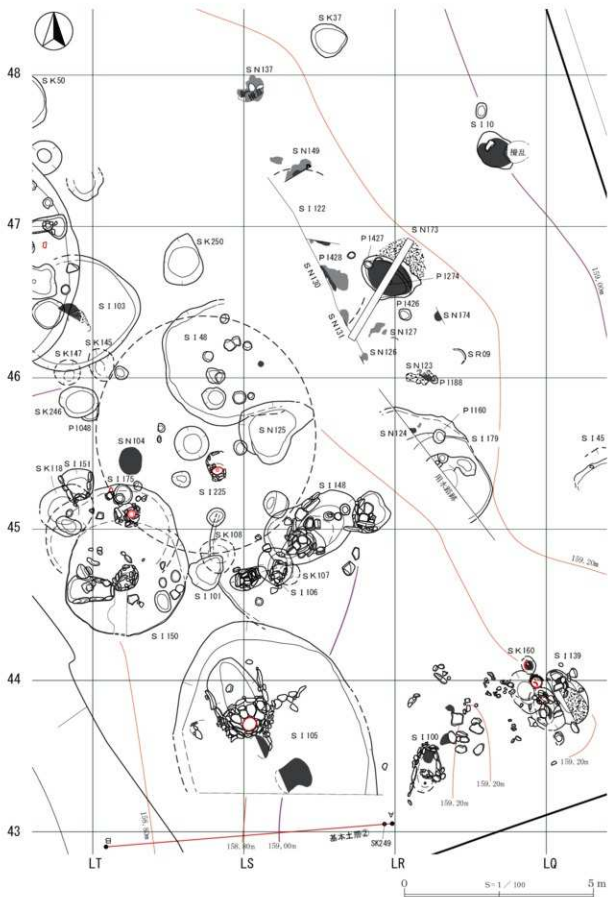
第20図 遺構配置図(4)



第21図 遺構配置図(5)



第22図 遺構配置図(6)



第23図 遺構配置図(7)

び特徴については、遺構内外共に本文や遺物観察表（第50～76表）に記載している。なお各遺構の出土物について未掲載のものは、点数・重量のみ記載した。

遺跡の所属時期は、大木8b～10a式期の縄文時代中期中葉～末葉であるが、明確に時期が判別している竪穴建物跡は、大木9a式期6棟、大木9b式期33棟、大木10a式期4棟であり、大木9b式期が主体となる。これらの建物跡はS L252・316河川跡に挟まれた区域を環状または弧状に分布し、その中心には土坑群や配石遺構群が見られる区域もあるが、令和元年度調査区に遺構の分布が集中し、令和3年度調査区は令和元年度調査区に比較し、遺構の分布が閑散としている。なお、複式炉や石囲炉の年代に関しては菅原哲文の著作及び横手市『神谷地遺跡・小出遺跡』（横手市2015）を参照した。

2 遺構と遺構内出土遺物

①竪穴建物跡

S I 03竪穴建物跡（遺構：第7・17・24・25図、付図1、第7表、図版3・6・8・16・41、遺物：第123図1・2、第50表、図版41、理化学分析：第233図、第77・78表）

《位置・確認状況》MH55・56、M I 55に位置する。第Ⅱ層上面を精査中、北側が調査区外へ延び、東側が擾乱を受け削平された黒褐色土の分布が確認された。試掘溝を設定し、掘り下げたところ、複式炉が検出されたため、竪穴建物跡として扱うこととした。S I 27・102竪穴建物跡、S R 19土器埋設遺構と重複して、本遺構が新しい。

《規模・形態》建物の平面形は、長軸（2.72）m（N-56°-W）、短軸（2.50）mの円形と推測される。確認面から床面までの深さは0.26mである。床面は平坦で、壁は東側が緩やかに、西側では急に立ち上がる。床面南東側に複式炉がある。柱穴は6基（P 1～6）確認された。径0.13～0.56m、床面からの深さ0.09～0.34mである。炉はP 5・6と重複して、P 6より旧く、P 5より新しい。

《埋土》2層に分けた。1層は第Ⅱ層土、2層は洪水堆積土を基質とする。混入物を含むことから、建物廃絶に伴う人為的な一括埋め戻し土と考えられる。

《炉》【規模・形態】土器埋設部・石組部・前庭部からなる複式炉である。掘方の平面形は、長軸2.35m（N-58°-W）、幅は土器埋設部0.72m、石組部1.22m、前庭部[1.29]m、床面からの深さは、土器埋設部0.19m、石組部0.46m、前庭部0.32mである。前庭部が南東側に開く。石組は、長軸1.67m、幅1.21mの範囲に、長さ7～22cm、厚さ6～10cmの細長い亜円・円礫が、A字状に前庭部両端に袖が開くように配置されていた。炉石に石皿の転用が確認された。土器埋設部には、埋設土器を中心に礫が放射状に並べられ、さらに外側には放射状に並べられた礫と直交するように礫が円形に配置されていた。埋設土器は、底部を欠損した径26cm、高さ29cmの深鉢形土器口縁～胴部が正位に据えられ、土器周辺は被熱していた。被熱厚は1～8cmである。また、石組部中央には、敷石があり、敷石の北東側は礫1個分の空間が空けられていた。さらに、前庭部床面には粘土を含む硬化面が確認された。確認時、周辺での被熱痕は未検出であったが、土器埋設部にて土器及び周辺の礫を外した際、被熱痕が確認された。よって火が焚かれた後に礫が並べられた可能性がある。長軸線上に並ぶP 5・6は炉廃絶後、または炉使用時に柱が立っていた可能性がある。【層序】14層に分けた。1・3・6・7・11層は第Ⅱ層土、2・4・5・9・12・14層は、洪水堆積土を基質とする。1～9層は、複式炉廃絶に際しての埋め戻し土であるが、P 5-1層が7層と同等層であることから、8・9層を埋め戻した後、P 5が構築されたと考えられ、柱材を抜き取った後、1～7層を埋めた想定される。また、P 6は堆積状況から、炉使用時、もしくは廃絶直後に構築されたと考えられる。10～12層は、埋設土器内部の堆積で、やはり廃絶に伴う埋め戻し土である。13層は焼土で、炉使用時の被熱痕であ

る。14層は炉構築時の裏込土である。

《出土遺物》埋土からは、埋設土器を含む縄文土器が53点2,269g・土器細片8g、スクレイパー（未製品及び欠け）1点4.2g、剥片2点50.1g、石皿Ⅱ類6点40,400g、磨石5点3,300g、凹石2点1,900g、石核1点63.3gが出土し、このうち土器2点を図示した。1は埋設土器で、Ⅲ群の深鉢形土器である。口縁～胴部、C1a類で、体部上半に入組波状文が描かれ、文様内側がLR斜縄文で充填されている。2はⅡ群の深鉢形土器である。胴～底部、逆U字状槽円文と想定される文様が描かれ、文様内側がLR斜縄文で充填されている。

《所見・時期》複式炉の埋設土器内及び石組部・前庭部でも炭化物の検出がほとんどないことから、廃絶前に掻き出された可能性がある。時期は、埋設土器から、大木10a式期と推定される。炉11層から出土した炭化物の放射性炭素年代測定（暦年較正年代）では、2464-2238calBC（2σ）の年代値が、樹種同定によりクリという結果が得られた（第4章第1節以下同、試料1）。

S I 04 竪穴建物跡（遺構：第22・26・27図、付図1、第8表、図版8・9、遺物：第123～130図3～38、第201図576・577、第50・51・69・70表、図版41～45・76・80、理化学分析：第233・244・245図、第77・78・87表）

《位置・確認状況》LR51～53、LS51～53に位置する。第Ⅲ層上面を精査中、黒褐～暗褐色・にぶい黄褐色土の分布が確認された。S I 72 竪穴建物跡、S N 135・136 焼土遺構と重複し、本遺構は、S I 72より新しく、S N 135・136より古い。

《規模・形態》建物の平面形は、長軸[6.84]m（N-12°-E）、短軸（4.52）mの楕円形と推測される。確認面から床面までの深さは0.87mである。底面はほぼ平坦で、壁は北側が緩やかに、南側では急に立ち上がる。床面中央に土器埋設炉（炉1）、その南側に隣接して複式炉（炉2）がある。柱穴は6基（P1～6）確認され、径0.40～0.85m、床面からの深さ0.20～0.41mである。また、A-B土層断面中位で、幅55cm、被熱厚3～9cmの焼土層が確認されている。

《埋土》10層に分けた。1・3・6・8・9層は、第Ⅱ層土、洪水堆積土を基質とする。堆積状況や遺物の出土状況から、4層を除く1～9層は建物廃絶に伴う人為的な埋め戻し土、10層は壁の崩落土と考えられる。4層は焼土で、5層上面で火が焚かれた際の被熱である。5層まで埋め立てた後、しばらく間隔を空け、1～3層で埋められたと考えられる。

《炉1》【規模・形態】掘方の平面形は、長軸（0.56）m、（N-85°-E）、短軸0.50mの楕円形を呈す。確認面からの深さは0.12m、底面は凹凸があり、壁は急に立ち上がるが、南側では一度平坦になり、その後再び急に立ち上がる。埋設土器1号は、径43cm、高さ10cmの深鉢形土器胴部を正位に据えていたもので、表面が被熱により剥離している。また、焼土は床面中央で検出され、長軸48cm、短軸36cmの範囲で分布していた。被熱厚は1～5cmである。土層断面の観察から、土器埋設炉から地床炉へと変化した可能性がある。【層序】5層に分けた。1・2層は焼土で、地床炉使用時の被熱で、それぞれ1層は強被熱、2層は弱被熱範囲である。3層は土器埋設炉廃絶時に埋設土器内への埋め戻し土、4層は土器埋設炉使用時に形成された炭化物層で、廃絶時の状況を示す。また、5層は土器埋設炉構築時の裏込土である。

《炉2》【規模・形態】土器埋設部・石組部・前庭部からなる複式炉である。掘方の平面形は、長軸3.98m（N-9°-E）、幅は土器埋設部（0.63）m、石組部（1.15）m、前庭部1.75mである。床面からの深さは、土器埋設部0.40m、石組部0.37m、前庭部0.21mである。前庭部は南側に開く。石組部は、長軸3.14m、幅1.79mの範囲に、長さ5～54cmの亜角・亜円・円礫が敷き詰められ、前庭部両端に袖が開くように配置されていた。埋設土器は、土器埋設部（埋設土器2号）と石組部（埋設土器3号）でも出土し、土器埋設部には径56cm、高さ24cm、石組部には径32cm、高さ34cmの深鉢形土器

胴部が正位に据えられ、内面が被熱により剥離していた。土器埋設部は、検出面で焼土の分布が見られ、さらに掘り下げたところ埋設土器2号が出土した。よって、大きく2時期の使用が考えられる。つまり、構築時は土器埋設部、その後石囲炉としての使用が想定される。検出面での被熱範囲は、長軸0.95m、短軸0.63mで、被熱厚は1～9cmである。また、埋設土器2号周辺でも被熱範囲が検出され、被熱厚は1～2cmである。石組部は埋設土器があり、炭化物が埋設土器南側の石で組まれた部屋の中に分布し、礫は組み替えられた可能性がある。焼土は埋設土器3号内及び周辺で確認され、被熱厚は1～7cmである。前庭部では、東西端に軸石の配列が石組部から続くが、次に大きな礫に変化し、礫の配列も不明瞭になっていく。前庭部内には、廃絶に伴う礫の投げ込みが確認される。【層序】15層に分けた。1・3・7層は洪水堆積土、4・14・15層は第Ⅱ層土をそれぞれ基質とする。1層は炉廃絶時に前庭部を、2・3層は石組部内の埋設土器内部を埋めた土である。4層は、炉使用時に形成された炭化物が石組内に残存したもので、廃絶時の状況を示す。5・6層は焼土層で、土器埋設部第2期使用時に火が焚かれた際の被熱痕で、それぞれ5層は強被熱、6層は弱被熱範囲である。7層は、土器埋設部廃絶の際に埋設土器2号内への埋め戻し土、8層は、石囲炉使用時に形成された灰が埋設土器2号内に堆積したものである。9・10層は焼土層である。特に石組部の埋設土器3号内の9層は、本来の由來土が不明なほど、被熱を受け変色していた。11・12層は炭化物層であるが、それぞれ上面で火が焚かれた痕跡がある。13～15層は炉構築時の裏込土である。13層は炭化物層であるが、石組下の堆積であることから、石組は組み直された可能性がある。

《出土遺物》埋設土器を除く遺物は、5～8層で多量に出土が確認されている。これらを含み埋土からは縄文土器768点63,182.4g（赤彩土器4点3,953.2g含む）・土器細片125.6g、円盤状土製品2点31.8g、土製品1点12.9g、スクレイパーⅡC a類1点17.5g・ⅡF b類1点6.2g、RF1点13.8g、剥片33点292.1g、石皿Ⅰ類1点4,820g・Ⅱ類1点3,400g、敲石2点1,450g、磨石3点2,050g、凹石2点1,000g、赤色石1点181.2gが出土し、このうち38点を図示した。3～38は土器・土製品で、3～5はそれぞれ埋設土器1～3号、6・14は5層、13は7層、21は1・7層からの出土である。3・4・6～16はⅡβ群の深鉢形土器である。3は胴部で、縦位区画沈線文と相対楕円文と想定される文様が描かれている。4は頸～胴部で、胴部上半は2条の波状沈線文の上下に相対渦巻文が描かれている。R L斜縄文でそれぞれ文様内側が充填されているが、4の胴部下半は地文としている。6～14は口縁～胴部、または口縁～頸部、口縁部で、6～9はA2 a類、10・11はA3 a類、12はC1 a類、13・14はC2 b類である。6は頸部に横位沈線を巡らし、胴部上半には横位相対渦巻文Aと楕円文の組合せ文、胴部下半には楕円文と想定される文様が描かれている。7は2条1組の波状沈線文または渦巻文等、8・9は長楕円文が描かれている。10は頸部に横位沈線を巡らせ、胴部には楕円沈線文と楕円文との組合せ文と想定される文様が描かれている。11は頸部に2条の横位沈線を巡らせ、胴部には降沈線垂懸文及び楕円沈線文と楕円文の組合せ文と想定される文様が描かれている。12は楕円沈線文と相対楕円文との組合せ文、13はC字状文と渦巻文との組合せ文と想定される文様や三角形文、14は降沈線相対渦巻文Aが描かれている。それぞれ文様内側は、7・8～10・12～14がR L、6・11はL R斜縄文で充填されている。一方、7・13では一部刺突文の充填も認められる。また、8は一部外面に赤色塗彩が見られる。15・16は頸～胴部または胴部で、縦位区画沈線文と相対楕円文の組合せ文が描かれ、文様内側がR L斜縄文で充填されている。17はⅡ群の深鉢形土器である。胴～底部で、長楕円文と想定される文様が描かれ、文様内側がR L斜縄文で充填されている。5・18・21～28はR L斜縄文を地文とする。5・18・21・22は口縁～胴部で、5はA3 a類、18はA1 a類、21・22はD3 a類である。23・24は頸～胴部、25は胴部、26～28は胴～底部である。19・20は無文の深鉢形土器である。口縁～胴部または口縁～頸部で、19はA2 a類、20はA3 a類である。29～31はⅡ・

Ⅲ群、32は地文の鉢形土器①である。29は口縁～胴部、C 2 b 類で、横位S字状波状文、30は胴部で円内単位の相対渦巻文、31は胴部で円内単位のC字状文と想定される文様が描かれている。文様内側は、29・30がLR、31はRL斜縄文で充填されている。また、31は外面に赤色塗彩が施されている。32は口縁部、C 1 a 類で、RL斜縄文を地文とする。33～35はⅡ・Ⅲ群の鉢形土器②である。33は口縁～底部、34は口縁～胴部で、ともにB類である。33は体部下半に波状沈線文で上半と区画、体部上半は口縁部に透かし彫りが施され、円形文、小楕円文、相対渦巻文Aが描かれている。34は体部に長楕円文や、相対楕円文Aや隆沈線渦巻文等、35は胴～底部で、相対渦巻文Aが描かれている。それぞれ文様内側は、33・35がRL、34はLR斜縄文で充填されている。また、34では外面に赤色塗彩が施されているとともに、下半分の煤けが目立つ。36はLR斜縄文の浅鉢形土器である。口縁～底部、A類で、口縁部内面に赤色塗彩が施されている。37はRL斜縄文の器台土器台部で、円形の穿孔を伴う。38はRL斜位回転文が施された円盤状土製品である。576・577は石器である。576はスクレイパーⅡF b 類、577は石皿I類で、外縁が作出されている。

《所見・時期》炉1・炉2は、それぞれ土器埋設炉から地床炉、土器埋設炉から石囲炉へ作り替えられていたと想定される。時期は、埋設土器から、大木9 b 式期と推定される。また炉2～4層から出土した炭化物の放射性炭素年代測定（暦年較正年代）では、2894～2676cal BC (2σ) の年代値が、樹種同定によりクリという結果が得られた（試料2）。さらに、赤彩土器の顔料は、蛍光X線分析により、ベンガラという結果が得られた（第2章第5節、分析Na.1～2・4）。

S I 10 竪穴建物跡（遺構：第23・28図、付図1、第51表、図版9、遺物：第130図39・40、第51表、図版45）

《位置・確認状況》L Q47に位置する。第Ⅲ層上面を精査中、にぶい黄褐色土及び焼土の分布が確認された。精査中、礫や土器が焼土層下から出土したことから炉跡と想定され、付近から柱穴も確認されたことから、竪穴建物跡の一部と判断された。竪穴の掘り込みは削平により失われていた。

《炉》掘方の平面形は、長軸1.01 (N-67° -W) m、短軸0.82mの不整楕円形を呈す。確認面からの深さは0.27mである。底面は平坦で、壁は急に立ち上がる。焼土は長軸(0.66) m、短軸0.79mで、被熱厚は2～7cmある。底面付近で土器が多数出土し、その上に礫が置かれた状態で埋められていた。柱穴1基 (P1) があり、長軸0.41m、短軸0.28mである。

《層序》4層に分けた。1・4層は洪水堆積土を基質とする。1層は廃絶に際しての埋め戻し土であるが、炭化物が掻き出され、攪拌された痕跡がある。2層は1層と同質土で、火が焚かれた際の被熱痕である。また3層は炭化物層であるが、被熱により変色していた。炉の被熱面は2枚あり、2層が新しく、3層は底面に礫が組まれ、さらに炭化物も被熱により変色していたことから、この上面でも火が焚かれたと考えられる。4層は炉の下部構造である。

《出土遺物》3・4層の層境を中心に土器が出土した。埋土から縄文土器42点14,069.5g・土器細片40.3g、被熱を受けた石皿Ⅱ類1点8,900g、磨石1点1,350g、RF I 点6.7gが出土し、このうち4層から出土した土器2点を図示した。39はⅡβ群の深鉢形土器の口縁～底部、C 1 a 類で、体部上半に2条1組の横位波状文を巡らせ、その波間に相対渦巻文Dと小楕円文、逆U字状渦巻文と小楕円文、N字状文と小楕円文、円内単位の相対楕円文A等が描かれている。RL斜縄文で文様内側が充填され、体部下半は地文としている。40はLR斜縄文の深鉢形土器である。口縁～胴部、D 3 a 類で、口縁部にはミガキが施されている。

《所見・時期》下部構造を持つ地床炉である。底面付近で土器が多量に敷かれたように出土し、その上に礫がいくつか置かれた状態で埋められていたことから、第1期は石囲炉であった可能性がある。時期は出土遺物から、大木9 b 式期と推定される。

S I 11 竪穴建物跡 (遺構図：第19・29図、付図1、第9表、図版9、遺物：第130図41・42、第51表、図版45)

《位置・確認状況》MA55に位置する。第Ⅲ層上面を精査中、褐色土の分布が確認された。

《規模・形態》平面形は、長軸(2.06)m(N-25°-E)、短軸(2.27)mの楕円形と推測される。確認面からの深さは0.13mである。底面はほぼ平坦で、壁は急に立ち上がる。付属施設としては、床面中央部に石囲炉がある。

《埋土》洪水堆積土を基質とする単層で、炭化物を含むが、埋土が周辺との差異がないことから自然流入土の可能性はある。

《炉》【規模・形態】掘方の平面形は、長軸0.66m(N-67°-E)、短軸0.50mの隅丸方形を呈す。床面からの深さは0.18mである。底面は平坦で、壁は急に立ち上がる。幅6~24cmの亜角・亜円礫が、長軸0.72m、幅0.45mの範囲で、掘方壁際及び低面に敷き詰められていた。一部の礫、特に西側の壁に並べた礫は強く被熱していた。【埋土】3層に分けた。1・3層は洪水堆積土を基質とする。1層は自然流入土の可能性はある。2層は炉使用時に形成された炭化物が残存したもので、廃絶時の状況を示す。3層は炉構築時の裏込土である。

《出土遺物》埋土から縄文土器23点965.6g・土器細片5.2gが出土し、このうち2点を図示した。41はⅡβ群の深鉢形土器である。壺形状の口縁~胴部、B2a類で、頸部に横位沈線を巡らせ、胴部と区画し、胴部には隆沈線相対渦巻文Bと指頭を組合せた円内単位文、その左右上にも指頭による円文が施されている。42はL R斜縄文の深鉢形土器である。頸~胴部で、頸部に横位沈線が巡る。

《所見・時期》時期は、埋土から大木9b式期の土器が出土しているが、炉の形態及び出土遺物から、大木9a式期と推定される。

S I 12 竪穴建物跡 (遺構：第28図、付図1、第10表、図版9、遺物：第131図43~47、第51表、図版45、埋土化学分析：第233・236図、第77・78表)

《位置・確認状況》LQ48・49に位置する。第Ⅲ層上面を精査中、礫の周辺に、炭化物の分布が確認されたため、複式炉の一部と判断された。東及び西側は検出できなかった。竪穴建物の掘り込みは、削平されたため不明である。

《炉》土器埋設部・石組部からなる複式炉である。前庭部は削平のため不明瞭である。掘方の平面形は、長軸[1.48]m(N-25°-W)、幅は土器埋設部0.78m、石組部(0.58)mである。確認面からの深さは土器埋設部0.29m、石組部0.08mである。土器埋設部の底面は平坦で、壁は急に立ち上がる。石組部は掘り込みが不明瞭であるが、緩やかに傾斜している。前庭部は南東側に開くと想定される。石組は、長軸1.54m、幅0.80mの範囲に長さ4~37cmの亜角・亜円礫が配置されていた。上部が大きく削平されていることから、石組部では底面のみが残存し、本来、袖石が付属していたと想定される。土器埋設部中央には、埋設土器として径20cm、高さ12cmの深鉢形土器底部が据えられていた。埋設土器周辺には、礫がコの字型に並べられていた。土器埋設部の掘り込みは、第Ⅳ層地山上面に達し、第Ⅳ層中の礫が、底面で一部露出していた。石組部には8~25cmの比較的平らな礫が敷石として規則正しく並べられていた。また、炉西側に建物に付属すると考えられる柱穴1基確認された。規模は、長軸0.26m、短軸0.22mである。

《層序》3層に分けた。2・3層は第Ⅲ層土を基質とする。1層は、埋設土器内に堆積した炭化物層で、廃棄直前の状況を残す。2層は炭化物が攪拌しており、使用時に掻き出された痕跡が残る。3層は、礫の下であることから、炉構築時の石組部裏込土と考えられる。

《出土遺物》炉内埋土から埋設土器を含めた縄文土器24点1,361.4g・土器細片7.2gや石皿Ⅱ類2点17,300g、敲石1点750g、凹石1点1,000gの他、P1埋土中から剥片1点18.6gが出土し、このう

ち5点を図示した。43は埋設土器である。深鉢形土器でR L斜縄文が施されている。胴～底部で、底部にミガキが施されている。44はⅡβ群の深鉢形土器である。胴部で、楕円沈線文と楕円文の組合せ文と想定される文様が描かれ、文様内側がR L斜縄文で充填されている。45はⅡβ群の深鉢形土器である。胴～底部で、楕円文が描かれ、文様内側がR L斜縄文で充填されている。46はⅡ・Ⅲ群の深鉢形土器である。渦巻文が描かれ、沈線間にはR L斜縄文、その外側は刺突文が充填されている。47はL R斜縄文の台付土器である。胴～台部で、胴部の立ち上がりが一部残存し、台部には楕円形の穿孔がある。

《所見・時期》時期は、出土遺物及び周辺の状況から、大木9・10a式期、縄文時代中期後葉～末葉と推定される。また、出土した放射性炭素年代測定（暦年較正年代）では、2872-2584cal BC（2σ）の年代値が、樹種同定によりクリ・カエデ属という結果が得られた。

S I 14 竪穴建物跡（遺構：第19・30図、第11表、付図1、図版10、遺物：第131・132図48～51、第232図821、第51・75表、図版46・82）

《位置・確認状況》MA57に位置する。第Ⅲ層上面を精査中、礫や土器とともに北側が調査区外へ続く、褐色・暗褐色・黒褐色土の分布が確認された。掘り込みの形態及び礫や土器片の出土状況から、廃絶された複式炉と判断され、竪穴建物跡として扱うこととした。建物の掘り込みは、後世の削平により未検出である。

《炉》掘り込みの平面形は、長軸（2.83）m（S-1°-W）、幅0.84～（1.50）mの溝状を呈す。確認面からの深さは0.18mである。土器片が一部中央東側の凹みで出土していることから、土器埋設部であった可能性がある。南側から石組部、前底部と続いていた可能性があるが、詳細は不明である。柱穴は2基（P1・2）確認された。規模は、径0.34～0.38m、検出面からの深さ0.05～0.08mである。炉との新旧関係は不明である。

《埋土》5層に分けた。1・3・5層は洪水堆積土、2・4・6層は、第Ⅱ層土を基質とする。1～5層は炉廃絶時の人為的な埋土で、2層は埋設土器内、3～5層は石組・前底部と想定される範囲の埋土である。6層は炉構築時の裏込土と考えられる。

《出土遺物》埋土から、縄文土器122点4,049.5g・土器細片21g、剥片5点30.5g、凹石1点500gの他、粉れ込みと考えられる中世の須恵器系陶器甕1点37.8gが出土し、このうち5点を図示した。なお調査段階では、炉としての認識がなく、埋設土器と想定される土器片も粉々になり復元は不可であることから、図示していない。48はⅡα群の深鉢形土器である。口縁～胴部、A3b類で、隆沈線横位渦巻文や楕円文が描かれ、文様内側がR L斜縄文で充填されている。49はⅡβ群の深鉢形土器である。口縁～胴部、D3a類で、逆U字状沈線文と相対楕円文Bまたは逆U字状楕円文との組合せ文と想定される文様が描かれ、文様内側がR L斜縄文で充填されている。50・51はⅡ群の深鉢形土器である。胴部で、50は逆U字状楕円文、51は楕円文と想定される文様が描かれている。それぞれ文様内側は、R L斜縄文で充填されている。821はV群の須恵器系陶器甕である。頭部で、ロクロナデが確認される。

《所見・時期》掘方の形態及び、土器片や礫の分布状況から、廃絶時に石組が破壊された複式炉と考えられる。形態から北側は前底部にあたりと想定される。時期は炉の形態及び出土遺物から、大木9b式期と推定される。

S I 26 竪穴建物跡（遺構：第17・18・31・32図、付図1、第12表、図版6、遺物：第132～134図52～65、第201図578～580、第51・52・69・70・表、図版46・47・75・76、理化学分析：第233図、第77・78表）

《位置・確認状況》MH53・54、MI53・54に位置する。S K I 25 竪穴建物跡南壁の立ち上がりを確認するために、サブトレンチを入れ土層断面を観察したところ、S K I 25 竪穴建物跡下から、炉を伴う、別の竪穴建物の掘り込みが確認された。S I 63・S K I 25 竪穴建物跡、S K I 44・177土坑、

P201・P1200と重複し、S I 63、S K 144・177より新しく、S K I 25、P201・1200より古い。またS K 220土坑と重複する可能性があるが、詳細は不明である。

《規模・形態》断面観察から、平面形は、長軸[6.66]m (N-25°-W)、短軸[4.75] mの隅丸方形を呈すと推定される。確認面から床面までの深さは、0.50mである。床面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。床面中央に炉1、やや北側に炉2及びS K I 土坑がある。炉1・2の新旧関係は、炉1が新しく、炉2が古い。柱穴は9基(P1~9)確認された。径0.07~0.69m、床面からの深さは、0.13~0.54mである。

《埋土》5層に分けた。1~3・5層は洪水堆積土、4層は第II層土を基質とする。1・2層は自然流入土、3~5層は廃絶に伴う人為的な埋め戻し土と考えられる。

《炉1》【規模・形態】床面中央にて、火が焚かれた際の被熱痕で、石組等もないことから、地床炉と考えられる。平面形は、長軸1.86m、短軸0.93mの不整楕円形を呈す。被熱厚は、2~14cmである。【層序】単層で、炉使用時の被熱痕である。

《炉2》【規模・形態】床面中央やや北寄りにて、火が焚かれた際の被熱痕で、石組等もないことから、地床炉と考えられる。平面形は、長軸0.60m、短軸(0.30) mの不整形を呈す。被熱厚は、10~12cmである。本遺構は、S I 26付属S K 01、S K I 25付属P2・P3と重複してこれらより古い。

【層序】単層で、炉使用時の被熱痕である。

《S K I》【規模・形態】建物に付属する土坑である。土層断面観察の際に、床面からの掘り込みが確認された。平面形は、長軸[0.67] m、短軸[0.64] mである。確認面からの深さ0.30mである。底面は平坦で、壁は急に立ち上がる。炉2、S K I 25 P 6と重複して、本遺構は炉2より新しく、S K I 25 P 6より古い。【埋土】洪水堆積土を基質とする単層で、廃絶に伴う人為的な埋め戻し土と考えられる。

《出土遺物》埋土から縄文土器448点11,166.3g(赤彩土器3点300.5g含む)・土器細片149g、土偶2点20.6g、円盤状土製品2点42.9g、土製品1点44.9g、石鏃A a類1点0.9g、石匙C c類1点11.7g、スクレイパーI B a類1点48.3g・I B b類1点103.8g、剥片23点309.6g、磨石3点2,100gが出土し、このうち17点を図示した。52~65は土器・土製品で、55は2・3層、54・56・57・61は4層からの出土である。また、53・54は同一個体である。52はII α群の深鉢形土器である。口縁~胴部、A 3 a類で、隆沈線渦巻文や楕円文と想定される文様が描かれている。文様内側がR L斜縄文でそれぞれ充填されている。53~55はII β群の深鉢形土器である。53・54は口縁~胴部、A 3 a類で、長楕円文や円文、55は口縁部、C 2 a類で長楕円文と想定される文様が描かれ、それぞれ文様内側が、L R斜縄文で充填されている。56~58はII群の深鉢形土器である。56・57は胴部、58は胴~底部で、沈楕円文や相対楕円文等の類似する文様が描かれ、それぞれ文様内側がL R斜縄文で充填される。59は無文の深鉢形土器である。口縁~頸部で、C 2 a類と想定される。60はL R斜縄文の深鉢形土器胴部である。61はII群の鉢形土器①である。胴部で隆沈線渦巻文や相対渦巻文Dと想定される文様が描かれ、文様内側がR L斜縄文で充填されている。62はミニチュア深鉢形土器である。頸~胴部で、長楕円文が描かれ、文様内側がR L斜縄文で充填されている。63・64はA類の土偶である。63は胴部で縦・横位沈線の他C字状文が描かれている。64は小型板状土偶である。65は円盤状土製品で、表面が摩滅している。沈線で文様が描かれ、刺突文が充填されている。578~580は石器である。578は石鏃A a類、579はC c類の石匙で、どちらも先端が欠けている。

《所見・時期》時期は、出土遺物及び周囲の状況から、大木9式期と推定される。また、炉2から出土した炭化物の放射性炭素年代測定(暦年較正年代)では、2874~2586cal BC (2σ)の年代値が、樹種同定によりクリという結果が得られた(試料10)。

S I 27 竪穴建物跡（遺構：第7・17・33図、付図1、第13表、図版6・10、遺物：第134図66～70、第201図581、第52・70表、図版46・47・79）

《位置・確認状況》MG55・56、MH55・56に位置する。第Ⅲ層上面を精査中、北側が調査区外へ延びる褐色土の分布及び礫や土器の出土が確認された。土層観察用ベルトを残して掘り下げたところ、石組及び埋設土器が検出されたため、複式炉を伴う竪穴建物跡と判断された。S I 03 竪穴建物跡、S R 19 土器埋設遺構と重複し、S I 03 より本遺構が古い。また、S R 19 と本遺構との新旧関係は不明である。

《規模・形態》平面形は長軸（4.58）m（N-82°-E）、短軸（2.06）mの楕円形と推測される。確認面から床面までの深さは0.36m、床面は平坦で、壁は急に立ち上がる。また、柱穴は4基（P1～4）確認された。規模は、径0.22～（0.42）m、検出面からの深さ0.20～0.34mである。P4西側では、扁平な礫が壁に沿って立位の状態で見出された。床面中央から南東にかけ、複式炉がある。

《炉》【規模・形態】土器埋設部・石組部・前庭部からなる複式炉である。掘方の平面形は、長軸（2.26）m（N-48°-W）、幅は土器埋設部（0.84）m、石組部1.02m、前庭部0.99mである。床面からの深さは、土器埋設部0.23m、石組部0.22m、前庭部0.13mである。前庭部は南東側に開く。石組は長軸1.46m、幅1.02mの範囲に長さ5～46cmの亜角・亜円礫をコの字状に配置し、前庭部両端に袖が開くように配置されていた。なお、炉石には磨石、石皿からの転用が認められる。底面はほぼ平坦で、壁は急に立ち上がる。土器埋設部は、石組部からの連続した礫の並びが見られるが、北側では確認されなかった。埋設土器は、径24cm、高さ20cmの深鉢形土器頸～底部が斜位に据えられ、南側を開口していた。また、内側表面が被熱により剥離している。一部土器片が埋設土器の周りに据えられていた部分も見られた。土器埋設部と石組部の間の断面にて、被熱痕が確認された。被熱厚は1～3cmである。石組部は中央部に、長軸線と直交するように比較的細長の礫が2か所置かれ、2つに区画されていた。前庭部には、廃絶後に構築された柱穴P4が確認されている。また、炉検出時には、埋設土器を覆うように、長さ36cmの扁平な礫が置かれていた。【層序】5層に分けた。1・2層は洪水堆積土を基質とする。1層は石組部及び前庭部に、2層は埋設土器内への炉廃絶に際する人為的な埋め戻し土である。3層は埋設土器内底部、4層は石組部及び前庭部にそれぞれ堆積した炭化物層で、炉廃絶時の状況を示す。5層は焼土で、炉使用時の被熱痕である。

《出土遺物》埋土からは埋設土器を含めた縄文土器58点4,678.2g・土器細片43.2g、スクレイパーⅡD a類1点22g、RF1点3.2g、剥片3点10.9g、石皿Ⅱ類8点44,450g、磨石2点1,650gが出土し、このうち6点を図示した。66～70は土器で、66は埋設土器である。67・68はⅡβ群の深鉢形土器である。67は口縁部、C1 a類で、多重沈線文と楕円文の組合せ文と想定される文様、68は口縁～胴部、C2 a類で、口縁に横位沈線、体部上半には渦巻文・N字状文、下半には楕円形文が描かれている。それぞれ文様内側は、67がLR、68はRLR斜縄で充填されている。66・69はⅡ群の深鉢形土器である。66は頸～底部で、逆U字状楕円文、69は胴部、逆U字状沈線文と想定される文様内に相対楕円文Bが描かれている。それぞれ文様内側は、66がLR、69はRL斜縄文で充填されている。70はLR斜縄文の深鉢形土器胴部である。581はスクレイパーⅡD a類である。

《所見・時期》炉の北側の袖石は、廃絶時に抜き取られた可能性がある。また、埋設土器を覆う礫は、廃絶の際、儀礼が行われた可能性がある。時期は、埋設土器及び出土土器から、大木9 b式期と推定される。

S I 41 竪穴建物跡（遺構：第19・34図、付図1、第14表、図版10、遺物：第135図71・72、第202図582・583、第52・69・70表、図版47・75・78・81）

《位置・確認状況》MD56・57、ME56・57に位置する。第Ⅱ層上面にて、掘方が不明瞭な灰褐色に

ぶい黄褐色土の分布が確認された。その後第Ⅲ層まで掘り下げた後、北側が調査区外へ続く石組が検出されたため、複式炉と判断された。その後、調査区外と接する壁面を精査し、堅穴建物跡の掘り込みが土層断面から確認された。SK43と重複して本遺構が古い。

《規模・形態》平面形は、長軸(3.45)m(N-15°-W)、短軸4.91mの円形と推測される。確認面から床面までの深さは0.18m、床面は平坦で、壁は急に立ち上がる。床面中央に複式炉がある。柱穴は5基(P1~5)確認された。径0.14~0.30m、確認面からの深さは0.11~0.48mである。P5は炉と重複して古い。

《埋土》3層に分けた。全て洪水堆積土を基質とする。堆積状況から自然流入土の可能性がある。

《炉》【規模・形態】石組部・前庭部からなる複式炉である。北側が調査区外へ続くため、土器埋設部が存在していたと想定される。掘方の平面形は、長軸2.18m(N-11°-W)、幅は石組部1.32m、前庭部1.51mである。確認面からの深さは、石組部0.22m、前庭部0.14mである。底面はほぼ平坦で、壁は急に立ち上がる。前庭部は南東側へ開く。石組は、長軸(1.87)m、幅1.55mの範囲に長さ6~38cmの亜円・円礫が、A字状に配置されていた。長軸に対して弧状に交わるように、底面に石を並べ2つに区画され、扁平な石を壁に立てかけるように置かれていた。また、前庭部両端には、袖石が石組部同様、壁面に立てかけるように配置されていた。明確な被熱痕は確認されなかったが、石組部の礫はいくつか被熱が認められた。【埋土】4層に分けた。1・4層は、洪水堆積土、3層は第Ⅱ層土を基質とする。1層は炉廃絶時の埋め戻し土で、礫が多量に投げ込まれている。2層は炉使用時に形成された炭化物層で、廃絶時の状況を示す。3・4層は、炉構築時の裏込土と想定される。

《出土遺物》炉内、特に前庭部には廃絶に伴い多量の礫とともに、土器等の遺物が投げ込まれていた。これらを含め埋土から、縄文土器90点1,703.9g・土器細片13.3gの他、土偶1点70.7g、石匙Cd類1点4.1g、剥片5点32.9g、石皿Ⅱ類2点1,050g、磨石3点1,700g、多角柱状石製品1点1,820gが出土し、このうち4点を図示した。71はRL斜縄文の深鉢形土器である。口縁~底部、A3a類で、口縁部にはミガキが施されている。72はA類の土偶胴部で、沈線、刺突、貼付により正面は縦位、側面は横位を中心として文様が描かれている。582は石匙Cc類、583は角柱状石製品である。

《所見・時期》P5は、複式炉の構築土下からの検出であることから、複式炉構築以前に使用していたと考えられる。時期は炉の形態及び出土遺物、遺構の重複関係から大木9b式期と想定される。

S I 45 堅穴建物跡 (遺構：第23・35図、付図1・2、図版11、遺物：第135・136図73~80、第202図584、第52・70表、図版47)

《位置・確認状況》LP44・45に位置する。第Ⅲ層上面を精査中、褐灰~暗灰黄・黄灰色土の分布が確認された。SKI15堅穴建物跡、SK80土坑と重複して、これらより本遺構が古い。

《規模・形態》平面形は、長軸[3.56]m(N-36°-W)、短軸(1.90)mで平面形は不明である。確認面から床面までの深さは0.41m、貼床の厚さは1~10cmである。床面は平坦で、壁は北側が急に、途中から緩やかに立ち上がる。付属施設として、床面北側に複式炉がある。

《埋土》8層に分けた。全て洪水堆積土を基質とする。1~3層は、廃絶に伴う礫の投げ込みが見られることから人為的、4~7層は炭化物を含む自然流入土の可能性ある。8層は、建物構築時に床面を整えるための貼床土と考えられる。

《炉》【規模・形態】土器埋設部・石組部からなる複式炉である。掘方の平面形は、長軸0.72m(S-35°-E)、幅は、土器埋設部0.24m、石組部0.38mである。床面からの深さは、土器埋設部0.11m、石組部0.12mである。底面はやや凹凸のある鍋底状で、壁は急に立ち上がる。石組は、長さ6~37cmの亜円・円礫が、長軸0.85m、幅0.51mの範囲で分布していた。埋設土器は、径24cm、高さ26cmの深鉢形土器胴~底部が正位に据えられ、その周囲は小型の礫で囲われていた。石組部は、底面に礫を敷

き、長軸線に直交するように仕切石が据えられ、部屋が構築されていた。周辺に明確な被熱痕は認められなかった。廃絶時には、長さ43cmある大型の礫が投げ込まれていた。【埋土】3層に分けた。1・2層は、洪水堆積土を基質とする。1層は埋設土器、2層は石組部の隙間に入り込んだ人為的な埋め戻し土である。3層は炉使用時に形成された炭化物層で、廃絶時の状況を示す。

《出土遺物》埋土から埋設土器を含め縄文土器174点5,028.2g（赤彩土器1点13.7g含む）・土器細片17.6gの他、スクレイパーⅠAa3類1点16.6g・ⅡBb類1点16.9g、剥片3点119.2g、石皿Ⅱ類3点11,850g、磨石1点450g、凹石1点700gが出土し、このうち9点を図示した。73～80は土器で、73は埋設土器である。73～77はⅡβ群の深鉢形土器である。73は胴～底部で、胴部に横位波状区画沈線文を巡らせ、区画文上にはU字状文、S字状相對渦卷文Aの他、横位相對渦卷文と想定される文様が描かれている。文様内側がRLR斜縄文で充填されている。74は口縁～頸部、A3a類で、長楕円文、75は口縁部、Aa類で、楕円沈線文と長楕円文の組合せ文が描かれている。76は口縁～胴部、C1b類で、H字状楕円文と楕円文の組合せ文等、77は口縁部、C2a類で、横位沈線文を巡らせ、その下に円文及び多重楕円沈線文が描かれている。それぞれ文様内側は、74・75がRL、76・77はLR斜縄文で充填されている。78～80はⅡ群の深鉢形土器である。78・79は頸部である。78は相對渦卷文や円文等、79は横位区画帯や楕円文と想定される文様が描かれ、それぞれ文様内側が、RL斜縄文で充填されている。80は胴部で、隆沈線により区画文やその他不明な沈線文様が描かれ、文様内側がLR斜縄文で充填されている。584は床面直上から出土したスクレイパーⅡBb類である。

《所見・時期》建物跡1～3層から出土した礫は、ある程度まとまった状態であることから、意図的に集積された可能性がある。時期は、埋設土器から、大木9b式期と推定される。

S I 46 竪穴建物跡（遺構：第8・17・18・36・37図、付図1、第15表、図版11、遺物：第136図81、第202図585・586、第52・70表、図版79・82）

《位置・確認状況》MF54・55、MG54・55に位置する。第Ⅲ層上面を精査中、にぶい黄褐・褐色土の分布が確認された。S I 58・102竪穴建物跡、SK20土坑、SN21焼土遺構、P33と重複し、S I 58・102より新しく、SK20、SN21、P33より本遺構が古い。

《規模・形態》長軸[4.44]m（N-52°-W）、短軸4.15mの円形を呈す。確認面から床面までの深さは0.30mである。床面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。建物南西に複式炉（炉1）、中央やや北西に焼土（炉2）、建物中央に土坑状のSK1が確認された。柱穴は11基（P1～11）確認された。径0.14～0.44m、検出面からの深さ0.08～0.23mである。P10は炉1より旧いが、P11との新旧関係は不明である。石組部及び炉跡周辺には粘土を含む硬化面（貼床）が確認された。

《埋土》2層に分けた。洪水堆積土を基質とする。洪水堆積土が塊状に含まれることから、廃絶に伴う人為的な埋め戻し土と考えられる。

《炉1》【規模・形態】石組部・前庭部からなる複式炉である。掘方の平面形は、長軸1.89m（N-48°-W）、幅は石組部0.72m、前庭部0.76mである。床面からの深さは、石組部0.12m、前庭部0.09mである。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。前庭部は南東側に開く。石組は、長軸1.22m、幅0.70mの範囲に長さ8～42cmの垂角・垂円礫がコの字状に並べられていた。また石組部は、長軸線に直交するように2か所に仕切石や境石を並べ、2つに区画されていた。前庭部両端には、石組部から続く袖石が置かれ、南側に比べ、北側の袖が短い。石組部内側の礫表面が被熱している。【埋土】3層に分けた。1層は洪水堆積土、2層は第Ⅱ層土を基質とする。1・2層は、炉廃絶に伴う人為的な埋め戻し土、3層は炉使用時に形成された炭化物層で、廃絶時の状況を示す。

《炉2》【規模・形態】焼土の平面形は、長軸0.44m、短軸0.35mの不整形を呈す。被熱厚は1～6cmである。【層序】単層で、炉使用時の被熱痕である。

《SK1》【規模・形態】平面形は、長軸0.43m (N-2°-E)、短軸0.40mの不整形を呈す。床面からの深さは0.16mである。底面は凹凸があり、壁は急に立ち上がる。幅16~20cmの垂円礫2点を、炉1の長軸線上に直交するように入れていた。【埋土】2層に分けた。1層は洪水堆積土、2層は第II層土を基質とする人為的な埋め戻し土と考えられる。

《出土遺物》埋土から縄文土器46点724g・土器細片11.4g、楔形石器1点12.4g、石皿Ⅱ類3点30.400g、凹石1点470g、剥片2点6.3gが出土し、このうち3点を図示した。81はⅡ群の深鉢形石器である。胴部で、逆U字状楕円文と想定される文様が描かれ、文様内側にR L斜縄文で充填されている。585は楔形石器、586は凹石である。586は炉1内からの出土である。

《所見・時期》P10は堆積状況から、炉1使用時及び廃絶直前に構築された可能性があるが、詳細は不明である。時期は、出土遺物及び遺構の重複関係から、大木9b式期と推定される。

S I 47 竪穴建物跡 (遺構：第21・37・38図、付図1、第16表、図版4・11、遺物：第136・137図82~90、第52表、図版48)

《位置・確認状況》LT46・47、MA46・47に位置する。第II層上面を精査中、黒褐~黄灰色土の分布が確認された。S I 73・103・120竪穴建物跡、SK50土坑と重複し、本遺構はS I 81、SK50より旧く、S I 103・120より新しい。

《規模・形態》長軸 [6.47] m (N-18°-E)、短軸 [6.35] mの楕円形を呈す。確認面から床面までの深さは0.67m、床面は平坦で、壁は東側が急に立ち上がるが、西側では途中平坦になり、再度急に立ち上がる。炉及び焼土の分布から大きく3時期が考えられる。炉は3基確認された。炉1は建物第1・2期床面中央や南東寄り、炉2も第1期床面南東で、炉3は断面のみの確認で、建物3期床面中央辺りで確認されている。炉1・炉2の最初期での新旧関係は不明である。またSK1土坑が建物東端にある。柱穴は17基 (P1~17) 確認された。径0.16~0.95m、検出面からの深さは0.11~0.35mである。P3はSK1と、P2は炉1と重複して新しい。P15~17は屋外の柱穴である。

《埋土》5層に分けた。2・4・5層は洪水堆積土、1層は第II層土、3層は洪水堆積土と第II層土の混土を基質とする。1~3層は自然流入土の可能性があり、4・5層は人為的な埋め戻し土、5層上面は炉1の3期、4層は炉3の各地床炉が構築されていることから、それぞれ竪穴建物跡を再構築するための盛土と考えられる。

《炉1》【規模・形態】炉1では3時期が考えられ、第1期は複式炉、第2・3期は地床炉である。第1期の複式炉は、石組部・前庭部からなり、掘方の平面形は、長軸1.70m (S-22°-E)、幅は石組部1.56m、前庭部1.48mで、床面からの深さは、石組部0.16m、前庭部0.18mである。前庭部は北西側に開く。石組部は、長軸1.09m、幅0.76mの範囲に長さ6~12cmの垂円礫が「8」字状に並べられ、長軸線に交わるように仕切石や境石が置かれ、部屋が2つ構築されていた。被熱痕は石組部内で確認され、被熱厚は1~6cmである。また、石組部内側に面した礫には、被熱痕や煤が認められた。第2・3期は、土層断面のみの記録である。第2期は第1期の複式炉を廃絶、埋め戻した後、石組部東側の部屋及び前庭部の上で火が焚かれていた。被熱厚は2~7cmである。第3期は、第2期廃絶後に、土を盛り、その上面で火が焚かれていた。被熱厚は1~7cmである。使用面は、建物2期に相当する面である。【層序】5層に分けた。2・4層は、洪水堆積土を基質とする。1・3・5層は焼土で、1層は2層上面 (第3期)、3層は4層上面 (第2期)、5層は複式炉石組部内 (第1期) で火が焚かれた際の被熱痕である。2・4層は、それぞれ第3期から第2期、第1期から第2期へ移る際の人為的な埋土である。

《炉2》【規模・形態】土坑状に掘り下げた窪みで、火が焚かれた際の痕跡である。掘方の平面形は、長軸 [1.08] m (N-69°-W)、短軸0.86mである。検出面からの深さは0.24m、底面はほぼ

平坦で、壁は南側は緩やかに、北側では急に立ち上がる。焼土は間層をはさんで、2層形成されている。第1期は底面で火を焚き、被熱厚は2～6cmである。第2期は、第1期で形成された炭化物層と新たに盛った土の上で火が焚かれており、被熱厚は1～8cmである。【層序】4層に分けた。2層は洪水堆積土を基質とする。1・4層はそれぞれ、第2期及び第1期に火が焚かれた際の被熱痕である。2層は、第1期から、第2期に移る際、整地するための盛土、3層は、第1期使用時に形成された上面がやや被熱した炭化物層である。

《炉3》【規模・形状】地床炉である。断面のみの確認である。規模は幅0.15m、被熱厚2cmである。【層序】単層で、炉使用時の被熱痕である。

《SK1》【規模・形態】長軸1.17m(N-79°-E)、短軸0.38mの不整形である。検出面からの深さは0.23mである。底面は、やや凹凸があるもののほぼ平坦で、壁は急に立ち上がる。P3と重複して本遺構が古い。【埋土】4層に分けた。全て洪水堆積土を基質とする。1層は混土であり、2・4層には焼土や礫等の混入があることから、廃絶に伴う人為的な一括埋戻しと考えられる。

《出土遺物》埋土中から縄文土器267点8,291.4g(赤彩土器5点93.9g含む)・土器細片23.7g、スクレイパーI Ad 1点26g・II Ba 類1点25.3g、RF 1点13g、剥片11点123.2g、石皿II 類3点35,700gが出土し、このうち土器9点を図示した。82・84・85・88・89は床面直上、90はSK1からの出土である。82はII α群の深鉢形土器である。口縁部、C 2 b 類で、隆沈線渦巻文A等が描かれ、文様内側が刺突文で充填されている。83はII β群の深鉢形土器である。口縁～胴部、A 2 a 類で、小楕円文の他、H字状文や横位小楕円文と想定される文様が描かれ、文様内側がL R斜縄文で充填されている。84～86はII 群の深鉢形土器である。84は頸部で、隆沈線横位相対渦巻文Aと円文による円内単位文と想定される文様が描かれ、文様内側がL R斜縄文で充填されている。また、外面には赤色塗彩が施されている。85・86は胴部である。85は逆U字状楕円文、86は楕円沈線文と長楕円文との組合せ文と想定される文様が描かれ、それぞれ文様内側がR L斜縄文で充填されている。87・88はL R、89はR L斜縄文の深鉢形土器である。87は口縁部、D 2 a 類、88は口縁～頸部、D 3 a 類、89は胴～底部である。90はR L R斜縄文の鉢形土器②である。口縁～胴部、A 1 b 類で、口縁部はミガキが、口縁と胴部の境には1条の横位沈線が施されている。

《所見・時期》建物内に土を盛り、3時期の生活面が作られたと考えられる。時期は、出土遺物及び遺構の重複関係から、大木9 b 式期と推定される。

S I 48 竪穴建物跡 (遺構：第23・39図、付図1、第17表、図版4・12、遺物：第137図91～93、第202・203図587～589、第52・53・70表、図版48・79・82)

《位置・確認状況》L R 45・46、L S 45・46に位置する。第II層中を精査中、黒褐～黄灰色土の分布が確認された。S I 225 竪穴建物跡、S N 125 焼土遺構と重複し、S I 225、S N 125 よりも本遺構が新しいと考えられる。

《規模・形態》平面形は、長軸(2.31)m(N-60°-E)、短軸3.22mの楕円形と推測される。確認面から床面までの深さは0.42m、床面は平坦で、壁は急に立ち上がる。炉は地床炉で、床面中央やや東寄りに位置する。SK1土坑は南端に位置する。柱穴は8基(P1～8)確認された。径0.18～0.51m、床面からの深さ0.09～0.39mである。P3・4は重複するが、新旧関係は不明である。

《埋土》3層に分けた。1層は第II層土、3層は洪水堆積土を基質とする。2層は1・3層の混土である。人為堆積土が自然堆積土と判然としない。

《炉》【規模・形態】地床炉である。規模は長軸0.15m、短軸0.15mである。【層序】単層で、炉使用時の被熱痕である。

《SK1》【規模・形態】平面形は、長軸0.63m(N-69°-W)、短軸0.62mの不整形である。確

認面からの深さは0.18mである。埋土から土器が出土し、最上部には幅18cmの垂円礫が置かれていた。

《出土遺物》建物廃絶に伴う礫の投げ込みとともに、埋土から縄文土器77点3,366.7g（赤彩土器1点64.1g含む）・土器細片5g、スクレイパーⅠA a 2類1点18.5g、磨製石斧1点144.2g、剥片1点14.2g、石皿Ⅱ類1点3,950g、磨石2点4,150g、敲石1点320gが出土し、このうち5点を図示した。91～93はⅡ群の深鉢形土器である。91・92は胴部、93は胴～底部である。91は逆U字状楕円文、相對楕円文B、92・93は楕円文系の文様が描かれている。それぞれ文様内側が91・92はLR斜縄文、93はRLR斜縄文で充填されている。587・588は石器で、587はスクレイパーⅠA a 2類、588は、基部が折れた磨製石斧である。

《所見・時期》時期は、出土遺物及び遺構の重複関係から、大木9b式期と推定される。

S I 56 竪穴建物跡（第17・40図、付図1、図版6）

《位置・確認状況》M I 55に位置する。第Ⅲ層上面で、北側が調査区外へ続くにぶい黄褐色土の分布が確認された。その後調査区北西壁の土層断面を観察し、掘り込みの形態から竪穴建物跡と判断された。S I 03・S K I 42建物跡と重複して本遺構が古い。

《規模・形態》土層断面から幅（1.50）m、確認面から床面までの深さは0.22mである。床面はほぼ平坦で、壁は急に立ち上がる。

《層序》洪水堆積土を基質とする単層で、自然流入土の可能性がある。

《所見・時期》床面東側が、やや窪んでいることから、壁溝の可能性はある。時期はS I 03・S K I 42との重複関係から、大木9式期、縄文時代中期後葉と推定される。

S I 58 竪穴建物跡（遺構：第17・18・41図、付図1、第19表、図版3・12、遺物：第137・138図94・95、第53表、図版48、理化学分析：第233図、第77・78表）

《位置・確認状況》MF 53・54、MG 53・54に位置する。第Ⅲ層上面を精査中、褐色～にぶい黄褐色土の分布が確認された。S I 46竪穴建物跡、S Q K 93配石土坑、P 33・34と重複して、本遺構が古い。

《規模・形態》平面形は、長軸[3.00]m（N-65°-E）、短軸（1.82）mの楕円形を呈す。確認面から床面までの深さは0.24m、床面は平坦で、壁は急に立ち上がる。柱穴は6基（P 1～6）確認された。径0.11～0.44m、検出面からの深さは0.09～0.24mである。P 6は炉廃絶後の構築である。床面中央から南西側に、複式炉がある。

《埋土》5層に分けた。1～4層は洪水堆積土、5層は第Ⅱ層土を基質とする。堆積状況から、廃絶に伴う人為的な埋め戻し土と考えられる。

《炉》【規模・形態】土器埋設部・石組部・前庭部からなる複式炉である。掘方の平面形は、長軸1.40m（N-84°-W）、幅は土器埋設部0.43m、石組部0.60m、前庭部0.50mである。床面からの深さは、土器埋設部0.21m、石組部0.16m、前庭部0.12mである。底面はほぼ平坦で、壁は西側が急に、他は緩やかに立ち上がる。前庭部は東南東方向に開く。明確な被熱痕は確認されていない。埋設土器は、径22cm、高さ14cmの深鉢形土器口縁～胴部が礫の上に設置されていた。埋設土器西側では別個体の深鉢形土器底部が出土した。また、石組部には、石皿を含む長さ4～26cmの垂円礫が使用され、石皿転用の炉石は敷石として、埋設土器東側に接するように敷かれ、その周辺に礫が配置されていた。【埋土】4層に分けた。1・2層は洪水堆積土、4層は第Ⅱ層土を基質とする。1・2層は炉廃絶時の、人為的な埋め戻し土である。3層は洪水堆積土の混入が目立つが、炉使用時に形成された炭化物層で、炉廃絶時の状況を示す。4層は炉構築時の裏込土である。

《出土遺物》埋土からは、埋設土器を含む縄文土器13点1,230.5g、石皿Ⅱ類2点9,100gが出土し、このうち2点を図示した。94は埋設土器である。95はⅡβ群の深鉢形土器の底部で、縦位区画線文内側に、逆U字状楕円文と想定される文様が描かれ、文様内側はRL斜縄文が充填されている。94は

Ⅱ群βの鉢形土器②である。口縁～胴部、A類で、体部上半に2条1組の横位波状沈線文を巡らせ、波状文の波間上には、相対円文、相対渦巻文Aが描かれている。下には円文及び2条1組の波状沈線文下側の沈線の起点となる渦巻文と横位相対渦巻文Aの組合せ文、小楕円文と楕円渦巻懸垂文の組合せ文等が描かれている。また、体部下半は波状区画文により文様帯と区画されている。文様内側はRL斜縄文で充填されている。

《所見・時期》炉4層から出土した土器底部片は、前段階の炉に使用された埋設土器の一部と考えられる。また石組は南北で組み方が異なるため、廃絶に際し、一部除去された可能性がある。時期は埋設土器から、大木9b式期と推定される。また、炉1層から出土した炭化物での放射性炭素年代測定(暦年較正年代)では、2872-2584calBC(2σ)の年代値が得られた(試料4)。

S I 60 竪穴建物跡(遺構:第17・18・42図、第20・77・78表、付図1、図版12、遺物:第138図96~103、第203図590~593、第53・70表、図版48・74、理化学分析:第233図、第77・78表)

《位置・確認状況》MG53、MH53に位置する。第Ⅲ層上面を精査中、にぶい黄褐色土の分布が確認された。S I 63 竪穴建物跡、SK141・142・169土坑、SN447・448焼土遺構と重複し、本遺構は、SK142・169、SN447・448より旧く、S I 63、SK141より新しい。

《規模・形態》平面形は長軸[3.20]m(N-18°-E)、短軸[3.16]mの円形と推測される。確認面から床面までの深さは0.24m、床面は平坦で、壁は急に立ち上がる。南側壁際にSD1壁溝が確認された。SD1は総延長1.52m、幅0.12~0.36m、床面からの深さは0.14mである。床面東側に複式炉がある。また、埋土中ではあるが、床面中央やや北側でSN447焼土遺構、西側でSN448焼土遺構が検出された。柱穴は7基(P1~7)確認された。長軸0.13~0.32m、短軸0.14~0.29m、床面からの深さは0.07~0.55mである。P1・2は壁溝に伴い、P6は屋外柱穴と考えられる。またP7は複式炉と重複して新しい。

《埋土》3層に分けた。全て洪水堆積土を基質とする。堆積状況から1・3層は人為的な埋め戻し土、2層は壁の崩落土の可能性が有る。

《炉1》【規模・形態】石組部・前庭部からなる複式炉である。長軸1.20m(N-71°-W)、幅は石組部0.59m、前庭部0.68mである。床面からの深さは石組部・前庭部とも0.11mである。前庭部は南東に開く。石組は、長軸0.62m、幅0.58mの範囲で長さ4~31cmの垂角・垂円礫が方形に配置され、長軸と直交するように扁平な礫が仕切石として中央付近に置かれ、2つに区画されていた。底面に明確な被熱痕は確認されなかったが、石組を構成する礫の内側は被熱していた。前庭部にあるP7は、炉廃絶後の構築である。【埋土】3層に分けた。2・3層は洪水堆積土を基質とする。1層は炉使用時に形成された炭化物層で、廃絶時の状況を示す。2層は廃絶に伴う埋め戻し土、3層は炉構築時の裏込土と考えられる。

《出土遺物》埋土から縄文土器254点5,375.7g・土器細片57.4g、靴型土製品1点94.2g、スクレイパーI A a 1類1点8.6g・I A a 2類1点10.2g・I A b 1類1点11.3g・II F a 類1点31.4g、未製品及び欠け1点5.9g、楔形石器1点17g、剥片29点124g、石皿Ⅱ類7点19,900g、敲石1点550g、磨石6点4,400g、凹石1点550gが出土し、このうち12点を図示した。96~103は土器・土製品である。96・97はⅡ群βの深鉢形土器である。口縁部で、96はD2 a類、97はD2 b類である。ともに長楕円文が描かれ、それぞれ文様内側が、LR斜縄文で充填されている。98・99はⅡ群βの深鉢形土器である。98は口縁～胴部、A2 b類で、頸部に横位沈線、胴部に隆沈線楕円文と想定される文様が描かれている。99は胴部で、懸垂文、逆U字状沈線文と逆U字状楕円文または相対楕円文Bの組合せ文が描かれ、文様内側がRL斜縄文で充填されている。100はRL、101はLR、102はLR・RL斜縄文の深鉢形土器である。100は口縁～底部、C1 a類、101は口縁部、C2 a類、102は胴部であ

る。103は靴形土製品で、外面は無文、中は空洞である。590～593は石器である。590～592はスクレイパーで、それぞれ590はI A a 1類、591はI A a 2類、592はI A b 1類である。また、593は楔形石器である。

《所見・時期》時期は、炉の形態及び出土遺物、または周囲の状況から、大木9式期と推定される。また、炉1層から出土した炭化物の放射性炭素年代測定（暦年較正年代）では、2875～2631calBC（2 σ ）の年代値が、樹種同定によりクリという結果が得られた（試料5）。

S I 62 竪穴建物跡（遺構：第17・18・43図、付図1、図版13、遺物：第139図104、第203図594・595、第53・70表、図版49・78、理化学分析：第233・235図、第77・78表）

《位置・確認状況》MG52、MH52に位置する。第II層中を精査中、にぶい黄褐色土の分布が確認された。S I 64・196竪穴建物跡と重複して、S I 64より本遺構が新しい。またS I 196と本遺構との新旧関係は不明である。

《規模・形態》平面形は、長軸3.76m（N-46°-W）、短軸3.13mの略円形を呈す。床面までの深さは0.21m、床面は平坦で、壁は北東側が急に、北西側は一端平坦になり再度急に立ち上がる。床面中央やや北西寄りに土器埋設炉がある。

《埋土》5層に分けた。全て洪水堆積土を基質とする。人為的堆積土か自然堆積土か判然としない。

《炉》【規模・形態】土器埋設炉である。掘方の平面形は、長軸0.70m（N-28°-E）、短軸0.58mの不整形である。床面からの深さは0.39m、底面は鍋底状で、壁は急に立ち上がる。埋設土器は、径34cm、高さ38cmの深鉢形土器口縁～底部を正位に据えていた。土器は被熱を受け変色し、炉周辺も被熱していた。焼土の平面形は、長軸1.55m、短軸0.76m、被熱厚は2～8cmである。【層序】3層に分けた。1・3層は洪水堆積土を基質とする。1層は炉廃絶に伴い、埋設土器内に入れられた人為的な埋め戻し土で、建物跡1層と同質である。2層は炉使用時の被熱痕である。3層は炉構築時の裏込土である。

《出土遺物》埋設土器を含めた縄文土器54点5,308g・土器細片26.1g、土製品1点13.6g、スクレイパーI A a 2類1点10.2g、II A類1点10g、剥片8点59.4gが出土し、このうち埋設土器1点及びスクレイパー2点を図示した。104はR L斜縄文が施された深鉢形土器である。口縁～底部、D 3 a類で、口縁部にはミガキが施されている。また、口縁部に補修孔がある。594・595は、それぞれスクレイパーI A a 2類、II A類である。

《所見・時期》時期は出土遺物及び周囲の状況から、大木9式期と推定される。また、1層から出土した炭化物の放射性炭素年代測定（暦年較正年代）では、2863～2574calBC（2 σ ）の年代値が、樹種同定によりクリという結果が得られた（試料6）。

S I 63 竪穴建物跡（遺構：第7・17・18・44・45図、第21表、付図1、図版13、遺物：第139図105、第203図596、第53・70表）

《位置・確認状況》MH52・53、M I 52・53に位置する。第III層上面を精査中、にぶい黄褐色土の分布が確認された。その後、焼土の分布（炉1・2）が確認され、竪穴建物跡の炉跡と判断された。本遺構は、S I 26・60・64建物跡、S K 144土坑、P 201と重複して旧く、S I 64竪穴建物跡より新しい。

《規模・形態》平面形は径[4.60]m（N-75°-W）、短軸[4.58]mの円形と推測される。確認面から床面までの深さは0.42m、貼床の厚さは4～18cmである。床面中央に地床炉がある。建物に付属する柱穴は4基（P 1～4）確認された。全て土層断面での確認である。柱穴の規模は幅0.28～0.73m、検出面からの深さは0.28～0.43mである。柱間の芯々の距離は、P 1-P 2は2.32m、P 2-P 3は0.70m、P 3-P 4は2.36m、P 1-P 4は1.90mである。

《埋土》8層に分けた。全て洪水堆積土を基質とする。1・2層は、堆積状況から自然流入土、3層

は廃絶に伴う人為堆積土、4層は壁の崩落土、5～8層は貼床土である。5層上面で炉2が、6層上面でも炉1が検出されている。このため建物構築時に、6～8層で一度整地し、炉1廃絶後に5層を盛って、再度床面が整えられたと考えられる。

《炉1・2》【規模・形態】断面観察から、炉1が旧く、炉2が新しい。炉1は長軸(0.72)m、短軸0.34m、被熱厚は1～6cm、炉2は長軸1.07m、短軸0.68m、被熱厚は2～16cmである。【層序】炉1・2ともに単層で、炉使用時の被熱痕である。

《出土遺物》埋土から縄文土器49点1,121.7g・土器細片40.8g、楔形石器1点20g、剥片5点35.6g、磨石1点400gが出土し、このうち2点を図示した。105はR L斜縄文が施された深鉢形土器の胴部である。596は楔形石器である。

《所見・時期》断面観察から、大きく2時期の使用が想定される。時期は、床面からの出土遺物及び遺構の重複関係から、大木9式期と考えられる。

S I 64 竪穴建物跡 (遺構：第17・18・43図、付図1、図版13、理化学分析：第77・78表、第233・235図)

《位置・確認状況》MG52、MH52・53に位置する。第Ⅲ層上面を精査中、にぶい黄褐色土の分布が確認された。焼土の分布が確認され、竪穴建物跡の地床炉と判断された。上部は削平を受け、南側は確認調査トレンチにより欠損している。またS I 62・63竪穴建物跡と重複して本遺構が古い。

《規模・形態》掘方は、部分的に土層観察用ベルトでの確認である。径[3.60]mの円形と推測される。確認面から床面までの深さは0.25m、貼床の厚さは3～20cmである。床面中央と推定される位置に地床炉がある。

《層序》建物の埋土は5層に分けた。全て洪水堆積土を基質とする。1～3層は、建物廃絶に伴う人為的な埋め戻し土、4・5層は、建物構築時に床面を整えるための貼床土である。

《炉》【規模・形態】床面中央に位置する。長軸0.80m、短軸0.54mである。北側に人頭大の扁平な礎が置かれていた。【層序】単層で、炉使用時の被熱痕である。

《出土遺物》埋土から縄文土器1点34.6gが出土した。

《所見・時期》時期は、出土遺物及び周囲の状況から、大木9式期と考えられる。また、炉1層から出土した炭化物での放射性炭素年代測定(暦年較正年代)では、2875-2624cal BC (2σ)の年代値が、樹種同定によりクリ及びクワという結果が得られた(試料7)。

S I 72 竪穴建物跡 (第22・26図、付図1、図版13)

《位置・確認状況》LR53、LS53に位置する。S I 04竪穴建物跡の土層断面を精査中、S I 04と重複する別の竪穴建物跡の掘り込みが確認された。その後、第Ⅲ層上面を精査し、にぶい黄褐色土の分布が検出された。S I 04と重複して本遺構が古い。

《規模・形態》平面形は、径(0.94)mの楕円形と推測される。確認面から床面までの深さは0.29m、床面は平坦で、壁は急に立ち上がる。炉等の建物付属施設は確認されていない。

《埋土》洪水堆積土を基質とする単層で、自然流入土の可能性もあるが、塊状の基質土と同質土が含まれていることから、廃絶に伴う人為的な埋め戻し土と考えられる。

《所見・時期》S I 04竪穴建物跡より、床面が浅い構造であるため、炉等は削平された可能性がある。時期はS I 04竪穴建物跡と同じ大木9 b式期、縄文時代中期後葉と推定される。

S I 73 竪穴建物跡 (遺構：第21・46図、第22表、付図1、図版13、遺物：第139図106～108、第53表)

《位置・確認状況》LT47・48、MA47・48、MB48に位置する。S I 47建物跡周辺を掘り下げ中、焼土が確認され、第Ⅲ層上面からの掘り込みが確認された。焼土検出面が床面、掘り込みを竪穴建物跡の壁と判断された。S I 81竪穴建物跡、SK50土坑と重複し、S I 81より本遺構が新しい。本遺構

とSK50との新旧関係は不明である。

《規模・形態》平面形は長軸5.92m (N-75°-W)、短軸[3.64]mの楕円形を呈す。確認面から床面までの深さは0.36mである。床面は平坦で、壁は急に立ち上がる。床面中央や北東よりに地床炉がある。建物に付属する柱穴は13基 (P1~13) 確認された。規模は、径0.19~0.58m、検出面からの深さは0.19~0.26mである。P4・8には礎が入られていた。P11は炉と重複して古い。

《埋土》5層に分けた。1・3層は第Ⅱ層土、2・4・5層は洪水堆積土を基質とし、それに第Ⅱ層土が混じる。炭化物を含む層が多いことから、廃絶に伴う人為的な埋め戻し土と考えられる。

《炉》【規模・形態】地床炉である。焼土の平面形は、長軸0.90m、短軸0.43m、被熱厚は1~5cmである。【層序】単層で、炉使用時の被熱痕である。

《出土遺物》埋土から縄文土器97点1,659.9g (赤彩土器1点10.7g含む)・土器細片1.8g、剥片1点4.9g、石皿Ⅱ類1点2,200g、磨石2点13,00gが出土し、このうち床面直上から出土した土器3点を図示した。106はⅡ群の深鉢形土器である。頸~胴部、相対渦巻文Aと円文の円内単位文と想定される文様が描かれ、文様内側がLR斜縄文で充填されている。107・108はⅡ群の深鉢形土器である。107は口縁部、108は頸部である。107はC2a類で、多重沈線文及び楕円文と想定される文様、108は隆沈線相対渦巻文Aが描かれ、それぞれ文様内側が、RL斜縄文で充填されている。

《所見・時期》時期は、出土遺物及び遺構の重複関係から、大木9b式期と考えられる。

S I 75 竪穴建物跡 (遺構：第19・47・48図、第23表、付図1、図版14、遺物：第139図109~111、第203図597・598、第53・70表、図版78)

《位置・確認状況》MC53・54、MD53・54に位置する。確認調査時のトレンチ壁面を土層観察中、第Ⅲ層上面からの掘り込みが確認された。S I 98・202竪穴建物跡と重複する可能性があるが、本遺構との新旧関係は不明である。また、P1041と重複して本遺構が古い。

《規模・形態》平面形は、長軸(4.40)m (N-82°-W)、短軸[3.07]mの楕円形と推測される。確認面から床面までの深さは0.28mである。床面は平坦で、壁は急に立ち上がる。床面西側壁際に石囲炉(炉1)、北東側壁際に土器埋設炉(炉2)、地床炉(炉3)がある。残存状況から、炉3が炉2よりも古い。炉1の西側に長さ60cm、厚さ36cmの巨礎が、炉1の長軸線と直交するように置かれていた。柱穴は2基 (P1・2) 確認された。規模は、径0.20~0.22m、検出面からの深さは0.16~0.20mである。P1は炉2・3と重複して、炉2より旧く、炉3より新しい。一方P2は炉1と重複して古い。

《埋土》洪水堆積土を基質とする単層で、自然流入土と考えられる。

《炉1》【規模・形態】石囲炉である。東側が、確認調査時のトレンチにより欠損していた。掘方の平面形は、長軸[0.94]m (N-84°-W)、短軸は0.59mである。床面からの深さは0.14mである。底面は平坦で、壁は急に立ち上がる。長軸0.72、幅0.53mの範囲に長さ5~33cmの垂角・亜円礎が方形に配置されていた。また、明確な被熱痕は確認されなかったが、炉周辺には炭化物及び粒状の焼土も分布し、礎の一部に被熱痕や煤が認められた。【層序】3層に分けた。1・3層は、洪水堆積土を基質とする。1層は竪穴建物1層に相当し、自然流入土の可能性はある。2層は炉使用時に形成された炭化物層で、炉廃絶時の状況を示す。3層は炉構築時の裏込土である。

《炉2》【規模・形態】土器埋設炉である。平面形は、長軸0.41m (N-21°-E)、短軸0.31mの楕円形を呈す。床面からの深さは0.14mである。底面は鍋底状で、壁はややオーバーハング気味に立ち上がる。埋設土器は径29cm、最大幅40cm、高さ17cmの頸部以下が欠損した深鉢形土器が正位に据えられ、内面は被熱により剥離していた。焼土は埋設土器の内外で検出された。焼土の平面形は長軸0.23m、短軸0.20m、被熱厚は1~2cmである。【層序】4層に分けた。3・4層は、洪水堆積土由

来のにぶい黄褐及び明黄褐色砂を基質とする。1層は、2・3層上面で火が焚かれた際の焼土で、炉使用時の被熱範囲、2層は炉使用時に形成された炭化物層で、炉廃絶時の状況を示す。3・4層は、炉構築時の裏込土である。

《炉3》【規模・形態】地床炉と思われるが、P1と重複するため、詳細は不明である。焼土の平面形は、長軸[0.23]m、短軸[0.20]mで、被熱厚は6cmである。【層序】単層で、炉使用時の被熱痕である。

《出土遺物》埋土から埋設土器を含めた縄文土器73点I, 579.2g・土器細片7.5g、土製品1点5.8g、楔形石器1点0.4g、スクレイパーI A b 2類1点22g、RF 2点14.3g、剥片4点57.1gが出土し、このうち5点を図示した。109～111は土器である。炉2の埋設土器については、取り上げの際、粉々になり復元は不可であることから図示していない。109はIIβ群の深鉢形土器である。口縁部、C 2 a 類で、楕円文が描かれ、文様内側がRL斜縄文で充填されている。110はII群の深鉢形土器である。胴部で、逆U字状楕円文と想定される文様が描かれ、文様内側及び下がRL斜縄文で充填されている。111はLR斜縄文の深鉢形土器である。口縁～胴部、C 3 a 類で、口縁部にミガキが施されている。また597・598は石器で、598は炉2内からの出土である。597はスクレイパーI A b 2類、598は楔形石器である。

《所見・時期》地床炉である炉3は、他の地床炉と比べ、規模の割には被熱厚が厚いことから、P1は柱穴ではなく埋設土器を抜いた痕跡の可能性がある。時期は、周囲の状況から、大木9式期と推定される。

S I 81 竪穴建物跡（遺構：第21・49図、第24表、付図1、図版4・14、遺物：第139図112・113、第53・69表、図版76）

《位置・確認状況》MA47・48、MB47・48に位置する。S I 73 竪穴建物跡を掘り下げ中、第II層中より焼土の分布が確認され、S I 73とは別の建物に付属する炉と判断された。その後、土層観察用ベルトを設置し掘り下げたところ、建物跡の掘り込みが壁面で確認された。S I 47・73 竪穴建物跡と重複し、本遺構はS I 73より旧く、S I 47より新しい。

《規模・形態》平面形は、長軸[5.66]m (N-86°-W)、短軸(2.71)mの楕円形と推測される。確認面から床面までの深さは0.39m、床面は平坦で、壁は北側が緩やかに、南及び西側では急に立ち上がる。床面中央やや北寄りに、地床炉がある。柱穴が2基(P1・2)確認された。径0.33～0.34m、深さは0.21～0.22mである。

《埋土》3層に分けた。1～3層は第II層土及び洪水堆積土を基質とする。竪穴建物廃絶に伴う人為的な一括埋め戻し土である。

《炉》【規模・形態】地床炉と思われる。焼土の平面形は長軸1.17m、短軸0.90m、被熱厚は2～7cmである。【層序】単層で、炉使用時の被熱痕である。

《出土遺物》埋土から縄文土器56点I, 169.5g・土器細片21.1g、円盤状土製品1点33.8g、剥片4点73.7g、敲石900gの他、紛れ込みと思われる近世以降の挿針1点19.4gが出土し、このうち2点を図示した。112はIIβ群の深鉢形土器である。口縁部、A a 類で、楕円文と想定される文様が描かれ、文様内側がLR斜縄文で充填されている。113はRL斜縄文が施された円盤状土製品である。

《所見・時期》時期は出土遺物から、大木9 b 式期と考えられる。

S I 91 竪穴建物跡（遺構：第17・19・50図、第25表、付図1、図版14、遺物：第139図114・115、第53表）

《位置・確認状況》MD52・53、ME52・53に位置する。第II層精査中、焼土の分布が確認された。その後、焼土周辺で検出された柱穴様ビットが、焼土とともに竪穴建物を構成する一連のものと判断

された。SK226土坑と重複して本遺構が古い。またSK204・206土坑とも重複するが、本遺構との新旧関係は不明である。

《規模・形態》平面形は、柱穴の分布状態から予測された。長軸[4.70]m(N-10°-W)、短軸[4.18]mの円形と推測される。貼床の厚さは5~12cmである。床面中央やや南寄りに地床炉を、中央やや北寄りにSK1土坑を伴う。建物に付属する柱穴が4基(P1~4)確認された。規模は、径0.20~0.40mで、P1の深さは0.17mである。

《埋土》2層に分けた。1層は第II層土、2層は洪水堆積土を基質とする。1層は残存状況が悪く、人為堆積土か自然堆積土か判然としない。2層は建物構築時に、床面を整えるための貼床土と考えられる。

《炉》【規模・形態】焼土の平面形は、長軸1.15m、短軸0.57mの不定形を呈す。被熱厚は1~5cmである。【層序】単層で、炉使用時の被熱痕である。

《SK1土坑》【規模・形態】長軸0.79m(N-34°-W)、短軸0.71mの略円形を呈す。確認面からの深さは0.13mである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

《出土遺物》埋土から縄文土器11点642.4g、原石1点2,450gが出土し、このうち深鉢形土器2点を図示した。114はIIβ群の口縁部、C2a類で、横位小楕円文等が描かれ、文様内側がRL斜縄文で充填されている。115は無文の胴~底部である。

《所見・時期》時期は、出土遺物及び遺構の重複関係から、大木9b式期と推定される。

S I 98竪穴建物跡 (遺構：第19・51図、付図1、図版15、遺物：第140図116~120、第53表)

《位置・確認状況》MB53・54に位置する。第III層上面を精査中、礫で囲まれた焼土及び暗褐色にぶい黄褐色土の分布が確認された。S I 202竪穴建物跡、SK92土坑、P1071・1072・1266と重複し、本遺構はP1071・1072・1266より旧く、SK92より新しい。本遺構とS I 202との新旧関係は不明である。

《規模・形態》長軸(3.80)m(N-14°-W)、短軸(2.84)mで平面形は不明である。確認面から床面までの深さは0.22m、床面は平坦で、壁は南側のみの確認で、垂直に近い角度で立ち上がりをする。貼床の厚さは2~10cmである。床面中央に石囲炉がある。

《埋土》5層に分けた。1・2・4層は第II層土、3・5層は洪水堆積土を基質とする。1~4層は、建物廃絶に伴う人為的な埋め戻し土、5層は建物構築に際し、床面を整えるための貼床土と考えられる。

《炉》【規模・形態】石囲炉である。掘方の平面形は、長軸0.94m(N-10°-E)、短軸0.70mの不整楕円形を呈す。確認面からの深さは15cmである。長軸1.10m、短軸0.92mの範囲に長さ10~54cmの細長い垂円・円礫が円形に配置されていた。被熱厚は3~10cmである。また、礫の内側に面している部分では、一部被熱痕や煤が認められた。【層序】2層に分けた。炉使用時の被熱痕で、1層は強被熱、2層は弱被熱範囲である。建物底面が被熱を受けていないことから、炉構築時に、石囲の中に土を盛った後、使用していたと考えられる。

《出土遺物》埋土から縄文土器137点3,107.4g・土器細片41g、RF2点9.4g、剥片12点78.3g、磨石2点2,000g、凹石2点4,700g、蔽石1点1,250gが出土し、このうち土器5点を図示した。116・117はIIα群の深鉢形土器である。116・117は口縁部、C2b類で、116は隆沈線渦巻文、円文、楕円文が、117は隆沈線渦巻懸垂文及び楕円文と想定される文様が描かれ、それぞれ文様内側が、116はLR、117はRL斜縄文で充填されている。118~120は地文の深鉢形土器である。118はRL斜縄文を地文とする。口縁~胴部、C2a類である。119・120は同一個体と想定され、それぞれ口縁~胴部、胴~底部、C2a類である。胴部には櫛状工具による平行沈線文が描かれ、口縁部にはミガキが施されている。

《所見・時期》時期は、出土遺物及び周囲の状況から、大木9a式期、縄文時代中期後葉と推定される。

S I 100 竪穴建物跡（遺構：第23・52図、付図1、図版4・15、遺物：第140・141図121～124、第203・204図599～603、第53・54・70表、図版49・77・80）

《位置・確認状況》L Q 43・44、L R 43に位置する。第Ⅱ層土を掘り下げ中、複式炉が確認されたため、建物の掘り込みは確認されなかったが、竪穴建物跡として扱うこととした。S I 105・139竪穴建物跡、S K 160土坑と重複するが、本遺構との新旧関係は不明である。

《規模・形態》建物の平面形は不明で、遺物等の分布から径2m以上であると推定される。確認面から床面までの深さは0.09mである。複式炉を伴う他、この炉の北東で地床炉（炉2・3）が2か所確認された。残存状況から炉1は、炉2・3より新しいが、炉2と炉3の新旧関係は不明である。

《埋土》第Ⅱ層土を基質とする単層である。残存状況が悪く、人為的な堆積土か自然堆積土か判断としない。

《炉1》【規模・形態】石組部・前庭部からなる複式炉である。掘方の平面形は長軸1.30m（N-13°-E）、幅は石組部[0.63]m、前庭部[0.68]mである。確認面から床面までの深さは、石組部0.16m、前庭部0.19mである。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。前庭部は南側に開く。焼土は石組部内で検出され、規模は長軸0.48m、幅0.29m、被熱厚は1～3cmである。石組は、長軸1.52m、幅0.47～0.88mの範囲に長さ5～42cmの垂円・垂角礫をA字状に並べ作られているが、前庭部東端の袖の配置は確認されなかった。なお、炉石には石皿からの転用が認められた。礫は石組の内側部分が強く被熱していた。【層序】3層に分けた。1層は洪水堆積土を基質とする。炉廃絶に伴う人為的な埋め戻し土である。2層は、炉使用時に形成された炭化物層で、廃絶時の状況を示す。3層は炉使用時の被熱痕である。

《炉2・3》【規模・形態】それぞれ焼土の平面形は、炉2が長軸（0.24）m、短軸0.24m、炉3が長軸0.23m（N-40°-W）、短軸0.17mである。【層序】単層で、炉使用時の被熱痕である。

《出土遺物》埋土から縄文土器281点6.248.5g・土器細片62.5g、石匙A a類1点6.5g・A d類1点34g、スクレイパーI A b 1類1点6.3g・II B b類1点3.8g、剥片8点102.7g、石皿II類6点42.450g、磨石1点1,000g、凹石1点500gの他、紛れ込みと思われる近世後期以降の陶器鉢1点21.9gが出土し、このうち9点を図示した。121～124は土器で、123は炉内から出土した。121・122はII a群の深鉢形土器の口縁部である。121はA b類、横位隆沈線相対渦巻文Bと横位小楕円文の単位文、122はD 2 b類で、隆沈線懸垂文と楕円文と想定される単位文が描かれている。それぞれ文様内側が、121はR L、122はL R斜縄文で充填されている。123はII b群の深鉢形土器である。口縁～胴部、C 1 a類で、縦位C字状文、長楕円文が描かれ、R L斜縄文で充填されている。124はR L原体の異方向の回転により羽状縄文が施された深鉢形土器の頸～胴部である。599～603は石器で、603は炉内からの出土である。それぞれ599・600は石匙A a・A d類、601・602はスクレイパーI A b 1・II B b類、603は磨石で凹石からの転用である。

《所見・時期》複式炉の石組は東側の袖石がなく、廃棄に際し、抜き取られたと考えられる。時期は炉の形態及び出土遺物、周囲の状況から、大木9式期と推定される。

S I 101 竪穴建物跡（遺構：第23・53図、第27表、付図1、図版15・19、遺物：第141図125～132、第204図604～606、第54・70表、図版49・77・79・81）

《位置・確認状況》L R 44、L S 44に位置する。第Ⅲ層上面を精査中、石囲炉が確認され、竪穴建物跡の一部と判断された。その後隣接する西側で、土坑（S K 1）が確認され、これも建物の付属施設と判断された。建物の掘り込みは確認されなかった。S I 106・148竪穴建物跡、S K 107・108土坑と

重複して、本遺構は S I 148より新しく、S K 107・108より古い。また本遺構は、S I 105・225堅穴建物跡とも重複関係にあると想定される。S I 105から出土した土器片が、本遺構の床面直上から出土した土器片と接合したことから、本遺構は S I 105より新しいと考えられる。

《炉》石囲炉である。掘方の平面形は、長軸1.01m (N-69°-E)、短軸0.53mの楕円形を呈す。確認面からの深さは0.18mである。底面は鍋底状で、壁は緩やかに立ち上がる。長軸0.70m、幅0.66mの範囲に長さ4〜32cmの垂角・亜円礫が楕円形に配置され、さらに内側に礫が敷かれ、中に扁平な石が仕切石として立てられ、2つに区画されていた。明確な被熱痕は確認されなかったが、石組の内側では被熱痕や煤が認められた。

《埋土》2層に分けた。2層は洪水堆積土を基質とする。1層は炉使用時に形成された炭化物層で、廃絶時の状況を示す。2層は炉構築時の裏込土である。

《S K 1土坑》平面形は、長軸1.03m (N-47°-E)、短軸0.77mの略円形を呈す。確認面からの深さは0.32mである。底面は平坦で、壁は東側では急に、西側では緩やかに立ち上がる。《埋土》2層に分けた。1層は第Ⅱ層土、2層は洪水堆積土を基質とする。1層は炭化物がやや混じることから、炉で形成された炭化物が混入されたと考えられる。1・2層ともに大小の礫を含むことから、土坑廃絶に伴う人為的な埋め戻し土と考えられる。

《出土遺物》炉やS K 1土坑等の建物付属施設周辺から、縄文土器310点9,006.4g (赤彩土器1点11.5g含む)、石器1点7.6g、嘴状石器1点4.1g、剥片14点94.5g、葎石1点200g、磨石1点600g、凹石2点1,250g、石棒1点2,890gが出土し、このうち11点を図示した。125〜132は土器で、126・132は床面直上の出土で、さらに126はS I 105堅穴建物跡上層から出土した土器片と接合した。125〜128はⅡβ群の深鉢形土器である。125・126は口縁部または口縁〜胴部、A 1 a類である。125は長楕円文、126は2条の楕円沈線文と長楕円文の組合せ文が描かれている。127は口縁〜頸部、B 2類で、口唇部が欠けているため口縁が平状か波状かは不明であるが、楕円文と想定される文様が描かれている。128は頸〜胴部で、体部上半は懸垂楕円連続文、体部下半には長楕円と想定される文様が描かれている。それぞれ文様内側は、125・128はL R、126・127がR L斜縄文で充填されている。129はⅡ群の深鉢形土器である。胴部で縦位区画沈線文、長楕円文、相対楕円文と想定される文様が描かれ、文様内側がR L斜縄文で充填されている。130はR L斜縄文、131は羽状縄文が施された深鉢形土器である。口縁〜胴部で、それぞれ130はA 1 a類、131はA 2 a類である。ともに口縁部にミガキが施されている。また132はⅡβ群のミニチュア深鉢形土器である。胴〜底部で、L R斜縄文を地文とし、縦位区画沈線文が描かれている。また604〜606は石器で、605は床面直上での出土である。604は石匙A b類、605は嘴状石器、606は石棒である。

《所見・時期》検出された石囲炉及び土坑は、堅穴建物跡の付属施設と想定される。時期は炉の形態及び出土遺物から、大木9 b式期と推定される。

S I 102堅穴建物跡 (遺構：第17・54図、第27表、付図1、図版15・16、遺物：第141・142図133・134、第54・69表、図版75)

《位置・確認状況》MG54・55、MH54・55に位置する。第Ⅲ層上面を精査中、石組が確認され、複式炉と判断された。周辺を精査したところ、柱穴が8基確認され、これらは一連の建物を構成する施設と想定され、堅穴建物跡として扱うこととした。S I 03・46堅穴建物跡、S N22焼土遺構と重複し、本遺構が古い。

《規模・形態》平面形は、長軸[3.26]m (N-36°-E)、短軸[2.52]mの楕円形と推測される。確認面から床面までの深さは0.08m、床面は平坦である。床面中央やや南東寄りに複式炉がある。柱穴は8基 (P 1〜8) 確認された。径0.16〜0.28m、床面からの深さは0.07〜0.24mである。P 7・

8は炉と重複し、新旧関係はP7、炉、P8の順で新しくなる。

《炉》【規模・形態】石組部・前庭部からなる複式炉である。掘方の平面形は、長軸1.30m（N-64°-W）、幅は石組部0.66m、前庭部0.72mである。床面からの深さは、石組部0.22m、前庭部0.17mである。前庭部は南東方向に開く。底面は平坦で、壁は急に立ち上がる。石組は、長軸0.72m、幅0.50mの範囲に長さ6～24cmの亜角・亜円礫が楕円形に配置され、内側は、長軸線と直交するように礫が仕切石として置かれ、2つに区画されていた。明確な被熱痕は確認されていないが、石組部の内側に配置された礫の表面は、一部で被熱痕や煤が認められた。【埋土】3層に分けた。全て第Ⅱ層土を基質とする。炉廃絶に伴う人為的な埋め戻し土である。

《出土遺物》埋土及び炉の周辺から、縄文土器22点379.8g（赤彩土器1点15.3g含む）・土器細片7.3g、土偶1点91.7g、剥片7点24.2g、石皿Ⅱ類4点7,300gが出土し、このうち2点を図示した。133はⅡ群の深鉢形土器である。胴部で、長楕円文や相対楕円文と想定される文様が描かれ、文様内側がR L斜縄文で充填されている。134は土偶B類の脚部で、R L R斜縄文を地文とする。

《所見・時期》炉内からは明確な炭化物層が確認されなかったことから、廃絶に伴い掻き出された可能性がある。時期は、炉の形態から、大木9 a 式期と考えられる。

S I 103 竪穴建物跡（第21・23・55図、付図1、図版16）

《位置・確認状況》L S 46、L T 46に位置する。第Ⅱ層中を掘り下げ中、焼土及びにぶい黄橙色・暗オリーブ褐～オリーブ褐色土の分布が確認された。S I 47 竪穴建物跡、S K 145・147 土坑と重複し、本遺構はS I 47 より旧く、S K 145・147 より新しい。

《規模・形態》平面形は長軸3.22m（N-43°-E）、短軸（2.02）mの楕円形と推測される。確認面から床面までの深さは0.20mである。床面は平坦で、壁は急に立ち上がる。床面中央に地床炉及びS K 1 土坑がある。炉がS K 1 よりも新しい。

《埋土》2層に分けた。1層は洪水堆積土、2層は第Ⅱ層土を基質とする。人為的堆積土か自然堆積土か判然としない。

《炉》【規模・形態】地床炉である。平面形は、長軸0.78m、短軸（0.49）mである。被熱厚は2～11cmである。炭化物は焼土の南西側に分布していた。【層序】2層に分けた。1層は炉使用時に形成された炭化物層で、廃絶時の状況を示す。2層は焼土で、炉使用時の被熱痕である。

《S K 1》【規模・形態】平面形は、長軸0.82m（N-50°-E）、短軸0.76mの円形を呈す。床面からの深さは0.36mである。底面は平坦で、壁は急に立ち上がる。【埋土】第Ⅱ層土を基質とする単層で、人為的な埋め戻し土と考えられる。

《出土遺物》埋土中より縄文土器19点329.7g・土器細片4.9g、剥片12点72.1gが出土した。

《所見・時期》炉は断面観察から、S K 1 土坑が埋まりきる前の窪みを利用して火が焚かれていた。時期は、出土遺物及び遺構の重複関係から、大木9 a 式期と推定される。

S I 105 竪穴建物跡（遺構：第23・56・57図、付図1、図版16、遺物：第142～146図135～163、第204・205図607～612、第54・55・69・70表、図版49～51・75～77・79・81、理化学分析：第81・83表、第241・242図）

《位置・確認状況》L R 43・44、L S 43・44に位置する。第Ⅱ層土を掘り下げ中、多数の礫がまとまって出土した。さらに掘り下げたところ、複式炉及び焼土が確認されたため、竪穴建物跡と判断された。南側が調査区外へ続く。S I 100・101・148 竪穴建物跡と重複し、S I 148 より本遺構が新しい。S I 106 との直接の重複は確認されていないが、本遺構が古いと考えられる。S I 100・101 との本遺構との新旧関係は不明であるが、S I 101 床面直上で出土した土器（第141図126）が、本建物跡上層で出土した土器片と接合したことから、S I 101 より本遺構が古いと想定される。

《規模・形態》平面形は、長軸(4.54)m(N-0°-E)、短軸[5.18]mの楕円形と推測される。確認面から床面までの深さは0.70m、床面は平坦で、壁は急に立ち上がる。床面中央北西寄りに複式炉(炉1)、床面中央から西側にかけて地床炉(炉2~4)がある。炉3は炉1と重複して古い。

《埋土》4層に分けた。1層は第Ⅱ層土、2・4層は洪水堆積土を基質とする。3層は洪水堆積土と炭化物の混土である。2~4層は堆積状況から自然流入土の可能性はある。1層は大小多数の礫が含まれることから、建物の埋まりきらない窪地を埋めた、埋め戻し土と考えられる。

《炉1》【規模・形態】土器埋設部・石組部・前庭部からなる複式炉である。掘方の平面形は、長軸2.16m(S-25°-E)、幅は、土器埋設部0.99m、石組部1.38m、前庭部1.23mの楕円形を呈す。床面からの深さは、土器埋設部0.63m、石組部0.31m、前庭部0.23mである。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。前庭部は北西側に開く。長さ5~52cmの垂角・垂円・円礫が、長軸1.65m、幅1.52mの範囲にA字状に配置されていた。埋設土器が石組部内にあり、最大径40cm、高さ53cmの深鉢形土器胴~底部が南側に傾けて据えられ、周辺に扁平な礫が置かれていた。また、前庭部両端には石組部から袖が開くように配石されていた。炉石に石皿の転用が認められた。明確な被熱痕は確認できなかったが、石組部内側の礫は、一部で被熱痕や煤が認められた。廃絶時には、大小多数の礫が、炉の上を覆うように投げ込まれていた。【埋土】2層に分けた。1層は洪水堆積土を基質とし、建物跡4層に相当することから、自然流入土の可能性はある。2層は炉使用時に形成された炭化物層で、廃絶時の状況を示す。

《炉2~4》地床炉である。焼土は、炉2が長軸(0.76)m、幅0.65m、炉3が長軸0.67m、短軸(0.21)m、炉4が長軸0.22m、短軸(0.07)mで、被熱厚は、炉3が4~8cm、炉4が2~6cmである。【層序】2層に分けた。1層は、炉使用時に形成された炭化物層で、廃絶時の状況を示す。炉3のみ土層断面により確認された。2層は被熱痕である。

《出土遺物》建物廃絶に伴う多量の礫と共に遺物が投げ込まれていた。また複式炉の炉石に石皿の転用が確認された。これらを含め埋土からは、埋設土器を含めた縄文土器445点2,5513.2g(赤彩土器2点667.1g含む)・土器細片86.7g、土偶1点74.6g、円盤状土製品4点85.6g、石器Aa類1点16.9g・Ba類2点13.9g、石錐1点3.3g、スクレイパーI B a類1点15.4g・II E b類1点8g、剥片28点557.2g(黒曜石1点含む)、石皿II類5点37,550g、敲石3点2,380g、磨石5点3,850g、敲石3点2,380g、石棒1点2,870gが出土し、このうち32点を図示した。135~163は土器・土製品である。135は埋設土器、140・155は1層、149は2層、143・145は上層から、147・160・161・163は床面直上で出土した。136~148はⅡβ群の深鉢形土器である。136~142は口縁部または口縁~頸部、口縁~胴部である。136~138はA1 a類、139はA3 a類、140はC1 b類、141はC2 a類、142はC2 b類である。136は横位相対渦巻文A、137は楕円沈線文と相対楕円文の組合せ、または長楕円文と想定される文様が描かれている。138・139・141は楕円沈線文と長楕円文、140は楕円文や相対渦巻文A、142は逆U字状文と想定される文様が描かれている。それぞれ文様内側は、136・137・140がLR、138・139・141・142がRL斜縄文で充填されている。143は頸~胴部で、横位相対渦巻文Aと円文の組み合わせによる円内単位文・長楕円文と想定される文様、144は頸部で、楕円沈線文や楕円系文が描かれている。145は胴~底部、146~149は胴部である。145は縦位区画沈線文と逆U字状楕円文、146は逆J字状文と想定される文様、147・148は縦位区画沈線文の他、長楕円文や相対楕円文等と想定される文様が描かれている。それぞれ文様内側は、RL斜縄文で充填されている。149はⅡ群の深鉢形土器である。胴部で、隆沈線相対渦巻文と想定される文様が描かれ、文様内側がRL斜縄文で充填されている。150はⅢ群の深鉢形土器である。口縁~胴部、C1 a類で、C字状渦巻文Bと想定される文様等が描かれ、文様内側がRL斜縄文で充填されている。135はLR結節、151~155はRL、156

はL R斜縄文の深鉢形土器である。151～152は口縁部で、151はC 1 a類、152はC 2 a類である。151の口縁部にはミガキが確認される。135・153～156は胴部、または胴～底部で、135の底面には笹葉庄痕が確認される。157はⅡ・Ⅲ群の鉢形土器②の口縁～底部部である。口縁部が透かし彫状になり、体部には隆沈線渦巻文、C字状渦巻文A、C字状文、小楕円文が描かれ、文様内側はL R斜縄文が充填されている。158・159Ⅱ・Ⅲ群のは注口付の浅鉢形土器である。口縁～胴部または口縁部、B類である。158は区画沈線文や上下に相互する横位相対渦巻文Aが描かれ、文様内側がR L斜縄文で充填されている。159の文様は不明である。160は土偶である。A類の胴部で、縦・横位の条線や渦巻文が描かれている。161～163は円盤状土製品である。161・162は楕円系文の文様内側が、R L斜縄文で充填されている。163はR L斜縄文のみである。607～612は石器・石製品である。608・609・611・612は1層、609は上層から出土した。607・608は、それぞれの石匙A a類・B a類、609は石錐A a類、610・611はそれぞれスクレイパーI B a類・II E b類である。また612は石棒である。

《所見・時期》炉及び建物廃絶により礫が投げ込まれていた。炉3は今回復式炉である炉1とは別の炉跡扱いとしたが、炉1の被熱痕の可能性もある。時期は、出土遺物及び炉の形態から、大木9 b式期と推定される。また、埋土中より出土した黒曜石の産地同定により湯ノ倉産の結果が得られた（第2章第3節以下同、試料No. 3）。

S I 106 堅穴建物跡（遺構：第23・58図、付図1、図版17）

《位置・確認状況》L R 44に位置する。トレンチ断面の土層観察により、第Ⅱ層中からの掘り込みが確認され、その後の精査で、黄灰・暗灰黄色土の分布が検出された。当初、土坑として精査を進めたが、底部より石組が検出され、堅穴建物跡の石囲炉と判断された。S I 101・148 堅穴建物跡、S K 107 土坑と重複し、それらより本遺構が新しいが、直接の重複関係にはない。またS I 105 堅穴建物跡と重複する可能性があり、S I 105より本遺構が新しいと想定される。

《炉》掘り込みの平面形は長軸1.01m（N-10°-E）、短軸0.93mの円形を呈す。確認面からの深さは0.46mである。底面はほぼ平坦で、壁は急に立ち上がる。長さ6～20cmの垂角・垂円礫が、長軸0.62m、短軸0.52mの範囲で、掘方底部に「日」の字状に配列され、円の中心やや南側に仕切石として礫が並べられ、石組内で部屋が2つ構築されていた。また石組北側にも幅24cmの礫が、東西の向きに置かれていた。石組部内では、明確な被熱痕及び炭化物の堆積は認められなかった。

《埋土》3層に分けた。全て洪水堆積土を基質とする。全ては炉廃絶後の自然流入土と考えられる。1層が堆積する前に、2層土が若干掻き出された可能性がある。

《出土遺物》埋土から、縄文土器13点278.8g（赤彩土器1点15.8g）、土製品1点23.2gが出土した。

《所見・時期》石囲炉である。堅穴建物の掘り込みは未確認であり、詳細は不明である。時期は、遺構の重複関係及び出土遺物から、大木9 b・10 a式期と推定される。

S I 112 堅穴建物跡（遺構：第20・59・60図、第29表、付図1、図版17、遺物：第146～149図164～175、第205・206図613～626、第55・69～71表、図版51・52・75～79、理化学分析：第77・78表、第233図、第235図）

《位置・確認状況》MD 48・49、ME 48～50、MF 48～50に位置する。第Ⅱ層中を精査中、にぶい黄褐・灰黄褐色土の分布が確認された。S Q 229 配石遺構、P 1048と重複して、本遺構が古い。

《規模・形態》平面形は、長軸6.92m（N-27°-W）、短軸6.44mの円形を呈す。確認面から床面までの深さは0.78m、貼床の厚さは4～13cmである。床面は平坦で、壁は急に立ち上がるが、南壁では緩やかに、その後急に立ち上がる。床面中央やや南西寄りに複式炉がある。炉は作り替えが行われている。また、壁際には途切れながら壁溝4条（SD 1～4）が確認された。SD 1は総延

長4.70m、幅0.12～0.26m、床面からの深さは0.12mである。SD 2は総延長(1.90)m、幅0.08～0.42m、深さは0.18mである。SD 3は総延長1.52m、幅0.14～0.24m、床面からの深さは0.30mである。SD 4は総延長2.10m、幅0.24～0.36m、床面からの深さは0.06mである。建物内北側や北東側等、柱穴がある部分は途切れ、特に南東側では2.63mほど間隔が開く。柱穴は7基(P 1～7)確認された。P 1は北西側壁際に見られる不定形な比較的浅い掘り込みの底面に、径0.20～0.53m深さは0.15～0.32mの柱穴が4基あり、柱の立て替えが行われたと考えられる。不定形掘り込み面の規模は、長軸1.62m、短軸1.58mで、P 2～7は径0.22～1.15m、検出面からの深さは0.15～0.42mである。P 1・3～5は建物内北半分で方形に並ぶ。P 2はP 1の作り替えの可能性がある。P 7は炉の使用中に構築、廃絶が行われている。

《埋土》13層に分けた。1・4・8～13層は洪水堆積土、2・3・5～7層は第Ⅱ層土を基質とする。1～10層は堆積状況から自然流入土と考えられ、8層は壁の崩落土の可能性ある。1層は炉廃絶に伴う埋め戻し土、12層は建物使用時、壁溝に充てていた材を固定するための裏込め土、13層は建物構築時、床面を整えるための貼床土と考えられる。

《炉》【規模・形態】土器埋設部・石組部・前庭部からなる複式炉である。掘方の平面形は、長軸2.62m(N-27°-E)、幅は土器埋設部0.98m、石組部1.78m、前庭部2.16mである。床面からの深さは、土器埋設部0.40m、石組部は0.78m、前庭部は0.40mである。底面は平坦で、壁は急に立ち上がる。前庭部は南西側に開く。石組は、掘方の長軸線の上に1.32m、幅1.60mの範囲に長さ5～48cmの垂角・垂円・円礫が、A字状に配置され、石組部内には比較的扁平な礫が、土器埋設部の埋設土器1号を囲うように円礫が敷き詰められていた。前庭部両端の袖石は石組部との境までしかない。なお、炉石には石皿からの転用が認められた。土器埋設部には径26cm、高さ33cmの深鉢形土器が正位に据えられていた(埋設土器1号)。明確な被熱痕は確認されなかったが、石組部内に敷かれた礫は被熱していた。また、石組部北東に幅40cmの比較的大きな扁平な礫が置かれていた。一方、埋設土器1号を囲う土器埋設部と石組部の境にある石組下から、別の2つの埋設土器が検出された。石組部下の埋設土器は、それぞれ口縁部が欠損した2点の深鉢形土器を入れ子状に重ね、やや北側に傾けるように正位に据えられていた。内側(埋設土器2号)が径26cm、高さ30cm、外側(埋設土器3号)が径42cm、高さ45cmである。また、炉の北東では長軸0.77m、短軸(0.16)m、被熱厚は2～5cmの焼土が確認された。複式炉の掘り込みにより欠損した可能性が高い。また、前庭部に堆積した炭化物層中から、炉に伴う柱穴が1基(P7)検出された。

【埋土】13層に分けた。3・7・12層は洪水堆積土、1・6・9層は第Ⅱ層土を基質とする。10層は焼土で、第1期炉使用時の被熱痕である。1層は炉廃絶に伴い埋設土器1号内に入れられた埋土、2～4層はそれぞれ埋設土器1号内及び前庭部、石組部内に堆積した炭化物層で、第2期廃絶時の状況を示す。5層は炉を作り変える際、焼土である10層を大きく掘り込んだ後、埋設土器1号を据えるための裏込土、6層は第2期の石組を構築するため埋設土器2・3号上に埋めた盛土である。7・8・11・12層は、それぞれ前庭部、土器2号内上層、同下層、土器2・3号間への炭化物の堆積で、第1期の廃絶状況を示す。10層は土器2号内中位層で、上下を炭化物に挟まれている。埋設土器3号は、埋設土器2号とともに入れ子状に置かれた外側の土器であり、12層は炭化物層で、土器3号を据えるための裏込土であるが、土器2号を土器埋設炉として使用した際に形成された炭化物の可能性が。13層は炉構築時の裏込土である。

《出土遺物》P 5北東側床面では、剥片30点(168.6g)が白粘土で覆って埋められた状態で出土した。これらを含めて埋土から、埋設土器1～3号を含む縄文土器661点33,173.2g(赤彩土器2点54.1g含む)・土器細片198.4g、土偶2点98.3g、円盤状土製品1点21.3g、その他土製品2点

14.8g、石鏃A a類2点0.8g、石鏃B c類1点2.6g、石匙A類1点14.1g・Ca類1点24.7g・Cc類1点7.9g、スクレイパーIAa1類2点24.1g・IAa3類1点27g・IAb1類1点52.5g・IAb2類2点28g・IIAb類1点23.8g・IIBa類1点15.3g、IIFa類1点15.8g、磨製石斧1点195.7g、RF2点15.7g、剥片89点607.6g、石皿II類4点32,150g、敲石1点750g、磨石4点2,600gが出土し、このうち26点を図示した。164～175は土器・土製品で、164～166はそれぞれ埋設土器Ⅰ～Ⅲ号で、169・173は床面直上で出土した。164～168はⅢ群の深鉢形土器である。164・165は口縁～底部である。164はA2b類で、頸部に波状口縁と平行な波状文を巡らせ、口縁部と頸部以下を区画している。胴部中央にはS字状文と交互相対する三角形文からなる円単位文を、その周りには逆J字状文と逆U字状文の組合せ文、縦位C字状文が描かれている。文様内側は三角形文内には刺突文、他はLR斜縄文で充填されている。165はA3a類で、体部に波状文を巡らせ、波間には、上から横位小楕円文、U字状文またはC字状文、相對渦巻文A、胴部下半では波状区画文が描かれ、文様内側がRL斜縄文で充填されている。166は胴～底部で、体部上半にはC字状渦巻文A、楕円文と想定される文様が描かれ、文様内側がLR斜縄文・刺突文で充填されている。体部下半は地文としてLR斜縄文が施されている。167は口縁～底部、A2a類、体部上半に波状沈線文を巡らせ、波間上下には、C字状文と逆U字状文、U字状文とC字状文、S字状文が描かれている。また、体部下半にはC字状渦巻文A、横位相對渦巻文Aと横位楕円文からなる組合せ文が描かれ、文様内側がLR斜縄文で充填されている。168は胴～底部で、C字状渦巻文A'やC字状羊歯状文、縦位・横位楕円文が描かれ、文様内側がRL斜縄文で充填されている。169は無文の深鉢形土器の胴部である。171はRL、172はLR斜縄文のミニチュア深鉢形土器の胴～底部である。173はⅡ・Ⅲ群の器台土器である。台部で、波状区画文下半がRL斜縄文で充填されている。上半の穿孔周辺には、ミガキが施されている。174・175は土偶で、それぞれA類である。174は胴部で、正面は縦位、背面には縦・横位沈線で文様が描かれ、正面中央は、刺突文により充填されている。175は頭部で、縦・横位沈線や渦巻沈線文が描かれている。頭頂部は比較的平坦で、側面が4か所十字型に突き出ており、正面には平行した刺突文が2穴確認される。形態から動物の可能性がある。また、613～626は石器・石製品で、613・615は北東壁溝内、614は炉Ⅰ-1層、623は床面直上からの出土である。613・614はそれぞれ石鏃A a類で、614は両面にアスファルトが付着している。615・616・617は石匙で、それぞれ石匙A a類、Ca類、Cc類である。615は先端が折れ、617の両面にアスファルトが付着している。618は石匙B c類、619～625はスクレイパーで、それぞれ619はIAa1類、620はIAa3類、621はIAb1類、622・623はIAb2類、624はIIAb類、625はIIFa類である。626は磨製石斧で、基部が敲石として使用された痕跡がある。

《所見・時期》壁溝の切れ目が、建物南東部で幅が広いことから、建物の出入り口であった可能性がある。炉は断面観察から大きく2時期あったと想定される。第1期から第2期にかけて、土器埋設部を掘り返し、埋設土器1号を握るとともに、埋設土器2・3号上に土を盛り、その上に石組を再構築したと想定される。P7は炉の使用中に構築され、炉の再構築に伴い廃絶された可能性がある。時期は、埋設土器から、大木10a式期と推定される。また出土した炭化物の放射性炭素年代測定（暦年較正年代）では、2864-2574calBC（2σ）の年代値が、樹種同定によりカエデ属・エノキ属という結果が得られた（試料8）。

S I 120竪穴建物跡（遺構：第21・61図、第30表、付図1、図版18、遺物：第150・151図176～181、第207図627、第55・69・71表、図版52・82）

《位置・確認状況》LT46・47、MA46・47、MB46・47に位置する。S I 47竪穴建物跡を精査中、複数炉が確認され、S I 47とは別の竪穴建物跡の炉と判断された。第Ⅲ層上面から部分的に竪穴建物跡の掘り込みが検出されたが、全体を把握することが困難であった。S I 47、SK152土坑、P1052

と重複して本遺構が古い。

《規模・形態》掘り込み及び複式炉の規模から、平面形は径5～6mの円形と想定される。床面までの深さは0.29m、床面は平坦で、壁の立ち上がりは不明である。床面中央やや南と推定される位置に複式炉、南東端にSK1土坑がある。柱穴は2基(P1・2)確認された。径0.20mである。P1・2ともにSK1と重複し、SK1よりも新しい。

《埋土》2層に分けた。いずれも洪水堆積土を基質とする。自然流入土の可能性はある。

《炉》【規模・形態】土器埋設部・石組部・前庭部からなる複式炉である。掘方の平面形は、長軸1.48m(N-15°-W)、幅は土器埋設部0.68m、石組部1.40m、前庭部1.09mである。検出面からの深さは、土器埋設部0.16m、石組部0.26m、前庭部0.23mである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。前庭部は南側に開く。石組は、長軸線上に1.10m、幅1.54mの範囲に長さ4～42cmの垂角・垂円・円礫が三角形に配置されていた。石組部には礫を敷き詰め、前庭部には石組から袖石が延びるが、東側には見当たらない。炉石には磨石の転用が認められた。埋設土器1号は、径31cm、高さ16cmの深鉢形土器胴～底部を正位に据えていた。焼土は、埋設土器1号北側で確認され、焼土の平面形は、長軸0.48m、短軸0.32mである。被熱厚は1～10cmである。また、石組部内の礫には、一部で被熱痕及び煤の付着が認められた。石組を取り外した際に、礫の下より、埋設土器2号が出土していることから、作り替えが想定される。埋設土器2号は、深鉢形土器頭～底部で、径24cm、高さ6cmである。掘り込みの深さは、炉床面から0.06m、炉検出面から0.24mである。明確な被熱痕は確認していない。炉廃絶時に、長さ80cmの細長の礫が、石組部内へ横に倒すように置かれていた。【層序】6層に分けた。全て洪水堆積土を基質とする。1・2層は炉廃絶後の自然流入土の可能性はある。3層は炉使用時に形成された炭化物層で、廃絶時の状況を示す。4層は伊構築時の裏込土、5層は第1期の炉廃絶に伴う人為的な埋土である。6層は炉使用時の被熱痕である。

《SK1》【規模・形態】平面形は、長軸0.74m(N-89°-W)、短軸0.60mの楕円形を呈す。幅24～30cmの垂角礫・垂円礫が投げ入れられていた。

《出土遺物》埋土から、埋設土器を含む縄文土器61点7,126.8g・土器細片41.7g、剥片12点72.1g、磨石2点1,000g、凹石1点830gが出土し、このうち7点を図示した。176・177はそれぞれ埋設土器1・2号、178は床面直上からの出土である。178はⅡα群の深鉢形土器である。口縁～頸部で、口縁部先端部が残存せず類型は不明である。隆沈線楕円文内に楕円文が描かれ、楕円文内側がR L斜縄文で充填されている。176はⅡβ群の深鉢形土器である。口縁～胴部、C1a類で、体部上半に1条及び3条の楕円沈線文内側と楕円文の組合せ文と三角文、体部下半にも楕円文と想定される文様が描かれている。文様内側は、三角文内に刺突文、それ以外ではL R斜縄文で充填されている。179・180はⅢ群の深鉢形土器である。179は口縁部、A1a類、180は口縁～胴部、C1a類である。ともにC字状渦巻文と想定される文様が描かれ、文様内側は、179がL R、180はR L斜縄文でそれぞれ充填されている。181はR L斜縄文の深鉢形土器である。胴～底部で、底部に一部木葉圧痕が確認される。177はⅡ・Ⅲ群の鉢形土器②の頭～底部である。体部にはC字状文、横位相対渦巻文Aと円文及び横位小楕円文の組合せ文や2条の楕円沈線文内に円文と想定される文様が描かれ、文様内側がL R斜縄文で充填されている。627は凹石で被熱を受け、炉石へ転用されていた。

《所見・時期》炉は大きく2時期の可能性はある。検出時、石組部に横位に置かれた礫は、炉廃絶に関わる祭祀の可能性はある。時期は、炉の形態及び埋設土器から、大木9b式期と推定される。

S I 122竪穴建物跡(遺構:第23・62図、付図1、第31表、図版18、遺物:第151図182・183、第55表)

《位置・確認状況》L R 46・47に位置する。第Ⅱ層上面からの掘り込みが確認された。S N 130・131・149・173・244焼土遺構と重複して本遺構が古い。これらの焼土遺構は、建物跡確認面及び、堆

積土中にて検出されている。

《規模・形態》掘方の平面形は、幅4.38mである。確認面から床面までの深さは0.62m、北側では貼床があり、厚さは2～6cmである。床面は平坦で、壁は急に立ち上がるが、北側では一部オーバークラッピングしている。貼床中央に地床炉がある。

《埋土》8層に分けた。1・3・5・7層は第Ⅱ層土、2・4・5・8層は洪水堆積土を基質とする。1～6層は人為的な埋め戻し土と考えられるが、3層上面にSN244焼土遺構があることから、3層上面で、一時的に生活面を形成した可能性がある。7層は炉使用時に形成された炭化物が混ざる。1・2層は、SN244焼土遺構廃絶後に埋め立てられ、1層上面ではSN130・131・149・173焼土遺構がある。8層は建物構築時に、床面を整えるための貼床土と考えられ、その上面に地床炉がある。

《炉》【規模・形態】平面形は、長軸(0.85)m、短軸(0.41)mの不整形を呈す。被熱厚は2～7cmである。【層序】6層に分けた。1・3・5・6層は床面上で火が焚かれた際の被熱痕で、3・5層は強被熱、1・6層は弱被熱痕である。2・4層は使用時に掻き出されてきた窪みをならすため、人為的に盛られた土であり、4層に含まれる炭化物は、炉使用時に形成されたものである。

《出土遺物》埋土から縄文土器60点1,371.9g(赤彩土器4点29.1g含む)、剥片3点48.7g、石皿Ⅱ類1点5,800g、磨石1点500gが出土し、このうち2点を図示した。182はⅡ群の深鉢形土器である。口縁部、C2b類で、隆沈線渦巻文と想定される文様が描かれている。183はⅢ群の深鉢形土器である。胴部で、C字状文と想定される文様が描かれ、文様内側がRL斜縄文で充填されている。

《所見・時期》埋土中及びその上面に焼土があることから、廃絶後の窪みを利用して、火が焚かれた可能性がある。時期は出土遺物から、大木9～10a式期、縄文時代中期後葉～末葉と推定される。

S I 132 竪穴建物跡 (遺構：第20・58図、付図1、第32表、図版18、遺物：第151図184・185、第55・71表、第207図628・629、図版80)

《位置・確認状況》MD51、ME51に位置する。第Ⅲ層上面を精査中、配石とともに褐色土の分布が確認された。配石は石囲炉と判断され、竪穴建物跡に伴う炉跡として扱うこととした。

《炉》掘方の平面形は、長軸0.62m(N-46°-E)、短軸0.51mの楕円形を呈す。確認面からの深さは0.08mである。底面は凹凸があり、壁は緩やかに立ち上がる。長軸0.52m、幅0.43mの範囲で、長さ7～18cmの石皿・台石の転用を含む垂円・円礫が、底面に配置されていた。石組の上には土器片が敷かれ、その上に破損した幅19cmの石皿が置かれていた。明確な焼土は確認されなかったが、礫の一部には、被熱痕や煤が認められた。

《埋土》洪水堆積土を基質とする単層で、炉構築時の裏込土と考えられる。

《出土遺物》埋土及び周辺から、縄文土器7点586.8g・土器細片23.6g、石皿Ⅱ類4点13,050g、台石2点4,550g、敲石1点250g、磨石3点510gが出土し、このうち4点を図示した。184はⅡ群の深鉢形土器である。頸部で、長楕円文、楕円沈線文と円文の組合せと想定される文様が描かれ、文様内側がRL斜縄文で充填されている。185はLR斜縄文が施された深鉢形土器の胴部である。628・629は台石で、どちらも被熱を受け、炉石へ転用されていた。

《所見・時期》石囲炉である。東西及び北側周辺に柱穴様ビットが見られ、これらとともに竪穴建物構成していたと考えられる。時期は出土遺物から、大木9式期と推定される。

S I 139 竪穴建物跡 (遺構：第23・63図、付図1、図版4・18、遺物：第151～153図186～197、第206・208図630～633、第56・69・71表、図版53・76・79、理化学分析：第77・78表、第233・235図)

《位置・確認状況》LP43・44、LQ43・44に位置する。第Ⅲ層上面からの掘り込みが確認された。3基の炉跡が検出され、竪穴建物跡と判断された。SK160土坑と重複して古い。またS I 100竪穴建物跡と重複するが、新旧関係は不明である。

《規模・形態》掘方の平面形は不明である。確認面から床面までの深さは0.44m、底面はほぼ平坦である。炉1・2は複式炉、炉3は土器埋設炉である。炉2が旧く、炉1が新しい。炉3は残存状況から、炉2より古い可能性がある。柱穴は、炉1に隣接する南側で1基（P1）確認された。長軸0.34m、短軸〔0.23〕m、確認面からの深さは0.24mである。

《埋土》5層に分けた。1・3層は第Ⅱ層土、4・5層は洪水堆積土を基質とする。2層は第Ⅱ層土と洪水堆積土の混土である。人為的埋設土か自然堆積土か判然としない。

《炉1》《規模・形態》石組が取り外されているため不明瞭ではあるが、土器埋設部・石組部・前庭部からなる複式炉と想定される。掘方の平面形は、長軸1.52m（N-25°-W）、幅は、土器埋設部0.30m、石組部〔0.76〕m、前庭部〔0.78〕mである。確認面からの深さは、土器埋設部0.22m、石組部0.50m、前庭部0.44mである。前庭部は南東側に開く。石組は、長軸1.36m、幅0.98mの範囲に長さ6～30cmの礫を配置していた。土器埋設部の埋設土器1号は、径32cm、高さ38cm、深鉢形土器胴～胸部を正位に据えられ、北側には長さ6～8cmの礫が半円状に配置されていた。また、埋設土器1号内には、入れ子状に深鉢形土器胴～底（埋設土器2号）が横位に置かれていた。石組部は、本来U字状に配石されていた可能性がある。また石組部中央に径42cm、高さ40cmの深鉢形土器胴～底部（埋設土器3号）が正位に据えられていた。前庭部には石組部から東西に開くように袖石が配列されていたと思われるが、廃絶に伴い動かされている。焼土は土器埋設部北側、石組部及び前庭部で確認され、それぞれ土器埋設部北側が、長軸0.18m、短軸0.16m、被熱厚は2～10cm、石組部及び前庭部が、長軸0.46m、短軸（0.14）m、被熱厚は1～5cmである。石組の礫は一部被熱していた。【層序】7層に分けた。1・2・7層は、洪水堆積土を基質とする。1・2層はそれぞれ埋設土器1・2号内へ、炉廃絶後に入り込んだ自然流入土の可能性がある。3・4層は炉使用時に形成された炭化物層である。5・6層は炉使用時の被熱痕である。7・8層は炉構築時の裏込土である。

《炉2》《規模・形態》石組部・前庭部からなる複式炉である。掘方の平面形は、長軸1.57m（N-31°-W）、幅は石組部0.54m、前庭部（0.78）mの楕円形を呈す。確認面からの深さは、石組部0.24m、前庭部0.07mである。底面は平坦で、壁は北側が急に、南側が緩やかに立ち上がる。前庭部は南東側に開く。石組は、長軸0.76m、幅0.41mの範囲に長さ14～30cmの亜円・円礫が半円状に配置されていた。石組は礫の残存状況から、長方形に組まれ部屋を構築していたと思われる。焼土は石組部で確認され、長軸0.20m、短軸0.10mである。また石組でも一部被熱痕や煤が認められた。【層序】2層に分けた。1層は炉使用時に形成され、前庭部に堆積した炭化物層で、炉廃絶時の状況を示す。2・3層は、炉構築時の裏込土で、2層は炉使用時に被熱している。

《炉3》土器片が立った状態でわずかに残存していたことから、土器埋設炉と判断された。掘方の平面形は、長軸0.49m（N-25°-W）、短軸〔0.37〕mの楕円形を呈す。確認面からの深さは0.19m、底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。埋設土器は、径25cm、高さ12cmの深鉢形土器胸部を正位に据えていた。焼土は埋設土器内に堆積した炭化物層の上下で確認され、被熱厚はそれぞれ、上が1～6cm、下が1cmである。【層序】4層に分けた。4層は、第Ⅱ層土の灰黄褐色砂を基質とする。1・3層は焼土で、炉使用時の被熱痕、2層は炉使用時に形成された炭化物層、4層は炉構築時の裏込土と考えられる。

《出土遺物》埋土から埋設土器を含む縄文土器676点28,292.1g・土器細片528.1g、円盤状土製品1点26.4g、スクレイパーⅠAa2類1点8.2g・ⅠAc3類1点4.6g・欠け1点8.4g、打製石斧B類1点229.1g、RF1点18.7g、刺片35点228.1g、石皿Ⅱ類1点3,350g、奇石2点210gが出土し、このうち16点を図示した。186～197は土器・土製品で、186～188は埋設土器1～3号である。一方、炉3の埋設土器は、取り上げ時に粉々になり接合不可の状態のため図示していない。187・189～

193はⅡβ群の深鉢形土器である。187は胴～底部で、縦位区画沈線文や懸垂文、逆U字状楕円文と想定される文様、R L斜縄文で文様内側が充填されている。189～191は口縁～胴部である。189はA3a類で、波状沈線文の上下に小楕円文、190はC1a類で、逆U字状沈線文内側に相対楕円文Bが描かれている。191はC2a類で、二重の楕円沈線文と楕円文の組合せ文や縦位相対渦巻文Aが描かれている。それぞれ文様内側は、189がR L R、190はR L、191はL R斜縄文で充填されている。192・193胴部である。192は相対楕円文と想定される文様、193は2条の横位波状沈線文や楕円文と想定される文様が描かれ、それぞれ文様内側が、R L斜縄文で充填されている。186・188・194はⅡ群の深鉢形土器である。186は頭～胴部で、体部上半には横位波状沈線文で区画をし、その波間の上下に長楕円文を並べ、体部下半にも楕円系文が描かれている。188は胴～底部で、体部上半に相対楕円文Bが描かれ、R L斜縄文で、文様内側が充填されているが、体部下半を地文としている。194は胴部で、逆U字状沈線文と相対楕円文Bと想定される文様が描かれ、文様内側がR L斜縄文で充填されている。195はⅡβ群の鉢形土器②の口縁～胴部、196はⅡ群の浅鉢形土器の口縁部、A類である。195は縦位楕円文及び隆沈線渦巻懸垂文、196は横位相対渦巻文A等が描かれ、それぞれ文様内側が、195はL R、196はR L斜縄文で充填されている。197は円盤状土製品で、R L斜縄文が施されている。630～633は石器である。630・631・632はそれぞれI A a 2類、I A c 3類、欠損による形式不明のスクレイパーで、633は打製石斧B類である。

《所見・時期》複式炉2基及び土器埋設炉である。堅穴建物の一部と考えられるが、建物の掘方が未確認のため、詳細は不明である。複式炉は炉2から炉1へ作り替えられていた。炉3は、焼土が炭化物層の上下で確認されたことから、2時期の使用が考えられる。また、炉1・2では石組が一部外されていることから廃絶儀礼の可能性もある。時期は、埋設土器や出土遺物から、大木9式期と推定される。炉3埋設土器内から出土した炭化物の放射性炭素年代測定（暦年較正年代）では、2865～2576caLBC（2σ）の年代値が、樹種同定によりカツラという結果が得られた（試料8）。

S I 148堅穴建物跡（遺構：第23・64図、付図1、図版4・19、遺物：第153・154図198～200、第56表）

《位置・確認状況》L R 44・45、L S 44・45に位置する。旧水路による攪乱壁面で土層観察をし、礫が出土した第Ⅲ層上面まで周辺を掘り下げたところ、複式炉が確認され、堅穴建物跡の一部と判断された。S I 101・105・106・225堅穴建物跡、S K 107・108土坑と重複して、本遺構はS I 101・105・106・225、S K 107・108より旧いが、S I 106、S K 107・108との直接の重複関係はない。

《規模・形態》建物の掘方は一部のみ確認であり、詳細は不明である。平面形は径（5.14）mの円形と推測される。確認面から床面までの深さは0.14m、床面は平坦で壁は急に立ち上がる。複式炉が床面中央付近にある。この他、炉の東側に配石土坑（S Q K 1）がある。柱穴は3基（P 1～3）確認された。径0.21～0.30m、深さは0.12～0.18mである。P 2・P 3は炉1と重複して新しい。またP 2には礫が埋められていた。

《埋土》3層に分けた。1・2層は第Ⅱ層土、3層は洪水堆積土を基質とする。堆積状況から、自然流入土の可能性はある。

《炉》【規模・形態】石組部・前底部からなる複式炉である。掘方の平面形は、長軸2.66m（S－59°－W）、幅は石組部1.54m、前底部1.52mの楕円形を呈す。確認面からの深さは、石組部0.21m、前底部0.11mである。床面からの深さは、石組部0.25m、前底部0.15mである。底面はほぼ平坦で、南東側が急に、他は緩やかに立ち上がる。前底部は北東側に開く。石組部は、長軸1.49m、幅1.49mの範囲に長さ12～38cmの垂角～円礫が、A字形に扁平な礫が石組部底面、細長い礫が裾部に配置されていたと想定されるが、石組部西側及び裾部の礫が外されていたため、詳細は不明である。また前底部で硬化面が、石組部に堆積した炭化物層下からは、焼土が確認された。焼土は長軸0.26m、短軸

(0.08) m、被熱厚は2～9 cmである。また石組部では、礫が一部被熱していた。【層序】3層に分けた。1層は洪水堆積土で、建物埋土と似ていることから、自然流入土の可能性はある。2層は複式炉を構成する礫の下層での堆積である。また3層は焼土で、炉使用時の被熱痕であるが、2層炭化物層の下層であることから、炉の作り替えがなされ、その際2層は、裏込土として平坦に整えられたと考えられる。

《S Q K 1》【規模・形態】掘方の平面形は、長軸1.02 m (N-44° - E)、短軸0.93 mの略円形を呈す。床面からの深さは0.07 m、底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。幅10～50 cmの垂角～凹礫が、長軸1.10 m、幅0.90 mの範囲で、掘り込み内に配置されていた。中央には比較的扁平な礫があり、周りに小型の礫が並べられ、比較的細長い礫が南北方向に置かれていた。炉1と重複して新しい。

《出土遺物》埋土から縄文深鉢形土器64点2,170.6 g、土製品1点28.8 g、剥片1点3.6 g、磨石1点700 g、石皿Ⅱ類1点1,150 g、石棒1点2,000 gが出土し、このうち土器3点を図示した。198はⅡβ群の深鉢形土器である。口縁部、C1a類で、相対楕円文と想定される文様が描かれ、文様内側がR L斜縄文で充填されている。199は無文の深鉢形土器の胴部である。200はⅡ群の鉢形土器①の胴部で、楕円文や隆沈線蛇目状文が描かれ、L R斜縄文で充填されている。

《所見・時期》複式炉は堆積状況から、大きく2時期あり、作り替えられたと考えられる。またS Q K 1は、複式炉を構築していた礫を廃絶に伴って外し、配石遺構として使用した可能性がある。時期は出土遺物及びS I 225との重複関係から、大木9 b式期と推定される。

S I 150 竪穴建物跡 (遺構：第23・65・66図、付図1、図版4・19、遺物：第154図201・202、第56表)

《位置・確認状況》L S 44・45、L T 44・45に位置する。第Ⅱ層中を精査中、灰黄褐～暗灰褐色・暗灰黄～灰黄色土の分布が確認された。S I 175・225竪穴建物跡と重複し、本遺構はS I 175より旧く、S I 225より新しい。

《規模・形態》掘方の平面形は、長軸3.40 m (N-71° - E)、短軸(3.04) mの円形と推測される。確認面から床面までの深さは0.33 m、床面は平坦で、壁は垂直に立ち上がる。炉はそれぞれ、床面中央及び南東端に2基の複式炉(炉1・2)がある。炉1は炉2より新しい。柱穴は4基(P1～4)確認された。径0.26～0.58 m、床面からの深さは0.14～0.40 mである。P4は炉2と重複して新しい。また、建物廃絶に伴う礫の混入が見られる。

《埋土》4層に分けた。全て第Ⅱ層土を基質とする。埋土中に比較的大きな礫が含まれることから、建物廃絶に伴う人為的な埋戻し土と考えられる。

《炉1》【規模・形態】石組部・前庭部からなる複式炉である。掘方の平面形は、長軸1.02 m (S-63° - E)、幅は石組部0.80 m、前庭部0.78 mの楕円形を呈す。床面からの深さは、石組部7 cm、前庭部5 cmである。前庭部は北西側に開く。石組は、長軸1.02 m、幅0.78 mの範囲で長さ1～28 cmの垂角・垂円礫が、A字状に配置されていたと思われるが、西側の袖石が未検出のため詳細は不明である。廃絶に伴い外された可能性がある。また石組部を構成する礫が、一部被熱していた。【埋土】単層である。炉使用時に形成された炭化物層で、炉廃絶時の状況を示す。

《炉2》【規模・形態】石組部・前庭部からなる複式炉である。掘方の平面形は、長軸1.25 m (S-86° - E)、幅は、石組部0.60 m、前庭部0.75 mの楕円形を呈す。確認面から底面までの深さは、石組部8 cm、前庭部11 cmである。前庭部は西側に開く。石組は、長軸1.08 m、幅0.81 mの範囲に長さ17～48 cmの垂角礫が、A字状に配列されていたと想定されるが、境石が一部未検出のため詳細は不明である。また、石組部の礫に一部被熱や煤の付着が見られた。P4は炉廃絶後の構築である。【埋土】2層に分けた。1層は洪水堆積土を基質とする。炉廃絶に伴う人為的な埋戻し土である。2層は炉使用時に形成された炭化物層で、廃絶時の状況を示す。

《出土遺物》埋土から縄文土器29点1,179.9g、石皿Ⅱ類2点6,300g、凹石1点1,050gが出土し、このうち2点を図示した。202は地文のみの深鉢形土器である。201はⅡ群の深鉢形土器である。胸部で、縦位区画沈線文及び長楕円文と想定される文様が描かれ、文様内側にR L斜縄文で充填されている。202はR L斜縄文の深鉢形土器の胴～底部である。

《所見・時期》炉1・2ともに廃絶に伴い礫が動かされていたことから、それぞれ廃絶に伴う祭祀儀礼の可能性はある。時期は、床面直上の出土遺物から、大木9b式期と推定される。

S I 151 竪穴建物跡（遺構：第23・65・66図、付図1、図版4・19）

《位置・確認状況》L S45、L T45に位置する。第Ⅱ層中を精査中、配石及び焼土、にぶい黄褐色にぶい黄褐色土の分布が確認された。竪穴建物の掘り込みは未検出であるが、複式炉が検出されたことから、竪穴建物跡として扱うこととした。S I 175建物跡、S K 118土坑と重複して、本遺構はS K 118より旧く、S I 175より新しい。

《規模・形態》複式炉及び建物に付属すると思われる柱穴2基からなる。柱穴の規模は、径0.22～0.70m、確認面からの深さは0.21～0.31mである。

《炉》【規模・形態】石組部・前庭部からなる複式炉である。掘方の平面形は長軸0.82m（S-10°-W）、幅は石組部0.66m、前庭部0.82mの楕円形である。確認面から底面までの深さは、石組部0.14m、前庭部0.11mである。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。前庭部は北側に開く。幅10～36cmの比較的細長い垂円礫が、長軸線上に0.87m、幅0.90mの範囲にコの字形に配置されていた。

【層序】2層に分けた。1・2層ともに洪水堆積土を基質とする。1層は焼土が混じることから、炉廃絶に伴う人為的な埋土、2層は炉使用時に形成された炭化物層で、廃絶時の状況を示す。

《出土遺物》埋土から縄文土器17点327.5g・土器細片13.3g、剥片1点5.8gが出土した。

《所見・時期》複式炉である。炉を構成する礫が外されていることから廃絶儀礼の可能性はある。時期は出土遺物及び遺構の重複関係から、大木9b式期と推定される。

S I 153 竪穴建物跡（遺構：第21・67図、付図1、図版19、遺物：第154図203、第56表、図版54）

《位置・確認状況》L T51に位置する。第Ⅲ層上面を精査中、配石やにぶい黄褐色土及び焼土の分布が確認された。竪穴建物跡の掘り込みは未確認であるが、配石の状況から、石囲炉と判断されたため、竪穴建物跡として扱うこととした。

《炉》掘方の平面形は、長軸0.86m（N-78°-E）、短軸0.51mの楕円形を呈す。確認面からの深さは0.16mである。底面はほぼ平坦で、壁は東・西側が緩やかに、北・南側は急に立ち上がる。石組は、長さ6～21cmの垂角・垂円礫の比較的細長い礫が、環状に配置されていた。また、焼土は掘り込みを中心に確認された。平面形は、長軸2.90m、短軸0.68mで、被熱厚は2～6cmである。

《層序》3層に分けた。1層は洪水堆積土を基質とする。炉廃絶に伴う人為的な堆積土か自然的堆積土かの判断が難しい。2・3層は炉使用時の被熱痕で、それぞれ強被熱・弱被熱範囲である。

《出土遺物》周辺から縄文土器4点722.6gが出土し、このうち深鉢形土器1点を図示した。203はL R斜縄文の地文土器である。口縁～胸部、C 2 a 類で、口縁部にミガキが施されている。

《所見・時期》石囲炉である。掘り込みの底面に凹凸があることから、炭化物が掻き出される際に、挟られたと考えられる。時期は周辺の状況から、大木9式期と推定される。

S I 157 竪穴建物跡（遺構：第20・68図、付図1、図版20、遺物：第208図634、第71表、図版80）

《位置・確認状況》MC51・52に位置する。土層観察用ベルトを残して、掘り下げたところ、第Ⅳ層上面で石囲炉が確認されたことから、竪穴建物跡として扱うこととした。

《規模・形態》平面形は、径[3.54]mの楕円形と推測される。確認面から床面までの深さは0.24m、床面はほぼ平坦であるが、礫層上のため、特に床面北側は大小の礫がむき出しになっていた。壁は西

側で、急に立ち上がる。床面中央付近に石囲炉がある。

《埋土》5層に分けた。全て洪水堆積土を基質とする。廃絶後の人為的堆積土か自然堆積土か判然としない。

《炉》【規模・形態】掘方の平面形は、長軸0.52m (N-47°-W)、短軸0.49mの略円形を呈す。検出面から底面までの深さは0.14m、底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。石組は、幅6~28cmの垂角・亜円礫が、長軸0.73m、幅0.52mの範囲に、台形に配置され、掘り込み底面中央にも仕切石が置かれ、部屋が2つ構築されていた。また、石組の礫には一部被熱や煤の付着が認められた。

《出土遺物》埋土から石皿Ⅱ類4点30,450g、磨石1点750g、台石1点2,600gが出土し、このうち1点を図示した。634は台石である。

《所見・時期》炉の形状から、大木8b式期、縄文時代中期中葉と推定される。

S I 164 竈穴建物跡 (遺構：第21・69・70図、付図1、図版20、遺物：第154・155図204~209、第208・209図635~638、第56・71表、図版54・79・82)

《位置・確認状況》LT49・50、MA50に位置する。第Ⅱ層中から第Ⅲ層上面を精査中、にぶい黄褐色土の分布が確認された。

《規模・形態》掘方の平面形は、長軸3.28m (N-86°-W)、短軸2.80mの隅丸方形を呈す。確認面から床面までの深さは0.47m、床面は平坦で、壁は急に立ち上がる。建物南東端に長軸0.80m、短軸0.72mの楕円形の張り出しがある。床面は、第Ⅳ層地山面である礫層に達し、大小の礫が露出していた。床面中央に複式炉がある。複式炉周辺には、長軸1.33m、幅1.10mの範囲で炭化物が分布していた。建物に付属する柱穴は、建物外に建物の掘り込みを取り囲むように18基 (P1~18) 確認された。径0.09~0.21m、確認面からの深さは0.09~0.22mである。

《埋土》4層に分けた。全て洪水堆積土を基質とする。1層は炭化物や黒色土が混じり、2・3層は大小の礫を含むことから、1~3層は建物廃絶後の人為的な埋め戻し土、4層は自然流入土の可能性はある。

《炉》【規模・形態】土器埋設部・石組部からなる複式炉である。掘方の平面形は、長軸0.43m (N-16°-E)、幅は土器埋設部0.39m、石組部0.49mの台形を呈す。床面からの深さは、土器埋設部0.08m、石組部0.01m、底面は平坦で、壁は急に立ち上がる。石組は、長さ6~22cmの垂角礫が、長軸0.78m、幅0.52mの範囲に台形に配置されていた。埋設土器は、径20cm、高さ10cmの深鉢形土器底部が正位に据えられ、上部には同一個体片が環状に配置され、部分的に二重三重になっていた。土器内面は被熱により剥離していた。石組床面には敷石がなく、中央南端に長さ40cmの比較的大きな礫があるが、人為的に置かれた様子はない。礫層表面から露出していた礫を、石組の一部として取り込んだ可能性があり、炉東側にある長さ70cmの礫も同様と思われる。焼土は石組の北側で確認された。平面形は、長軸0.34m、短軸0.18m、被熱厚は1cmである。また石組の一部で被熱痕や煤が認められた。《層序》6層に分けた。3層は第Ⅱ層土を基質とする。1層は焼土で、炉使用時の被熱痕、3層は炉構築時の裏込土である。2・4層は炉使用時に形成された炭化物層で、特に2層は使用中に掻き出された炭化物の堆積と想定される。また4層は炉廃絶時の状況を示す。

《出土遺物》埋土から、埋設土器を含めた縄文土器171点4,945.6g (赤彩土器4点386.9g含む)、円盤状土製品1点19.3g、スクレイパーI A b 1類1点11.4g・I A c 3類1点12g・割れ1点5.8g・未製品1点11.1g、剥片4点44.9g、敲石1点310gが出土し、このうち11点を図示した。204~209は土器で、204は埋設土器である。205はⅡa群の深鉢形土器である。口縁~胴部、C 2 b類で、口縁部に横位隆沈線渦巻文Bと想定される文様や横位楕円文の組合せ文、体部に長楕円文、隆沈線渦巻垂文と想定される文様が描かれ、文様内側がR L斜縄文で充填されている。206・208はⅡ群の深鉢形土

器である。胴部で、逆U字状文や長楕円文が描かれている。それぞれ文様内側は、206がR L、208はL R斜縄文で充填されている。204・207はR L斜縄文の深鉢形土器である。204は胴～底部、207は口縁～胴部、B 2 a類である。それぞれ口縁部及び底部にミガキが施されている。209はⅡ・Ⅲ群の鉢形土器②の胴～底部である。楕円沈線文や長楕円文が描かれ、文様内側がR L斜縄文で充填されている。また、内外面で赤色塗彩が確認される。635～638は石器である。635・636・637はスクレイパーで、それぞれI A b 1類、I A c 3類、割れにより不明である。638は敲石である。

《所見・時期》建物南東側にある張出しは建物の出入口と想定される。また床面が礫層であるため、礫層の礫を利用し、炉の石組が構築されたと考えられる。石組部南側及び炉東側にある礫は、当初から動かされた形跡はなく、建物を構築する際にも礫を除かず、そのままの位置を保持していたと考えられる。時期は、出土遺物及び炉の形態がS I 197竪穴建物跡の炉と類似することから、大木9 b式期と推定される。

S I 175竪穴建物跡（遺構：第23・65・66図、付図1、図版4・19、遺物：第155図210、第208図639、第56・71表、図版54・82）

《位置・確認状況》L S 44・45、L T 44・45に位置する。第Ⅱ層中を精査中、暗灰黄色土の分布が確認された。S I 150・151・225竪穴建物跡、S K 108土坑と重複し、本遺構はS I 151、S K 108より旧く、S I 150・225より新しい。

《規模・形態》平面形は、長軸〔3.44〕m（N-73°-E）、短軸〔2.74〕mの楕円形と推測される。確認面から床面までの深さは0.30m、床面は平坦で、壁は急に立ち上がる。床面北東寄りに複式炉がある。廃絶に伴い巨礫が投げ込まれていた。

《埋土》第Ⅱ層土を基質とする単層で、礫を含むことから、建物廃絶に伴う人為的な埋め戻し土と考えられる。

《炉》【規模・形態】土器埋設部・石組部からなる複式炉である。掘方の平面形は、長軸〔0.60〕m（S-37°-E）、幅は土器埋設部〔0.65〕m、石組部〔0.55〕mの円形を呈す。床面からの深さは、土器埋設部8cm、石組部4cm、底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。石組は、長軸線上に0.70m、幅0.75mの範囲に長さ10～30cmの礫がU字状に配置されていたと考えられ、前庭部は北西側に開くが、東側では袖石の一部が未検出であり、廃絶時に外された可能性がある。土器埋設部の埋設土器は、径22cm、高さ18cmの深鉢形土器胴部を正位に据えていた。また、内面が被熱により剥離している。周辺を細長の礫で、方形に囲っていた。埋設土器周辺の礫で一部被熱痕や煤が認められた。

【埋土】2層に分けた。1層は第Ⅱ層土を基質とする。建物跡1層と同質であり、炉廃絶に伴う埋め戻し土である。2層は炉使用時に形成された炭化物層で、廃絶時の状況を示す。

《出土遺物》埋設土器1点789.3gの他、建物内から凹石1点540gが出土し、これら2点を図示した。210は埋設土器で、R L斜縄文が施された深鉢形土器胴部である。639は凹石である。

《所見・時期》石組が動かされていたことから、炉廃絶に伴う祭祀儀礼の可能性はある。時期は埋設土器及び遺構の重複関係から、大木9 b式期と推定される。

S I 179竪穴建物跡（遺構：第23・58図、第28表、付図1、図版20）

《位置・確認状況》L Q 45、L R 45に位置する。第Ⅲ層上面を精査中、西側半分が攪乱を受けた褐色土の分布が確認された。S N 124焼土遺構、P 1160と重複して、これらより本遺構が古い。

《規模・形態》掘方の平面形は、長軸3.68m（N-37°-W）、短軸〔1.03〕mの楕円形と推測される。確認面からの深さは0.40m、床面は平坦で、壁は南側では緩やかに立ち上がるが、北側では急に立ち上がり、一旦平坦になった後、再び急に立ち上がる。柱穴が3基（P 1～3）確認された。径0.26～（0.56）m、床面からの深さは0.13～0.31mである。P 1・3は重複し、P 3が古い。

《埋土》5層に分けた。1～3・5層は洪水堆積土、4層は第Ⅱ層土を基質とする。1・2層は建物廃絶に際しての人為的な埋め戻し土、3～5層は、P3廃絶時に再度床面を整えるために埋められた貼床土の可能性がある。

《所見・時期》P3の埋土に焼土塊が含まれているため、炉が存在していた可能性がある。また、床面が高い北側は別遺構の可能性がある。時期は周辺の状況から、大木9式期と推定される。

S I 188竪穴建物跡（遺構：第18・71・72図、付図1、図版20・21、遺物：第155・156図211～220、第56・57表、図版54・55）

《位置・確認状況》MG49～51、MH49～51に位置する。第Ⅱ層上面を精査中、多数の礫の投げ込みが確認された。当初、配石遺構としていたが、複式炉が検出されたため、竪穴建物跡と判断された。

S I 196・218竪穴建物跡、P1273・1411と重複し、P1273・1411より本遺構が古い。S I 196・218と本遺構との新旧関係は不明である。

《規模・形態》平面形は、長軸（5.64）m（N-10°-W）、短軸〔5.30〕mの楕円形と推測される。確認面から床面までの深さは0.34mである。床面はほぼ平坦で、壁は急に立ち上がる。床面中央南寄りに複式炉がある。炉西側にはSK1土坑があり、炉と重複しSK1が新しい。

《埋土》5層に分けた。1層は第Ⅱ層土、2～5層は洪水堆積土を基質とする。堆積状況から1～4層は自然流入土の可能性がある。

《炉》【規模・形態】土器埋設部・石組部・前庭部からなる複式炉である。石組部には埋設土器がある。掘方の平面形は、長軸2.78m（N-19°-W）、幅は土器埋設部0.49m、石組部1.10m、前庭部0.90mの楕円形を呈す。床面からの深さは、土器埋設部0.22m、石組部0.38m、前庭部0.35mである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。前庭部は南東側に開く。石組は、長軸2.20m、幅1.38mの範囲で、5～53cmの垂角・垂円礫が土器埋設部周辺は環状に、石組部・前庭部はA字状に配置され、前庭部両端には石組部から袖石が続く。土器埋設部の埋設土器1号は、径32cm、高さ22cmの深鉢形土器胴～底部をやや南に傾け、正位で据えられていた。上部で同一個体の破片を周辺に置き、二重に重なる部分もある。埋設土器は被熱していた。石組部の埋設土器2号は、径24cm、高さ34cmの深鉢形土器胴～底部を北側に傾け、斜位に据えられていた。また、廃絶時に入れられたと思われる径10cm、高さ11cmの小型の深鉢形土器（埋設土器3号）が、斜位に埋設土器2号内に入れ子状に置かれていた。石組部内は、埋設土器南側で比較的扁平な礫が、敷石状に並べられていた。また、袖石が東西両端で南側に広がる。前庭部中央では、長軸線上で直交するように細長の礫が仕切石・境石として置かれ、2つに区画されていた。前庭部との境は不明瞭である。焼土は埋設土器1・2号周辺で確認された。平面形は、長軸1.16m、短軸0.77m、被熱厚は2～12cmである。石組の礫でも一部被熱痕や煤が認められた。【層序】6層に分けた。1・2層は洪水堆積土を基質とする。また、1層は建物跡5層と同質である。1層は炉廃絶後、2層は炉使用時に堆積した自然流入土、3～5層はそれぞれ炉使用時に形成された炭化物層である。6層は炉使用時の被熱痕である。

《SK1》【規模・形態】規模は、長軸0.75m（N-87°-E）、短軸0.72mの隅丸方形を呈す。確認面からの深さは0.76mである。底面は平坦で、壁は急に立ち上がる。【埋土】洪水堆積土を基質とする単層で、廃絶に伴う人為的な埋め戻し土である。

《出土遺物》埋土から、埋設土器1～3号を含む縄文深鉢形土器178点63,672.3g（赤彩土器1点67.5g含む）が出土した他、剥片1点6.1g、磨石1点400gが出土し、このうち10点を図示した。211～213は埋設土器1～3号である。214はSQ183配石遺構周辺で出土した土器片と接合した。214はⅡα群の深鉢形土器である。口縁～頸部、A3b類で、横位隆状線懸垂文や小楕円文が描かれ、文様内側がRL斜縄文で充填されている。211・215・216はⅡβ群の深鉢形土器である。211は胴～底

部で、縦区画沈線文及び相対楕円文Bと想定される文様が描かれている。215は口縁へ胴部、B2 a類で、懸垂楕円連続文と想定される文様が描かれている。216は口縁部へ胴部、C3 a類で、長楕円文と想定される文様が描かれている。それぞれ文様内側は、211がLR、215・216はRL斜縄文で充填されている。212・217・218はⅡ群の深鉢形土器である。212は胴へ底部で、逆U字状楕円文、相対楕円文Bが、217・218は胴部で、217は縦区画沈線文や相対楕円文と想定される文様、218は逆U字状楕円文が描かれている。それぞれ文様内側は、217がLR、218はRL斜縄文で充填されている。213はRL、218～220はRL斜縄文の深鉢形土器である。213は口縁へ底部、219・220は口縁へ胴部で、213・219はC2 a類、220はD3 a類である。それぞれ口縁部にはミガキが施されている。

《所見・時期》埋設土器2号内に埋設土器3号が入れ子状に置かれていたことや、炉や建物の廃絶に際し、多数の礫が投げ入れられていたことから、廃絶儀礼が行われた可能性がある。時期は、埋設土器から、大木9 b式期と推定される。

S I 196 竪穴建物跡（遺構：第18・73・74図、付図1、図版21、遺物：第156図221・222、第209図640、第57・71表、図版55・77）

《位置・確認状況》MG50～52、MH50～52に位置する。第Ⅲ層上面を精査中、黄灰・暗灰黄～黄褐・灰黄色土の分布が確認された。S I 62・188 竪穴建物跡、SQK113 配石土坑、SK52 土坑、P1273 と重複し、SQK113、SK52、P1273 より本遺構が古い。また本遺構とS I 62・188との新旧関係は不明である。

《規模・形態》平面形は長軸[5.64]m (N-11°-E)、短軸[5.05]mの円形と推測される。確認面から床面までの深さは0.26m、底面は平坦で、壁は急に立ち上がる。床面中央やや南側に複式炉がある。

《埋土》4層に分けた。全て洪水堆積土を基質とする。堆積状況から、1・2層は建物廃絶後の人為的堆積土か自然堆積土か判然としない。3層は壁の崩落土と考えられる。4層は硬化が認められることから、貼床土か使用時の堆積と考えられる。

《炉》【規模・形態】土器埋設部・石組部・前庭部からなる複式炉である。掘方の平面形は、長軸1.75m (N-11°-E)、幅は、土器埋設部0.60m、石組部0.74m、前庭部0.80mの楕円形を呈す床面からの深さは、土器埋設部0.66m、石組部0.30m、前庭部0.29mである。底面は平坦で、壁は北側に急に、南側では緩やかに立ち上がる。前庭部は南側に開く。石組は、長軸1.62m、幅0.91mの範囲に長さ8～32cmの垂角・垂円礫をA字状に配置されていたと想定されるが、前庭部東端には石組から続く袖石がない。土器埋設部の埋設土器は、径35cm、高さ53cmの深鉢形土器胴へ底部を北側に傾けるように斜位に据えられていた。埋設土器は被熱し、周辺は礫で囲まれていた。また炉廃絶時に埋設土器内へ長さ30cmの細長の礫を差し込むように、また前庭部上でも長さ64cmある礫が長軸線と直交するように置かれていた。石組部は、土器埋設部から続く石組で周囲を囲い、前庭部との境には、境石として細長の礫が立てられ、区画されていた。焼土は石組部、特に埋設土器周辺で確認された。平面形は、長軸1.10m、幅0.20m、被熱厚は2～8cmである。石組を構成する礫の一部でも、被熱痕や煤が認められた。

《層序》1・2・4層は洪水堆積土を基質とする。堆積状況から1・2層は炉廃絶後の埋め戻し土、3・4層は炉使用時に形成された炭化物層で、それぞれ埋設土器内、石組部・前庭部底面にあり、炉廃絶時の状況を示す。4層は洪水堆積土を基質とすることから、廃絶直前にある程度攪拌された可能性がある。5層は炉使用時の被熱痕である。

《出土遺物》埋土から、埋設土器を含めた縄文土器54点5,649.3g・土器細片5.8g、石錐C類1点86.3gが出土し、このうち3点を図示した。221は埋設土器で、RL斜縄文の深鉢形土器である。口

縁～底部、D3 a 類で、口縁部にミガキが施されている。222はⅡ・Ⅲ群の鉢形土器②である。口縁～胴部、B類で、円文、楕円文及び渦巻文等と想定される文様が描かれ、文様内側はR L斜縄文されている。640はB c 類の石錐である。

《所見・時期》炉東側の袖石は外され、埋設土器には礫が差し込まれ、前庭部上の埋土にも比較的大きな礫が置かれていることから、炉の廃絶儀礼が行われた可能性がある。また、複式炉北側に広がる被熱に一部窪みが確認され、灰や炭化物が掻き出された痕の可能性もあり、地床炉として使用された可能性がある。時期は、埋設土器及び炉の形態から、大木9 b 式期と推定される。

S I 197 竪穴建物跡（遺構：第74図、付図1、図版21、遺物：第157図223、第57表、図版55）

《位置・確認状況》MC47・48に位置する。竪穴建物跡の掘り込みは未確認であるが、第Ⅲ層上面で、複式炉が確認されたことから、竪穴建物跡として扱うこととした。

《炉》土器埋設部・石組部からなる複式炉である。掘方の平面形は長軸0.60m（N-44°-W）、幅は土器埋設部0.24m、石組部0.30m。確認面からの深さは、土器埋設部0.34m、石組部0.14mである。埋設土器は径34cm、高さ21cmの深鉢形土器が正位に据えられていた。石組は、長軸線上に長さ0.60m、幅0.66mの範囲に長さ18～24cmの垂角・亜円礫が埋設土器周辺からU字状に配置されていた。焼土は埋設土器及び石組部南東側の隣接した位置で確認された。平面形は、埋設土器周辺が長軸0.36m、幅0.30m、被熱厚は2～6cmで、石組部南東側が長軸0.30m、幅0.26m、被熱厚は1～3cmである。

《層序》4層に分けた。1層は洪水堆積土を基質とする。炉廃絶に伴う人為的な埋め戻し土である。2層は埋設土器を据えるための裏込土で、被熱していた。3層は炉使用時に形成された炭化物層で、廃絶時の状況を示す。4層は炉使用時の被熱痕である。

《出土遺物》埋土から埋設土器1点1,510.5gが出土し、これを図示した。223は深鉢形土器口縁～胴部、D2 a 類で、体部上半は3条1組の横位波状沈線文により上下に区画され、波状線の上下に円文、小楕円文を、体部下半には縦位楕円形沈線文内側に長楕円文、または相対楕円文が描かれ、文様内側がL R斜縄文で充填されている。

《所見・時期》複式炉である。時期は埋設土器から、大木9 b 式期と推定される。

S I 202 竪穴建物跡（遺構：第19・75図、付図1、図版22、遺物：第157図224～226、第57表、図版56）

《位置・確認状況》MB53・54、MC53・54に位置する竪穴建物の掘り込みは未確認であるが、第Ⅲ層上面を精査中、複式炉が確認されたことから、竪穴建物跡として扱うこととした。S I 75・98 竪穴建物跡と重複するが、本遺構との新旧関係は不明である。

《炉》土器埋設部・石組部・前庭部からなる複式炉である。掘方の平面形は、長軸2.78m（N-20°-E）、幅は土器埋設部0.32m、石組部1.48m、前庭部 [2.70] mの台形を呈す。検出面からの深さは、土器埋設部0.31m、石組部0.36m、前庭部0.39mである。前庭部は南西側に開く。石組は、長さ5～40cmの垂角・亜円・円礫がA字状に配置されていたと想定される。土器埋設部には礫による囲いが無い。また、前庭部西端には石組部から続く袖石がない。埋設土器は、径29cm、高さ19cmの深鉢形土器口縁～胴部が正位に据えられていた。埋設土器は被熱し焼けていた。石組部内には敷石がなく、前庭部には境石として礫が並べられ前庭部と分けられていた。炉石の中には、石皿からの転用が認められた。焼土は、埋設土器北側及び内側の炭化物層上及び石組部底面で確認された。それぞれ平面形は、土器埋設部周辺が、長軸34cm、幅4cm、被熱厚は1～4cm、土器内部は、長軸6cm、短軸5cm、被熱厚は1～2cm、石組部では長軸41cm、短軸36cm、被熱厚は2～7cmである。また、石組で一部被熱痕や煤が認められた。さらに石組部内や前庭部北側では、炉廃絶時に投げ入れられた礫が確認された。

《層序》11層に分けた。1層は第Ⅱ層土、2～4・10層は洪水堆積土を基質とする。1～4層は炉廃

絶時の堆積土であるが、人為的堆積土か自然堆積土かの判断が難しい。5・6・7層は、炉使用時に形成された炭化物層で、廃絶時の状況を示す。7・8・11層は被熱痕で、7・8層が強被熱、11層は弱被熱範囲である。7層である被熱痕が、5層下及び9層上にあることから、一時的に9層上面で使用されていたと想定される。10・11層は裏込土であるが、11層は被熱を受け変色していた。

《出土遺物》埋土から埋設土器を含む縄文土器110点4,933.1g・土器細片46.5g、剥片1点6.3g、石皿Ⅱ類1点7,700gが出土し、このうち土器3点を図示した。224は埋設土器である。224・225はⅡβ群の深鉢形土器である。224は口縁～胴部、C1a類で、口縁部に横位隆沈線渦巻文と円文の単位文を、頸部は下位に2条1組の横位沈線、胴部には隆沈線懸垂文と円文・C字状楕円文との単位文等が描かれている。225は胴部で、隆沈線懸垂文、楕円文等が描かれている。それぞれ文様内側が、RL斜縄文で充填されている。226はRLR斜縄文の深鉢形土器である。口縁～胴部、A3a類で、口縁部にミガキ調整が施されている。

《所見・時期》複式炉である。前庭部北側に集中していた礫は、石組の袖を構成していた礫を廃絶儀礼として外した後、投げ込まれたと想定される。時期は、埋設土器及び炉の形態から、大木9a式期、縄文時代中期後葉と推定される。

S I 212 竪穴建物跡（遺構：第74図、付図1、図版22、遺物：第157図227、第57表）

《位置・確認状況》MG47に位置する。竪穴建物の掘り込みは未確認であるが、第Ⅲ層上面を精査中、石囲炉が確認されたことから、竪穴建物跡として扱うこととした。

《炉》掘方の平面形は、長軸1.01m（N-48°-E）、短軸0.59mの楕円形を呈す。確認面からの深さは0.16mである。底面はほぼ平坦で、壁は西側が緩やかに、東側では垂直に立ち上がる。長軸1.08m、幅0.92mの範囲に、長さ10～23cmの亜角・亜円・円礫が配置されていた。また、底部にも礫が敷き詰められていた。礫には被熱痕や煤が認められた。礫の積み方から大きく2時期が考えられる。第1期から第2期に移る際、燃烧室に細長の礫が長軸線上に仕切石として置かれ、燃烧室を区切り、2区画に分けられた可能性がある。

《出土遺物》周辺から縄文深鉢形土器6点327gが出土し、このうち土器1点を図示した。227はⅡβ群の深鉢形土器である。口縁部、D3a類で、長楕円文と想定される文様が描かれ、文様内側がRL斜縄文で充填されている。

《所見・時期》作り替えのある石囲炉である。時期は、周辺出土の遺物から、大木9b式期と推定される。

S I 218 竪穴建物跡（遺構：第18・74図、付図1、図版21・22）

《炉》MH50に位置する。竪穴建物の掘り込みは未確認であるが、第Ⅲ層上面を精査中、石囲炉が検出されたことから、竪穴建物跡として扱うこととした。S I 188・196竪穴建物跡と重複するが、本遺構との新旧関係は不明である。

《規模・形態》掘方の平面形は長軸0.62m（N-70°-W）、短軸0.40mの楕円形を呈す。確認面からの深さは0.09mである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。焼土は底面で確認された。平面形は、長軸0.48m、短軸0.32mで、被熱厚は1cmである。石組は、長軸48cm、幅48cmの範囲に長さ10～23cmの亜円礫を環状に配置されていた。礫には被熱痕や煤が認められた。

《層序》2層に分けた。1層は炉使用時に形成された炭化物層で、廃絶時の状況を示す。2層は被熱痕である。

《出土遺物》1層から凹石1点430g、埋土から縄文土器11点136.5gが出土した。

《所見・時期》石囲炉である。礫の一部は炭化物層の中に差し込む様に置かれたものもあることから、作り替えが考えられる。時期は、周辺の状況から、大木9b式期と推定される。

S I 225 竪穴建物跡 (遺構：第23・76図、付図1、第37表、図版23、遺物：第157図228・229、第57表、図版56)

《位置・確認状況》LR44～46、LS44～46に位置する。竪穴建物の掘り込みは未検出であるが、第III層上面を精査中、複式炉及びその周辺から土坑、柱穴ビットが確認されたことから、竪穴建物跡として扱うこととした。S I 48・101・148・175竪穴建物跡、SK108土坑、SN104・125焼土遺構と重複すると想定され、本遺構は、S I 48・175、SK108、SN104・125より旧く、S I 148より新しいと考えられる。またS I 101と本遺構との新旧関係の詳細は不明である。

《規模・形態》建物の規模は不明であるが、付属施設の分布から径5.8m以上と推定される。床面中央と想定される位置に複式炉及びSK1土坑がある。柱穴が9基(P1～9)確認された。径0.19～0.67m、検出面からの深さは、0.06～0.37mである。

《炉》【規模・形態】土器埋設部・石組部からなる複式炉である。掘方の平面形は、長軸[0.78]m(S-11°-E)、幅は土器埋設部[0.42]m、石組部[0.50]mである。確認面からの深さは、土器埋設部0.21m、石組部0.09mである。石組は、幅6～22cmの亜角・亜円礫を「8」字状に並べられていたと想定される。土器埋設部の埋設土器は、径31cm、高さ14cmの深鉢形土器胴～底部(埋設土器1号)を正位に、埋設土器1号南側に鉢形土器口縁部(埋設土器2号)を当てこむように据えられていた。石組内では焼土が確認された。また、石組の礫も一部被熱痕や煤が認められた。【埋土】2層に分けた。1層は洪水堆積土、2層は第II層土を基質とする。1層は炉廃絶時の埋め戻し土、2層は炉構築時の裏込土である。

《SK1土坑》平面形は、長軸0.90m(N-14°-W)、短軸0.89mの円形を呈す。確認面からの深さは0.25mである。

《出土遺物》建物跡と想定される範囲及び埋土から、埋設土器を含む縄文土器24点1,426.2g(赤彩土器1点18.4g含む)が出土し、このうち埋設土器2点を図示した。228・229はそれぞれ埋設土器1号・2号である。229はIIβ群の深鉢形土器である。C1b類で、隆沈線渦巻文が描かれ、文様内側がRL斜縄文で充填されている。228はII群の深鉢形土器である。胴～底部で、縦位区画沈線文、逆U字状栴檀文や相対栴檀文Bと想定される文様が描かれ、文様内側がLR斜縄文で充填されている。

《所見・時期》時期は埋設土器から、大木9b式期と推定される。

S I 236 竪穴建物跡 (遺構：第17・19・77図、付図1、第38表、図版23、遺物：第157・158図230・231、第210図642、第57・71表、図版56・79)

《位置・確認状況》ME53・54、MP53・54に位置する。第IV層地山上面を精査中、焼土の分布及び柱穴の掘方が検出され、これらが竪穴建物に付属する施設と判断された。建物の掘方は確認されなかった。SK1207竪穴建物跡、SK206・248土坑、P1413と重複すると考えられるが、本遺構との新旧関係は不明である。

《規模・形態》規模は、掘方が未検出のため不明である。柱穴の位置から、径[4.40]mの円形と推測される。床面に地床炉がある。柱穴が2基(P1・2)確認された。規模は径0.65～0.80m、深さは0.40～0.52mである。柱間は3.45mである。

《炉》【規模・形態】地床炉である。平面形の規模は、長軸1.24m、短軸1.03mである。被熱厚は1～8cmである。【層序】単層で、炉使用時の被熱痕跡である。

《出土遺物》埋土から縄文土器4点215.3g、磨製石斧1点177.9gが出土し、このうち3点を図示した。230・231は土器である。230はIIβ群の深鉢形土器である。口縁部、Ab類で、隆沈線により文様が描かれ、文様内側が刺突文で充填されている。231は無文の台付土器である。台部で、4か所に穿孔がある。642は磨製石斧で、刃部のみ残存する。基部は再調整と想定される。230・642はP2か

らの出土である。

《所見・時期》時期は、出土遺物から、大木9b式期と推定される。

S I 301 竪穴建物跡（遺構：第22・78・79図、付図1、第39表、図版5・23・24、遺物：第158図232～239、第209・210図643～645、第57・71表、図版56・57・77～79、理化学分析：第77・79表、第234・238図）

《位置・確認状況》LQ55・56、LR55・56に位置する。第Ⅲ層上面を精査中、暗褐色土の分布が確認された。S I 307 竪穴建物跡と重複して、本遺構が古い。

《規模・形態》掘方の平面形は、長軸4.00m（N-75°-W）、短軸3.91mの円形を呈す。確認面から床面までの深さは0.21m、貼床の厚さは1～6cm、床面は平坦で、壁は急に立ち上がる。床面中央から西側にかけ石囲炉がある他、建物壁際に塗切れながら6条の壁溝（SD1～6）が巡る。SD1は総延長0.96m、幅0.13～0.18m、床面からの深さは0.04～0.16mである。SD2は総延長1.34m、幅0.16～0.26m、床面からの深さは0.09～0.14mである。SD3は総延長2.36m、幅0.10～0.24m、床面からの深さは0.07～0.21m、SD4は総延長1.67m、幅0.10～0.29m、床面からの深さは0.16mである。SD5は総延長1.02m、幅0.16～0.30m、床面からの深さは0.13mである。SD6は総延長0.40m、幅0.18m、床面からの深さは0.04mである。柱穴8基（P1～8）が確認された。径0.21～1.36m、深さは0.06～0.18mである。

《埋土》竪穴建物跡の埋土は3層に分けた。1層は第Ⅱ層土、2・3層は洪水堆積土を基質とする。1層は、埋まりきらない窪みを埋めた人為的な埋め戻し土、2層は建物廃絶後の自然流入土、3層は建物構築時に床面を整えるために埋められた貼床土である。また、壁溝の埋土は2層に分けられ、1・2層ともに洪水堆積土を基質とする。建物廃絶後の自然流入土と考えられる。

《炉》【規模・形態】掘方の平面形は、長軸0.57m（N-83°-E）、短軸0.50mの隅丸方形を呈す。確認面からの深さは0.08mである。底面は平坦で、壁は西側が急に、東側では急に立ち上がった後やや緩く立ち上がる。石組は、長さ6～26cmの垂角・亜円礫が台形に配置され、中央部分が境石で区切れ、2つに区画されていた。炉石には石皿からの転用が認められた。炉東側で焼土が確認され、平面形は、長軸0.96m、短軸0.42m、被熱厚は1～2cmである。また、石組の礫の大部分で被熱痕や煤が認められた。【層序】3層に分けた。1・2層ともに第Ⅱ層土を基質とする。1層は炉廃絶に伴う人為的な埋め戻し土、2層は炉使用時に形成された炭化物層で、炉廃絶時の状況を示す。3層は炉使用時の被熱痕である。

《出土遺物》埋土から縄文土器317点8,326.5g（赤彩土器8点71.4g含む）・土器細片577.9g、石錐B a類1点1.5g、スクレイパーI a b 2類1点15g・I b a類1点6g、RF1点17.2g、剥片25点105.8g、磨製石斧1点300g、石皿2点10,350g、磨石1点450g、凹石2点1,150g、奇石1点1,150gが出土し、このうち11点を図した。232～239は土器で、232は炉内、他は1・2層からの出土である。232はⅡα群の深鉢形土器である。口縁部、C 2 b類で、隆沈線渦巻文が描かれ、文様内側がR L斜縄文で充填されている。233～238はⅡβ群の深鉢形土器である。233～236は口縁～胴部である。233はC 1 a類で、口縁部には横位沈線文を巡らせ、体部には横位S字状相対渦巻文Aと長楕円文の組合せ文や、隆沈線渦巻懸垂文及び相対楕円文、234はC 2 a類で、逆U字状楕円文及び逆U字状沈線文と相対楕円文Bの組合せ文が描かれている。235はD 2 a類で、2条1組の横位波状沈線文を巡らせ、波間上下に楕円沈線文と長楕円文の組合せ文や相対楕円文等、236はD 2 a類で、逆U字状沈線文内に相対楕円文Bが描かれている。それぞれ文様内側が、233～235はLR、236はRL斜縄文で充填されている。237・238は胴部である。237は縦位区画沈線文または逆U字状沈線文と長楕円文の組合せ文と想定される文様、238には楕円沈線文や楕円文と想定される文様が描かれ、それぞれ文様内側が、

R L斜縄文で充填されている。239はⅡ群の鉢形土器②である。口縁～胴部、B類で渦巻文等が描かれ、文様内側がLR斜縄文で充填されている。643～645は石器で、これらは炉内から出土した。643は石錐Ba類、644・645はそれぞれIAb2類、IBa類のスクレイパーである。

《所見・時期》SD1とSD2及びSD1とSD6の間隔は、他の壁溝が途切れる箇所よりも間隔があることから、この辺りに建物の出入り口が想定される。時期は、炉の形態及び出土遺物から、大木9a式期と推定される。また、埋設土器内から出土した炭化物の放射性炭素年代測定（暦年較正年代）では、2888～2675calBC（2 σ ）の年代値が、樹種同定によりクリ・サクラ属の結果が得られた（試料13）。

S1302竪穴建物跡（遺構：第80・81図、付図1・2、第40表、図版5・24、遺物：第158～160図240～249、第210図646～649、第57・58・71表、図版57・58・75・79、理化学分析：第77・79・81・83～86表、第234・241・242図）

《位置・確認状況》LN52・53、LO51～53に位置する。第Ⅱ・Ⅲ層上面を精査中、灰黄褐・黒褐色土の分布が確認された。P1530・1532・1533と重複して本遺構が古い。また南側で攪乱を受けている。

《規模・形態》掘方の平面形は、長軸6.16m（N-34°-W）、短軸5.42mの隅丸方形を呈す。確認面から床面までの深さは0.13～0.24m、底面はほぼ平坦で、壁は急に立ち上がる。床面中央から西側にかけて複式炉がある他、炉西側にあるSQK1配石土坑が検出されている。建物東側壁際に壁溝が巡る。壁溝は複式炉により南北に分断されている。壁溝はSD1で総延長3.96m、幅0.10～0.46m、床面からの深さは0.16mである。SD2は総延長2.57m、幅0.06～0.28cm、床面からの深さは0.21mである。また柱穴5基（P1～5）が確認された。径0.24～0.41m、深さは0.10～0.20mである。P6は複式炉と重複して古い。

《埋土》5層に分けた。1・3～5層は洪水堆積土、2層は第Ⅱ層土を基質とする。2層は人為的な埋め戻し土、他は自然流入土と推測される。

《炉》【規模・形態】土器埋設部・石組部・前庭部からなる複式炉である。掘方の平面形は、長軸2.62m（S-89°-W）、幅は土器埋設部1.18m、石組部1.34m、前庭部1.41mの楕円形を呈す。床面からの深さは土器埋設部0.51m、石組部0.31m、前庭部0.41mである。底面は平坦で、壁は東側では急に、西側では緩やかに立ち上がる。前庭部は東側に開く。石組は、掘方の長軸線上に1.22m、幅0.95mの範囲に長さ5～34cmの扁平な亜角・亜円礫をA字状に配置されていた。土器埋設部の埋設土器は、径29cm、高さ42cmの深鉢形土器胴部が斜位に据えられていた。土器周辺は礫で囲われている。石組部は比較的大きな扁平な礫が壁面に据えられていた。前庭部両端に軸が広がるように配置されているが、北側に比べ、南側が短い。前庭部には長軸と直交するように境石として礫が置かれていた。石組部の礫で被熱痕や煤が認められた。【埋土】7層に分けた。1・4・6層は第Ⅱ層土を、2・3層は洪水堆積土を基質とする。1～3層は炉廃絶時の人為的な埋め戻し土、3・5層は炉使用時に形成された炭化物層で、炉廃絶時の状況を示す。6層は炉構築時の裏込土、7層は炉使用時に形成された炭化物層と想定されるが、堆積状況から炉構築時に裏込めや床面を調整するために埋められたと考えられる。また炉内採取土で土壌分析を行った（第4章第4節以下同、サンプル④）。

《SQK1》【規模・形態】掘方の平面形は、長軸0.40m（S-47°-W）、短軸0.38mの円形を呈す。検出面からの深さは0.05m、底面は鍋底状で、壁は西側では急に、東側では緩やかに立ち上がる。掘方に幅4～9cmの比較の長い亜角礫が二重環状に配置されていた。【埋土】洪水堆積土を基質とする単層で、人為的な廃絶に伴う埋め戻し土である。

《出土遺物》埋土から埋設土器を含め縄文土器692点24,500.9g（赤彩土器4点39.7g含む）・土器細片334.6g、スクレイパーIAb1類1点5.2g・IBa類1点10.2g・ⅡB類2点19.9g・未製

品1点0.9g、RF1点9.3g、剥片39点341.9g（黒曜石1点を含む）、磨製石斧1点131.7g、浮石1点27.3g、石棒原材2点6,250gが出土し、このうち14点を図示した。240は埋設土器、242・248は床面直上からの出土である。241・242はⅡa群の深鉢形土器である。241・242は口縁部で、それぞれ241はA b類、242はC 4類である。隆沈線渦巻文A及び楕円文と想定される文様が描かれている。文様内側は、241がLR、242はRL斜縄文でそれぞれ充填されている。243～246はⅡβ群の深鉢形土器である。243～245は口縁部～胴部である。243はA 3 a類で、体部に2条1組の横位波状沈線を巡らせ、その波間上下に相對楕円文Aが描かれている。244はC 2 a類で、体部上半に横位波状沈線を巡らせ、その波間上に相對楕円文A、下に長楕円文、体部下半には楕円沈線文と長楕円文と想定される組み合わせ文が描かれている。245はC 3 a類で、長楕円文及び相對楕円文と想定される文様、246は頸～胴部で、隆沈線S字状相對渦巻文Aと想定される文様が描かれている。それぞれ文様内側は、243・246がLR、244・245はRL斜縄文で充填されている。247はⅡ群の深鉢形土器である。口縁～頸部、D 2類で、体部にRL側面疔痕が充填されている。240はLR、248はRL斜縄文の深鉢形土器である。240は胴部、248は口縁～胴部である。249はミニチュア深鉢形土器の口縁～底部で、LR斜縄文を地文とする。646～649は石器で、61・62は炉内からの出土である。646・647・648はそれぞれ、I A b 1類・I B a類・Ⅱ B b類のスクレイパーである。また、647は石材質が黒曜石である。649は磨製石斧で、刃部に使用痕が確認される。

《所見・時期》炉内で炭化物を多量に含む層が、炬構築時の裏込土に使用されていることから、炉の作り替えが考えられる。また、石組は、前庭部を区切る境石が中央部で途切れていることから、廃絶の際に取り外された可能性がある。時期は、炉の形態及び出土遺物から、大木9 b式期と推定される。また、埋設土器内より出土した炭化物の放射性炭素年代測定（暦年較正年代）では、2868～2583cal BC（2σ）の年代値が、樹種同定によりクリの結果が（試料15）、また、炉1層で出土した黒曜石産地同定により湯ノ倉産という結果が得られた（試料№5）。

S 1306竪穴建物跡（遺構：第82・83図、付図1、第41表、図版5・24・25、遺物：第160～163図250～273、第210・211図650～655、第58・59・71表、図版59・60・75・78・79、理化学分析：第77・79・84～86表、第234・243図）

《位置・確認状況》LP52・53、LQ52・53、LR52・53に位置する。第Ⅲ層上面を精査中、西側が調査区外へ続く、黒褐・褐・黄褐色土の分布が確認された。SN304焼土遺構、P1550・1551と重複して、本遺構が古い。

《規模・形態》掘方の平面形は、長軸（6.19）m（N-55°-W）、短軸（4.64）mの隅丸楕円形と推測される。確認面から床面までの深さは0.14～0.26m、床面は平坦で、壁は急に立ち上がる。床面中央から南東にかけ複式炉がある。また、壁際には途切れながら壁溝2条（SD1・2）が確認された他、南西側では複式炉と壁溝の間に1条の溝（SD3）がある。壁溝は、SD1は総延長5.08m、幅0.20～0.64m、床面からの深さは0.18m～0.28mである。SD2は総延長（4.36）m、幅0.08～0.13m、床面からの深さは0.05mである。SD3はP1と重複するが、新旧関係は不明である。総延長[1.26]m、幅0.10～0.12m、床面からの深さは0.16mである。柱穴4基（P1～4）が確認された。径0.18～1.13m、床面からの深さは0.36～0.52mである。

《埋土》6層に分けた。1・2層は第Ⅱ層土、3～6層は洪水堆積土を基質とする。1層は遺物を多量に含むことから、埋まりきらない窪みを埋めた人為的な埋土、2～5層は建物廃絶後の自然流入土、6層は建物廃絶後の崩落土と考えられる。

《炉》【規模・形態】土器埋設部・石組部・前庭部からなる複式炉で、石組部には埋設土器がある。掘方の平面形は、長軸（2.56）m（N-36°-E）、幅は土器埋設部1.04m、石組部1.18m、前庭部

[1.73] mの三連円を呈する。床面からの深さは、土器埋設部0.40m、石組部0.64m、前庭部0.35mである。底面はほぼ平坦で、壁は急に立ち上がる。前庭部は南西側に開く。石組は、掘方の長軸線上に1.84m、幅1.28mの範囲に長さ4～30cmの垂角・垂円礫がA字状に配置されている。土器埋設部の埋設土器1号は、径30cm、高さ32cmの口縁部が欠損した深鉢形土器頸～底部で正位に据えられている。またこの周辺は、礫が土器と少し間隔を空けて囲っていた。石組部に伴う埋設土器2号は、径34cm、高さ38cmの深鉢形土器頸～胴部で正位に据えられている。この周辺には、比較的大きな扁平な礫が配置されていた。前庭部はP1551と重複し、かつ調査区外へ続くことから、正確な形態は不明である。石組部の一部の礫では、被熱痕や煤が認められた。【埋土】6層に分けた。1・3・6・7層は洪水堆積土を基質とする。1層は堆積上から炉廃絶に伴う人為的な埋め戻し土、2～5層は炉使用時に形成された炭化物層で、炉廃絶時の状況を示すが、2層は炭化物の混入の割合が少なく、かつ石組部の埋設土器を覆うように堆積していたことから、炉廃絶時の埋め戻し土とともに攪拌されたと想定される。6・7層は炉構築時の裏込土である。また埋設土器付近での採取土で土壌分析を行った(サンプル⑤)。

《出土遺物》建物廃絶に際し、建物1層内でまとまった土器が出土している。これらを含め、埋土から埋設土器を含む縄文土器804点45,424.8g(赤彩土器9点83.1g含む)・土器細片665.3g、石匙A類1点4.8g・Ca類1点18.8g、スクレイパーI A a 1類1点18.1g・I A b 2類2点18.8g・II B a 類1点21.5g・II C a 類1点32.4g・II F a 類1点3.4g、剥片57点329g、石皿II類1点9,150g、凹石1点1,600g、この他紛れ込みと思われる近世陶器碗1点8.4gが出土し、このうち30点を図示した。250～273は土器である。250・251は埋設土器1・2号、267は炉内、271はP2内からの出土、258・259及び264・265は同一個体である。250～259はIIβ群の深鉢形土器である。250は頸～底部で、胴部に2条(間は充填縄文)の波状文の波間上に楕円文、その直下に逆U字状楕円文、波間下には相対楕円文Bが描かれている。251は頸～胴部で、頸部に横位沈線が巡らせ、胴部には逆U字状楕円文、逆U字状沈青文と相対楕円文Bの組合せ文が描かれている。それぞれ文様内側は、250がLR、251はRL斜縄文で充填されている。252～257は口縁部または口縁～胴部、口縁～頸部である。252・253はA1a類で、楕円沈線文と楕円文または、楕円渦巻文の組合せ文と想定される文様が描かれている。254・255はA2a類で、254は懸垂楕円連続文、255は逆J字状文及び縦位C字状文と想定される文様が描かれている。257はC1a類で、横位S字状波状文と想定される文様が描かれている。それぞれ文様内側は、252がRLR、254・255はLR、257はLR斜縄文、253は刺突文で充填されている。また、254には口縁部に2か所の補修孔がある。256は口縁部先端が欠損し、隆沈線相対渦巻文等と想定される文様が描かれている。258・259(同一個体)は、C1類で、三角形や隆沈線相対渦巻文等が描かれている。それぞれ文様内側は、RL斜縄文と刺突文で充填されている。260～262はIII群の深鉢形土器の口縁～胴部である。260はA2a類で、C字状文や変形楕円文が、261はB1a類で、頸部に帯状文を巡らせ、その上に塔状の文が口縁部にかへ描かれ、その土台内に円文の組合せ文、胴部には横位S字状波状文が描かれている。262はC2a類で、U字状文と想定される文様等が描かれている。それぞれ文様内側が、260・262はRL、261はLR斜縄文で充填されている。263～266はLR斜縄文の深鉢形土器である。264・265は同一個体である。263は口縁部で、口縁部にミガキが施されている。264～266は胴部である。267・268は無文の深鉢形土器の胴～底部である。269・270はIIβ群、271は無文の鉢形土器①である。269は口縁部、C1a類で、波状沈線文を巡らせ、その波間上下に小楕円文が描かれている。270は胴部で隆沈線渦巻文等の文様が描かれ、それぞれ文様内側が、269はLR斜縄文、270は刺突文で充填されている。271は口縁～底部である。272はII群、のミニチュア深鉢形土器である。胴～底部で、逆U字状楕円文が描かれ、文様内側がLR斜縄文で充填されている。273は

無文のミニチュア鉢形土器①である。273は口縁～底部、A1a類である。650～655は石器で、652は炉内、654はP2、651は2層からの出土である。650・651はそれぞれ石匙A類、C a類で、ともに先端部が折れている。652～655はスクレイパーで、それぞれ652はI A a 1類、653・654はI A b 2類、655はII C b類である。

《所見・時期》時期は、埋設土器から、大木9b式期と推定される。また、埋設土器内から出土した炭化物の放射性炭素年代測定（暦年較正年代）では、2873～2629cal BC（2 σ ）の年代値が、樹種同定によりケヤキという結果が得られた（試料14）。

S I 307 竪穴建物跡（遺構：第22・84図、付図1、第42表、図版25、遺物：第163図274、第59表、図版60）

《位置・確認状況》LR55・56、LS55に位置する。第III層上面を精査中、西側調査区外へ続く複式炉が確認された。その後、調査区外へ続く壁面を精査したところ、竪穴建物跡の掘り込みが確認された。S I 301 竪穴建物跡と重複して、本遺構が新しい。

《規模・形態》調査区外に接する土層断面観察及び付属する柱穴の配置から、径[4.30] m、の円形を呈すと推定される。確認面からの深さは0.12mである。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。推定される建物範囲西端に複式炉がある。柱穴3基（P1～3）が確認された。規模は、径0.24～0.50m、検出面からの深さは0.08～0.20mである。

《埋土》第II層土を基質とする単層で、建物廃絶後の人為的堆積土か自然堆積土か判然としない。

《炉》【規模・形態】土器埋設部・石組部からなる複式炉である。調査区外へ続くため、前底部は未確認である。掘方の平面形は、長軸(0.92) m (N-70°-E)、幅は土器埋設部0.30m、石組部0.54mの楕円形を呈す。床面からの深さは土器埋設部0.14m、石組部0.10mである。底面は平坦で、壁は東側が急に、南・北側では緩やかに立ち上がる。前底部は南東側に開くと想定される。石組は、長軸0.65m、幅0.24mの範囲に長さ5～31cmの扁平な亜角・亜円礫が配置されていた。竪穴建物や炉の上部が大きく削平されていることから、石組部底面のみが残存し、本来、据石が付属していたと想定される。土器埋設部の埋設土器は、径34cm、高さ14cmの深鉢形土器胴部が正位に据えられていた。埋設土器は被熱していた。焼土は埋設土器周辺で確認され、長軸0.64m、短軸0.38m、被熱厚は2～4cmである。石組を構成する礫の一部にも被熱痕や煤が認められた。【層序】1・2層は第II層土、3・5層は洪水堆積土を基質とする。1～3層は埋設土器内の堆積土で、1層は建物跡1層と同質で、炉廃絶後の人為的堆積土か自然堆積土か判然としない。2層は炉使用時に形成された炭化物を多量に含むことから、廃絶時の状況を示す。3層は炉構築時の裏込土と考えられるが、明瞭な被熱を受けていないことから、土器が据え直された可能性がある。4層は炉使用時の被熱痕、5層は炉構築時の裏込土と考えられる。

《出土遺物》埋土から埋設土器を含む縄文土器6点1,648.2g（赤彩土器1点19.9g含む）・土器細片29.8g、土製品22.6g、剥片1点2.9gが出土し、このうち埋設土器1点を図示した。274はR L斜縄文の深鉢形土器の胴部である。

《所見・時期》時期は、炉の形態から、大木9b式期と推定される。

S I 312 竪穴建物跡（遺構：第85図、付図2、図版25・26、遺物：第163図275、第59表、図版61）

《位置・確認状況》LF57・58、LG57・58に位置する。第III層上面を精査中、複式炉の土器埋設部・石組部が確認された。また、炉の周囲を精査したところ、周辺と若干土質が異なる範囲があり、それを竪穴床面範囲と判断された。

《規模・形態》長軸[4.90] m (N-10°-W)、短軸[4.39] mの楕円形と推測される。床面中央から北東端に複式炉がある。

《炉》【規模・形態】土器埋設部・石組部・前庭部からなる複式炉である。掘方の平面形は、長軸2.11m (S-61°-W)、幅は、土器埋設部[0.70]m、石組部0.98m、前庭部0.89mの楕円形を呈す。前庭部は北東側に開く。確認面からの深さは、土器埋設部0.17m、石組部0.27m、前庭部0.17mである。石組は、長軸線上に1.26m、幅0.88mの範囲に径6～36cmの垂角・亜円・円礫が配置されており、北側は比較的残存状態が良好であった。土器埋設部の埋設土器は、径33cm、高さ16cmの深鉢形土器胴部が正位に据えられ、一部二重になる部分もあった。また、土器底部には扁平な礫が据えられ、埋設土器周辺には比較的小型の礫が並べられていた。石組は扁平な礫が敷かれ、壁際にも礫が並べられ部屋が構築されていた。石組部を構成する礫は被熱痕や煤が認められた。【埋土】5層に分けた。全て洪水堆積土を基質とする。1・2・3層は炉廃絶後の自然流入土、4層は自然流入土に、炉使用時に形成された炭化物が混じる。5層は炉構築時の裏込土である。

《出土遺物》床面直上から石棒に似せた自然礫が、また南端で剥片5点60.7gが集中して出土した他、埋土から埋設土器を含む縄文土器3点1,862.6g、石皿Ⅱ類1点5,100gが出土し、このうち5層から出土した土器1点を図示した。埋設土器は復元不可のため図示していない。275はR L斜縄文の深鉢形土器の胴～底部で、底部外面にはミガキが施されている。

《所見・時期》複式炉の石組は、南側の残存状況が良くないことから、廃絶に伴い動かされた可能性がある。時期は、出土遺物及び炉の形態から、大木9b・10a式期と推定される。

S I 314 竅穴建物跡 (遺構：第86図、付図2、図版26、遺物：第163・164図276～279、第59表、図版60・61、理化学分析：第77・79・84～86表、第234・237・243図)

《位置・確認状況》L F 60・61、L G 60・61に位置する。第Ⅲ層上面を精査中、にぶい黄褐色土の分布が確認された。S L 316河川跡と重複して、本遺構が新しい。

《規模・形態》平面形は長軸3.82m (N-61°-E)、短軸3.02mの楕円形を呈す。確認面から床面までの深さは0.29mである。底面は平坦で、壁は西側は緩やかに、他は急に立ち上がる。床面中央から東側にかけ複式炉がある。

《埋土》洪水堆積土を基質とする単層で、建物廃絶後の自然流入土と考えられる。

《炉》【規模・形態】土器埋設部・石組部・前庭部からなる複式炉である。掘方の平面形は、長軸1.76m (S-71°-W)、幅は、土器埋設部0.90m、石組部0.88m、前庭部0.80mの隅丸方形を呈す。床面からの深さは、土器埋設部0.24m、石組部0.40m、前庭部0.40mである。底面は平坦で、壁は急に立ち上がる。前庭部は東側に開く。石組は、長軸線上に1.22m、幅0.87mの範囲で長さ6～56cmの垂角・亜円・円礫が「8」の字状に配置されていた。前庭部では石組部から続く袖石は南側のみ確認される。土器埋設部には埋設土器として、径32cm、高さ22cmの深鉢形土器が正位に据えられ、周囲が礫で囲われていた。石組部は比較的大型の礫が壁に立てかけられ、底面には扁平な礫が敷かれ、前庭部との境には境石として細長の礫が配置されていた。前庭部は第Ⅳ層地山面まで掘り下げられ、南端には袖石が確認された。石組部を構成する礫は被熱していた。【埋土】6層に分けた。1～4層は洪水堆積土を基質とする。1～4層は炉廃絶後の自然流入土と想定される。5層は炉使用時に形成された炭化物層で、炉廃絶時の状況を示す。6層も炭化物層であるが、炉構築時の裏込土である。炉6層からの採取土で土壌分析を実施した(サンプル⑩)。

《出土遺物》埋土から埋設土器を含め縄文土器7点9,245.8g(赤彩土器1点20.5g含む)が出土し、このうち土器4点を図示した。276は埋設土器、277は床面直上及び炉内から出土である。276～278はⅢ群の深鉢形土器である。276は頸～底部で、頸部には横位S字状文、胴部には横位楕円文が描かれ、文様内側がL R斜縄文で充填されている。277・278は頸～底部である。277は横位S字状文、278はC字状渦巻文Aと想定される文様がそれぞれ体部上半に描かれている。それ

ぞれR L斜縄文で文様内側が充填され、体部下半を地文としている。279はL R斜縄文の深鉢形土器である。胴～底部で、一部ナデを施し、地文間を空けている。

《所見・時期》建物東半分は、S L 316河川跡上に堆積した砂層上から掘り込まれていることから、流路が氾濫により東へ移った後に構築されたと考えられる。炉の前庭部南端では南側のみ袖石らしき礎が置かれていたことから、廃絶に伴い北側は外された可能性がある。また埋設土器の裏込土は、炭化物を多量に含むことから、炉の作り替えが想定される。時期は、埋設土器から、大木10 a 式期と推定される。また、埋設土器内出土した炭化物の放射性炭素年代測定（暦年較正年代）では、2848～2500cal BC (2σ) の年代値が、樹種同定によりクワ属という結果が得られた（試料16）。

S I 317 竪穴建物跡（遺構：第22・88図、付図1、図版26、遺物：第164図280、第59表、図版61）

《位置・確認状況》L R 54に位置する。第Ⅲ層上面を精査中、暗褐色土及び焼土の分布が確認、断面精査により土器埋設炉が確認された。上部が削平された炉の可能性があるので、竪穴建物跡として扱うこととした。

《炉》掘方の平面形は、長軸0.46m (N-13° -W)、短軸0.42m、確認面からの深さは0.20mである。埋設土器は径47cm、高さ12cmの深鉢形土器胴部が正位に据えられていた。焼土は埋設土器の西側に分布していた。焼土の平面形は、長軸0.57、短軸0.42m、被熱厚は1～2cmである。

《層序》3層に分けた。1層は第Ⅱ層土を基質とする。炉廃絶後の人為的堆積土か自然堆積土か判然としない。2層は炉使用時に形成された炭化物層で、炉廃絶時の状況を示す。3層は焼土で、使用時の被熱痕である。

《出土遺物》埋設土器である深鉢形土器1点219.0gが出土し、これを図示した。280はⅡ群の深鉢形土器胴部で、逆U字状楕円文と想定される文様が描かれ、文様内側がR L斜縄文で充填されている。

《所見・時期》時期は、埋設土器から、大木9式期と推定される。

S I 318 竪穴建物跡（遺構：第87・88図、付図1、第43表、図版27、遺物：第165図281～285、第59表、図版61、理化学分析：第84～86表、第243図）

《位置・確認状況》L H 56・57、L 156に位置する。第Ⅲ層上面を精査中、褐色土の分布が確認された。

《規模・形態》平面形は、長軸4.00m (N-84° -E)、短軸3.96mの円形を呈す。確認面から床面までの深さは0.16mである。床面は平坦で、壁は急に立ち上がる。床面中央から南端に複式炉がある。壁際を巡る壁溝は、北側で途切れるとともに、南側は炉と重複し、東西に分断されていた。炉の東側SD1が総延長4.48m、幅0.12～0.27m、床面からの深さは0.06～0.17mである。西側SD2は総延長6.06m、幅0.12～0.25m、床面からの深さは0.08～0.14mである。柱穴が8基（P1～8）確認された。規模は、径0.42～0.76m、床面からの深さは、0.10～0.40mである。これらの柱穴は炉を囲うように環状に配置されていた。P8は炉と重複するが、新旧関係は不明である。建物の主柱穴はP1・2・4・6・7と想定される。

《埋土》洪水堆積土を基質とする単層で、堆積状況から自然流入土と考えられる。

《炉》【規模・形態】土器埋設部・石組部・前庭部からなる複式炉である。土器埋設部と石組部との境は不明瞭である。掘方の平面形は、長軸1.96m (N-8° -W)、幅は土器埋設部0.86m、石組部1.01m、前庭部1.25mの楕円形を呈す。床面からの深さは、土器埋設部0.35m、石組部0.30m、前庭部0.32mである。底面は平坦で、壁は急に立ち上がる。前庭部は南側に開く。石組は径5～42cmの直角・垂円・円礎が、A字状に配置されていた。土器埋設部の埋設土器は、径30cm、高さ22cmの口縁部を欠いた深鉢形土器底部を斜位に北側へ傾けて据えられていた。石組部には比較的扁平な礎が敷かれ、また前庭部との境には礎が立てられ、部屋が構築されていた。また、前庭部両端に石組部から続く袖石が

延びている。石組部の礫は被熱痕や煤が認められた。【埋土】5層に分けた。1・2層は洪水堆積土を基質とする。1・2層は炉廃絶後の自然流入土である。3層は埋設土器内、4層は石組部・前庭部内で炉使用時に形成された炭化物層で、炉廃絶時の状況を示す。5層も由来不明の炭化物層であるが、堆積状況から炉構築時の裏込土と考えられる。また炉3層からの採取土で土壌分析を実施した(サンプル⑥)。

《出土遺物》埋土から埋設土器を含めた縄文土器52点5,076.1g、スクレイパー未製品及び欠け1点0.8g、石皿Ⅱ類3点42,400g、RF2点17.5g、剥片2点10.5gが出土し、このうち5点を図示した。281は埋設土器、282・284は炉内出土土器である。282は口縁部、A1a類で、長楕円文が描かれている。283・284は胴部で、283には縦位区画沈線文と逆U字状楕円文、284には長楕円文や相対楕円文と想定される文様が描かれている。281は口縁～底部、A2a類で、体部上半にはC字状渦巻文AやC字状渦巻文Aの先端から分裂して相対楕円文Aが付く文様や、体部下半には逆U字状楕円文が描かれている。それぞれ文様内側は、281がRLR、282～284はRL斜縄文で充填されている。285はRL斜縄文の深鉢形土器の胴部である。

《所見・時期》床面北側で壁溝が途切れていることから、建物の出入り口の可能性がある。P8は土層断面観察から、炉以前の構築、または炉と同時期に存在していたと考えられる。時期は埋設土器から、大木10a式期と推定される。

S I 403 竈穴建物跡 (第9・89・90図、付図2、第44表、図版27、遺物：第165・166図286～291、第211図656・657、第59・71表、図版61・62・78、理化学分析：第77・79・84～86表、第234・237・243図)

《位置・確認状況》LH46・47、L146に位置する。第Ⅱ層中及び第Ⅲ層上面を精査中、調査区外南側へ続く、褐色・にぶい黄褐～にぶい黄橙色土の分布が確認された。掘り下げたところ、土器片及び石組が検出されたことから、複式炉と判断された。その後、掘り込みが確認されたため竈穴建物跡として扱うこととした。SK442・443土坑、SN443焼土遺構と重複して本遺構が古い。

《規模・形態》掘方の平面形は長軸(2.02)m(N-82°-E)、短軸(2.20)mの円形と推測される。確認面からの深さは0.40mである。底面は平坦で、壁は西側が急に立ち上がる。床面中央北西寄りに複式炉がある。柱穴が1基(P1)確認された。規模は、長軸0.31m、短軸0.28m、床面からの深さは0.22mである。

《埋土》建物の埋土は10層に分けた。1～5・7～9層は洪水堆積土、6層は第Ⅱ層土を基質とする。全て炉廃絶後の自然流入土で、9層は壁の崩落土と考えられる。

《炉》【規模・形態】石組部・前庭部からなる複式炉である。掘方の平面形は、長軸1.98m(N-80°-E)、幅は石組部(0.50)m、前庭部(1.02)mである。床面からの深さは、石組部0.22m、前庭部0.24mである。底面は平坦で、壁は東側では緩やかに、西側では急に立ち上がる。前庭部は西側に開く。石組は、径6～32cmの垂角・垂円・円礫がA字型に配置されていた。石組部では、扁平な礫が底面に敷かれ、長形の礫を方形に囲い部屋が構築されていた。前庭部両端には、石組部から袖石が延びる。石組部を構成する礫で、被熱痕や煤が認められた。【埋土】4層に分けた。2・3層は洪水堆積土を基質とする。1・4層は炉使用時に形成された炭化物層である。1層は石組の上に堆積しているため、炉廃絶時に掻き出された可能性がある。2・3層は炉廃絶後の自然流入土と考えられる。

《出土遺物》埋土から縄文土器深鉢153点4,122.2g・土器細片349.6g、楔形石器1点0.6g、スクレイパーI A b a 1類1点17.3g、剥片15点96.5g、石皿Ⅱ類1点1,300g、石核2点158.2gが出土し、このうち8点を図示した。286～291は土器である。291はRL斜縄文の深鉢形土器である。口縁部、C2b類である。286・287はⅡβ群の深鉢形土器である。286は口縁～胴部、C2a類で、縦位C字状文やH字状文と楕円文の組み合わせ文が描かれている。287は頸～胴部、波状沈線文や縦位C字

状文が描かれている。それぞれ文様内側は、286がL R、287はR L斜縄文で充填されている。288～290はⅡ群の深鉢形土器である。288は穿孔が施された把手付である。口縁～胴部、D 1 a 類で、楕円文が描かれている。289・290は胴部で、289は隆沈線円形文と想定される文様、290は楕円文と想定される文様が描かれている。それぞれ文様内側がR L斜縄文で充填されている。291はR L斜縄文の深鉢形土器である。口縁部、C 2 b 類で、口縁部にはミガキが施されている。656・657は石器で、657はI A a 1 類のスクレイパー、658は楔形石器である。また炉石組部内からの採取土で土壌分析（サンプル③）を実施した。

《所見・時期》時期は、炉の形態及び出土遺物から、大木9式期と推定される。また、建物6層から出土した炭化物の放射性炭素年代測定（暦年較正年代）では、2872～2627cal BC（2 σ ）の年代値が、樹種同定によりケヤキの結果が得られた（試料16）。

S I 407 竪穴建物跡（遺構：第9・91図、付図2、図版27・28、遺物：第166図292、第211図658、第59・71表）

《位置・確認状況》L J 45、L K 45・46に位置する。第Ⅱ層中を精査中、攪乱下から南側が調査区外へ続く石組が確認された。石組の東側で第Ⅱ層上面からの掘り込みが確認された。石組は本遺構周辺の竪穴建物跡の複式炉石組に近似していたことから、竪穴建物跡と判断された。S K 408 土坑と重複して本遺構が古い。

《規模・形態》平面形は、長軸（4.01）m（N-78°-E）、短軸（2.35）mの円形と推測される。確認面から床面までの深さは0.22mである。床面は平坦で、壁は東側が緩やかに立ち上がる。建物跡2層上面に、複式炉の袖石と思われる石組及び石組のやや南西第Ⅲ層上面でS Q 1 配石遺構が確認されたことから、配石は複式炉廃絶後に構築された可能性がある。

《埋土》3層に分けた。全て洪水堆積土を基質とする自然流入土である。

《炉》【規模・形態】複式炉の前庭部分と考えられる。第Ⅱ層上面で確認された。掘方の平面形は、長軸1.43m（S-59°-E）、幅[0.96]mの楕円形を呈す。床面からの深さは0.18mである。石組は、直線上に長さ8～18cmの垂角・垂円礫が配置されていた。J-K断面では内外に礫が壁に立てかけられるように置かれていた。前庭部は北西側に開くと推定される。

《S Q 1》【規模・形態】長さ22～30cmの3点の垂円・円礫で構成される。第Ⅲ層上面で確認された。中央に横位に扁平な礫が1点置かれ、両端に礫を突き刺すように立てられていた。【埋土】洪水堆積土を基質とする単層で、礫を固定するための裏込土である。

《出土遺物》床面直上から縄文土器26点829.3gの他、埋土中から、スクレイパーI A b a 2 類1点12.2g、剥片2点7.9g、石核1点320gが出土し、このうち2点を図示した。292はR L斜縄文が施された深鉢形土器胴部である。658はスクレイパーI A a 2 類である。

《所見・時期》配石遺構は、炉廃絶後の構築と考えられる。時期は炉の形態から、大木9～10 a 式期と推定される。

S I 410 竪穴建物跡（遺構：第92図、付図2、図版28、遺物：第166図293～296、第59表、図版62）

《位置・確認状況》L N 46に位置する。竪穴建物の掘り込みは未確認であるが、第Ⅲ層上面で複式炉が検出されたため、竪穴建物跡として扱うこととした。

《炉》土器埋設部・前庭部からなる複式炉である。掘方の平面形は、長軸1.39m（S-64°-E）、幅は、土器埋設部[0.50]m、前庭部[0.93]mの楕円形を呈す。確認面からの深さは、土器埋設部0.25m、前庭部0.32mである。前庭部は北西側に開く。石組は、長さ10～34cmの垂角・垂円礫が本来はU字形に配置されていたと思われる。土器埋設部の埋設土器1号は、径16cm、深さは4cmの深鉢形土器底部が正位に据えられ、他の土器片（埋設土器2号）が裏込として埋められていた。焼土は埋設

土器周辺で一部確認されるのみで、被熱厚は2cmである。また、埋設土器周辺の石組を構成する礫で一部被熱痕や煤が認められた。前庭部には、袖石の一部と思われる礫がある。

《層序》5層に分けた。1・5層は洪水堆積土、4層は第Ⅱ層土を基質とする。1層は炉廃絶後の自然流入土の可能性ある。2層は炉使用時に形成された炭化物層で、廃絶時の状況を示す。3層は炉使用時の被熱痕、4・5層は炉構築時の裏込土である。

《出土遺物》埋設土器の他、埋土から縄文土器13点1,238.9g、剥片2点1g、凹石1点850gが出土し、このうち土器4点を図示した。293・294は埋設土器で、294は293の裏込めとして埋設されていた。295・296はⅡβ群の深鉢形土器である。295は口縁部、A1a類で、長楕円文と想定される文様、296は胴部で、不明な文様が描かれている。それぞれ文様内側は、295がLR、296はRL斜縄文で充填されている。293はⅡ群の深鉢形土器である。胴～底部で、縦区画沈線文及び逆U字状楕円文が描かれ、文様内側がRL斜縄文で充填されている。294はRL斜縄文の深鉢形土器である。胴部で、地文がナデにより一部消されている。

《所見・時期》複式炉である。時期は、埋設土器及び炉の形態から、大木9b式期と推定される。

S I 418 竪穴建物跡 (遺構：第92・93図、付図2、図版5・28、遺物：第166図297・298、第211図659、第59・71表、図版62、理化学分析：第84～86表、第243図)

《位置・確認状況》LH49・50、LI49・50に位置する。暗渠による攪乱を掘り上げ後、その壁を土層観察用に精査中、第Ⅲ層からの掘り込みが確認された。西側は攪乱を受け欠損していた。また、北側は掘り込みが不明瞭であった。

《規模・形態》平面形は、長軸(3.27)m(N-60°-E)、短軸(2.22)mの楕円形を呈す。確認面からの深さは0.26mである。床面は平坦で、壁は東側では急に立ち上がる。床面は、第Ⅳ層地山層上に達しているため、大小の礫が表面に露出していた。床面南寄りに複式炉(炉1)、中央東西に、別の複式炉(炉2)、地床炉(炉3)が位置する。炉1が炉2・3より新しく、炉2・3の新旧関係は不明である。

《埋土》洪水堆積土を基質とする単層で、建物廃絶後の自然流入土と推定される。

《炉1》【規模・形態】土器埋設部・石組部・前庭部からなる複式炉である。掘方の平面形は、長軸1.20m(S-88°-E)、幅は土器埋設部0.96m、石組部1.03m、前庭部1.0mの楕円形を呈す。床面からの深さは、土器埋設部0.20m、石組部0.16m、前庭部0.20mで、底面は平坦で、壁は東側が急に、南側では緩やかに立ち上がる。前庭部は西側に開く。石組は、長軸線上に0.90m、幅0.68mの範囲に長さ6～34cmの垂角・垂円礫がA字状に配置されていた。土器埋設部は、径28cm、高さ18cmの深鉢形土器が斜位にやや東側へ傾くように据えられ、それを囲うように小型で細長の礫が並べられていた。石組部の礫は、平坦な面を上にして、底面に敷くように配置されていた。また、前庭部両端には大型の礫が石組部から延びる袖石として、南北両端に並べられていた。土器埋設部及び石組部を構成する礫の一部に、被熱痕や煤が認められた。【埋土】10層に分けた。1～5層は洪水堆積土、8・9層は第Ⅱ層土を基質とする。1～4層は炉廃後の人為堆積土か自然堆積土か判然としない。5層は炭化物層で、炉廃絶に伴い1～3層と攪拌された可能性がある。6層は埋設土器内、7層は石組部内にて、炉使用時に形成された炭化物層である。8・10層も炭化物層であるが、9層同様、炉構築時の裏込土と考えられる。6層で土壌分析を実施した(サンプル②)。

《炉2》【規模・形態】石組部・前庭部からなる複式炉である。掘方の平面形は長軸1.36m(N-77°-E)、幅は石組部0.58m、前庭部0.46mで、円形の窪みが3つ連なったような形態を呈す。床面からの深さは、石組部0.08m、前庭部0.12mである。底面は平坦であるが、北側から南側へむけ階段状に下がり壁は緩やかに立ち上がる。前庭部は南側に開くと推定される。検出時、建物や炉の廃絶

に伴う大小多量の礫で覆われていた。石組は周辺に残る長さ8~37cmの角・亜円礫が配置されていたと想定されるが、廃絶に伴い動かされたと思われ、詳細は不明である。石組部及び炉に伴う焼土は未検出である。【埋土】4層に分けた。1・3層は洪水堆積土を基質とする。1層は炉廃絶に伴う人為的な埋め戻し土、2・4層は炉使用時に形成された炭化物層で、炉廃絶時の状況を示すが、2・4層間に3層が堆積していることから、炉の作り替えの可能性がある。

《炉3》【規模・形態】掘方の平面形は、長軸0.30m、短軸0.29mの円形を呈す。確認面からの深さは0.08mである。底面は鍋底状で、壁は緩やかに立ち上がる。検出時、炉や建物廃絶に伴う礫で覆われていた。【埋土】単層で、炉使用時に形成された炭化物層である。炉廃絶時の状況を示す。また採取土で土壌分析を行った（サンプル⑧）。

《出土遺物》埋土から、埋設土器を含む縄文土器56点2,425g、スクレイパーI A a 2類1点15.3g・未製品1点7.5g、RF 2点12.9g、剥片2点12.9gが出土し、このうち3点を図示した。297・298は土器である。297は埋設土器で、II β群の深鉢形土器である。口縁〜底部、C 1 a 類である。体部上半に横位波状沈線文を巡せ、その波間上に相対楕円文A、下に双頭楕円文を、さらに体部下半に逆U字状楕円文が描かれている。文様内側にRL斜縄文で充填されている。298はRL斜縄文の深鉢形土器である。口縁〜胴部、A 2 a 類で、口縁部にミガキが施されている。659はI A a 2類のスクレイパーである。

《所見・時期》検出時に炉及び建物廃絶に伴う礫が多量に出土しているが、床面にも礫が露出している部分があることから、炉に伴うものか廃絶に伴う礫であるかは不明瞭である。時期は埋設土器及び炉1の形態から、大木9 b 式期と推定される。

S I 420竪穴建物跡（遺構：第7・94図、第45表、付図1・2、図版29、遺物：第167図299、第59表、図版62）

《位置・確認状況》L L 47・48、L M 47・48、L N 47・48に位置する。第II層中及び第III層上面を精査中、残存状況が不良な複式炉が確認された。調査後に複式炉周辺を掘り下げたところ、等間隔に環状に並ぶ柱穴が7基検出されたことから、複式炉とともに竪穴建物を構成する遺構群であると判断された。

《規模・形態》掘方は未検出であるが、柱穴の配置状況から、長軸[5.17] m (N-89°-W)、短軸[4.63] mの略円形と推測される。炉周辺で灰黄褐色粘土が部分的に広がっていることから、本来は貼床を敷き詰めていた可能性がある。床面中央やや西寄りに複式炉がある。柱穴が8基(P 1~8)確認された。径0.12~0.42m、検出面からの深さは0.05~0.12mである。P 1~7は複式炉周囲を環状に囲むが、P 8は炉廃絶後の構築である。炉の北側に、扁平な面を上にした径60cmの礫が置かれていた。

《炉》【規模・形態】本来は土器埋設部・石組部・前庭部からなる複式炉と想定される。掘方の平面形は、長軸1.68m (N-65°-E)、幅は土器埋設部0.28m、石組部0.54m、前庭部0.72mの楕円形を呈す。検出面からの深さは、土器埋設部0.4m、石組部0.10m、前庭部0.13mである。底面は平坦で、壁は東側が緩やかに、西側が急に立ち上がる。前庭部は南西側に開く。石組は、径6~34cmの垂角・亜円礫が長軸0.96m、幅0.50mの範囲にあるが、土器埋設部と石組部間以外は、廃絶に伴い動かされた可能性があるため、詳細は不明である。土器埋設部には、径12cm、高さ5~6cmの深鉢形土器胴〜底部が埋設土器として正位に据えられていた。石組部を構成する礫は外されているが、残存状況から本来は埋設土器を囲うように配置されていたと考えられる。また、前庭部には、廃絶に伴い大型の扁平な礫が置かれていた。焼土は埋設土器周辺で検出された。平面形は、長軸0.16m、短軸0.06mで、被熱厚は2~3cmである。また、石組部周辺の礫が一部被熱していた。【層序】3層に分けた。

1・2層は洪水堆積土を基質とする。1層は炉廃絶に伴う埋め戻し土である。2層は炉使用時に形成された炭化物層で、炉廃絶時の状況を示す。3層は炉使用時の被熱痕である。

《出土遺物》埋設土器を含む縄文土器17点763.6g・土器細片17.1g、剥片1点12.2g、石皿Ⅱ類33,950gが出土し、このうち埋設土器1点を図示した。299はR L斜縄文の深鉢形土器である。胴～底部で、底部にミガキが施されている。

《所見・時期》時期は、炉の形態から、大木9～10式期と推定される。

S I 426 竪穴建物跡（遺構：第95・96図、第46表、付図1・2、図版29、遺物：第167図300～305、第211図660～663、第59・60・71表、図版62・63・77～79、理化学分析：第85～86表）

《位置・確認状況》LN44～46、LO44～46に位置する。第Ⅱ層中を掘り下げたところ、複式炉が確認された。その後周辺を精査し、竪穴建物跡のおおよその範囲が確認された。

《規模・形態》規模は、長軸（7.48）m（N-33°-W）、短軸〔7.85〕mの円形と推測される。確認面から床面までの深さは0.10mである。床面は平坦である。床面中央やや北西寄りで複式炉（炉1）が、また、その南東側に比較的大きな扁平な礫が置かれ、その周囲を精査したところ、焼土を伴う土坑状の掘り込み（炉2）が確認された。炉1は炉2より新しい。柱穴が1基（P1）が確認された。規模は、長軸0.80m、短軸0.64m、検出面からの深さは0.24mである。複式炉とP1の間にも、径34cmの別の扁平な礫が置かれていた。

《埋土》建物の埋土は5層に分けた。1層は第Ⅱ層土、2～5層は洪水堆積土を基質とする。1層は炉廃絶後の窪みを埋めた人為的な埋め戻し土、2・3層は建物廃絶後の自然流入土の可能性がある。4・5層は建物使用時の堆積土と考えられる。

《炉1》【規模・形態】土器埋設部・石組部・前庭部からなる複式炉で、石組部にも埋設土器を伴う。掘方の平面形は、長軸2.62m（S-55°-E）、幅は、土器埋設部0.40m、石組部1.20m、前庭部〔1.93〕mで、検出面からの深さは、土器埋設部0.22m、石組部0.24m、前庭部0.34mである。底面は平坦であるが、土器埋設部・前庭部が、石組部より高く段になっていた。壁は北側では緩やかに、他は急に立ち上がる。前庭部は北西側に開く。石組は、炉の長軸線上に1.52m、幅1.20mの範囲で、長さ3～34cmの垂角・垂円礫が、本来は「8」の字状に配置されていたと考えられる。土器埋設部の埋設土器（埋設土器1号）は、径30cm、高さ10cmの深鉢形土器胴部が正位に据えられていた。石組部は、大型の扁平な礫が敷き詰められ、埋設土器（埋設土器2号）を囲うように礫が配置されていた。埋設土器2号は、径32cm、高さ18cmの深鉢形土器胴部が東側にわずかに傾けるように据えられていた。焼土は埋設土器1号の内外及び埋設土器2号周辺で確認され、埋設土器周囲2～8cmの範囲で広がっていた。埋設土器1号内では土層断面から、被熱痕が2層確認され、被熱厚は、3層は2～7cm、7層は1cmである。また、埋設土器1・2号周辺及び石組部内での礫にも被熱痕や煤が認められた。さらに、前庭部には廃絶時に投げ入れられたと考えられる礫も出土している。【層序】9層に分けた。1・2・9層は洪水堆積土を基質とする。1・2層は炉廃絶後の自然流入土、3・4・7層は炉使用時の被熱痕、5・6層は炉使用時に形成された炭化物層で、炉廃絶時の状況を示す。断面観察から、埋設土器1号は大きく2時期あり、6層は5層上に土を盛ってその上面で火が焚かれていた。8・9層も炉構築時の裏込土であるが、8層は炭化物層であり、炉2からの供給の可能性がある。炉1～6層からの採取土で土壌分析を実施した（サンプル⑦）。

《炉2》【規模・形態】掘方の平面形は、長軸0.48m（N-56°-E）、短軸0.39mの不整形を呈す。確認面からの深さは0.02mである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。径44cm、厚さは12cmの垂円礫周辺を掘り下げたところ、炭化物層内で焼土面が確認された。平面形は、長軸6cm、短軸2cmである。【層序】2層に分けた。1層は炉使用時の被熱痕、2層は炉使用時に形成された炭化物

層で、炉廃絶時の状況を示す。1層の焼土は、小規模であることから、使用頻度が少ないか、炭化物が掻き出される際に、削られ消失した可能性がある。

《出土遺物》床面直に石皿が置かれていた。また建物廃絶に際し、多量の土器片が投げ込まれていた。これらを含め埋土から縄文土器100点16,138.4g・土器細片84.8g、石匙A b類1点15.8g・B類1点2.2g、スクレイパーI A b 1類1点3.7g・II C a類1点16.8g、RF 1点4.9g、剥片12点74.1g、磨製石斧1点72.2g、石皿3点40,300g、凹石1点800gが出土し、このうち10点を図示した。300~305は土器で、300・301はそれぞれ埋設土器1・2号である。301~304はII β群の深鉢形土器である。301は胴部で、逆U字状楕円文等が描かれている。302・303は口縁~胴部または口縁部である。302はC 2 a類、303はC 4 a類で、それぞれ楕円文が描かれている。304は胴~底部で、多重沈線文の中に、縦位楕円文と想定される文様が描かれている。それぞれ文様内側は、301~303がR L、304はL R斜縄文で充填されている。300はII群の深鉢形土器である。頸~胴部で、2条1組の横位波状文の波間上下に小楕円文が描かれ、文様内側がR L斜縄文で充填されている。305はL R斜縄文の深鉢形土器である。口縁部、C 2 a類で、口縁部にミガキが施されている。660~663は剥片石器及び石製品で、660・661はそれぞれ石匙A b類及びB類、662はスクレイパーI A b 1類、663は磨製石斧である。

《所見・時期》時期は埋設土器、炉の形態及び出土遺物から、大木9 b式期と推定される。

S I 435 竪穴建物跡 (遺構：第97~100図、付図2、第47表、図版5・29・30、遺物：第167~169図306~312、第211・212図664~669、第60・71表、図版63・64・76~78、理化学分析：第77・79・84~86表、第234・238・243図)

《位置・確認状況》L H 52・53、L I 52~54、L J 52・53に位置する。第II層上面から黒褐色土の分布が確認されたが、掘り込み面が第II層土との区分が不明瞭なため、土層観察用トレンチを残し掘り下げたところ、複式炉が検出され、竪穴建物跡と判断された。南側では攪乱を受けていた。

《規模・形態》掘方の平面形は、長軸6.78m (N-78°-E)、短軸6.20mの隅丸方形を呈す。確認面から床面までの深さは0.73mである。床面は平坦で、壁は垂直に立ち上がる。床面中央南寄り及び中央東寄りに2基の複式炉(炉1・2)を、また炉2よりやや北側に地床炉(炉3)がある。炉1と炉3の新旧関係は不明であるが、使用面は、床面として生活していたと思われる面より下位で検出されたことから、それぞれ炉2より新しい。このため建物は作り替えがあり、大きく2時期あることが想定される。第1期より第2期へ移る際に、底面に貼床土が埋められ整地されている。貼床の厚さは7cmである。また、床面中央やや北東にSK 1土坑、北側にSK 2土坑が、また炉2の土層断面観察からSK 3土坑が確認された。この他、建物壁際に北端から西端、南端にかけ、2条の壁溝(北からSD 1・2)が検出された。また、西端から南端にかけ、SD 1・2より内側でSD 3が検出された。東側は未検出である。壁溝の規模は、SD 1が総延長1.24m、幅0.17~0.28m、床面からの深さはG-H断面で0.19m、SD 2は総延長4.14m、幅0.16~0.39m、床面からの深さはE-F断面で0.22m、SD 3では、総延長2.74m、幅0.54~0.87、床面からの深さはA-B断面で0.22mである。柱穴は5基(P 1~5)確認された。径0.26~0.76m、床面からの深さは0.08~0.37mである。P 2はSD 2と重複して古い。また、精査中、廃絶に伴う投げ込みと思われる多数の大型の礫が確認されている。

《埋土》7層に分けた。全て洪水堆積土を基質とする。検出時、第II層土を基質とする層が第2・3層上を覆っていた。1~6層は土器片や礫等の遺物を含むが、堆積状況から基本的には自然流入土が中心である可能性があり、6層は壁の崩落土と考えられる。7層は第1期から第2期へ、建物を作り替える際の貼床土と考えられる。

《炉1》【規模・形態】第2期の炉で、土器埋設部・石組部・前庭部からなる複式炉である。石組部

には埋設土器が伴う。掘方の平面形は、長軸2.50m (N-17°-W)、幅は土器埋設部0.58m、石組部1.61m、前庭部1.82mの釣り鐘状を呈す。床面からの深さは、土器埋設部0.26m、石組部0.58m、前庭部0.36mである。底面は第IV層である礫層まで掘り切っているため、礫が露出しているが、ほぼ平坦で、壁は南側、北側ともに急に立ち上がる。石組は、径5～58cmの垂角・垂円・円礫が掘方の長軸線上に2.01m、幅2.00mの範囲にA字状に配置されていた。土器埋設部の埋設土器1号は、径31cm、高さ12cmの深鉢形土器胴部が正位に据えられていた。埋設土器1号周辺は礫で囲われていない。また、石組部は埋設土器2号を伴い、径40cm、高さ22cmの深鉢形土器胴部が、北西側へ傾けて据えられていた。石組は、埋設土器を含めて囲い込み、埋設土器南東側は、比較的大きめの扁平な面を持つ礫が敷き詰められるように、また前庭部は南東側に開き、袖が前庭部両端に広がるように配置されていた。前庭部底面では、炉の長軸線上と交差するように、径18cm細長の礫が境石として配置されていた。焼土は炉1の北東側に置かれた石皿西側や、埋設土器2号周辺のみ確認されている。埋設土器周辺の被熱厚は2cmである。また、埋設土器2号内で出土した石皿や石組部及び炉1北側に置かれた石皿2点で被熱痕や煤が認められた。また、廃絶に伴い大小多数の礫が石組部や前庭部に投げ入れられている。【埋土】8層に分けた。1～3・6・8層は、洪水堆積土を基質とする。1・2・3層は炉廃絶に伴う人為的な埋め戻し土である。3・5層は炉使用時に形成された炭化物層で、炉廃絶時の状況を示す。6層は炉使用時の被熱痕である。3層内に埋められた礫は、上面が被熱していた。このため一時的に石が露出した状態で火が焚かれていたと想定される。8・9層は埋設土器2号を据えるための裏込土である。8層は炭化物層であり、炉2からの供給と考えられる。また炉1-3層からの採取土で土壌分析を実施した(サンプル①)。

《炉2》【規模・形態】第1期の炉で、土器埋設部、前庭部からなる複式炉である掘方の平面形は、長軸[2.24]m (S-83°-W)、幅は土器埋設部 [0.92] m、前庭部1.79mの不整楕円形を呈す。床面からの深さは、土器埋設部0.60m、前庭部0.39mである。底面は第IV層に達しているため、大小多数の礫が露出しているが、ほぼ平坦で、壁は東側が急に、西側では緩やかに立ち上がる。前庭部は東側に開く。石組は、炉の長軸線上に0.82m、幅1.02mの範囲に、長さ5～40cmの垂角礫・垂円礫が埋設土器3号を囲うように配置されていたが、廃絶に伴い取り除かれた可能性がある。しかし、北側では部分的に広がっていたことから、本来は石組部を伴っていた可能性がある。埋設土器3号は、径38cmの深鉢形土器胴～底部が西側に傾け据えられていた。また、体部下位の一部は欠けており、それを塞ぐように別の深鉢形土器胴部(埋設土器4号)が南側に据えられていた。埋設土器3号内は、検出時に小礫が多数入れられていた。礫除去後、さらに下から径30cmの礫が出土した。焼土は土器埋設部の埋設土器内及び西側に分布していた。埋設土器内は幅18cm、被熱厚は1～2cm、埋設土器北側は長軸0.82m、短軸0.30m、被熱厚は1～2cmである。また、埋設土器周辺の石組を構成する礫の一部でも被熱痕や煤が認められた。【層序】9層に分けた。1～5層は洪水堆積土を基質とする。1～5層は炉廃絶に伴う人為的な埋め戻し土で、5層は埋設土器3号内の堆積土である。それぞれ廃絶に伴い大小の礫を多数含んでいた。3層は建物埋土7層と同質である。6・7層は炉使用時の被熱痕、8層は炉使用時に形成された炭化物層で、廃絶時の状況を示すが、6層焼土が8層上面で検出されたことから、炭化物層上で火が焚かれていたと想定される。9層は炉構築時に埋設土器3号を据えるための裏込土である。

《炉3》第2期の炉で、焼土と炭化物が分布する地床炉である。焼土は南北2か所確認され、北側の平面形は、長軸16cm、幅12cmで、中央部分に炭化物が分布する。南側は長軸6cm、短軸5cmである。

【層序】2層に分けた。1層は焼土で炉使用時の被熱痕、2層は炉使用時に形成された炭化物層で、廃絶時の状況を示す。

《SK1》【規模・形態】長軸0.48m (N-83° -W)、短軸0.45mの円形を呈す。確認面からの深さは0.09mである。底面は鍋底状で、壁は緩やかに立ち上がる。【埋土】2層に分けた。1層は、洪水堆積土、2層は本遺構周辺の炉で形成された炭化物を基質とする。1・2層ともに炉廃絶後の人為的堆積土か自然堆積土か判然としにくい。

《SK2》【規模・形態】平面形は長軸1.52m (N-41° -W)、短軸 [1.04] mの楕円形を呈す。確認面からの深さは0.40mである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

《SK3》【規模・形態】炉2の土層断面のみの検出である。幅0.63m、確認面からの深さは0.16mである。底面は鍋底状で、壁は東側では急に、西側では緩やかに立ち上がる。

《出土遺物》埋設土器1～4号が出土している他、石皿4点が意図的に床面直上及び埋設土器1号上に置かれていた。また別の石皿は埋設土器2号内に石組として他の礫と共に入れられていた。また建物廃絶に伴い炉や建物理土に、礫とともに投げ入れられた遺物が多量に出土した。これらを含め、縄文土器223点18,979.6g (赤彩土器1点15.9g含む)、石鍬A類2点1.7g、石匙C A類1点9.5g、スクレイパーI A b a 1類1点27.3g・I A a 2類1点9.8g・I A b 1類1点13g・II E A類1点7.6g・未製品及び欠け1点2.9g、剥片11点67g、小型磨製石斧1点3g、石皿II類5点49,880gが出土し、このうち13点を図示した。306～312は土器で、306～309は埋設土器1～4号、310～312は炉1～2層内からの出土である。309～311はII β群の深鉢形土器である。309は頸～底部で、体部上半に2条1組の横位波状文を巡らせ、その波間上には左右対となる相対渦巻文Aと円文との組合せ文、下には縦・横位を組み合わせた相対渦巻文Aの組合せ文、体部下半には逆U字状楕円文が描かれている。文様内側はR L・L R斜縄文で充填されている。310・311は口縁部である。310はA 1 b類、隆沈線により渦巻文と想定される文様、311はC 1 a類で、楕円文、円形沈線文内に横位相対渦巻文Aと想定される文様が描かれている。それぞれ文様内側は、310が摩滅のため原体不明な斜縄文と刺突文、311はL R斜縄文で充填されている。307はII群の深鉢形土器である。胴部で、縦位区画沈線文内に、長楕円文や小楕円文が描かれ、文様内側がL R斜縄文で充填されている。306はL R、308・312はR L斜縄文の深鉢形土器である。306は口縁～胴部、D 3 a類で、口縁部はミガキが施されている。308は胴部である。312は口縁～底部で、胴部下位にミガキが施されている。664～669は石器で、668は7層、665は床面直上、669は炉1～5層からの出土である。664・665は石鍬A A類で、664にはアスファルトが付着している。666は石匙C A類である。667・668はそれぞれスクレイパーI A a 1類、I A b 1類、669は小型磨製石斧で、刃部が欠損している。

《所見・時期》炉1の埋設土器1号内に炭化物の堆積が確認されていないことから、炉廃絶以前に除去された可能性がある。石組の残存状況から、炉2は、本来石組部を伴っていた可能性がある。またSD 3は、SD 1・2よりも内側にあり、炉1と重複していることから、炉2同様、建物第1期に属すると想定される。時期は、埋設土器から、大木9 b式期と推定される。炉1の埋設土器内から出土した放射性炭素年代測定(暦年較正年代)では、2884～2671cal BC (2σ)の年代値が、樹種同定によりカエデ属という結果が得られた(試料19)。

②竪穴建物跡(炉なし)

SK I 15竪穴建物跡(遺構:第35図、付図1・2、図版31、遺物:第169・170図313～319、第60表、図版64)

《位置・確認状況》L O44、L P44に位置する。第III層上面を精査中、黒褐・灰黄・灰黄褐・黄灰・黄褐・にぶい黄褐・にぶい黄色土の分布が確認された。S I 45竪穴建物跡、SK 80土坑と重複して、本遺構はS I 45より新しく、SK 80より古い。

《規模・形態》平面形は、長軸2.54m (N-37° -W)、短軸 (1.00) mの楕円形と推測される。確

認面から床面までの深さは0.58mである。床面は平坦で、壁は急に立ち上がる。

《埋土》8層に分けた。全て洪水堆積土を基質とする。7層のみ第Ⅱ層土の基質の割合が強い。堆積状況から、自然流入土の可能性はある。

《出土遺物》建物廃絶に伴う遺物が5層を中心に多量に出土した。これらを含めて埋土から、縄文土器391点10,843.8g（赤彩土器2点54.4g含む）・土器細片161.1g、敲石2点2,350g、磨石7点3,450g、凹石3点2,150g、剥片10点110.2gが出土し、このうち7点を図示した。313はⅡβ群の深鉢形土器である。口縁～胴部、A3a類で、楕円文が描かれ、文様内側がLR斜縄文で充填されている。314はⅡ群の深鉢形土器である。胴部で、相対楕円文Bが描かれ、文様内側がL撚糸文で充填されている。315～317はⅢ群の深鉢形土器である。315は口縁部、C2類で、C字状渦巻文と想定される文様が描かれている。316・317は胴部または胴～底部である。316はU字状文、317はC字状文等の文様が描かれている。それぞれ文様内側が、315・317はLR、316はRL斜縄文で充填されている。318はLR斜縄文の深鉢形土器の胴部である。319は鉢形土器①である。口縁部C1a類で、文様内側がLR斜縄文及び刺突文で充填されている。また、外面及び内面口縁部に赤色塗彩が施が施されている。

《時期・所見》時期は、出土遺物及び遺構の重複関係から、大木9b・10a式期と推定される。

SK I 25 竪穴建物跡（遺構：第7・17・18・101・102図、第48表、付図1、図版31、遺物：第170図320～323、第212図670～672、第60・71表、図版75・76）

《位置・確認状況》MH54・55、MI54・55に位置する。第Ⅲ層上面を精査中、暗褐色・褐色土の分布が確認された。SI26・SKI42竪穴建物跡、SK177土坑と重複して、SI26、SK177より本遺構が新しい。SKI42と本遺構との新旧関係は不明である。

《規模・形態》掘方の平面形は、長軸5.93m（N-87°-E）、短軸3.56mの楕円形と推測される。確認面から底面までの深さは0.42mである。貼床の厚さは0.05～0.21mである。床面西側は洪水による削平を受け、東側は攪乱を受け削平されていた。付属施設として柱穴12基（P1～12）が確認された。規模は、径0.14～1.24m、床面からの深さは、0.14～0.60mである。

《層序》3層に分けた。1層は第Ⅱ層土、3層は洪水堆積土を基質とする。2層は1・3層の混土である。1・2層は堆積状況から自然流入土の可能性はある。3層は建物構築時に床面を整えるための貼床土である。

《出土遺物》埋土から縄文時代中期後葉の土器355点7,836.7g（赤彩土器3点140.6g含む）・土器細片141.9g、石鏃Aa類1点1.2g、スクレイパーⅡBb類1点24.6g、剥片21点167.1g、石核1点274.1gが出土した。このうち7点を図示した。320～323は土器である。320は2層、321はP5埋土から出土した。320・321はⅡα群の深鉢形土器である。320は口縁部、D2b類で、隆沈線渦巻文及び楕円文と想定される文様が描かれ、楕円文の中心がLR斜縄文で充填されている。321は胴部で、隆沈線渦巻懸垂文、長楕円文の組み合わせ文と想定される文様が描かれ、文様内側がRLR斜縄文で充填されている。322はⅡ群の深鉢形土器である。胴～底部で、逆U字状楕円文が描かれ、文様内側がLR斜縄文で充填されている。323はⅡ群のミニチュア深鉢形土器である。胴～底部で、逆U字状楕円文が描かれ、文様内側がLR斜縄文で充填されている。670～672は剥片石器及び石核で、670は石鏃Aa類で、アスファルトが付着している。また、671はⅡBb類のスクレイパー、671は石核である。

《所見・時期》時期は、出土遺物及び遺構の重複関係から、大木9式期と推定される。

SK I 42 竪穴建物跡（遺構：第17・40図、第18表、付図1、図版31、遺物：第170図324～327、第60表）

《位置・確認状況》MI54・55、MJ55に位置する。第Ⅱ層中及び第Ⅲ層上面を精査中、北側が調査

区外へ延びるにぶい黄褐色土の分布が確認された。S I 56・S K I 25堅穴建物跡、S K 94・95土坑、S R 83土器埋設遺構と重複して、本遺構はS I 56・S R 83より新しく、S K 94・95より本遺構が古い。S K I 25と本遺構との新旧関係は不明である。

《規模・形態》平面形は長軸 [3.50] m (N-71° - E)、短軸 (2.71) m の楕円形を呈す。確認面からの深さは0.38mである。底面はやや西側へ傾斜しているが、ほぼ平坦で、壁は西側では急に、東側では緩やかに立ち上がる。建物に付属する柱穴は1基 (P 1) 確認された。規模は、径0.06m、深さは0.13mである。炬は確認されていない。

《埋土》3層に分けた。全て洪水堆積土を基質とする。1・3層は堆積状況から自然流入土の可能性があるが、2層は3層をえぐるように堆積していることから、柱穴等を構築した可能性がある。

《出土遺物》埋土から深鉢形土器157点3,079.7g・土器細片73.2gが出土し、このうち4点を図示した。324はⅡα群の深鉢形土器である。口縁部、C 2 b類で、隆沈線楕円渦巻文と想定される文様が描かれ、文様内側がR L斜縄文で充填されている。325・326はⅡβ群の深鉢形土器である。頸部である。325は隆沈線相対渦巻文と想定される文様が描かれ、文様内側がL R斜縄文で充填されている。326は多重沈線文と想定される文様が描かれている。327はⅡ群の深鉢形土器である。頸～胴部で、長楕円文と想定される文様が描かれ、文様内側がL R斜縄文で充填されている。

《所見・時期》時期は、出土遺物や周囲の状況から、大木9式期と推定される。

S K I 207堅穴建物跡 (遺構：第17・19・102図、第60表、付図1、遺物：第170図328、第60表)

《位置・確認状況》MD 54、ME 53・54に位置する。第Ⅲ層上面を精査中、にぶい黄褐色・灰黄褐色・暗灰黄色・灰黄色・黒褐色土の分布が確認された。S I 236堅穴建物跡、S K 248土坑、P 1059と重複し、S K 248、P 1059より本遺構が古い、S I 236と本遺構との新旧関係は不明である。

《規模・形態》平面形は長軸 [2.90] m (N-35° - E)、短軸2.54mの不整楕円形を呈す。確認面からの深さは0.33mである。底面はやや凹凸があり、壁は急に立ち上がる。

《埋土》3層に分けた。1・3層は洪水堆積土、第2層は第Ⅱ層土を基質とする。堆積状況から全て建物廃絶後の自然流入土で、1層土が堆積する前に礫が投げ入れられたと想定される。

《出土遺物》縄文土器1点82.7gが出土し、これを図示した。328はⅡ群の深鉢形土器頸～胴部である。相対楕円文と想定される文様が描かれ、文様内側がR L斜縄文で充填されている。

《所見・時期》時期は、周囲の状況から、大木9式期と推定される。

S K I 405堅穴建物跡 (遺構：第103図、付図2、第49表、図版31、遺物：第170・171図329～337、第60・61表、図版65)

《位置・確認状況》L K 46・47、L L 46・47に位置する。第Ⅲ層上面を精査中、北側が攪乱を受けた。にぶい黄褐色土の分布が確認された。P 414と重複して本遺構が古い。

《規模・形態》平面形は、長軸 [3.52] m (N-69° - E)、短軸 (2.70) m の不整円形を呈す。確認面から床面までの深さは0.32mである。底面は平坦で、壁は東側では緩やかに、南側では急に、西側では急に立ち上がった後、再び緩やかに立ち上がる。建物に付属する施設は、柱穴が4基 (P 1～4) 確認された。規模は、径0.32～0.64m、床面からの深さは0.10～0.29mである。

《埋土》6層に分けた。1～3・5・6層は洪水堆積土、4層は第Ⅱ層土を基質とする。堆積状況や遺物の混入から、建物廃絶に伴う人為的な埋め戻し土と考えられる。

《出土遺物》4層で建物廃絶に伴う遺物が出土した。これらを含め埋土から縄文土器273点4,309.1g (赤彩土器2点16.3g含む)・土器細片642.6g、スクレイパー未製品欠け1点4g、剥片26点69.1gが出土し、このうち土器8点を図示した。329・330はⅡα群の深鉢形土器である。329・330は口縁部である。329はA 3 b類で円文が描かれ、文様内側がL R斜縄文で充填されている。330は口縁突起部、

D3b 類で、隆沈線渦巻文で文様が描かれるとともに穿孔が施されている。331～334はⅡβ群の深鉢形土器である。331は口縁～胴部、C2a 類で、長楕円文が描かれ、文様内側がR斜縄文で充填されている。332は胴～底部、333は頭～胴部、334は胴部である。楕円沈線文や長楕円文の組合せ文、相対楕円文B、逆U字状文等が描かれている。それぞれ文様内側がR斜縄文で充填されている。335はⅡ群の深鉢形土器である。胴～底部で、逆U字状楕円文や相対楕円文Bが描かれ、文様内側がR斜縄文で充填されている。336はR斜縄文が施された深鉢形土器である。口縁～底部、D2a 類で、口縁部にミガキが施されている。337は無文のミニチュア鉢形土器①である。口縁～底部、D1a 類である。

《所見・時期》時期は、出土遺物から、大木9b 式期と推定される。

③フラスコ状土坑

SKF216フラスコ状土坑（遺構：第104図、付図1、図版31）

《位置・確認状況》MD46・47に位置する。第Ⅱ層中を精査中、確認された。

《規模・形態》平面形は長軸1.16m（N-37°-W）、短軸1.06mの円形を呈す。底面は平坦で、壁は急に立ち上がる。一部上端のオーバハングが確認されたが、掘削時に崩落した。このため位置のみの記録である。

《所見・時期》時期は、周囲の状況から、大木9～10式期と推定される。

SKF219フラスコ状土坑（遺構：第104図、付図1、図版31）

《位置・確認状況》ME46・47、MF46・47に位置する。第Ⅱ層中を精査中、にぶい黄褐・黒褐色土の分布が確認された。

《規模・形態》平面形は長軸[1.26]m（N-38°-W）、短軸[1.22]mの円形を呈す。確認面からの深さは0.30mである。底面はほぼ平坦で、壁は急に立ち上がり、南西側では一部オーバハングしている。

《埋土》4層に分けた。1・3層は洪水堆積土、2・4層は第Ⅱ層土を基質とする。廃絶後の人為堆積土か自然堆積土か判然としない。

《所見・時期》時期の詳細は不明である。

SKF305土坑（遺構：第104図、付図2、図版31）

《位置・確認状況》LL54・55、LM54・55に位置する。第Ⅲ層上面を精査中、暗褐色土の分布が確認された。

《規模・形態》平面形は、長軸1.54m（N-89°-E）、短軸1.37mの略円形を呈す。オーバハングしている部分があり、最大幅は1.58m、確認面からの深さは0.52mである。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がり、オーバハングした後、急に立ち上がる。

《埋土》3層に分けた。1・3層は第Ⅱ層土、2層は洪水堆積土を基質とする。1層は廃絶に際しての一括埋め戻し土である。1層と2層の境には漸移層が発達し、断面がハの字に開き切る高さ2層上面の高さが揃うため、2層直上が床底面として利用されていた可能性が高い。このため、2層は第2期への使用に際し、底面を整えるための埋め立て土、3層は第1期使用時に堆積した自然流入土と考えられる。堆積状況から、一度底部まで掘り下げて利用し、その後中位まで埋め立てられ、再利用された可能性がある。

《出土遺物》埋土から縄文土器6点110.3g・土器細片11.6gが出土した。

《所見・時期》断面観察から2時期の可能性はある。時期は周囲の状況から、大木9～10a 式期と推定される。

SKF406フラスコ状土坑（遺構：第104図、付図2、図版32、遺物：第171図338～344、第212・213図673～676、第61・69・71・72表、図版76・77、理化学分析：第77・79表、第234図）

《位置・確認状況》L J 49、L K 49に位置する。Ⅱ層上面精査中で、中央部が攪乱を受けた暗褐色・黒褐色土の分布が確認された。S K 411土坑、P 1608・1667と重複してS K 411、本遺構はP 1608より新しく、P 1627より古い。

《規模・形態》平面形は、長軸3.13m (N-44° -W)、短軸[1.76]mの不整楕円形を呈す。確認面からの深さは0.80mである。底面はやや凹凸があり、壁はA-B断面では、緩やかに立ち上がるが、C-D断面では、西側はオーバーハングし、東側では平坦になった後、再び垂直に立ち上がる。

《埋土》7層に分けた。1～6層は第Ⅱ層土、7層は洪水堆積土を基質とする。堆積状況から一部判然としなが、1～3層は自然流入土と、4・5層は廃絶時の人為的な埋戻し土、6・7層は、使用時の堆積土の可能性はある。

《出土遺物》埋土から縄文土器255点4,757.3g・土器細片49.9g、円盤状土製品1点22.4g、石鏃A b類1点2.3g・B c類1点0.9g、石匙1点4.2g、スクレイパーI 4 A a 3類1点37.8g、R F 1点7.2g、剥片7点27.8gが出土し、このうち11点を図示した。338～334は土器・土製品である。338はⅡα群の深鉢形土器である。口縁突起部、D 2 b類で、隆沈線渦巻文や楕円文と想定される文様が描かれ、文様内側がR L斜縄文で充填されている。339・340はⅡβ群である。339は口縁部、A a類で、楕円沈線文、長楕円文と想定される文様、340は胴部で、楕円沈線文及び楕円文と想定される文様が描かれ、文様内側がR L斜縄文でそれぞれ充填されているが、339では一部刺突文が認められる。341はⅡ群の深鉢形土器である。頸部で、縦位区画帯及び楕円文と想定される文様が描かれ、区画帯中は刺突文、他はR L斜縄文で充填されている。342はⅡ・Ⅲ群の深鉢形土器である。342は胴部で、楕円沈線文と楕円文の組合せ文や長楕円文と想定される文様が描かれ、文様内側がL R斜縄文、一部刺突文で充填されている。343はL R斜縄文が施された把手付深鉢形土器である。口縁部、A類である。344は円盤状土製品である。3条の沈線による区画文内にR L斜縄文が施されている。673～676は石器で、675は5層から出土した。673・674は、それぞれ石鏃A b類・B a類、675は44石鏃A a類、676はI A a 3類のスクレイパーである。

《所見・時期》C-D断面で、東壁に平坦な部分が見られることから、足場としての使用が想定される。時期は、出土遺物から、大木9 b式期と推定される。また埋土から出土した炭化物の放射性炭素年代測定(暦年較正年代)では、2851-2505cal BC (2σ)の年代値が、樹種同定によりクリ・モクレン属の結果が得られた(試料18)。

S K F 422 フラスコ状土坑 (遺構：第105図、付図1・2、図版32、理化学分析：第77・79表、第234・237図)

《位置・確認状況》L N 48に位置する。第Ⅱ層上面を精査中、にぶい黄褐色・褐色土及び炭化物の分布が確認された。

《規模・形態》平面形は長軸1.48m (N-51° -E)、短軸1.20mの楕円形である。確認面からの深さは0.43mである。底面はほぼ平坦で、壁は垂直に立ち上がるが、北西部ではオーバーハングが見られる。

《埋土》4層に分けた。全て洪水堆積土を基質とする。1～3層は廃絶時の人為的な埋戻し土と考えられ、廃絶時の投げ込みと思われる長さ6～40cmの礫が含まれている。4層は天井部の崩落土と考えられる。

《出土遺物》埋土から縄文土器69点779.6g・土器細片8.3g、剥片2点26.9gが出土した。

《所見・時期》時期の詳細は不明である。また、埋土から出土した炭化物の放射性炭素年代測定(暦年較正年代)では、2873-2629cal BC (2σ)の年代値が、樹種同定によりクリの結果が得られた(試料20)。

④配石土坑

SQK93配石土坑（遺構：第17・18・105図、付図1、図版32）

《位置・確認状況》MG53に位置する。第Ⅲ層上面を精査中、立石を中心に褐色土の分布が確認された。S158竪穴建物跡と重複して、本遺構が新しい。

《規模・形態》掘方の平面形は、長軸0.39m（N-89°-E）、短軸0.35mの円形を呈す。確認面からの深さは0.22mである。底面は鍋底状で、壁は急に立ち上がる。幅0.20mの円礫の上に長さ0.20mの棒状の礫が立てられるように配置されていた。

《掘方埋土》洪水堆積土を基質とする単層で、立石の裏込土である。

《所見・時期》遺構の重複関係から、大木9b・10a式期と推定される。

SQK113配石土坑（遺構：第18・105図、付図1、図版32）

《位置・確認状況》MH51に位置する。第Ⅲ層上面を精査中、にぶい黄褐色土の分布に、礫が直立した状況が確認された。S1196竪穴建物跡と重複して、新しいと想定される。

《規模・形態》掘方の平面形は、長軸0.35m（N-6°-W）、短軸0.32mの円形を呈す。確認面からの深さは0.19mである。底面はほぼ平坦で、壁は西側では急に、東側では途中オーバーハングして立ち上がる。幅6~14cm、厚さは7~20cmの大小2点の礫があり、大きな礫は直立して埋土に刺さった状態であった。

《出土遺物》埋土から縄文土器2点35.9gが出土した。

《掘方埋土》洪水堆積土を基質とする単層で、立石の裏込土である。

《所見・時期》時期は、遺構の重複関係及び周囲の状況から、大木9b・10a式期と推定される。

SQK133配石土坑（遺構：第20・105図、付図1、図版32）

《位置・確認状況》MD51に位置する。第Ⅲ層上面を精査中、褐色土の分布及び直立した礫が確認された。

《規模・形態》掘方の平面形は、長軸0.35m（N-2°-E）、短軸（0.26）mの楕円形を呈す。確認面からの深さは0.33mである。底面は凹凸があり、壁は急に立ち上がる。掘方に長さ20cm、幅14cm、厚さ40cmの長形の垂角礫が直立に埋められていた。

《掘方埋土》第Ⅱ層土を基質とする単層で、立石の裏込土である。

《所見・時期》時期は、周囲の状況から、大木9~10式期と推定される。

⑤土坑

SK06土坑（遺構：第105図、付図1、図版32）

《位置・確認状況》LR50に位置する。第Ⅲ層上面で黄灰色土の分布が確認された。SK242土坑と重複して、本遺構が新しい。

《規模・形態》平面形は、長軸1.63m（N-25°-E）、短軸（0.65）mの円形を呈す。確認面からの深さは0.52mである。底面は鍋底状で、壁は緩やかに、その後やや平坦になり、再び急に立ち上がる。

《埋土》2層に分けた。1層は第Ⅱ層土、2層は洪水堆積土を基質とする。混入物の入り具合から、人為的な一括埋め戻し土と考えられる。

《所見・時期》周囲や埋土の状況から、土坑墓の可能性がある。時期の詳細は不明である。

SK08土坑（遺構：第22・105図、付図1、図版33）

《位置・確認状況》LS54に位置する。第Ⅲ層上面で、にぶい黄褐色土の分布が確認された。

《規模・形態》平面形は、長軸0.72m（N-89°-W）、短軸0.57mの楕円形を呈す。確認面からの深さは0.08mである。底面は平坦で、壁は東側では緩やかに、西側では急に立ち上がる。

《埋土》洪水堆積土を基質とする単層で、底面にまとまった礫を含むことから、人為的な一括埋め戻し土と考えられる。

《所見・時期》底面から礫がまとまって出土したことや埋土及び底面形状から、土坑墓の可能性がある。時期の詳細は不明である。

SK13土坑（遺構：第19・105図、付図1、図版33）

《位置・確認状況》MB56・57に位置する。第Ⅱ層上面で、東側で一部攪乱を受けた暗褐色土の分布が確認された。

《規模・形態》平面形は長軸0.85m（N-49°-E）、短軸0.76mの円形を呈す。確認面からの深さは0.32mである。底面は平坦で、壁は急に立ち上がるが、北東側では一旦平坦になり、再び急に立ち上がる。

《埋土》4層に分けた。1・3層は第Ⅱ層土、2・4層は洪水堆積を基質とする。混入物の入り方から、人為的な一括埋め戻し土と考えられる。3・4層では埋め戻しに伴う礫が含まれている。

《出土遺物》縄文土器5点133.5g、剥片1点8.1gが出土した。

《所見・時期》礫が上面でまとまって出土していることや埋土状況及び底面形状から、土坑墓の可能性はある。時期は、出土遺物から、大木9b式期と推定される。

SK17土坑（遺構：第19・106図、付図1、図版33、遺物：第171図345、第69表、図版76）

《位置・確認状況》MB56、MC56に位置する。第Ⅲ層上面を精査中、灰黄褐色土の分布が確認された。SK18・40土坑と重複して、本遺構が新しい。

《規模・形態》平面形は、長軸2.03m（N-56°-W）、短軸1.26mの不定形を呈す。確認面からの深さは0.26mである。底面は平坦で、壁は急に立ち上がる。

《埋土》3層に分けた。全て洪水堆積土を基質とする。3層は土中の鉄分の錆化により変色している。1・2層では埋め戻しの際に、径10cm～20cmの礫が多数埋められており、さらに各層中での混入物の入り方から、全て人為的な一括埋め戻し土と考えられる。

《出土遺物》埋土から、縄文土器22点405.5g・土器細片6.6g、円盤状土製品1点56.7g、剥片1点4.6g、石皿Ⅱ類1点800g、磨石1点400gが出土し、このうち円盤状土製品1点を図示した。345はSK18土坑出土の可能性もある。縦位区画沈線文が描かれ、文様内側がRL斜縄文で充填されている。

《所見・時期》礫や遺物の出土、埋土や周囲の状況及び底面形状から、土坑墓の可能性はある。時期は、出土遺物から、大木9b式期、縄文時代中期後葉と推定される。

SK18土坑（遺構：第106図、付図1、図版33）

《位置・確認状況》MB56、MC56に位置する。第Ⅲ層上面を精査中に確認された。SK17・40土坑と重複して、本遺構はSK17より旧く、SK40より新しい。

《規模・形態》平面形は、長軸（0.80）m（N-10°-E）、短軸1.17mの楕円形を呈す。確認面からの深さは0.14mである。底面は平坦で、壁は急に立ち上がる。

《所見・時期》礫の出土、周囲の状況及び底面形状から、土坑墓の可能性はある。時期は、重複するSK17と時期差がほとんどないと想定されることから、大木9b式期と想定される。

SK20土坑（遺構：第17・106図、付図1、図版3・33）

《位置・確認状況》MG55に位置する。第Ⅲ層上面を精査中、暗褐色土の分布が確認された。S146堅穴建物跡と重複して、本遺構が新しい。

《規模・形態》平面形は、長軸1.29m（N-4°-W）、短軸0.98mの不整楕円形を呈す。確認面からの深さは0.14mである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

《層序》第Ⅱ層土を基質とする単層で、礫が含まれることから、人為的な一括埋め戻し土と考えられる。

《出土遺物》埋土から縄文土器6点39.9gが出土した。

《所見・時期》礫が底面にまとまった状態で出土していることや埋土の状況及び底面形状から、土坑墓の可能性はある。時期はSⅠ46との重複関係及び出土遺物から、大木9～10a式期と推定される。

SK28土坑（遺構：第19・106図、付図1、図版33、遺物：第213図677、第72表、図版77）

《位置・確認状況》MD56に位置する。第Ⅲ層上面を精査中、確認調査時のトレンチにより、一部欠損した黒褐色土の分布が確認された。また、P1272と重複して、本遺構が古い。

《規模・形態》平面形は、長軸[1.99]m(N-2°-W)、短軸1.22mの楕円形を呈す。確認面からの深さは0.15mである。底面は、やや凹凸があるがほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

《埋土》第Ⅱ層土を基質とする単層で、混入物の入り方から人為的な一括埋め戻し土と考えられる。

《出土遺物》埋土から縄文土器34点482.4g・土器細片21.1g、石錐B類1点6g、スクレイパーⅡAa類1点9.2g、RF1点10.1g、剥片19点182.3gが出土し、このうち石錐1点を図示した。677はB類で未製品である。

《所見・時期》出土遺物、規模・形状及び埋土の状況から、土坑墓の可能性はある。時期は、出土遺物から、大木9b式期と推定される。

SK36土坑（遺構：第107図、付図1、図版33）

《位置・確認状況》LR49に位置する。第Ⅲ層上面を精査中に確認された。

《規模・形態》平面形は、長軸1.46m(N-19°-W)、短軸0.71mの楕円形を呈す。確認面からの深さは0.14mである。底面はほぼ平坦で、壁は北側が急に、南側がやや階段状になりながら急に立ち上がる。

《所見・時期》規模・形状から、土坑墓の可能性はある。時期の詳細は不明である。

SK37土坑（遺構：第23・107図、付図1、図版33）

《位置・確認状況》LR48に位置する。第Ⅲ層上面を精査中に確認された。

《規模・形態》平面形は、長軸0.92m(N-54°-W)、短軸0.84mの略円形を呈す。確認面からの深さは0.20mである。底面は平坦で、壁は急に立ち上がる。

《所見・時期》規模・形状及び周囲の状況から、土坑墓の可能性はある。時期の詳細は不明である。

SK38土坑（遺構：第19・107図、付図1）

《位置・確認状況》MC56に位置する。第Ⅲ層上面を精査中、分布が確認された。

《規模・形態》平面形は、長軸[1.24]m(N-70°-W)、短軸1.04mの不整楕円形である。確認面からの深さは0.16mである。底面は平坦で、壁は南側が緩やかに、北側では平坦になり、再び急に立ち上がる。

《出土遺物》埋土から縄文土器11点112.1gが出土した。

《所見・時期》規模・形状及び周囲の状況から、土坑墓の可能性はある。時期は、周囲の状況及び出土遺物から、大木9式期と推定される。

SK40土坑（遺構：第19・106図、付図1、図版33、理化学分析：第81・83表、第241・242図）

《位置・確認状況》MC56に位置する。第Ⅲ層上面を精査中に確認された。SK17・18土坑と重複して、本遺構が古い。

《規模・形態》平面形は、長軸(1.00)m(N-35°-E)、短軸(0.72)mの楕円形である。確認面からの深さは0.24mである。底面は鍋底状で、壁は緩やかに、途中から急に立ち上がる。

《出土遺物》埋土から縄文土器11点124.1g・土器細片2.2g、黒曜石の剥片1点4.1gが出土した。

《所見・時期》規模・形状及び周囲の状況から、土坑墓の可能性はある。時期は、出土遺物及び周囲の状況から、大木9b式期と推定される。また、埋土から出土した黒曜石の産地同定の結果、木造産と同定された(試料No.2)。

S K43土坑 (遺構：第17・19・107図、付図1、図版34)

《位置・確認状況》MD56・ME56に位置する。第Ⅲ層上面を精査中に確認された。S I41竪穴建物跡と重複して、本遺構が新しい。

《規模・形態》平面形は、長軸(0.84)m(N-1°-E)、短軸1.00mの隅丸方形を呈す。確認面からの深さは0.09mである。底面は平坦で、壁は東側では急に、西側では緩やかに立ち上がる。

《出土遺物》埋土から縄文土器2点32.1gが出土した。

《所見・時期》規模・形状及び周囲の状況から、土坑墓の可能性はある。時期は、出土遺物及び遺構の重複関係から、大木9～10a式期、縄文時代中期後葉～末葉と推定される。

S K50土坑 (遺構：第21・23・107図、付図1、図版34)

《位置・確認状況》L T47・48に位置する。第Ⅱ層中を精査中、S I47竪穴建物跡北東側で黄灰及び暗灰色土の分布が確認された。S I47・S I73竪穴建物跡と重複し、本遺構はS I47より新しいが、S I73との新旧関係は不明である。

《規模・形態》平面形は長軸1.98m(N-87°-W)、短軸1.63mの楕円形である。確認面からの深さは、0.30mである。底面は平坦で、壁は東側では急に、西側では緩やかに立ち上がる。底面中央付近に径10～40cmの扁平な垂円礫が入れていた。

《埋土》4層に分けた。全て洪水堆積土を基質とする。底面に礫が置かれていることから、人為的な埋め戻し土と考えられる。

《出土遺物》埋土から縄文土器2点66.6g、石皿Ⅱ類2点30,950g、磨石2点1,500g、凹石1点250g、敲石1点950gが出土した。

《所見・時期》底面の礫の出土や埋土の状況及び底面形状から、土坑墓の可能性はある。時期は、周囲の状況から、大木9b式期と推定される。

S K52土坑 (遺構：第18・107図、付図1)

《位置・確認状況》MG51に位置する。第Ⅱ層上面を精査中、にぶい黄褐色土の分布が確認された。

S I196竪穴建物跡、P1273と重複して、本遺構はP1273より旧く、S I196より新しい。

《規模・形態》平面形は長軸(0.86)m(N-88°-W)、短軸0.60mの楕円形を呈す。確認面から底面までの深さは0.31mで、底面はほぼ平坦で、壁は急に立ち上がる。

《埋土》2層に分けた。洪水堆積土を基質とする。廃絶後の人為堆積土か自然堆積土か判然としない。《出土遺物》埋土から縄文土器5点69.8g・土器細片7.9gが出土した。

《所見・時期》時期は、出土遺物及び周囲の状況から、大木9b式期、縄文時代中期後葉と推定される。

S K80土坑 (遺構：第35図、付図1・2、遺物：第171・172図346・347、第61表)

《位置・確認状況》L P44に位置する。第Ⅲ層上面を精査中、南側は攪乱を受け削平された灰褐色～灰黄褐色土の分布が確認された。S I45・S K I15竪穴建物跡と重複して、本遺構が新しい。

《規模・形態》平面形は、長軸(0.71)m(N-70°-W)、短軸[0.81]mの楕円形を呈す。確認面からの深さは0.57mである。底面は鍋底状で、壁は急に立ち上がる。

《埋土》2層に分けた。1・2層ともに洪水堆積土を基質とする。1・2層境で土器が出土し、ともに廃絶に伴う礫を含むことから、人為的な一括埋め戻し土と考えられる。

《出土遺物》1・2層境で土器が出土した。これらを含め埋土から縄文土器38点1,416.7g、石皿Ⅱ類2点2,450g、磨石1点800gが出土し、このうち2点を図示した。346はⅡβ群の深鉢形土器である。胴部で、縦位区画沈線文や逆U字状楕円文と想定される文様が描かれ、文様内側がR L斜縄文で充填されている。347はL R斜縄文で一部異方向の羽状縄文が見られる深鉢形土器である。口縁部、C3a類で、口縁部にはミガキが施されている。

《所見・時期》時期は、出土遺物及び遺構の重複関係から、大木9b・10a式期と推定される。

SK89土坑（遺構：第17・18・107図、付図1、図版34）

《位置・確認状況》ME52、MF52に位置する。第Ⅲ層上面で、配石とにぶい黄褐色土の分布が確認された。P1048・1049と重複して、本遺構が新しい。

《規模・形態》平面形は、長軸2.58m（N-65°-W）、短軸1.83mの不整楕円形を呈す。確認面からの深さは0.28mである。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。確認面で長さ8~40cm、厚さ7~8cmの長形の垂円礫が、長軸1.75m、短軸1.13mの範囲に「八」の字状に置かれていた。

《埋土》洪水堆積土を基質とする単層で、人為的な一括埋め戻し土と考えられる。

《出土遺物》埋土から縄文土器1点19.2gが出土した。

《所見・時期》確認面での礫の出土、埋土の状況や底面形状から、土坑墓の可能性はある。時期は出土遺物及び周囲の状況から、大木9~10a式期、縄文時代中期後葉~末葉と推定される。

SK92土坑（遺構：第19・108図、付図1、図版34、遺物：第172図348、第61表、図版64）

《位置・確認状況》MA54、MB54に位置する。第Ⅱ層中を精査中、褐~暗褐色土の分布が確認された。P1061・1265・1044と重複して、本遺構はP1061より新しく、P1265・1044より古い。

《規模・形態》平面形は、長軸1.60m（N-90°-E）、短軸1.53mの略円形を呈す。確認面からの深さは0.62mである。底面は平坦で、壁は急に立ち上がり、一度平坦になった後、再び急に立ち上がる。

《埋土》3層に分けた。1・2層は第Ⅱ層土、3層は洪水堆積土を基質とする。全ての層に幅10~28cmの礫や土器片が含まれていることから、人為的な埋め戻し土と考えられる。特に2・3層は、比較的大きな礫が埋められていた。

《出土遺物》礫と共に埋土から縄文土器37点1,216.0g・土器細片13.1gが出土し、このうち土器1点を図示した。348はⅡα群の深鉢形土器口縁~胴部、A3b類で、突起部は大小あり、大突起部には隆沈線相対渦巻文Cと双頭が外側に開く変形隆沈線相対渦巻文Aが描かれ、3つの隆沈線渦巻文が上部に重なるようにして突起部が作られ、穿孔が施されている。一方、小突起部は隆沈線渦巻懸垂文の渦巻からなる。体部は、隆沈線渦巻懸垂文や隆沈線懸垂文、逆U字状楕円文の組み合わせ文からなり、それぞれ楕円文内側がR L斜縄文で充填されている。

《所見・時期》時期は、出土遺物から、大木9a式期と推定される。

SK94土坑（遺構：第17・40図、付図1）

《位置・確認状況》M155に位置する。第Ⅲ層上面を精査中、にぶい黄褐色土の分布を確認した。

SK I 42竪穴建物跡と重複して本遺構が新しい。

《規模・形態》長軸0.96m（N-31°-W）、短軸0.79mの楕円形を呈す。確認面からの深さは0.36mである。底面はほぼ平坦で、壁は急に立ち上がる。

《埋土》洪水堆積土を基質とする単層である。混入物の入り方から、廃絶後の人為的な一括埋め戻し土と考えられる。

《出土遺物》埋土から縄文土器13点197.7gが出土した。

《所見・時期》埋土の状況から、土坑墓の可能性はある。時期は、出土遺物及び遺構の重複関係か

ら、大木9式期、縄文時代中期後葉と考えられる。

SK95土坑（遺構：第17・40図、付図1）

《位置・確認状況》M I 55に位置する。第Ⅲ層上面を精査中、にぶい黄褐色土の分布を確認した。

SK I 42堅穴建物跡と重複して本遺構が新しい。

《規模・形態》長軸1.22m（N-76°-E）、短軸1.18mの円形を呈す。確認面からの深さは、0.40mである。底面は、鍋底状で壁は急に立ち上がる。

《埋土》4層に分けた。全て洪水堆積土を基質とする。1・2層は自然流入土、3・4層は廃絶に伴う人為的な埋め戻し土と考えられる。

《出土遺物》埋土から縄文土器7点90.2gが出土した。

《所見・時期》時期の詳細は不明である。

SK107土坑（遺構：第23・108図、付図1）

《位置・確認状況》LR44に位置する。土層観察により、第Ⅱ層中から暗褐色・にぶい黄褐色土の掘り込みが確認された。S I 101・106・148堅穴建物跡と重複して本遺構が新しいが、S I 101・106とは直接の重複関係にはない。

《規模・形態》平面形は長軸（0.72）m（N-89°-W）、短軸[0.58]mの楕円形を呈す。確認面からの深さは0.30mである。底面は平坦で壁は急に立ち上がる。

《埋土》第Ⅱ層土及び洪水堆積土の混土を基質とする単層で、人為的な一括埋め戻し土と考えられる。

《所見・時期》埋土の状況や底面形状から、土坑墓の可能性はある。時期は、遺構の重複関係から、大木9b・10a式期と推定される。

SK108土坑（遺構：第23・108図、付図1）

《位置・確認状況》LS44に位置する。第Ⅱ層上面から、黒褐・灰褐色土の掘り込みが確認された。

SI 101堅穴建物跡と重複して新しいが、直接の重複関係にはない。

《規模・形態》平面形は長軸[0.91]m（N-1°-W）、短軸[0.90]mの円形を呈す。確認面からの深さは0.36mである。底面は平坦で、壁は急に立ち上がる。

《埋土》2層に分けた。1層は洪水堆積土、2層は第Ⅱ層土と洪水堆積土の混土である。2層に礫が含まれている。1・2層ともに人為的な埋め戻し土と考えられる。

《出土遺物》埋土から縄文土器2点62.7g、凹石1点800gが出土した。

《所見・時期》遺物や底面での礫の出土、埋土の状況や底面形状から、土坑墓の可能性はある。時期は遺構の重複関係及び出土遺物から、大木9b・10a式期と推定される。

SK118土坑（遺構：第23・108図、付図1）

《位置・確認状況》LT44・45に位置する。第Ⅱ層中、礫が数点確認され、土層観察用ベルトを残し掘り下げたところ、黒褐色土の分布が確認された。S I 151・175堅穴建物跡と重複して本遺構が新しい。

《規模・形態》平面形は長軸[0.72]m（N-80°-E）、短軸0.66mの円形を呈す。確認面からの深さは0.28mである。底面は鍋底状で、壁は緩やかに立ち上がる。

《埋土》第Ⅱ層土を基質とする単層である。上位にて磨石を含む径6～33cm、厚さ3～14cmの亜角礫・亜円礫が埋められていたことから、人為的な一括埋め戻し土と考えられる。

《出土遺物》埋土上位にて他の礫と共に、磨石5点3,800gが出土している。

《所見・時期》遺物や礫の出土及び埋土の状況から、土坑墓の可能性はある。時期は、遺構の重複関係から、大木9b・10a式期と推定される。

SK121土坑 (遺構：第21・108図、付図1、図版34)

《位置・確認状況》LT48・49に位置する。第Ⅱ層中を精査中に確認された。
《規模・形態》平面形は長軸1.60m (N-16° - E)、短軸 [1.35] mの楕円形を呈す。確認面からの深さは0.48mである。底面は平坦で、壁は北側では急に、南側では緩やかに立ち上がる。
《所見・時期》時期は、周囲の状況から、大木9～10a式期、縄文時代中期後葉～末葉と推定される。

SK134土坑 (遺構：第21・108図、付図1、図版34)

《位置・確認状況》MA49に位置する。第Ⅲ層上面を精査中、褐灰色土の分布の中に礫が数点まとまった状態が確認された。
《規模・形態》平面形は長軸0.98m (N-15° - E)、短軸0.62mの楕円形である。確認面からの深さは0.16mである。底面はほぼ平坦で、壁は急に立ち上がる。幅8～32cm、厚さは8～10cmの垂角礫・亜円礫が埋土上で検出されている。
《埋土》第Ⅱ層土を基質とする単層で、礫の出土状況から、人為的な埋め戻し土と考えられる。
《所見・時期》確認面での礫の出土状況や埋土の状況から、土坑墓の可能性はある。時期の詳細は不明である。

SK140土坑 (遺構：第21・109図、付図1、図版4・34)

《位置・確認状況》MA49に位置する。第Ⅱ層上面を精査中、褐灰・にぶい黄橙色土の分布が確認された。
《規模・拡大》平面形は、長軸2.09m (N-67° - W)、短軸1.29mの楕円形を呈す。確認面からの深さは0.46mである。底面は平坦で、壁は垂直に立ち上がる。壁際に集中して長さ6～40cmの垂角・亜円礫が配置されているように埋められていた。
《埋土》4層に分けた。1～3層は洪水堆積層土、4層は第Ⅱ層土の焼土混入土を基質とする。礫の入り方から、全て人為的な埋め戻し土と考えられる。
《出土遺物》埋土から縄文土器4点79.2gが出土した。
《所見・時期》礫の出土、埋土の状況や低面形状から、土坑墓の可能性はある。時期は、隣接し、かつ規模・形状が類似するSK171土坑同様、大木10a式期と推定される。

SK141土坑 (遺構：第17・18・42図、付図1、遺物：第172図349、第61表)

《位置・確認状況》MG53、MH53に位置する。S I 60竪穴建物跡を精査中、土層観察により掘り込みを確認した。S I 60竪穴建物跡、SK142土坑と重複し、本遺構はS I 60より新しく、SK142より古い。
《規模・形態》長軸1.07m (N-85° - W)、短軸 (0.45) mの楕円形を呈す。確認面からの深さは0.41mである。底面は平坦で、壁は急に立ち上がる。
《埋土》2層に分けた。全て洪水堆積土を基質とする。人為的堆積土か自然堆積土か判然としない。
《出土遺物》埋土から、縄文土器12点223.8g・土器細片1.4gが出土し、このうち土器1点を図示した。349はⅡ群の深鉢形土器である。胴部で、縦位区画沈線文、長楕円文及び相対楕円文と想定される文様が描かれ、文様内側がLR斜縄文で充填されている。
《所見・時期》時期は、出土遺物から、大木9式期と推定される。

SK142土坑 (遺構：第17・18・42図、付図1)

《位置・確認状況》MG53、MH53に位置する。S I 60竪穴建物跡を精査中、土層断面観察により掘り込みを確認した。S I 60竪穴建物跡、SK141土坑と重複して本遺構が新しい。
《規模・形態》長軸0.92m (N-56° - E)、短軸0.70mの楕円形を呈す。確認面からの深さは0.46m

である。底面はほぼ平坦で、壁は北側では緩やかに、南側では緩やかに立ち上がる。

《埋土》2層に分けた。1層は第Ⅱ層土、2層は洪水堆積土を基質とする。廃絶後の人為堆積土か自然堆積土か判然としない。

《出土遺物》埋土から、縄文土器1点8.6gが出土した。

《所見・時期》時期は、重複関係から、大木9b・10a式期と推定される。

SK144土坑（遺構：第17・18・109図、付図1、図版35、遺物：第213図678・679、第72表）

《位置・確認状況》MH53・54に位置する。S I 26竪穴建物跡を精査中、床面にぶい黄褐色土の分布を確認した。S I 26・63竪穴建物跡、P 1200と重複して本遺構が古い。

《規模・形態》平面形は、長軸1.26m（N-6°-W）、短軸0.59mの楕円形を呈す。確認面からの深さは0.52mである。底面はほぼ平坦で、壁は南側では緩やかに、他は急に立ち上がる。

《埋土》洪水堆積土を基質とする単層で、遺物や礫の入り方から、人為的な一括埋め戻し土と考えられる。

《出土遺物》縄文土器20点493.5g（赤彩土器1点22.1g含む）・土器細片3.9g、石鏃Aa類1点0.7g、石鏃Ba類1点2.1g、剥片1点2.2gが出土し、このうち石鏃・石鏃各1点を図示した。678は石鏃Aa類で、両面にアスファルトが付着している。679は石鏃Ba類である。

《所見・時期》遺物の出土や埋土の状況から土坑墓の可能性はある。時期は、出土遺物及び遺構の重複関係から、大木9式期と考えられる。

SK145土坑（遺構：第21・23・109図、付図1）

《位置・確認状況》LS45・46、LT45・46に位置する。土層観察用ベルト断面により、第Ⅱ層上面からの掘り込みが確認された。S I 103竪穴建物跡と重複して本遺構が新しい。S I 47竪穴建物跡との重複も想定されるが、詳細は不明である。

《規模・形態》平面形は、長軸[0.91]m（N-24°-W）、短軸[0.66]mの楕円形を呈す。確認面からの深さは0.29mである。底面は平坦で、壁は西側では急に、東側では緩やかに立ち上がる。

《出土遺物》埋土から縄文土器1点134.3gが出土している。

《所見・時期》時期の詳細は不明である。

SK147土坑（遺構：第21・23・109図、付図1）

《位置・確認状況》LT45・46に位置する。土層観察用ベルトの壁面観察より、第Ⅱ層上面からの掘り込みが確認された。S I 103竪穴建物跡と重複して新しい。

《規模・形態》平面形は、長軸(0.69)m（N-89°-W）、短軸[0.67]mの円形を呈す。確認面からの深さは0.29mである。底部は平坦で、壁は急に立ち上がる。

《所見・時期》時期の詳細は不明である。

SK152土坑（遺構：第21・61図、付図1）

《位置・確認状況》MB46に位置する。トレンチ壁面の土層観察より、第Ⅱ層中で掘り込みが確認された。S I 120竪穴建物跡、P1052と重複し、S I 120より新しく、P1052より古い。

《規模・形態》平面形は、長軸2.08m（N-85°-E）、短軸[1.66]mの楕円形を呈す。確認面からの深さは0.33mである。底面は平坦で、壁は西側では急に、東側では緩やかに立ち上がる。

《埋土》2層に分けた。いずれも洪水堆積土を基質とする。自然流入土の可能性はある。

《所見・時期》時期は、遺構の重複関係から、大木9b式期と推定される。

SK154土坑（遺構：第21・109図、付図1）

《位置・確認状況》LT51、MA51に位置する。第Ⅱ層上面を精査中に確認された。

《規模・形態》平面形は、長軸0.77m (N-66°-E)、短軸0.68mの略円形を呈す。確認面からの深さは0.18mである。底面は平坦で、壁は急に立ち上がる。

《所見・時期》時期の詳細は不明である。

SK159土坑 (遺構：第21・110図、付図1、図版35)

《位置・確認状況》LT50・51、MA50・51に位置する。第Ⅱ層中を精査中に確認された。

《規模・形態》平面形は、長軸0.93m (N-3°-E)、短軸0.91mの不整形円形を呈す。確認面からの深さは0.54mである。底面は平坦で、壁は南側が急に、北側では一度平坦になり、その後再び急に立ち上がる。確認面で長さ11~32cmの亜角・亜円礫が確認された。

《出土遺物》埋土から縄文土器4点62.4gが出土した。

《所見・時期》礫の出土状況や底面形状から、土坑墓の可能性はある。時期は出土遺物から、大木9b式期と推定される。

SK160土坑 (遺構：第23・110図、付図1)

《位置・確認状況》LQ43・44に位置する。S I 139竪穴建物跡の土層断面観察中、掘り込みが確認された。S I 139と重複して本遺構が新しい。

《規模・形態》平面形は長軸1.18m (N-26°-W)、短軸[0.82]mの楕円形を呈す。確認面からの深さは0.45mである。底面は平坦で、壁は北側では急に、南側では平坦となり、その後緩やかに立ち上がる。

《埋土》2層に分けた。1・2層ともに洪水堆積土を基質とする。混入物の入り方から、人為的な一括埋め戻し土と考えられる。

《所見・時期》埋土の状況や底面形状から、土坑墓の可能性はある。時期は、遺構の重複関係から、大木9b・10a式期と推定される。

SK169土坑 (遺構：第17・18・110図、付図1)

《位置・確認状況》MG53に位置する。S I 60竪穴建物跡を精査中、にぶい黄褐色土の分布が確認された。S I 60と重複して本遺構が新しい。

《規模・形態》長軸0.72m (N-86°-W)、短軸0.66mの隅丸方形を呈す。確認からの深さは0.24mである。底面はほぼ平坦で、壁は急に立ち上がる。

《埋土》洪水堆積土を基質とする単層で、廃絶後の人為堆積土か自然堆積土か判然としない。

《所見・時期》時期は、遺構の重複関係から、大木9b・10a式期と推定される。

SK171土坑 (遺構：第20・21・110図、付図1、図版35、遺物：第172図350、第61表、図版65)

《位置・確認状況》MA49に位置する。第Ⅱ層上面を精査中、にぶい黄褐色土の分布が確認された。

《規模・形態》平面形は、長軸1.91m (N-11°-W)、短軸1.02mの楕円形を呈す。確認面からの深さは0.34mである。底面はやや鍋底状で、壁は急に立ち上がる。壁際に長さ8~45cmの礫が集中して埋められていた。

《埋土》4層に分けた。1・2層は洪水堆積土、4層は第Ⅱ層土を基質とする。3層は由来不明である。堆積状況や混入物の入り方から、全て人為的な一括埋め戻し土と考えられる。3層は遺跡全体における他の遺構内埋土からも未確認の堆積土である。色合いから考えても、意図的に埋められた可能性が高い。

《出土遺物》埋土から縄文土器3点90.9gが出土し、これを図示した。350はⅢ群の深鉢形土器である。口縁部、C I a類で、頸部に横位沈線文を巡らせ、体部にはC字状文と想定される文様が描かれ、文様内側がRL斜縄文で充填されている。

《所見・時期》規模・形状及び埋土や礫の出土状況から、土坑墓の可能性はある。時期は、出土遺物から、大木10 a 式期と推定される。

SK177土坑（遺構：第17・18・110図、付図1、図版35、遺物：第172図351、第213図680、第69・72表、図版76・79）

《位置・確認状況》M154に位置する。S126竪穴建物跡床面を精査中、にぶい黄褐色・黒褐色土の分布が確認された。S126・SK125竪穴建物跡と重複して本遺構が古い。

《規模・形態》平面形は、長軸0.90m（N-7°-W）、短軸0.78mの円形を呈す。確認面からの深さは0.20mである。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。上位西側壁際に礫が集中していた。

《埋土》2層に分けた。1層は洪水堆積土、2層は第Ⅱ層土を基質とする。人為的な埋め戻し土と考えられる。

《出土遺物》埋土から縄文土器31点1,205.1g、円盤状土製品1点21.3g、スクレイパーⅡBb類1点15.9g、剥片2点7.9gが出土し、このうち2点を図示した。351は円盤状土製品で、RL斜縄文が施されている。680はスクレイパーⅡBb類である。

《所見・時期》礫や遺物の出土及び埋土の状況から、土坑墓の可能性はある。時期は、出土遺物及び遺構の重複関係から、大木9式期と推定される。

SK178土坑（遺構：第20・21・110図、付図1、図版4・35）

《位置・確認状況》MB49・50に位置する。第Ⅲ層上面で確認された。P1187と重複して、本遺構が古い。

《規模・形態》平面形は、長軸1.40m（N-75°-W）、短軸1.27mの略円形を呈す。確認面からの深さは0.52mである。底面は平坦で、壁は急に立ち上がる。

《出土遺物》埋土から縄文土器14点376.9gが出土した。

《所見・時期》規模・形態及び周囲の状況から、土坑墓の可能性はある。時期の詳細は不明である。

SK180土坑（遺構：第18・110図、付図1、図版35）

《位置・確認状況》MG49に位置する。第Ⅱ層中で礫のまとまりが、さらにその下から黄褐色土の分布が確認された。

《規模・形態》平面形は長軸1.26m（N-3.5°-W）、短軸0.82mの不整楕円形を呈す。確認面からの深さは0.39mである。底面はほぼ平坦で、壁は東側では急に、西側では途中から緩やかに立ちあがる。長軸1.06m、短軸0.84mの範囲で、長さ9～33cm、厚さ4～23cmの垂円・円礫数点が、確認面上で集中して置かれていた。

《埋土》2層に分けた。1・2層とも洪水堆積土を基質とする。人為的な一括埋め戻し土である。

《所見・時期》確認面での礫の出土及び埋土の状況から、土坑墓の可能性はある。時期の詳細は不明である。

SK186土坑（遺構：第20・111図、付図1）

《位置・確認状況》MC49に位置する。第Ⅲ層上面を精査中、にぶい黄褐色土の分布及び礫のまとまりが確認された。

《規模・形態》平面形は、長軸1.13m（N-6°-E）、短軸0.99mの円形を呈す。確認面からの深さは0.32mである。底面はほぼ平坦で、壁は西側では緩やかに、東側では途中から急に立ち上がる。長さ5～22cm、厚さは5～14cmの垂角・垂円礫がまとまって置かれていた。

《埋土》洪水堆積土を基質とする単層で、礫の入り方から人為的な一括埋め戻し土と考えられる。

《所見・時期》礫の出土や埋土の状況から、土坑墓の可能性はある。時期の詳細は不明である。

SK187土坑（遺構：第20・111図、付図1）

《位置・確認状況》MC49に位置する。第Ⅲ層上面を精査中、にぶい黄褐色土の分布及び礫のまとまりが確認された。

《規模・形態》平面形は、長軸0.64m（N-51°-E）、0.51mの楕円形を呈す。確認面からの深さは0.40mである。底面は平坦で、壁は急に立ち上がる。長さ8～26cm、厚さは6～10cmの亜角・亜円礫が確認面でまともって確認された。

《埋土》洪水堆積土を基質とする単層で、礫の出土状況から、人為的な一括埋め戻し土である。

《所見・時期》礫の出土及び埋土の状況から、土坑墓の可能性ある。時期の詳細は不明である。

SK189土坑（遺構：第20・21・111図、付図1、図版4、第213図681、第72表、図版77）

《位置・確認状況》MC48・49に位置する。第Ⅲ層上面を精査中、褐色土の分布が確認された。

《規模・形態》平面形は、長軸1.88m（N-55°-W）、短軸0.97mの楕円形を呈す。確認面からの深さは0.36mである。底面は平坦で、壁は西側に急に、東側では垂直に立ち上がる。南東に長さ20～26cmの礫が埋められていた。

《埋土》洪水堆積土の褐色砂を基質とする単層で、混入物の入り方から、人為的な一括埋め戻し土と考えられる。

《出土遺物》埋土から異形石器1点9.2gが出土し、これを図示した。

《所見・時期》出土遺物や規模・形状から、土坑墓の可能性ある。時期は、規模・形状が類似するSK171土坑墓同様、大木10a式期と推定される。

SK190土坑（遺構：第21・111図、付図1、図版4）

《位置・確認状況》MC48に位置する。第Ⅱ層中を精査中に確認された。

《規模・形態》平面形は、長軸0.92m（N-74°-E）、短軸0.86mの略円形である。確認面からの深さは0.17m、底面は平坦で、壁は南側は急に、北側では緩やかに立ち上がる。SK232土坑と重複して新しい。

《出土遺物》埋土から縄文土器21点337.6gが出土した。

《所見・時期》規模・形状及び周囲の状況から、土坑墓の可能性ある。時期の詳細は不明である。

SK191土坑（遺構：第21・111図、付図1）

《位置・確認状況》MB47・48、MC47・48に位置する。第Ⅱ層中を精査中、オリーブ黒褐色土の分布及び礫のまとまりが確認された。

《規模・形態》平面形は、長軸1.10m（N-9°-W）、短軸0.84mの略円形を呈す。確認面からの深さは0.22mである。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。長軸0.98m、短軸0.48mの範囲に長さ22～38cm、厚さ12～18cmの礫6点が意図的に配置されていた。

《埋土》洪水堆積土を基質とする単層である。礫の入り方から、人為的な埋め戻し土と考えられる。

《所見・時期》礫の出土状況から、土坑墓の可能性ある。時期の詳細は不明である。

SK195土坑（遺構：第21・111図、付図1）

《位置・確認状況》MB47に位置する。第Ⅲ層上面を精査中、褐色土の分布が確認された。

《規模・形態》平面形は、長軸0.86m（N-34°-W）、短軸0.70mの略円形を呈す。確認面からの深さは0.22mである。底面は凹凸があり、壁は緩やかに立ち上がる。

《埋土》洪水堆積土を基質とする単層で、人為的な一括埋め戻し土と考えられる。

《出土遺物》埋土から縄文土器7点142.5gが出土した。

《所見・時期》規模・形状及び周囲の状況から、土坑墓の可能性ある。時期の詳細は不明である。

SK198土坑（遺構：第20・21・111図、付図1、図版4、遺物：第213図682、第72表、図版77）

《位置・確認状況》MB50に位置する。第Ⅲ層上面で暗褐色・褐色土の分布を確認した。

《規模・形態》平面形は、長軸1.62m（N-50°-W）、短軸0.64mの不整楕円形である。確認面からの深さは0.24mである。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに、その後急に立ち上がる。また、南東側底面直上には礫が意図的に配置されていた。

《埋土》2層に分けた。1層は第Ⅱ層土、2層は洪水堆積土を基質とする。1・2層ともに混入物の入り方から、人為的な一括埋め戻し土と考えられる。

《出土遺物》埋土から縄文土器1点37.6gの他、2層中から透閃石岩製の有孔石製品1点3.4gが出土し、これを図示した。

《所見・時期》規模・形状及び出土遺物等から、土坑墓の可能性はある。時期は出土遺物から、大木9b式期と推定される。

SK204土坑（遺構：第17・112図、付図1、遺物：第172図352、第61表、図版65）

《位置・確認状況》ME53に位置する。第Ⅲ層上面を精査中、にぶい黄褐～黄褐色土の分布が確認された。S191竪穴建物跡と重複するが、新旧関係は不明である。

《規模・形態》平面形は、長軸0.61m（N-2°-E）、短軸0.55mの略円形を呈す。確認面からの深さは0.28mである。底面は平坦で、壁は急に立ち上がる。

《埋土》洪水堆積土を基質とする単層で、一括埋め戻し土と考えられる。

《出土遺物》確認面より、完形の縄文深鉢形土器1点489.2gが逆位に置かれた状態で出土し、これを図示した。352はⅡβ群である。口縁～底部、C1a類で、口縁部には2条の横位沈線文を、胴部には2条1組の横位波状沈線文を巡らせ、波間上には長楕円文、波頂部の沈線文間には円文が描かれ、文様内側及び波状沈線下はLR斜縄文で充填されている。

《所見・時期》出土遺物や埋土の状況及び底面形状から、土坑墓の可能性はある。時期は、出土遺物から、大木9b式期と推定される。

SK206土坑（遺構：第17・19・112図、付図1、遺物：第172図353～355、第213図683、第61・69・72表、図版78）

《位置・確認状況》ME53に位置する。第Ⅲ層上面を精査中、灰黄褐～にぶい黄褐色土の分布が確認された。S191・236竪穴建物跡と重複するが、本遺構との新旧関係は不明である。

《規模・形態》平面形は、長軸1.52m（N-29°-W）、短軸1.20mの楕円形を呈す。確認面からの深さは0.32mである。底面はやや凹凸があり、壁は急に立ち上がる。底面付近で、長さ8～28cmの礫が数点埋められている。

《埋土》4層に分けた。全て洪水堆積土を基質とする。堆積状況や礫の出土状況から、人為的な埋め戻し土と考えられる。

《出土遺物》埋土から、縄文土器2点184.6gの他、キノコ形土製品1点25.7g、スクレイパーI A a 4類1点41.8g、剥片10点306.8g、敲石1点350gが出土し、このうち4点を図示した。353はⅡβ群の深鉢形土器である。口縁部、C2a類、多重沈線文と楕円文の組合文、354は円文等が描かれ、文様内側がLR斜縄文で充填されている。354はⅡ群の深鉢形土器である。頭～胴部で、円文等が描かれ、文様内側がLR斜縄文で充填されている。355はキノコ形土製品の頭部である。また、683スクレイパーI A a 4類である。

《所見・時期》規模・形状及び礫の出土状況から、土坑墓の可能性はある。時期は、出土遺物及び遺構の重複関係から、大木9式期と推定される。

SK211土坑（遺構：第18・112図、付図1）

《位置・確認状況》MI50・51に位置する。第Ⅲ層上面を精査中、黄灰～黄褐色土の分布及び礫のまとまりが確認された。SK240土坑と重複して本遺構が古い。

《規模・形態》平面形は、長軸1.50m（N-14°-E）、短軸1.06mの楕円形を呈す。確認面からの深さは0.22mである。底面は平坦で、壁は南北が急に、東西は緩やかに立ち上がる。長軸1.10m、幅0.80mの範囲に長さ6～22cmの亜円・円礫が比較的大きな円礫を中心に、長方形に配置されていた。

《埋土》洪水堆積土を基質とする単層で、人為的な一括埋め戻し土である。

《所見・時期》礫の出土状況や埋土の状況及び底面形状から土坑墓の可能性がある。時期の詳細は不明である。

SK214土坑（遺構：第112図、付図1）

《位置・確認状況》MF46・47に位置する。第Ⅱ層中を精査中、暗灰黄～にぶい黄褐色土の分布及び礫のまとまりが確認された。

《規模・形態》平面形は、長軸0.78m（N-23°-E）、短軸0.67mの略円形を呈す。確認面からの深さは0.29mである。底面はほぼ平坦で、壁は急に立ち上がる。幅14～35cmの直角礫敷点があり、比較的大きな礫を取り囲むように、長軸0.66m、短軸0.52mの範囲で確認面上にまとまっていた。

《埋土》2層に分けた。1・2層ともに洪水堆積土を基質とする。堆積状況や礫の出土状況から、人為的な埋め戻し土と考えられる。

《所見・時期》礫の出土状況や埋土の状況から、土坑墓の可能性がある。時期の詳細は不明である。

SK220土坑（遺構：第17・18・112図、付図1、遺物：第173図356、第61表、図版65）

《位置・確認状況》MI53に位置する。第Ⅲ層上面を精査中、にぶい黄褐色土の分布を確認した。上部が擾乱を受けていた。SI26壁穴建物跡と重複する可能性があるが、詳細は不明である。

《規模・形態》平面形は長軸1.02（N-70°-W）、短軸[0.90]mの円形を呈す。確認面からの深さは0.25mである。底面は鍋底状で、壁は急に立ち上がる。

《埋土》2層に分けた。1・2層ともに洪水堆積土を基質とする。1層は遺物や礫の出土状況から、人為的な埋め戻し土、2層は開口時に底部に堆積した可能性がある。

《出土遺物》縄文土器1点3.131.0g、磨石1点650g出土し、このうち土器1点を図示した。356はⅡβ群の深鉢形土器である。口縁～胴部、D2a類で、長楕円文、逆U字状沈線文と相對楕円文Bの組合せ文が描かれ、文様内側がRL斜縄文で充填されている。また口縁部には補修孔がある。

《所見・時期》遺物の出土や埋土の状況から、土坑墓の可能性ある。時期は、出土遺物から、大木9b式期と推定される。

SK221土坑（遺構：第18・113図、付図1、図版35）

《位置・確認状況》MI51に位置する。第Ⅲ層上面を精査中に確認された。SK227土坑と重複して本遺構が新しい。

《規模・形態》平面形は、長軸1.62m（N-85°-W）、短軸1.46mの円形を呈す。確認面からの深さは0.27mである。底面はほぼ平坦で、壁は急に立ち上がる。

《埋土》3層に分けた。1・2層は第Ⅱ層土、3層は洪水堆積土を基質とする。礫や混入物の入り方から、人為的な一括埋め戻し土と考えられる。

《所見・時期》規模・形状及び埋土の状況から、土坑墓の可能性ある。時期は、重複かつ規模・形状が類似するSK227土坑同様、大木9b式期と推定される。

S K226土坑（遺構：第17・19・113図、付図1、図版36）

《位置・確認状況》MD53に位置する。第Ⅲ層上面を精査中、礫及び灰黄褐色土の分布が確認された。S191竪穴建物跡P4と重複して本遺構が新しい

《規模・形態》平面形は、長軸0.60m（N-32°-E）、短軸0.52mの隅丸方形を呈す。確認面からの深さは0.17mである。底面は平坦で、壁は急に立ち上がる。検出面で長さ30～32cmの垂円礫2点が確認されている。

《埋土》第Ⅲ層土の灰黄褐色土を基質とする単層で、礫の入り方から、人為的な埋め戻し土と考えられる。《所見・時期》礫の出土や埋土及び周辺の状況等から、土坑墓の可能性はある。時期は、遺構の重複関係及び周囲の状況から、大木9b・10a式期と推定される。

S K227土坑（遺構：第18・19・113図、付図1、図版35、遺物：第173図357～359、第61表）

《位置・確認状況》MG51、M151・52に位置する。第Ⅲ層上面を精査中に確認された。S K221土坑と重複して本遺構が古い。

《規模・形態》平面形は、長軸1.62m（N-50°-E）、短軸1.40mの円形を呈す。確認面からの深さは0.48mである。底面は平坦で、壁は急に立ち上がる。径6～22cmの垂角～円礫が多数埋められていた。

《出土遺物》埋土から縄文土器29点746.9gが出土し、このうち3点を図示した。357・358はⅡβ群の深鉢形土器である。357は頸部で、楕円沈線文や楕円文、358は胴部で、縦区画沈線文や長楕円文及び相対楕円文が描かれ、それぞれ文様内側がL R斜縄文で充填されている。359はⅡ群の深鉢形土器である。胴～底部で、逆U字状楕円文及び相対楕円文B、懸垂文と想定される文様が描かれ、文様内側がL R斜縄文で充填されている。

《所見・時期》礫の出土や周囲の状況及び規模・形状から、土坑墓の可能性はある。時期は、出土遺物から、大木9b式期と推定される。

S K232土坑（遺構：第20・21・113図、付図1、図版36）

《位置・確認状況》MC48に位置する。第Ⅲ層上面を精査中、上部が削平された黒褐色土の分布が確認された。S K190土坑と重複して本遺構が古い。

《規模・形態》平面形は、長軸0.88m（N-78°-E）、短軸0.87mの円形を呈す。確認面からの深さは0.12mである。底面は平坦で、壁は急に立ち上がる。

《埋土》第Ⅱ層土を基質とする単層で、混入物の入り方から、人為的な一括埋め戻し土と考えられる。

《出土遺物》埋土から、縄文土器15点134.7g・土器細片3.1gが出土した。

《所見・時期》規模・形状及び周囲の状況から、土坑墓の可能性はある。時期の詳細は不明である。

S K233土坑（遺構：第20・21・113図、付図1）

《位置・確認状況》MB48に位置する。第Ⅲ層上面を精査中、上部が削平された黒褐色土の分布が確認された。

《規模・形態》平面形は、長軸（0.34）m（N-77°-W）、短軸0.45mの楕円形を呈す。確認面からの深さは0.11mである。底面は平坦で、壁は南北側が緩やかに、西側では急に立ち上がる。

《埋土》第Ⅱ層土を基質とする。混入物の入り方から、人為的な一括埋め戻し土と考えられる。

《出土遺物》埋土から縄文土器16点276.2gが出土した。

《所見・時期》規模・形状や埋土及び周囲の状況から、土坑墓の可能性はある。時期は、出土遺物から、大木9b式期と推定される。

SK240土坑（遺構：第18・112図、付図1、理化学分析：第77・78表、第233図）

《位置・確認状況》MH50・51、MI50・51に位置する。第Ⅲ層上面を精査中、灰黄褐色土の分布が確認された。SK211土坑と重複して本遺構が新しい。

《規模・形態》平面形は、長軸[1.83]m、短軸0.90mの楕円形を呈す。確認面からの深さは0.43mである。底面は鍋底状で、壁は急に立ち上がる。

《埋土》5層に分けた。1～4層は洪水堆積土を、5層は第Ⅱ層土を基質とする。基質土が斑状に堆積していることから、人為的な一括埋め戻し土と考えられる。

《所見・時期》規模・形状、埋土及び周囲の状況から、土坑墓の可能性はある。時期の詳細は不明である。また、出土した炭化物の放射性炭素年代測定（暦年較正年代）では、2886-2670cal BC（2σ）の年代値が、樹種同定によりカエデ属という結果が得られた（試料12）。

SK242土坑（遺構：第105図、付図1、図版32）

《位置・確認状況》LQ50、LR50に位置する。第Ⅲ層上面を精査中、黄灰色土の分布が確認された。

SK06土坑と重複して本遺構が古い。

《規模・形態》平面形は、長軸1.56m（N-34°-E）、短軸（0.54）mの円形を呈す。確認面からの深さは0.42mである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

《埋土》第Ⅱ層土を基質とする単層で、洪水堆積土塊を含むことから、人為的な一括埋め戻し土と考えられる。

《所見・時期》時期の詳細は不明である。

SK246土坑（遺構：第23・113図、付図1）

《位置・確認状況》LS45、LT45に位置する。第Ⅱ層中を精査中に確認された。P1048と重複して、本遺構が新しい。SI225竅穴建物跡との重複の可能性はあるが、詳細は不明である。

《規模・形態》平面形は、長軸1.03m（N-84°-W）、短軸0.82mの不整形形を呈す。確認面からの深さは0.18mである。底面は平坦で、壁は東側が急に、西側では緩やかに立ち上がる。底部に径33cmの礫が埋められていた。

《所見・時期》礫の出土及び底面形状から、土坑墓の可能性はある。時期の詳細は不明である。

SK248土坑（遺構：第17・19・113図、付図1、図版23）

《位置・確認状況》ME53・54に位置する。第Ⅲ層上面を精査中に確認された。SI236・SKI207竅穴建物跡、P1413と重複し、本遺構はSKI207より新しく、P1413より古い。SI236との新旧関係は不明である。

《規模・形態》平面形は、長軸1.24m（N-10°-E）、短軸1.10mの略円形を呈す。確認面からの深さは0.21mである。底面は平坦で、壁は北側が急に、南側では垂直に立ち上がる。

《所見・時期》規模・形状及び周囲の状況から、土坑墓の可能性はある。時期は、周辺の状況から、大木9式期と推定される。

SK249土坑（遺構：第7・113図）

《位置・確認状況》LR43に位置する。基本土層②の土層断面を精査中、第Ⅲ層上面からの掘り込みが確認された。

《規模・形態》断面のみの確認である。規模は幅〈1.66〉m、確認面からの深さは0.84mである。底面は平坦で、壁は西側が急に、東側では緩やかに立ち上がる。

《埋土》洪水堆積土を基質とする単層で、混入物の入り方から、廃絶に伴う人為的な埋め戻し土と考えられる。

《所見・時期》周囲の状況から土坑墓の可能性がある。時期は、周辺の状況から、大木9式期と推定される。

SK250土坑（遺構：第23・114図、付図1）

《位置・確認状況》L S46に位置する。第Ⅲ層上面を精査中に確認された。

《規模・形態》平面形は、長軸1.30m（N-3°-W）、短軸1.00mの楕円形を呈す。確認面からの深さは0.40mである。底面は平坦で、壁は南側が急に、北側では緩やかに立ち上がる。

《所見・時期》規模・形状及び周囲の状況から、土坑墓の可能性がある。時期の詳細は不明である。

SK310土坑（遺構：第114図、付図2、図版36）

《位置・確認状況》L J60に位置する。第Ⅲ層上面を精査中、暗褐色土の分布が確認された。

《規模・形態》平面形は、長軸1.04m（N-1°-E）、短軸0.98mの隅丸方形を呈す。確認面からの深さは0.26mである。底面はやや鍋底状で、壁は急に立ち上がる。

《埋土》2層に分けた。1・2層ともに第Ⅱ層土を基質とする。1・2層ともに混入物の入り方から、人為的な埋め戻し土と考えられる。

《出土遺物》埋土から縄文土器4点98.4gが出土している。

《所見・時期》規模・形状及び埋土の状況から、土坑墓の可能性がある。時期は、出土遺物から、大木9式期と推定される。

SK311土坑（遺構：第114図、付図2、図版36）

《位置・確認状況》L I59に位置する。第Ⅲ層上面を精査中、褐色土の分布が確認された。P1546と重複して、本遺構が新しい。

《規模・形態》平面形は長軸1.21m（N-18°-W）、短軸1.01mの楕円形を呈す。確認面からの深さは、0.24mである。底面はやや凹凸があるが、ほぼ平坦で、壁は南東側が急に、北西側では緩やかに立ち上がる。

《埋土》2層に分けた。1・2層ともに第Ⅱ層土を基質とする。1層は混入物を含むことから、人為的な埋め戻し土、2層は自然流入土と考えられ、2層が埋まった後、少し時間をおいて1層土が埋められたと考えられる。

《出土遺物》埋土から縄文土器3点403g、剥片1点7.4gが出土した。

《所見・時期》時期の詳細は不明である。

SK408土坑（遺構：第114図、付図2、図版5）

《位置・確認状況》L K45・46に位置する。第Ⅱ層上面で、にぶい黄褐色土の分布が確認された。S I407竪穴建物跡と重複して本遺構が新しい。

《規模・形態》平面形は、長軸1.23m（N-86°-W）、短軸0.78mの不整楕円形を呈す。確認面からの深さは0.31mである。底面は鍋底状で、壁は東側が緩やかに、西側では急に立ち上がる。

《埋土》第Ⅲ層土を基質とする単層で、炭化物や第Ⅱ層土の混入具合から、自然流入土と考えられる。

《所見・時期》時期の詳細は不明である。

SK411土坑（遺構：第10・104図、付図2、図版32、遺物：第173図360、第61表）

《位置・確認状況》L J49に位置する。第Ⅱ層上面精査中に確認された。SKF406フラスコ状土坑と重複して、本遺構が古い。

《規模・形態》平面形は、長軸1.32m（N-20°-W）、短軸（0.36）mの楕円形を呈す。確認面からの深さは0.20mである。底面付近で径5～10cmの竅が数点出土している。

《出土遺物》埋土から縄文土器2点279.7gが出土し、このうち土器1点を図示した。360はL R斜縄文の深鉢形土器底部である。

《所見・時期》礫の出土状況から、土坑墓の可能性はある。時期は、出土遺物及び遺構の重複関係から、大木9式期と推定される。

SK415土坑（遺構：第10・114図、付図2、図版7、図版36、遺物：第173図361、図版65、第61表）

《位置・確認状況》L J 45・46に位置する。基本土層⑩断面を精査中、第Ⅲ層上面からの掘り込みを確認し、その後にぶい黄褐～にぶい黄橙色土の分布が確認された。SK419土坑と重複して、本遺構が新しい。

《規模・形態》平面形は、長軸2.16m（N-74°-W）、短軸[2.00]mの不定円形を呈す。確認面からの深さは0.36mである。底面はほぼ平坦で、壁は急に立ち上がった後、平坦になり、再び急に立ち上がる。

《埋土》洪水堆積土を基質とする単層で、遺物の出土状況から人為的な埋め戻し土と考えられる。

《出土遺物》埋土から縄文土器53点1,264.5g・土器細片10g、RF1点14.6g、剥片1点20.5g、石皿I類1点900gが出土し、このうち土器1点を図示した。360はⅡ群の深鉢形土器である。口縁～胴部、B2b類で、口縁～頸部に2条の横位沈線文を巡らせ、胴部には長楕円文及び相対楕円文と想定される文様が描かれ、文様内側にL R斜縄文で充填されている。

《所見・時期》出土遺物及び埋土の状況から、土坑墓の可能性はある。時期は、埋土からの出土遺物及び遺構の重複関係から、大木9b式期と推定される。

SK419土坑（遺構：第10・114図、付図2、図版7・36）

《位置・確認状況》L J 46に位置する。基本土層⑩断面を精査中、第Ⅲ層上面からの掘り込みが確認され、その後平面を精査したところ、灰黄褐～にぶい黄橙色土の分布が確認された。SK415・441土坑、P1669と重複して、SK441より新しく、SK415、P1669より古い。トレンチにより西側半分が欠損している。

《規模・形態》平面形は、長軸[1.20]m（N-16°-W）、短軸（0.50）mの楕円形を呈す。確認面からの深さは0.37mである。底面はほぼ平坦で、壁は急に立ち上がる。

《埋土》2層に分けた。それぞれ洪水堆積土を基質とする。自然流入土と考えられるが、SK415と同様、人為的な埋め戻し土の可能性はある。

《所見・時期》土坑墓の可能性はある。時期は、遺構の重複関係から、大木9b式期と推定される。

SK423土坑（遺構：第115図、付図2、図版36）

《位置・確認状況》L P 49・50に位置する。第Ⅱ層中を精査中、にぶい黄褐色土の分布が確認された。直接の重複関係はないが、SK438土坑と重複して本遺構が新しい。

《規模・形態》平面形は長軸1.32m（北-83°-西）、短軸0.86mの楕円形を呈す。確認面からの深さは0.18mである。底面は平坦で、壁は急に立ち上がる。

《埋土》第Ⅲ層土を基質とする単層で、長さ20cmの礫が混入されていることから、人為的な一括埋め戻し土と推測される。

《出土遺物》埋土から縄文土器13点229.8g・土器細片7.8gが出土した。

《所見・時期》礫の出土や埋土の状況及び底面形状から、土坑墓の可能性はある。時期の詳細は不明である。

SK424土坑（遺構：第115図、付図1、図版36、遺物：第173図362、第61表）

《位置・確認状況》L Q 50に位置する。第Ⅱ層中で分布が確認された。

《規模・形態》平面形は、長軸0.79m (N-42° -W)、短軸0.49mの楕円形を呈す。確認面からの深さは0.10mである。底面は平坦で、壁は急に立ち上がる。廃絶に伴う長さ10～30cmの礫が投げ込まれている。

《出土遺物》埋土から縄文土器1点47.5gが出土し、これを図示した。362はⅡ群の深鉢形土器胴部で、摩滅が激しく全体像は不明だが、横位沈線下に長楕円文と想定される文様が描かれ、文様内側がL R斜縄文で充填されている。

《所見・時期》礫の出土や周囲の状況及び底面形状から、土坑墓の可能性はある。時期の詳細は不明である。

S K 425土坑 (遺構：第115図、付図1・2、図版37、遺物：第173図363・364、第213図684、第62・72表、図版76)

《位置・確認状況》L P 48・49に位置する。第Ⅱ層中を精査中、褐色土の分布が確認された。

《規模・形態》平面形は長軸2.49m (N-63° -E)、短軸1.87mの隅丸長方形を呈す。確認面からの深さは0.27mである。底面は平坦で、壁は急に立ち上がる。

《埋土》3層に分けた。全て洪水堆積土を基質とする。1層上位で、廃絶に伴う長さ8～46cmの礫の投げ込みが確認される。それぞれ混入物があることから、全て人為的な埋め戻し土と推測される。

《出土遺物》埋土から縄文土器48点789.7g・土器細片29.6g、石鏃A a類1点0.6g、RF 1点10.5g、剥片3点10.2gが出土し、このうち3点を図示した。363・364はⅡβ群の深鉢形土器である。363は口縁部、C 2かD 2類で、楕円沈線文、長楕円文と想定される組合せ文、364は縦位区画沈線文及び相対楕円文と想定される文様が描かれ、それぞれ文様内側が、R L斜縄文で充填されている。684は石鏃A a類である。

《所見・時期》遺物の出土及び埋土の状況から、土坑墓の可能性はある。時期は、出土遺物から、大木9b式期、縄文時代中期後葉と推定される。

S K 433土坑 (遺構：第115図、付図1・2、図版37、遺物：第173・174図365・366、第62表、図版65)

《位置・確認状況》L O 46・47、L P 46・47に位置する。第Ⅲ層上面を精査中、褐色土の分布が確認された。

《規模・形態》平面形は、長軸1.63m (N-43° -W)、短軸1.60mの円形である。確認面からの深さは0.47mである。底面は平坦で、壁は急に立ち上がる。確認面で比較的大きな礫が数点確認されている。

《埋土》3層に分けた。1～3層とも洪水堆積土を基質とする。堆積状況から、全て人為的な一括埋め戻し土で、1層には長さ19～44cmの礫が数点埋められている。

《出土遺物》底部付近から縄文土器15点1,561.1g、剥片1点7.6gが出土し、このうち土器2点を図示した。365はⅡ群の深鉢形土器である。口縁～頸部、B 2 a類で、頸部に横位区画沈線を巡らせ、胴部には長楕円文と想定される文様が描かれ、文様内側がL R斜縄文で充填されている。366はR L斜縄文の深鉢形土器胴～底部である。

《所見・時期》礫の出土や埋土の状況及び規模・形状から、貯蔵穴及び土坑墓のいずれかが考えられる。時期は、出土遺物から、大木9式期と推定される。

S K 436土坑 (遺構：第115図、付図1、図版37)

《位置・確認状況》L N 46・47、L O 46・47に位置する。第Ⅱ層中を精査中、褐色・にぶい黄褐色土の分布が確認された。北側は擾乱を受けている。

《規模》平面形は、長軸1.92m (N-20° -E)、短軸 [1.67] mの不定円形を呈す。確認面からの

深さは0.24mである。底面は平坦で、壁は南側が緩やかに、東及び西側では垂直に立ち上がる。

《埋土》3層に分けた。全て洪水堆積土を基質とする。1・2層は自然流入土、3層は廃絶時に投げ込まれたと考えられる長さ14~36cmの礫を含むことから、人為的な埋め戻し土と考えられる。

《所見・時期》時期の詳細は不明である。

SK437土坑（遺構：第116図、付図1・2、図版37、遺物：第213図685、第71表、図版79）

《位置・確認状況》LO47・48に位置する。第Ⅲ層上面を精査中、褐色土の分布が確認された。

《規模》平面形は、長軸 [1.89] m (N-57°-E)、短軸 (0.58) m の不整形円形を呈す。確認面からの深さは0.28mである。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

《埋土》3層に分けた。全て洪水堆積土を基質とする。混入物の入り方から、全て人為的な一括埋め戻し土と考えられる。

《出土遺物》埋土から、縄文土器17点281g、スクレイパーⅡBB類1点16.9g、石皿Ⅱ類3200gが出土し、このうち1点を図示した。685はスクレイパーである。

《所見・時期》礫の出土や埋土の状況及び底面形状から、土坑墓の可能性はある。時期の詳細は不明である。

SK438土坑（遺構：第115・116図、付図2、図版37）

《位置・確認状況》LP49・50、LQ49・50に位置する。第Ⅲ層上面を精査中、褐色土の分布が確認された。SN427焼土遺構、SK423土坑と重複して本遺構が旧いが、SK423と本遺構とは直接の重複関係にはない。

《規模・形態》平面形は、長軸1.40m (N-4°-W)、短軸1.05mの楕円形を呈す。確認面からの深さは0.10mである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

《埋土》洪水堆積土を基質とする単層で、最大で長さ42cmの礫の他、炭化物や第Ⅱ層土が混入されていることから、廃絶に伴う人為的な一括埋め戻し土と考えられる。

《所見・時期》底面付近での礫の出土状況から、土坑墓の可能性はある。時期は周囲の状況から、大木9式期と推定される。

SK440土坑（遺構：第22・116図、付図1、図版37）

《位置・確認状況》LQ50・51に位置する。第Ⅲ層上面を精査中、令和元年度調査区へ続く黒褐・暗褐色土の分布が確認された。P1672と重複して本遺構が新しい。

《規模・形態》平面形は、長軸1.83m (N-16°-W)、短軸 (0.31) m の楕円形を呈す。確認面からの深さは0.35mである。底面は鍋底状で、壁は緩やかに立ち上がる。

《埋土》4層に分けた。全て第Ⅱ層土を基質とする。混入物に乱れがないことから、全て廃絶後の自然流入土と考えられる。

《出土遺物》埋土から縄文土器10点105.2gが出土している。

《所見・時期》時期は、出土遺物から、大木9式期、縄文時代中期後葉と推定される。

SK441土坑（遺構：第114図、付図1、図版7）

《位置・確認状況》LJ46に位置する。基本土層⑩断面の観察より、第Ⅱ層中及び第Ⅲ層上面からの掘り込みが確認され、その後平面を精査したところ、不明瞭なにぶい黄褐色土の分布が確認された。SK419土坑と重複して本遺構が旧い。また、トレンチにより西側半分は欠損している。

《規模》平面形は、長軸 (0.92) m (N-16°-W)、短軸 (0.30) m の楕円形を呈す。確認面からの深さは0.31mである。底面はほぼ平坦で、壁は急に立ち上がる。

《埋土》洪水堆積土を基質とする単層で、自然流入土と考えられる。

《所見・時期》時期は、遺構の重複関係から、大木9式期と推定される。

SK442土坑（遺構：第9・89図）

《位置・確認状況》LH46に位置する。基本土層⑤断面を精査中、第II層中からの掘り込みが確認された。SI403竪穴建物跡、SK444土坑、SN443焼土遺構と重複し、本遺構はSK444、SN443より旧く、SI403より新しい。

《規模・形態》土層断面のみの検出である。幅は0.58m、確認面からの深さは0.34mである。底面は平坦で、壁は東側では急に、西側では途中から緩やかに立ち上がる。

《埋土》洪水堆積土を基質とする単層で、炭化物を含むことから、廃絶に伴う人為的な埋め戻し土と考えられる。

《所見・時期》埋土の堆積状況から土坑墓の可能性もある。時期は、遺構の重複関係及び周囲の状況から、大木9式期と推定される。

SK444土坑（遺構：第9・89図）

《位置・確認状況》LH46に位置する。基本土層⑤断面を精査中、第II層上面からの掘り込みが確認された。SI403竪穴建物跡、SK442土坑、SN443焼土遺構と重複して本遺構が新しい。

《規模・形態》土層断面のみの検出である。幅1.50m、確認面からの深さは0.26mである。底面は鍋底状で、壁は緩やかに立ち上がる。

《埋土》第II層土を基質とする単層で、混入物を含むことから、廃絶に伴う人為的な埋め戻し土と考えられる。

《所見・時期》埋土の堆積状況から土坑墓の可能性もある。時期は、遺構の重複関係及び周囲の状況から、大木9式期と推定される。

SK445土坑（遺構：第9・116図）

《位置・確認状況》LJ46に位置する。基本土層⑤断面を精査中、第II層上面からの掘り込みが確認された。SK446土坑と重複して本遺構が古い。

《規模・形態》土層断面のみの検出である。幅0.90m、確認面からの深さは0.12mである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

《埋土》洪水堆積土を基質とする単層で、廃絶後の人為堆積土か自然堆積土か判然としない。

《所見・時期》時期は、遺構の重複関係及び周囲の状況から、大木9式期と推定される。

SK446土坑（遺構：第9・116図）

《位置・確認状況》LJ46に位置する。基本土層⑤断面を精査中、第III層上面からの掘り込みが確認された。SK445土坑と重複して本遺構が新しい。

《規模・形態》土層断面のみの検出である。幅2.00m、確認面からの深さは0.20mである。底面は比較的平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

《埋土》第II層土を基質とする単層で、廃絶後の人為堆積土か自然堆積土か判然としない。

《所見・時期》時期は、遺構の重複関係及び周囲の状況から、大木9～10a式期と推定される。

SK1003土坑（遺構：第116図、遺物：第174図367・368、第62表、図版66）

《位置・確認状況》LQ50に位置する。第III層上面を精査中、黄灰色土の分布とともに円礫が確認された。

《規模・形態》平面形は、長軸0.62m（N-3°-E）、短軸0.52mの円形を呈す。確認面からの深さは0.24mである。底面は鍋底状で、壁は急に立ち上がる。

《埋土》2層に分けた。全て洪水堆積土を基質とする。幅14～23cmの亜円礫が数点入れられているこ

とや、混入物の入り方から、人為的な埋め戻し土と考えられる。

《出土遺物》縄文土器21点1,856.7gが底部より出土し、このうち2点を図示した。367・368はⅡβ群の深鉢形土器で、同一個体の可能性がある。367は口縁～頸部で、C3a類、368は胴部で、楕円渦巻文や楕円沈線文及び小楕円文の組み合わせ文と想定される文様が描かれ、文様内側がR L斜縄文で充填されている。

《所見・時期》礫の出土や埋土の状況から、土坑墓の可能性はある。時期は、出土遺物から、大木9b式期と推定される。

SK1142土坑（遺構：第21・116図、付図1）

《位置・確認状況》MA50・51に位置する。第Ⅱ層中を精査中に確認された。

《規模・形態》平面形は、長軸0.86m（N-35°-E）、短軸0.84mの略円形を呈す。確認面からの深さは0.17mである。底面は平坦で、壁は急に立ち上がる。

《出土遺物》縄文土器1点6.1gが底部より出土した。

《所見・時期》規模・形状及び周囲の状況から、土坑墓の可能性はある。時期の詳細は不明である。

SK1520土坑（遺構：第116図、付図1）

《位置・確認状況》LQ58に位置する。第Ⅲ層上面を精査中、北側が調査区外へ延びる暗褐色土の分布が確認された。

《規模・形態》平面形は、長軸[1.14]m（N-5°-E）、短軸（0.42）mの楕円形を呈す。確認面からの深さは0.33mである。底面は鍋底状で、壁は緩やかに、東側ではその後急に立ち上がる。

《埋土》2層に分けた。1・2層ともに、第Ⅱ層土を基質とする。混入物の入り方から、人為的な埋め戻し土と考えられる。

《出土遺物》埋土から縄文土器9点97.9gが出土した。

《所見・時期》埋土の状況から、土坑墓の可能性はある。時期は、出土遺物から、大木9式期、縄文時代中期後葉と推定される

⑥配石遺構

SQ05配石遺構（遺構：第117図、付図1、図版37）

《位置・確認状況》LQ48・49に位置する。第Ⅱ層上面を精査中、礫が集積した状況が確認された。

《規模・形態》長軸1.45m（N-78°-W）、幅1.22mの範囲に、長さ7～27cmの磨石・凹石を含む亜角礫～円礫が不整形にまとめて置かれていた。

《出土遺物》配石を構成する礫の中に、磨製石斧1点63.3g、磨石3点3,100g、凹石1点650gの転用が確認された。この他周辺から縄文土器53点1,072.5g・土器細片53.7gが出土した。

《所見・時期》時期の詳細は不明である。

SQ88配石遺構（遺構：第17・117図、付図1、図版34・37）

《位置・確認状況》ME52に位置する。第Ⅲ層上面を精査中、礫が集積した状況が確認された。

《規模・形態》長軸1.28m（N-18°-E）、幅0.8mの範囲に、長さ4～48cmの石皿を含む亜角礫や亜円礫が不整形にまとめて置かれていた。

《出土遺物》配石を構成する礫に、石皿Ⅱ類1点11,450gの転用が確認された。

《所見・時期》時期の詳細は不明である。

SQ90配石遺構（遺構：第18・117図、付図1、図版34・38）

《位置・確認状況》MF51・52に位置する。第Ⅲ層上面を精査中、コの字状の礫の配置が確認された。

《規模・形態》長軸2.04m（N-54°-E）、幅1.89mの範囲に、長さ10～50cm、厚さは5～10cmの

亜円角・亜円礫がコの字状に配置されていた。

《所見・時期》時期の詳細は不明である。

SQ183配石遺構（遺構：第117図、付図1、図版38、遺物：第174・175図369～371、第62表）

《位置・確認状況》MG49に位置する。第Ⅱ層中を精査中、礫及び土器のまとまりが確認された。

《規模・形態》長軸1.10m（N-14°-W）、短軸0.66mの範囲に、長さ12～21cm、厚さは4～15cmの亜角・亜円礫がまとめて置かれていた。

《出土遺物》礫周辺から、縄文深土器5点829.3gが出土し、このうち3点を図示した。214はS188 竪穴建物跡出土片と接合した。369はⅡ群の深鉢形土器である。胴部で、長楕円文と想定される文様が描かれ、文様内側がR L斜縄文で充填されている。370はR L、371はL R斜縄文の深鉢形土器である。370は口縁～胴部で、A 2 a 類、口縁部にはミガキが施されている。371は胴部、外面で一部ナデにより地文が消されている。

《所見・時期》祭祀に関連する可能性がある。時期は、礫周辺から出土した土器から、大木9 b 式期と推定される。

SQ193配石遺構（遺構：第21・117図、付図1、図版38）

《位置・確認状況》MC47に位置する。第Ⅲ層上面を精査中、礫の配置が確認された。

《規模・形態》長さ8～39cm、厚さ8～23cmの礫4点が、長軸0.39m（N-12°-W）、短軸0.33mの範囲で扁平な礫が立てられ、その周辺に他の礫が配置されていた。

《埋土》洪水堆積土を基質とする単層で、礫が差し込むように入れられ、その隙間に入り込んだ自然流入土である。

《所見・時期》祭祀に関連する可能性がある。時期の詳細は不明である。

SQ229配石遺構（遺構：第18・20・117図、付図1、図版38）

《位置・確認状況》MF49に位置する。第Ⅲ層上面で長形の礫のまとまりが確認された。S I 112 竪穴建物跡と重複して本遺構が古い。

《規模・形態》長軸1.12m（N-58°-W）、幅0.56mの範囲に、長さ8～38cm、厚さは10～22cmの長形の磨石を含めた亜角礫がクランク状に配置されていた。

《出土遺物》配石を構成する礫に、磨石1点1,200gの転用が確認された。

《所見・時期》祭祀に関わる可能性がある。時期は、遺構の重複関係から、大木9式期と推定される。

SQ230配石遺構（遺構：第18・118図、付図1、図版38）

《位置・確認状況》MF49に位置する。第Ⅲ層上面で、大小の礫のまとまりが確認された。

《規模・形態》長軸0.75m（N-58°-E）、幅0.44mの範囲に長さ5～26cm、厚さ2～12cmの円・長形の亜角・亜円礫が使われ、円礫の間にわずかに孤状を描くように小さな礫が配置されていた。

《出土遺物》配石を構成する礫の中から、磨石2点3,300g確認された。

《所見・時期》祭祀に関わる可能性がある。時期は、周囲の状況から、大木9式期と推定される。

SQ231配石遺構（遺構：第20・118図、付図1、図版38、遺物：第214図686、第72表）

《位置・確認状況》ME50に位置する。第Ⅲ層上面で、礫のまとまりが確認された。

《規模・形態》長軸0.98m（N-55°-E）、幅0.67mの範囲に凹石を含む長さ10～22cm、厚さ4～12cmの亜角・亜円礫が配置されていた。石皿が西側に離れて置かれていたが、他は密集し、わずかに孤状に近い並び方をしていた。

《出土遺物》配石を構成する礫に、石皿1類1点3,470g、凹石1点950gの転用が確認され、このうち石皿1点を図示した。686は半分欠損しているが、縁や脚を作出している。

《所見・時期》祭祀に関わる可能性がある。時期は、周囲の状況から、大木9式期と推定される。

SQ412配石遺構（遺構：第118図、付図2、図版38）

《位置・確認状況》L J 46、L I 46に位置する。第II層上面を精査中、大小の礫が意図的に配置された状態を確認した。

《規模・形態》長軸1.15m（N-5°-W）、幅0.60mの範囲に、長さ9～46cm、幅8～2.5cm、厚さ10～22cmの角～亜円礫が並べられ、比較的大きな礫が北側にあり、南に直線上に置かれていた。

《出土遺物》配石を構成する礫に石棒原材1点1,550gが確認された他、周辺から縄文土器1点2.6gが出土した。

《所見・時期》祭祀に関わる可能性がある。時期は、周囲の状況から、大木9式期と推定される。

⑦土器埋設遺構

SR09土器埋設遺構（遺構：第23・118図、付図1、図版38、遺物：第175図372、第62表、図版66）

《位置・確認状況》L Q 46に位置する。第II層上面を精査中、にぶい黄褐色土の分布の外側に、土器が正位に埋設された状況が確認された。

《規模・形態》掘方の平面形は、長軸（0.41）m（N-93°-W）、短軸（0.10）mの円形を呈す。確認面からの深さは0.11mである。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。埋設土器は径[40]cm、高さ（22）cmの上部が削平により欠損した深鉢形土器で、正位の状態で埋められていた。

《埋土》2層に分けた。1層は洪水堆積土を、2層は第II層土を基質とする。1層は埋設土器内への埋め戻し土、2層は構築時に土器を据えるための裏込土である。

《出土遺物》埋土から埋設土器を含め縄文土器13点670.8gの他、石皿Ⅱ類1点850g出土し、このうち埋設土器1点を図示した。372はR L斜縄文の深鉢形土器胴部である。

《所見・時期》時期は、埋設土器から、大木9～10a式期と推定される。

SR19土器埋設遺構（遺構：第17・118図、付図1、図版39、遺物：第175図373、第62表、図版66）

《位置・確認状況》MH56位置する。第II層上面を精査中、褐色土の分布の中に、上部を削平された埋設土器が確認された。S I 03・27竪穴建物跡と重複し、本遺構はS I 03より旧く、S I 27より新しい。また、南側は攪乱を受けている。

《規模・形態》掘方の平面形は、長軸0.43m（N-87°-E）、短軸（0.39）mの円形を呈す。確認面からの深さは0.14mである。埋設土器は、径31cm、高さ13cmの鉢形土器②底部が正位の状態で埋められていた。

《層序》3層に分けた。全て洪水堆積土を基質とする。全て人為的な埋土で、1層は埋め戻し土、2・3層は構築時の裏込土である。

《出土遺物》埋設土器を含め、埋土から縄文土器9点931.4g（赤彩土器1点855.8g）・土器細片8.5gが出土し、埋設土器1点を図示した。373はⅡ・Ⅲ群の鉢形土器②である。口縁～底部、B類で、頸部にU字状の溝を設ける。口径は比較的小さい。頸部は凹凸のある凝った作りで、突起部には穿孔が施されている。文様は突起部に隆沈線相対渦巻文B、胴部にC字状文、逆U字状楕円文、逆U字状沈線文が描かれ、文様内側がR L R斜縄文で充填されている。さらに外面全体及び内面底部付近は、赤色塗彩が施されている。体部下半は炭化物の付着が激しい。

《所見・時期》時期は、埋設土器及び周辺の状況から、大木9b・10a式期と推定される。

SR83土器埋設遺構（遺構：第7・17・118図、付図1、図版39、遺物：第175図374、第62表、図版66）

《位置・確認状況》M I 55、M J 55に位置する。S K I 42竪穴建物跡を精査中、第II層中で、逆位に

置かれた深鉢形土器と調査区外へ広がる暗褐色土の分布を確認した。SK I 42堅穴建物跡と重複して古い。

《規模・形態》掘方の平面形は、長軸0.79m (N-70°-E)、短軸(0.32)mの楕円形を呈す。確認面から底面までの深さは0.26mである。深鉢形土器は、径15cm、高さ15cmで、逆位に埋められている。

《埋土》2層に分けた。1・2層ともに第II層土を基質とする。混入物の入り方から、人為的な一括埋め戻し土と考えられる。

《出土遺物》埋設土器である深鉢形土器1点1192.0gが出土し、これを図示した。374はRLR縄文斜縄文の深鉢形土器である。胴～底部で、底部圧痕は網代痕(蓋タイプ)の痕跡がわずかに確認される。

《所見・時期》時期は、埋設土器及び周辺の状況から、大木9～10a式期と推定される。

SR235土器埋設遺構(遺構：第19・118図、付図1、図版39、遺物：第176図375・376、第62表、図版66、理化学分析：第77・78表、第233図)

《位置・確認状況》MB54に位置する。第III層上面を精査中、褐・暗褐色土の分布が確認された。精査中埋設土器が確認されたため、土器埋設遺構として扱うこととした。

《規模・形態》掘方の平面形は、長軸(0.46)m (N-40°-W)、短軸[0.49]mの円形を呈す。確認面からの深さは0.56mである。埋設土器は、最大径0.40m、高さ0.46cmの底部が欠損した深鉢形土器で、正位に埋められていた。

《埋土》2層に分けた。1層は第II層土、2層は洪水堆積土を基質とする。1層は埋め戻し土、2層は構築時の裏込土である。

《出土遺物》埋設土器である深鉢形土器1点の他、埋設土器内から筒状土製品1点の2点10,305.7gが出土し、これら2点を図示した。375は体部上半はLR斜縄文、下半はRLR斜縄文の深鉢形土器である。口縁～胴部、D3a類で、口縁部にはミガキが施されている。376は筒状土製品で、RL斜縄文を地文とする。体部は内傾し、その後垂直に立ち上がる。

《所見・時期》時期は、埋設土器及び周囲の状況から、大木9式期と推定される。また、2層上位から出土した炭化物の放射性炭素年代測定(暦年較正年代)では、2903-2701cal BC (2σ)の年代値が、樹種同定によりクリという結果が得られた(試料11)。

SR434土器埋設遺構(遺構：第118図、付図2、図版39、遺物：第176図377、第62表、図版67、理化学分析：第84～86表、第243図)

《位置・確認状況》LH54に位置する。第III層上面を精査中、円礫が置かれた状況が確認された。礫を残して周辺を掘り下げたところ、礫下から埋設土器が出土したため、土器埋設遺構として調査した。

《規模・形態》掘り込みの平面形は、長軸0.39m (N-85°-E)、短軸0.37mの略円形である。確認面からの深さは0.24mである。底面は平坦で、壁は急に立ち上がる。掘り込み底面に、長さ46cm、厚さ4cmの扁平な礫が置かれ、その上に胴～底部の北側が欠けた深鉢形土器が正位に据えられ、さらに欠けた部分に別の土器片が当てられ、さらにその上に床面の礫同様、扁平な長さ46cm、厚さは6cmの礫が置かれていた。

《埋土》3層に分けた。1・2層は第II層土、3層は第III層土を基質とする。全て人為的な埋め戻し土である。1・2層は埋設土器の埋土で、2層は炭化物を含む。3層は構築時の裏込土である。埋設土器内からの採取土で土壌分析を実施した(サンプル⑨)。

《出土遺物》埋設土器として深鉢形土器1点1,050.4gが出土し、これを図示した。377はIIα群、頸

～底部で、頭部は括れている。口縁部に横位隆沈線、頭～胴部に縦位隆沈線を描いて区画を設けている。中央部では、横位隆沈線と縦位区画隆沈線の交点付近に円文を、側面では胴部中に隆沈線高巻文が描かれ、それぞれ胴部にも区画が設けられている。区画内側はLR斜縄文で充填されている。

《所見・時期》時期は、埋設土器から、大木9 a 式期と推定される。

⑧焼土遺構

SN21焼土遺構（遺構：第119図、付図1）

《位置・確認状況》MG55に位置する。S I 46堅穴建物跡堆積土上面で、焼土の分布が確認された。S I 46堅穴建物跡と重複して、本遺構が新しい。

《規模・形態》平面形は、長軸0.66m、短軸0.42mの不整形を呈す。被熱厚は2～20cmである。

《層序》単層で、被熱痕である。

《所見・時期》周辺には上屋施設となる柱穴が認められないため、野外の地床炉の可能性があるが、検出面の標高から、S I 46堅穴建物の廃絶に伴い堆積土中で火が焚かれた可能性がある。時期は、遺構の重複関係から、大木9 b・10 a 式期と推定される。

SN22焼土遺構（遺構：第119図）

《位置・確認状況》MG54に位置する。第Ⅲ層上面を精査中、焼土の分布が確認された。S I 102堅穴建物跡と重複して本遺構が新しいが、直接の重複関係にはない。

《規模・形態》平面形は、長軸0.20m、短軸0.17mの不整形を呈す。被熱厚は1～4cmである。

《層序》単層で、S I 102堅穴建物跡の埋土上で、火が焚かれた際の被熱痕である。

《出土遺物》周辺から縄文土器10点261.6g・土器細片3.9g、剥片1点2.9gが出土した。

《所見・時期》周辺には上屋施設となる柱穴が認められないため、野外の地床炉の可能性があるが、検出面の標高から、S I 102堅穴建物の廃絶に伴って堆積土中で火が焚かれた可能性がある。時期は、遺構の出土遺物及び重複関係から、大木9 b 式期と考えられる。

SN29焼土遺構（遺構：第119図、付図1、図版39）

《位置・確認状況》ME55に位置する。第Ⅲ層上面で、焼土及び炭化物の分布が確認された。P1026・1027と重複して本遺構が古い。

《規模・形態》平面形は、長軸1.14m、短軸0.88mの不整形を呈す。被熱厚は2～10cmである。中央部及び周辺に炭化物が堆積している。

《層序》2層に分けた。1層は使用時に形成された炭化物層で、廃絶時の状態を残す。2層は被熱痕である。

《出土遺物》周辺から縄文土器6点139.0gが出土した。

《所見・時期》周辺には上屋施設となる柱穴が認められないため、野外の地床炉の可能性ある。西側に隣接するSN30焼土遺構でも火が焚かれた痕跡があるため、本遺構と密接な関係にあると考えられる。時期は、出土遺物から、大木9 b 式期と推定される。

SN30焼土遺構（遺構：第119図、付図1、図版39、遺物：第176図378、第62表）

《位置・確認状況》ME55に位置する。第Ⅲ層上面を精査中、暗褐色土の分布が確認された。

《規模・形態》掘方の平面形は、長軸0.83m（N-8°-E）、短軸0.58mの楕円形である。確認面からの深さは0.26mである。底面は平坦で、壁は急に立ち上がる。中位で焼土の分布が見られる。焼土の平面形は、長軸0.99m、短軸0.58mの不整形で、被熱厚は2～4cmである。

《埋土》4層に分けた。1層はⅡ層土、4層は洪水堆積土を基質とする。1層は廃絶に伴う埋土、2・3層は使用時の被熱痕で、由来は4層と同様であるが、被熱により変色していた。それぞれ強被

熱・弱被熱範囲である。4層は構築時に埋め戻し、上面で火が焚かれたと考えられる。

《出土遺物》埋土から縄文土器22点363.1g・土器細片2.1gが出土し、このうちミニチュア深鉢形土器1点を図示した。口縁〜胴部、A1a類で、渦卷文等の文様が描かれ、文様内側がR L斜縄文で充填されている。

《所見・時期》中位層上で火が焚かれた痕跡が残る。炭化物層が確認できないことから、廃絶時に掻き出されたと考えられる。周辺には上屋施設となる柱穴が認められないため、野外の地床炉の可能性はある。東側に隣接するSN29焼土遺構でも火が焚かれた痕跡があるため、本遺構と密接な関係にあると考えられる。時期は、出土遺物及び周囲の状況から、大木9b式期と推定される。

SN76焼土遺構（遺構：第119図、付図1）

《位置・確認状況》MD54第Ⅲ層上面を精査中、焼土の分布が確認された。

《規模・形態》平面形は、長軸0.59m、短軸0.31mの不定形を呈す。被熱厚は6～12cmである。

《層序》2層に分けた。1・2層とも被熱痕で、それぞれ強被熱・弱被熱範囲である。

《所見・時期》周辺には上屋施設となる柱穴が認められないため、野外の地床炉の可能性はある。時期の詳細は不明である。

SN79焼土遺構（遺構：第119図、付図1）

《位置・確認状況》MC54に位置する。第Ⅲ層上面を精査中、焼土の分布が確認された。

《規模・形態》平面形は、長軸0.38m、短軸0.35mの不定形を呈す。被熱厚は1～10cmである。

《層序》単層で、被熱痕である。

《所見・時期》周囲には上屋施設となる柱穴が認められないため、野外の地床炉の可能性はある。時期の詳細は不明である。

SN104焼土遺構（遺構：第119図、付図1、遺物：第176図379、第62表）

《位置・確認状況》LS45に位置する。第Ⅱ層中を精査中、焼土の分布が確認された。S I 225堅穴建物跡と重複して、本遺構が新しいと想定される。

《規模・形態》焼土の平面形は、長軸0.72m、短軸0.61mの楕円形を呈す。被熱厚は2～4cmである。

《層序》単層で、被熱痕である。

《出土遺物》周辺から縄文土器1点76.6g・土器細片33.4gが出土し、このうち深鉢形土器1点を図示した。379はⅡβ群の口縁部、C2b類で、長楕円文及び隆沈線渦卷懸垂文と想定される文様が描かれ、文様内側がL R斜縄文で充填されている。

《所見・時期》周辺で多量の土器が出土しているが、S I 225に関わる遺物の可能性もあり、その区分は難しい。周囲には上屋施設となる柱穴が認められないため、野外の地床炉の可能性はある。時期は、周辺の出土遺物及び遺構の重複関係から、大木9b式期と推定される。

SN114焼土遺構（遺構：第119図、付図1）

《位置・確認状況》MF56に位置する。第Ⅳ層地山上面を精査中、焼土の分布が確認された。

《規模・形態》平面形は長軸0.21m、幅0.15mの楕円形を呈す。被熱厚は未計測である。

《層序》単層である。被熱痕で、弱被熱範囲である。

《所見・時期》周囲には上屋施設となる柱穴が認められないため、野外の地床炉の可能性はある。時期の詳細は不明である。

SN123焼土遺構（遺構：第119図、付図1）

《位置・確認状況》LQ45・46に位置する。第Ⅱ層中を精査中、焼土と炭化物の分布が確認された。

《規模・形態》平面形は、長軸0.66m、短軸0.38mの不定形を呈す。被熱厚は2～8cmである。灰の

掻き出しにより形成された凹みの深さは、最大で6 cmある。

《層序》3層に分けた。1層は第Ⅱ層土を基質とする。炭化物を含むことから、使用時に形成された炭化物や灰が掻き出された後、凹みに流入した堆積土、2・3層は被熱痕で、それぞれ強被熱・弱被熱範囲である。

《所見・時期》周囲には上屋施設となる柱穴が認められないため、野外の地床炉の可能性はある。時期の詳細は不明である。

S N124焼土遺構（遺構：第119図、付図1）

《位置・確認状況》L Q45に位置する。第Ⅱ層中を精査中、西側が攪乱を受け削平された焼土の分布が確認された。

《規模・形態》焼土は2か所からなり、西側の平面形は、長軸（14）cm、短軸12cmの不整形、その東側は長軸13cm、短軸5 cmの不整形を呈す。被熱厚は西側焼土で1～2 cmである。

《層序》2層に分けた。被熱痕である。1層が強被熱、2層が弱被熱範囲である。

《所見・時期》周囲には上屋施設となる柱穴が認められないため、野外の地床炉の可能性はある。時期の詳細は不明である。

S N125焼土遺構（遺構：第120図、付図1、遺物：第176図380、第62表、図版67）

《位置・確認状況》L R45、L S45に位置する。S I48竪穴建物跡を精査中、床面から東側が攪乱を受け欠損した黒褐～黄灰色及び灰黄褐～暗灰黄色土の分布が確認された。S I48・225竪穴建物跡と重複し、本遺構は、S I48より旧く、S I225より新しい。

《規模・形態》掘方の平面形は長軸 [2.06] m、短軸1.60mの不整形を呈す。確認面からの深さは0.69mである。底面はほぼ平坦で、壁は急に立ち上がる。土層観察から、中位層で焼土が検出された。被熱厚は2～9 cmである。

《層序》5層に分けた。2～5層は洪水堆積土、1層は第Ⅱ層土と洪水堆積土の混土を基質とする。4層は被熱痕で、弱被熱範囲である。5層と同質土が被熱により変色している。1～3層は遺構廃絶に伴う埋め戻し土、2層はその下位層である3～5層を抉るように堆積していることから、再度掘り返された可能性がある。4・5層が埋め立てられた後、火が焚かれたと考えられる。

《出土遺物》埋土から縄文土器15点796.5g（赤彩土器1点14.2g含む）、円盤状土製品1点8g、おね込みと思われる近世磁器碗1点1.9gが出土し、このうち深鉢形土器1点を図示した。380はⅡα群口縁～胴部、A2a類である。隆沈線渦巻懸垂文、円文、楕円文と想定される文様が描かれ、文様内側がL R、R L R斜縄文で充填されている。口縁部にはミガキ調整が施されている。

《所見・時期》周囲には、上屋施設となる柱穴が認められないため、野外の地床炉の可能性はある。時期は、出土遺物及びS I48・225との重複関係から、大木9b式期と推定される。

S N126焼土遺構（遺構：第120図、付図1）

《位置・確認状況》L R46に位置する。第Ⅲ層上面を精査中、西側が攪乱を受け削平された焼土の分布が確認された。

《規模・形態》平面形は、長軸（0.19）m、短軸0.21mの不定形を呈す。被熱厚は2～5 cmである。

《層序》単層で、被熱痕である。弱被熱範囲である。

《所見・時期》周囲には上屋施設となる柱穴が認められないため、野外の地床炉の可能性はある。時期の詳細は不明である。

S N127焼土遺構（遺構：第120図、付図1）

《位置・確認状況》L Q46、L R46に位置する。第Ⅲ層上面を精査中、焼土の分布が確認された。

《規模・形態》3か所に分布している。焼土の平面形は、東から長軸0.18m、短軸0.05mの弧状で、中央は長軸0.13m、短軸0.10mの不定形、西側のものは最大で、平面形は長軸0.52m、短軸0.40mの不定形を呈す。被熱厚は西側で1～2cmである。

《層序》単層で、被熱痕である。弱被熱範囲である。

《所見・時期》周囲には上屋施設となる柱穴が認められないため、野外の地床炉の可能性はある。時期の詳細は不明である。

SN130焼土遺構（遺構：第120図、付図1、図版39）

《位置・確認状況》LR46に位置する。第Ⅲ層上面を精査中、西側が攪乱により削平された焼土の分布が確認された。SI122竪穴建物跡と重複して、本遺構が新しい。

《規模・形態》平面形は、長軸0.93m、短軸0.42mの不整楕円形を呈す。被熱厚は1～4cmである。

《層序》2層に分けた。1・2層は被熱痕で、それぞれ強被熱・弱被熱範囲である。

《所見・時期》周囲には上屋施設となる柱穴が認められないため、野外の地床炉の可能性はある。時期の詳細は不明である。

SN131焼土遺構（遺構：第120図、付図1）

《位置・確認状況》LR46に位置する。第Ⅲ層上面を精査中、西側が攪乱を受け削平された焼土の分布が確認された。SI122竪穴建物跡と重複して本遺構が新しい。

《規模・形態》焼土の平面形は、長軸0.44m、短軸0.42mの不定形を呈す。被熱厚は1～3cmである。

《層序》単層で、被熱痕である。弱被熱範囲である。

《出土遺物》周辺から縄文土器1点39.1gが出土した。

《所見・時期》周囲には上屋施設となる柱穴が認められないため、野外の地床炉の可能性はある。時期の詳細は不明である。

SN135焼土遺構（遺構：第120図、付図1、図版39）

《位置・確認状況》LS51に位置する。第Ⅱ層上面を精査中、東及び西側で攪乱を受け削平された焼土及び炭化物の分布が確認された。

《規模・形態》平面形は、長軸(0.65)m、短軸0.36mの不定形である。被熱厚は1～4cmである。炭化物は北側に分布している。

《層序》3層に分けた。1層は使用時に形成された炭化物層で、廃絶時の状況を示す。掻き出され、窪地に堆積している。2・3層は被熱痕で、それぞれ強被熱・弱被熱範囲である。

《出土遺物》周辺から縄文土器1点70.4gが出土した。

《所見・時期》周囲には上屋施設となる柱穴が認められないため、野外の地床炉の可能性はある。時期は、周囲の状況から、大木9b・10a式期と推定される。

SN136焼土遺構（遺構：第120図、付図1）

《位置・確認状況》LS52に位置する。第Ⅱ層上面を精査中、北及び西側は攪乱を受け削平された焼土及び炭化物の分布が確認された。SI104竪穴建物跡と重複して、本遺構が新しい。

《規模・形態》平面形は、長軸0.60m、短軸0.4mの不定形である。被熱厚は1～5cmである。炭化物は西側に集中して堆積していた。

《層序》3層に分けた。1層は使用時に形成された炭化物層で、廃絶時の状況を示す。掻き出され、窪地に堆積している。2・3層はSI104竪穴建物跡埋土上面での被熱痕で、それぞれ強被熱・弱被熱範囲である。

《所見・時期》周囲には上屋施設となる柱穴が認められないため、野外の地床炉の可能性はある。時

期は遺構の重複関係から、大木9b・10a式期と推定される。

SN137焼土遺構（遺構：第120図、付図1）

《位置・確認状況》LR47・48、LS47に位置する。第II層上面を精査中、中央及び東・南西側で攪乱を受け削平された焼土の分布が確認された。

《規模・形態》平面形は、長軸0.64m、短軸0.57mの不定形である。被熱厚は1～8cmである。炭化物は西側に集中して堆積していた。

《層序》2層に分けた。1・2層は被熱痕で、それぞれ強被熱・弱被熱範囲である。

《所見・時期》周囲には上屋施設となる柱穴が認められないため、野外の地床炉の可能性はある。時期の詳細は不明である。

SN149焼土遺構（遺構：第120図、付図1）

《位置・確認状況》LR47に位置する。第III層上面を精査中、南側が攪乱を受け削平された焼土及び炭化物の分布が確認された。SI122竪穴建物跡と重複して本遺構が新しい。

《規模・形態》焼土の分布は東西2箇所からなり、東側の平面形は長軸[0.78]m、短軸(0.23)mの不整形を、西側は長軸0.31m、短軸0.18mの不整形を呈す。西側焼土の被熱厚は1～9cmである。

《層序》3層に分けた。1層は使用時に形成された炭化物が掻き出され、窪みに堆積したものである。2・3層は被熱痕で、それぞれ強被熱・弱被熱範囲である。

《所見・時期》周囲には上屋施設となる柱穴が認められないため、野外の地床炉の可能性はある。時期の詳細は不明である。

SN155焼土遺構（遺構：第120図、付図1）

《位置・確認状況》MD48、ME48に位置する。第III層上面を精査中、焼土の分布が確認された。P1223と重複して本遺構が古い。

《規模・形態》平面形は、長軸0.90m、幅(0.69)mの不整形円形を呈す。被熱厚は1～3cmである。

《層序》単層である。被熱痕で、弱被熱範囲である。

《所見・時期》周囲には上屋施設となる柱穴が認められないため、野外の地床炉の可能性はある。時期の詳細は不明である。

SN158焼土遺構（遺構：第120図、付図1）

《位置・確認状況》MA53に位置する。第III層上面を精査中、焼土の分布が確認された。

《規模・形態》東西2か所に分布している。焼土の平面形は、それぞれ西側では長軸0.90m、短軸0.78mの不整形を、東側では長軸0.62m、短軸0.42mの不定形を呈す。被熱厚は、西側では1～10cm、東側では1～6cmである。

《層序》2層に分けた。1・2層は被熱痕で、それぞれ強被熱・弱被熱範囲である。

《出土遺物》周辺から縄文土器4点64.2gが出土した。

《所見・時期》周囲には上屋施設となる柱穴が認められないため、野外の地床炉の可能性はある。時期の詳細は不明である。

SN162焼土遺構（遺構：第121図、付図1）

《位置・確認状況》MD51に位置する。第III層上面を精査中、焼土の分布が確認された。

《規模・形態》平面形は長軸0.23m、幅0.20mの不整形円形を呈す。被熱厚は15～17cmである。

《層序》単層で、被熱痕である。

《所見・時期》周囲には上屋施設となる柱穴が認められないため、野外の地床炉の可能性はある。時期の詳細は不明である。

SN167焼土遺構（遺構：第121図、付図1）

《位置・確認状況》LT49に位置する。第Ⅲ層上面を精査中、東側が攪乱を受け削平された焼土及び炭化物の分布が確認された。

《規模・形態》平面形は、長軸（0.84）m、短軸（0.18）mの不整楕円形を呈す。被熱厚は2～6cmである。

《層序》3層に分けた。1層は使用時に形成された炭化物層である。2・3層は被熱痕で、それぞれ強被熱・弱被熱範囲である。

《所見・時期》周囲には上屋施設となる柱穴が認められないため、野外の地床炉の可能性はある。時期の詳細は不明である。

SN173焼土遺構（遺構：第121図、付図1、図版39）

《位置・確認状況》LQ46、LR46に位置する。第Ⅱ層中を精査中、焼土及び炭化物・褐色土の分布が確認された。P1274・1427と重複して本遺構が古い。

《規模・形態》土坑状の窪みの内側に焼土の分布がある。土坑状の窪みの平面形は、長軸1.53m（N-60°-W）、短軸1.20mの不整楕円形を呈す。確認面からの深さは0.10mである。底面は凹凸があり、壁は緩やかに立ち上がる。焼土の平面形は、長軸1.42m、短軸（1.19）mの不整楕円形を呈す。被熱厚は1～8cmである。北側が掻き出しと思われ、窪みに炭化物が堆積している。

《層序》3層に分けた。1層は洪水堆積土を基質とする。使用時に炭化物や焼土が掻き出されたことにより形成された堆積土で、自然流入土の可能性はある。2層は使用時に形成された炭化物層で、廃絶時の状況を示す。3層は被熱痕である。

《所見・時期》周囲には上屋施設となる柱穴が認められないため、野外の地床炉の可能性はある。時期は、周囲の状況から、大木9式期と推定される。

SN174焼土遺構（遺構：第121図、付図1）

《位置・確認状況》LQ46に位置する。第Ⅱ層中を精査中、焼土の分布が確認された。東側は調査時の切り返しにより、溜められた盛土のため、分布の広がりは未確認である。

《規模・形態》平面形は、長軸（16）cm、短軸24cmの不整形である。被熱厚は2～4cmである。

《層序》単層で、被熱痕である。

《出土遺物》周辺から縄文土器1点19gが出土した。

《所見・時期》周囲には上屋施設となる柱穴が認められないため、野外の地床炉の可能性はある。時期の詳細は不明である。

SN181焼土遺構（遺構：第121図、付図1、図版40）

《位置・確認状況》LT51に位置する。第Ⅲ層上面を精査中、サブトレレンチにより西側が一部欠損削平された焼土の分布が確認された。

《規模・形態》平面形は、長軸1.02m、短軸0.56mの不定形である。被熱厚は2～7cmである。

《層序》2層に分けた。被熱痕で、それぞれ弱被熱・強被熱範囲である。

《出土遺物》周辺から縄文土器5点117.3gが出土した。

《所見・時期》周囲には上屋施設となる柱穴が認められないため、野外の地床炉の可能性はある。時期の詳細は不明である。

SN208焼土遺構（遺構：第121図、付図1、図版40、遺物：第176図381・382、第215図687、第63・72表）

《位置・確認状況》ME47に位置する。第Ⅱ層中を精査中、黄褐～にぶい黄褐色、暗オリーブ褐～オ

リープ褐色土及び焼土・炭化物の分布が確認された。

《規模・形態》掘方の平面形は、長軸1.30m (N-24°-W)、短軸0.95mの不整楕円形を呈す。確認面からの深さは0.53mである。底面は平坦で、壁は急に立ち上がる。焼土は断面中位層のみで確認された。被熱厚は10~20cmである。

《埋土》6層に分けた。1・2・6層は洪水堆積土を基質とする。1・2層は炭化物が含まれることから廃絶に伴う埋土、3層は使用時に形成された炭化物層で、廃絶時の状況を残す。4・5層は被熱痕で、それぞれ強被熱・弱被熱範囲である。由来土は6層と同質と考えられる。6層は本遺構構築時の埋め戻し土で、上面が整えられた後に火が焚かれたと考えられる。

《出土遺物》埋土から、縄文土器40点1,046.1g (赤彩土器1点17.6g含む)、石核1点500g、剥片3点18gが出土し、このうち3点を図示した。381はII a群の深鉢形土器である。口縁部、C b類であるが、突起部が欠けている。隆沈線渦巻懸垂文が描かれている。382はR L斜縄文の深鉢形土器である。口縁部、C 2 a類で、口縁部にミガキが施されている。687は石核である。

《所見・時期》土坑状に掘り込んで埋め戻した後、上面をならし、火が焚かれたと考えられる。断面南側で、3・4層が見られないことから、使用後に掻き出され、削平された可能性がある。周囲には上屋施設となる柱穴が認められないため、野外の地床炉の可能性はある。時期は、出土遺物から、大木9 a式期と推定される。

S N217焼土遺構 (遺構: 第121図、付図1)

《位置・確認状況》MD46・47に位置する。第III層上面を精査中、焼土及び炭化物の分布が確認された。S K F 219プラスチック状土坑、P 1267と重複し、本遺構はS K F 219プラスチック状土坑より新しく、P 1267より古い。

《規模・形態》平面形は、長軸0.94m、短軸0.48mの不整楕円形を呈す。被熱厚は2~7cmである。南東側に炭化物が堆積する回みがある。炭化物は長軸 [0.94] m、幅0.84mの範囲で分布し、確認面からの深さは9cmである。

《層序》2層に分けた。1層は被熱痕である。2層は使用時に形成された炭化物層で、廃絶時の状況を示す。

《所見・時期》周囲には上屋施設となる柱穴が認められないため、野外の地床炉の可能性はある。時期の詳細は不明である。

S N244焼土遺構 (遺構: 第62図)

《位置・確認状況》L R 46に位置する。S I 122堅穴建物跡を精査中、S I 122埋土上面で焼土の分布が確認された。S I 122と重複して、本遺構が新しい。

《規模・形態》土層断面のみの検出である。被熱は幅0.11m、被熱層は1~4cmである。

《層序》単層で、被熱痕である。弱被熱範囲である。

《所見・時期》周囲には上屋施設となる柱穴が認められないため、野外の地床炉の可能性はある。時期の詳細は不明である。

S N304焼土遺構 (遺構: 第122図、付図2、図版40)

《位置・確認状況》L Q 52に位置する。第III層上面を精査中、焼土及び暗褐色土の分布が確認された。S I 306堅穴建物跡、P 1550と重複し、本遺構は、P 1550より旧く、S I 306より新しい。

《規模・形態》土坑状の掘り込み上面で火が焚かれていた。掘方の平面形は、長軸0.83m (N-44°-W)、短軸0.18mの楕円形を呈す。確認面からの深さは0.16mである。底面はほぼ平坦で、壁は北側では急に、南側では緩やかに立ち上がる。焼土の平面形は、長軸0.96m、短軸0.20m、被熱厚は3

～10cmで、西側に続く想定される。また北側の土坑状の掘り込みから外れた地点では、特に強く被熱していた。

《層序》2層に分けた。1層は第Ⅱ層土、2層は洪水堆積土を基質とする。1層は焼土を含み、部分的に強く被熱していた。使用時に何度も攪拌されていた可能性があり、焼土にまとまりがない。2層は遺構構築時の裏込土である。

《出土遺物》埋土から縄文土器5点127.8g・土器細片10.4gが出土した。

《所見・時期》周囲には上屋施設となる柱穴が認められないため、野外の地床炉の可能性はある。時期は、出土遺物及び遺構の重複関係から、大木9b式期と推定される。

S N413焼土遺構（遺構：第122図、付図1・2、図版40）

《位置・確認状況》LM46に位置する。第Ⅱ層中を精査中、焼土の分布が確認された。周辺を精査したところ、褐・黒褐色土も分布も確認された。

《規模・形態》土坑状の掘り込み上面で火が焚かれていた。掘方の平面形は、長軸[0.70]m（N-68°-W）、短軸0.34mの不整楕円形で、確認面からの深さは0.21mである。底面は鍋底状で、壁は東側では急に、西側では緩やかに立ち上がる。焼土の平面形は長軸12cm、短軸7mの不整楕円形を呈す。被熱厚は4～6cmである。

《層序》5層に分けた。3・5層は洪水堆積土、4層は第Ⅱ層土を基質とする。1・2層は被熱痕で、それぞれ強被熱・弱被熱範囲である。3～5層は、本遺構構築時に底部まで掘り下げられた後に埋め戻し、3層上面で火が焚かれたと想定される。

《出土遺物》埋土から縄文土器4点37.2gが出土している。

《所見・時期》周辺に上屋を構成する柱穴等が確認されていないことから、野外の地床炉と考えられる。時期は、出土遺物から、大木9式期と推定される。

S N427焼土遺構（遺構：第122図、付図1）

《位置・確認状況》LQ49に位置する。第Ⅲ層上面を精査中、焼土及び炭化物の分布が確認された。SK438土坑と重複して本遺構が新しい。

《規模・形態》土坑状の掘り込み上面で火が焚かれていた。掘方の平面形は、長軸[0.57]m（N-68°-W）、短軸[0.41]m、確認面からの深さは0.20mである。底面は平坦で、壁は北側が垂直に、南側では急に立ち上がる。また、焼土の平面形は、長軸0.58m、幅0.54mの不整形を呈す。被熱厚は8～11cmである。焼土の南約10cmの位置には、炭化物が長軸0.60m、短軸0.42m、確認面からの深さは8cmの窪みに溜まっていた。

《層序》4層に分けた。4層は洪水堆積土を基質とする。1層は使用時に形成された炭化物が掻き出され、窪みに堆積したものである。2・3層は4層上で火が焚かれた際の被熱痕で、それぞれ強被熱・弱被熱範囲である。4層は土坑状の掘り込み内の埋土で、径7～12cmの礫を含むことから、人為的な埋土と考えられ、この上面で火が焚かれていた。

《出土遺物》4層から剥片1点4gの他、埋土から縄文土器9点163.7g・土器細片5.8gが出土した。

《所見・時期》周辺に上屋施設が認められないが、建物跡に由来する炉跡と推測される。土坑状の掘り込み内に礫や炭化物を含むことから、旧段階の炉を廃棄し、その上で火が焚かれた可能性がある。時期の詳細は不明である。

S N443焼土遺構（遺構：第9・89図）

《位置・確認状況》LH46に位置する。基本土層⑤の断面を精査中、第Ⅱ層中で焼土の分布が確認された。S I 403堅穴建物跡、SK442・444土坑と重複し、本遺構はSK444より旧く、S I 403、SK

442より新しい。

《規模・形態》断面のみ確認のため、平面形は不明である。幅16cm、被熱厚は7cmである。

《層序》2層に分けた。1・2層は被熱痕で、それぞれ強被熱・弱被熱範囲である。

《所見・時期》野外の地床炉の可能性ある。時期の詳細は不明である。

SN447焼土遺構（遺構：遺構：第17・18・42図）

《位置・確認状況》MG53に位置する。S I 60竪穴建物跡を掘り下げ中、S I 60—1層と2・3層の層境で焼土の分布が確認された。S I 60と重複して本遺構が古い。

《規模・形態》平面形は長軸0.56m、幅0.08～0.18mの不整形で、被熱厚は未計測である。

《層序》単層で、被熱痕である。

《所見・時期》野外の地床炉の可能性ある。S I 60を廃絶後、埋まりきらない窪みを利用して火が焚かれたと考えられる。時期は、S I 60と同時期の大木9式期と推定される。

SN448焼土遺構（遺構：遺構：第17・18・42図）

《位置・確認状況》MH53に位置する。S I 60竪穴建物跡を掘り下げ中、S I 60—1層と2・3層の層境で焼土の分布が確認された。S I 60と重複して、本遺構が古い。

《規模・形態》平面形は長軸0.83m、幅0.22～0.55mの不定形を呈す。被熱厚は未計測である。

《層序》単層で、被熱痕である。

《所見・時期》野外の地床炉の可能性ある。S I 60を廃絶後、埋まりきらない窪みを利用して火が焚かれたと考えられる。時期は、S I 60と同時期の大木9式期と推定される。

⑨河川跡

S L 252河川跡（遺構：第23図、付図1、図版3・4、遺物：第177図383～385、第214・215図688・689・690、第62・72表、図版77）

《位置・確認状況》L S 42・43、L T 41～45、M A 41～45、M B 41～46、M C 40～46、M D 40～45、M E 40～45、M F 39～45、M G 39～45に位置する。南から蛇行し、調査区外西へ流れていく。

《規模・形態》調査区内での規模は、長さ〈32.3〉m、幅〈14.2～18.0〉mである。深さは目算であるが、最深度で1.20m程ある。

《出土遺物》上記グリッドにて取り上げた遺物（M B 46、M C 46は上端がわずかに接するだけなので除外）は、縄文土器196点5547.7g（赤彩土器2点25.7g含む）・土器細片65.3g、石匙C類1点9.5g、石錐C類1点4.6g、スクレイパーI B a類1点23.3g、剥片8点98.7g、磨石2点1,650g、凹石2点1,450gで、このうち6点を図示した。383・384はII β群の深鉢形土器である。383は口縁部、C 1 a類で、楕円系文と想定される文様が描かれている。384は口縁～胴部、C 2 a類で、楕円沈線文と楕円文の組合せ文が描かれ、それぞれ文様内側が383はL R、384はR L斜縄文で充填されている。また、383は外面が赤色塗彩されている。385はII・III群の深鉢形土器である。口縁部、C 1類で、横位沈線及び降沈線楕円系文と想定される文様が描かれ、文様内側がL R斜縄文や刺突文で充填されている。688は石錐C類、689は石匙C類、690はスクレイパーI B a類である。

《所見・時期》役内川の旧河道である。遺跡内で生活が営まれていた時期は開口していたと考えられる。

S L 316河川跡（遺構：付図2、図版3・40、遺物：第177図386～390、第215図691・692、第62・72表、図版67・77、理化学分析：第80表）

《位置・確認状況》L C 56、L D 55～62、L E 55～62、L F 57～62、L G 59～62に位置する。調査区外から続く旧河道が、蛇行し遺跡の東縁を形成しながら南から北へ延びていく。

《規模・形態》調査区内で確認された規模は、長さ(27.6)m(N-21°-E)、幅(4.0~10.1)mで南東から北西へ延びている。確認面から底面までの深さは、基本土層⑨で1.52mである。底面はほぼ平坦で、壁は西側は緩やかに立ち上がる。東側は周辺の地形観察から、西側と比べ急に立ち上がると推測される。

《埋土》4層に分けた。基本土層⑨の1~3・9層に相当する。1~3層は、遺跡内の基本土層Ⅱ層土、9層はⅢ層土にそれぞれ対応する。全て洪水や河川運搬による自然流入土である。

《出土遺物》2層から縄文時代晩期、3層から後期、9層から縄文時代中期後葉の土器が出土し、多量の遺物が出土している。上記グリッドにて取り上げた遺物は、縄文土器114点3757.2g・土器細片113g、石錐B b類1点2.3g、スクレイパーI A c 2類1点6.5g・II B b類1点7.3gで、剥片7点36.2g、RF 1点13g、石核1点129.9g、このうち6点を図示した。386~388はⅢ群の深鉢形土器である。386は口縁~胸部、A 1 a類で、渦巻文が描かれている。387・388は胸部である。387はU字状文やC字状渦巻文、388は横位S字状波状文と想定される文様が描かれている。それぞれ文様内側は、386・387がRL、388はL R斜縄文で充填されている。389はⅣ群の深鉢形土器である。389は口縁~底部で、C 3 b類、口縁部には沈線による区画文があり、重弧文や菱形文が描かれ、口縁部ではL R斜縄文が確認される。390はⅣ群の浅鉢形土器である。口縁~胸部、A類で、口縁部には退化した羊歯状文である列点文、体部には雲形文が描かれている。一部文様内側がL R斜縄文で充填されている。691は石錐B b類、692はスクレイパーII B b類である。またLE 56の川底から布状の炭化物が出土した。当初編組品の可能性が考えられたが、保存処理及び樹種同定の結果、ヤナギ科の自然木と判明した(第4章第2節)。

《所見・時期》最下層(基本土層⑨9層)から縄文時代中期後葉の土器が出土したことから、遺跡が最盛期を迎えていた中期後葉には、河川として水流があったことが想定される。後期前半や晩期の土器は、遺跡内からほとんど出土していないことから、上流からの流れ込みと想定される。時期は、出土遺物から縄文時代中期後葉~晩期中葉と推定される。

S L 439河川跡(遺構:付図2、図版3)

《位置・確認状況》L I 48・49、L J 48~50、L K 49~51、L L 50~52、L M 51・52、L N 51に位置する。Ⅱ層中及びⅢ層上面を精査中、南東から北東へ走る河川跡が確認された。S K 406・411土坑、P 1652・1653・1655・1657・1658・1667と重複して古い。

《規模・形態》規模は、長さ(21.0)m、幅3.00~3.95mで南東から北東へ、途中屈曲して延びる。深さは、目算であるが、約10~15cmである。

《所見・時期》S K 406土坑等の遺構群と重複して古いことから、遺跡内での生活が営まれていた時期以前、役内川の氾濫により形成された水流痕跡と考えられる。

⑩柱穴様ビット(遺構:図及び図版は第3~6表を参照、遺物:第177・178図391~399、第215図693、第63・72表、図版82)

調査区全域から柱穴様ビットが305基検出された。これら柱穴様ビットの埋土は基本的にはⅡ層土に由来するものであるが、検出面に関して明確に判断できるものが少ない。また、出土遺物も後の時代のものが埋土に入り込んだ可能性もある。このため時期区分を明瞭にすることが難しい。これらの柱穴様ビットの各位置については、遺構配置図や付図に掲載した。個々の規模や形態等は、柱穴様ビット一覧表に記載した。

《掲載遺物》出土遺物から10点を図示した。391~399は土器である。394・395・398はⅡ a群の深鉢形土器である。394は口縁~頸部、395は口縁部である。394はA 1 a類、隆沈線渦巻懸垂文及び栴円文の

組合せ文と想定される文様、395はC2b類で、隆沈線渦巻文、渦巻文と想定される文様が描かれている。398は胴部、。横位沈線下に楕円系文と想定される文様が描かれている。それぞれ文様内側が394・395はLR、398はRL斜縄文で充填されている。397はIIβ群の深鉢形土器である。口縁部、C2a類で、口縁部に横位沈線が巡り、胴部に多重楕円沈線文と想定される文様が描かれ、文様内側がLR斜縄文で充填されている。391・396・399はII群の深鉢形土器である。391・396は胴部である。391は不明な沈線文が描かれ、胴部下位には一部ナデにより消されたLR斜縄文が施されている。396は長楕円文及び相対楕円文と想定される文様が描かれている。399は胴～底部で、縦位区画沈線文及び逆U字状楕円文と想定される文様が描かれている。それぞれ文様内側は、396がRL、399はLR斜縄文で充填されている。392・393は同一個体でLR斜縄文の深鉢形土器である。それぞれ口縁～胴部、B2a類、または胴～底部で、口縁部にはミガキが施されている。693はII B b類のスクレイパーである。

3 遺構外出土遺物

遺構外出土遺物は、縄文土器17,602点408,639.4g(赤彩土器68点3,552.5g)・土器細片5,934.6g、土偶11点317.3g、円盤状土製品23点420.8g、動物形土製品1点19.3g、キノコ状土製品1点41.8g、石斧状土製品1点89.4g、三角形状土製品1点80g、不明土製品7点105.6g、石鏃15点24.6g、石鏃8点34.9g、石匙27点445.9g、石匱1点87.2g、異形石器1点8.8g、スクレイパー93点1,108.6g、楔形石器7点166.2g、打製石斧3点1,141.2g、磨製石斧4点297.8g、石皿141点226,600g、台石4点7,650g、敲石19点10,260g、磨石90点57,179g、凹石54点35,350.7g、石棒4点10,070g、砥石1点250g、RF37点456.9g、剥片813点7,621.2g、石核25点4,510g、奇石6点1,350g、石棒原石1点350g、中世では中国龍泉窯青磁碗1点20g、須恵器系陶器2点87.2g、瀬戸美濃産陶器2点18.2g、近世・近代では陶器(播鉢含む)58点1,028.8g、磁器56点347.3g、貝風呂1点33.5g、銭貨3点4gが出土した。このうち図示したものは、縄文土器162点、土偶・土製品17点、石鏃15点、石匙16点、石匙41点、石匱1点、異形石器1点、スクレイパー54点、楔形石器4点、打製石斧3点、磨製石斧3点、石皿2点、台石2点、敲石1点、凹石2点、石棒2点、石核3点、砥石1点、中近世陶磁器10点、銭貨3点である。

(1) 縄文土器・土製品

深鉢形土器(第178～197図400～558、第63～68表、図版67～75)

I群: 9点を図示した(第178・179図400～407、第63表、図版67・68)。401・402は口縁部、403は口縁～頸部、404は頸～胴部、405は把手部、406・407は胴部である。400～402は口縁部が残存し、分類が可能である。それぞれ400はC1a類、401はC2a類、402はD2b類である。403は口縁部先端が欠けているため、口縁分類は不明である。400は地文としてLR斜縄文が施されている。401・402・406はLR斜縄文で、文様内側が充填されている。400は口縁部から頸部にかけ、貼付による2条の斜位の隆帯文が頸部へ向かうとともに、頸部には2条の隆帯文が横位に巡る。401の上部はつまみにより抽出された突出部に隆沈線渦巻文が描かれ、突出部両側にはL原体側面圧痕が施されている。また、下部はLR斜縄文で充填され、上部同様に突出部直下にて渦巻状のL側面圧痕跡文が施されている。402は口縁突起部を透かし状にし、周辺に貼付による隆帯文が施されている。403は口縁部表側に隆沈線横位渦巻文を、裏側には貼付によるS字状隆帯渦巻文等の文様が描かれている。404は頸～胴部、頸部に横位隆沈線を巡らせ、横位隆沈線から、隆沈線渦巻文が下へ展開する文様が描かれている。405は把手部で、穿孔が施され、さらに全体に隆沈線渦巻懸垂文や隆沈線相対渦巻文等が描かれている。406は胴部で、上部に横位隆沈線文を、それに直交するように2条の縦位隆沈線文により区

画され、充填文下に円形または楕円形文と想定される文様が描かれている。北陸系土器の影響を受けていると考えられる。407は楕縁により、中央に縦位の沈線文が等間隔に並び、その左右は、外側から内側へ斜めに文様が描かれ、これも北陸系の影響と考えられる。また内面が赤色彩塗されている。

II α 群：25点を図示した（第179～182図408～432、第63・64表、図版68～70）。408～411・413・414・416・418・424は口縁～胴部、412・415・417・419～423・425は口縁部、429は頸部、426～428・430～432は胴部である。408～425は口縁部が残存し、分類が可能である。408・409がA 1 b類、410・411がA 3 b類、412はC 1 b類、413～420はC 2 b類、421～423はC 4 b類、424・425は突起部だけのC b類である。体部は410～412・418・429のように、頸部から口縁へ外反し立ち上がる形状が見られる。特に413は頸部に明確な段を持つ括れとなっている。隆沈線で文様が描かれ、それぞれ文様内側には、408・416・418・424・425・429がL R斜縄文、410～415・417・419・422・423・426～428・430はR L斜縄文、421はR L R文で充填されている。431・432の原体は不明である。408は口縁～頸部上位に、隆沈線相對渦巻文Bと横位相對渦巻文Aの組合せ文と円文が交互に配置され、頸部では横位隆沈線渦巻懸垂文と円文の組合せ文、胴部には縦位の隆沈線相對渦巻文Bと円文の組合せ文、隆沈線渦巻懸垂文と長楕円文の組合せ文が描かれている。409は、口縁部に隆沈線横位渦巻懸垂文と刺突文で充填した渦巻文の組合せ文や隆沈線相對渦巻文C、その下には渦巻文・楕円文と想定される文様が描かれている。410は口縁部に横位の渦巻懸垂文及び楕円文、頸部下には隆沈線渦巻懸垂文と長楕円文との組合せと想定される文様が描かれている。411は口縁～胴部で、頸部に3条の横位沈線文を巡らせ、その上2条の線の上に刺突文を連続して施し、胴部には隆沈線渦巻懸垂文や長楕円文が描かれている。412は横位隆沈線渦巻系文等が描かれている。413は頸部で上下に区画を設け、口縁部には隆沈線相對渦巻文B、隆沈線S字狀相對渦巻文C、胴部には隆沈線渦巻懸垂文、長楕円文が描かれている。414は隆沈線渦巻懸垂文や長楕円文、相對楕円文、415は隆沈線渦巻懸垂文や楕円文、416は隆沈線渦巻懸垂文や長楕円文が描かれている。417は隆沈線渦巻文が楕円文と想定される文様、418は横位隆沈線渦巻懸垂文等が描かれている。419・420は横位隆沈線渦巻文や楕円系文と想定される文様が描かれている。421は横位隆沈線渦巻文とその内側に相對円文が描かれる組合せ文、突起部に2つの隆沈線懸垂文の組合せ文がそれぞれ描かれている。422・423にも隆沈線渦巻系文が描かれているが詳細は不明である。また、422には外面口縁突起部が赤色彩塗されている。424は突起部にS字狀相對渦巻文B、隆沈線渦巻懸垂文、楕円文と想定され文様が描かれている。425は突起部のみで、指頭痕が確認されるとともに、隆沈線渦巻文や楕円文と想定される文様が描かれている。426は上位に隆沈線渦巻文等、下位には隆沈線渦巻懸垂文や長楕円文や相對楕円文、427は隆沈線相對渦巻文及び一部刺突文が充填された隆沈線楕円文と想定される文様が描かれている。428は隆沈線渦巻懸垂文や長楕円文等、429は隆沈線渦巻文等が、また430～432は不明瞭であるが、隆沈線渦巻系文等がそれぞれ描かれている。

II β 群：47点を図示した（第182～188図433～478、第64～66表、図版70～72）。433・435・437・440～445・448～452・455・457・460は口縁部、434・458は口縁～底部、436・438・439・446・454・456・459は口縁～胴部、447は口縁～頸部、461～465は頸～胴部または頸部、466～478は胴部である。433～458は口縁部が残存し、分類が可能である。433はA 1 a類、434～437はA 2 a類、438・439はB 2 b類、440～444はC 1 a類、445はC 1 b類、446～454はC 2 a類、455はC 2 b類、456・457はC 3 a類、458はC 4 a類である。体部は438・439のように頸部が大きく屈曲するものもあるが、ほとんどが緩やかに頸部から外反、または内湾するものに分かれる。文様内側には、それぞれ433・435～437・440・442・447・449・451～453・461・463・466・469・470・472・473・475はR L斜縄文、

434・438・441・443～446・448・450・454～459・462・464・465・467・471・474・477はLR斜縄文、439はRLR斜縄文、445・449は刺突文、478は櫛掻文で充填されている。459は残存状況により不明である。433は懸垂楕円連続文と想定される文様、434は逆U字状楕円文・相対楕円文B、435は楕円沈線文や長楕円文が描かれている。436は楕円沈線文と楕円文及び長楕円文、437・452～454・459は長楕円文と想定される文様が描かれている。438は頸部に縄文で充填させた横位波状文、胴部に楕円文と想定される文様が描かれている。439は頸部に2条1組の横位波状沈線文を巡らせ、その下の沈線文から渦巻文が続き、胴部には円文及び楕円文等と想定される文様が描かれている。440は相対渦巻文Aと楕円文と想定される円内単位文の他、刺突文で充填された三角形文、441は楕円文や渦巻文と想定される文様が描かれている。442はC字状文や懸垂楕円文と想定される文様、443は隆沈線相対渦巻文A、444は楕円沈線文や長楕円文と想定される文様が描かれている。445は刺突文で充填させた隆沈線相対渦巻文A及び三角形文、446は逆U字状沈線文と相対楕円文Bの組合せ文が描かれている。447は2条1組の波状沈線文上下に楕円文及び相対楕円文と想定される文様、448は波状沈線文及び多重楕円沈線文と想定される文様及び小楕円文、449は楕円沈線文と相対渦巻文及び二重楕円沈線文と小楕円の組合せ文と想定される文様が描かれている。450・451は楕円沈線文と楕円文と想定される文様、455・470は楕円沈線文、長楕円文と想定される文様が描かれている。456は逆J字状文と逆U字状楕円文と想定される組合せ文が描かれている。457は長楕円文及び相対楕円文と想定される文様、458は逆U字状楕円文と相対楕円文Bの他、縦位楕円渦巻懸垂文と逆U字状楕円文の組合せ文や隆沈線懸垂文が描かれている。460は隆沈線渦巻文と想定される文様、461は頸部に2条の横位沈線文を巡らせ、胴部には隆沈線懸垂文、長楕円文と想定される文様が描かれている。462は頸部に2条の横位沈線（沈線間には縄文）を巡らせ、胴部には懸垂楕円連続文が描かれている。463は体部上半に楕円沈線文と楕円文、体部下半に長楕円文及び相対楕円文が描かれている。464は頸部に1条の横位沈線を巡らせ、体部上半は不明であるが、体部下半に横位相対渦巻文Aと円文の円内単位文が描かれている。465は刺突文で充填した隆沈線渦巻文Aによる円内単位文等が描かれている。465は相対渦巻文Aによる円内単位文等、466は波状沈線文の波間にそれぞれ相対渦巻文A、467・474は縦位区画沈線文、相対楕円文及び長楕円文と想定される文様が描かれている。469は把手付で、中央が刺突文で充填された隆沈線渦巻文、469は逆J字状文と逆U字状楕円文の組合せ文が描かれている。471は縦位隆沈線、472は縦位区画沈線文及び相対楕円文、473は縦位区画沈線文及び長楕円文が描かれている。475は楕円沈線文及び長楕円文と想定される文様、476は隆沈線相対渦巻文Aによる円内単位文等が描かれている。477は縦位区画沈線文や相対楕円文等、478は楕円文と想定される文様がそれぞれ描かれている。

II型：16点を図示した（第188～190図479～497、第66表、図版72）。II α ・II β 群の判別が難しい土器群である。479～483は口縁部、484～491は胴部である。479～483は口縁部が残存し、分類が可能である。479はA3a類、480はA3bかB2b類、481はC1b類、482・483はC4a類である。479・482・496はLR斜縄文、483・484・486～490・493～495はRL斜縄文、485・491は刺突文、492はRL斜縄文及び刺突文が、文様内側に充填されているが、480・481・497は摩滅や残存状況不良のため詳細不明である。479は隆沈線渦巻文と想定される文様、480は隆沈線文、481は楕円系文が描かれている。482は隆沈線長楕円文と想定される文様、483は隆沈線楕円文や楕円文、隆沈線渦巻懸垂文と想定される文様が描かれている。484は隆沈線渦巻文や楕円文等、485は横位沈線や三角形文、486は隆沈線渦巻懸垂文やC字状文が描かれている。487は楕円文、488は縦位区画沈線文及び逆U字状楕円文及び相対楕円文Bと想定される文様が描かれている。489は逆U字状楕円文、490は横位隆沈線渦巻懸垂文や小楕円文、逆U字状楕円文等、491は相対渦巻文の変形文が描かれている。492は楕円文、493・494は逆

U字状楕円文が描かれている。495は楕円沈線文及び楕円文、496は縦位区画沈線文及び楕円文、497は不明沈線文が描かれている。また、479は内外面、486は外面が赤色塗彩されている。

Ⅱ・Ⅲ群：6点を図示した（第190図498～500）。全て口縁部で分類が可能である。498はC 1 a類、499はC 2 b類、500はC 2類である。499は逆J字状文、または縦位C字状文と想定される文様が描かれている。498は裝飾付で、楕円文と想定される文様、500は不明文様が描かれている。それぞれ498はL R斜縄文、500は刺突文で充填されている。また500は、外面赤色塗彩の痕跡がわずかに確認される。

Ⅱβ・Ⅲ群：4点を図示した（第190～191図501～504、第66表）。上述したⅡ・Ⅲ群の土器に比べ特定される時期が狭まる。501～504は胴部である。501・503・504はL R斜縄文、502はR L斜縄文及び刺突文で充填されている。501はU字状文や渦巻文系の文様、502は楕円沈線文や楕円文が描かれている。503は逆J字状文と逆U字状楕円文の組合せ文か縦位C字状文と想定される文様、504は懸垂連続楕円文と想定される文様が描かれている。

Ⅲ群：13点を図示した（第191～197図505～517、図版72・73）。507・508は口縁～胴部、509は頭～胴部、510～517は胴部である。505・506は口縁部部が残存し、分類が可能で、それぞれA 2 a類である。505～507・509・513・514・516・517はL R斜縄文、508・510～512・515はR L斜縄文で充填されている。507～509は、それぞれC字状渦巻文と想定される文様が描かれている。510・511は横位S字状波状文と想定される文様、509・514・515はC字状渦巻文と想定される文様が描かれている。510は不明沈線文、512はS字状波状文と想定される文様が描かれている。513は渦巻文系の文様、516はC字状渦巻文Aと想定される文様、517は隆沈線入組文波状文と想定される文様が描かれている。

地文土器：37点を図示した（第192～196図518～544、図版73）。深鉢形の地文土器である。518・520・522～524・526・527・535・537・539・541・542はL R斜縄文、521・528～532・534・536・538・540・543・544はR L斜縄文を、525は櫛掻文を、また、519はそれぞれ上がR L、下がL Rの縦位斜縄文による羽状縄文、533はR L R斜縄文を地文とする。また、530は一部ナデにより地文を消している。518～524は口縁部が残存し、分類が可能である。518・519はA 1 a類、520はA 2 a類、521はA 3 a類、522はC 2 a類、523はD 2 a類、524・525はD 3 a類で、521・525以外の口縁部にはミガキが施されている。526・532は頭部から外反して立ち上がる。522～544は底部が残存する。基本的に底面はミガキ調整されているものがほとんどを占めるが、536は笹葉痕、537は網代痕、538はスタレ状網代圧痕、539は縄目の敷物痕といった成形時の敷物痕跡が確認されている。

鉢形土器（第196・197図545～551、第68表、図版73・74）

6点を図示した。545・546は鉢形土器①である。545はⅢ群、546はⅡβ・Ⅲ群である。545は口縁～胴部で、C 2 b類、横位S字状波状文が、546は胴～底部で、渦巻文と想定される文様が描かれ、それぞれ文様内側は545がR L、546はL R斜縄文で、また546は一部刺突文でも充填されている。547～549はⅡ群、550はⅢ群、551は地文の鉢形土器②である。547は口縁～胴部で、B類、隆沈線渦巻文や楕円文が描かれ、口縁では透かし彫りが施され、文様内側がR L斜縄文で充填されている。548は胴部で、相対渦巻文Aや楕円文と想定される文様が描かれ、文様内側がR L斜縄文で充填されている。また、外面が赤色塗彩されている。549は胴部、550は胴～底部である。ともに渦巻文と想定される文様が描かれ、それぞれ文様内側が、R L斜縄文で充填されている。551はL R斜縄文を地文とする。口縁～胴部、A類で、口縁部にミガキが施されている。

台付土器（第197図552～555、第68表、図版74）

4点を図示した。全て台部を有する。552はL R、553はR L斜縄文を地文とする。554は無文であ

る。552は台部先端がラッパ状に開く。逆U字状文が描かれている。553・554は、それぞれ台部に円形及び楕円形の穿孔が施されている。555は脚部が欠損し全体像は不明である。

ミニチュア土器 (第197図556～558、第68表、図版75)

3点を図示した。556・557はミニチュア深鉢形土器である。それぞれ口縁部は、C3a類及びD1a類で、体部は無文である。調整のためにナデ、ミガキの痕跡が確認される。558はミニチュア注口鉢形土器②の口縁～底部で、B類、口縁に鐮状の段を持つ。体部には波状沈線を巡らせ、沈線下部にはLR斜縄文が充填されている。

土偶 (第198・199図559～565、図版75)

7点を図示した。559～561・564はA類、562・563・565はB類である。それぞれ沈線、貼付文、刺突文により文様が描かれている。559は胸～足部で、胸部には突起がある。C字状文、横位及び縦位沈線文、正面の胸～足部には刺突文が施されている。560は胴部で、正面に渦巻文や刺突文、横位沈線文、側面及び裏側に縦位沈線文が施されている。561は胴部で、C字状文や縦位沈線文が施されている。562は胸～胴部で胸部には突起がある。縦位沈線文が施されている。563は肩部で、横位沈線文、RL側面圧痕が施されている。564は頭～胴部で、土器の装飾の可能性がある。565は肩部で横位沈線文とともに、円文やC字状文と想定される文様が描かれている。

土製品 (第199～200図566～575、第72表、図版76)

566は動物形の胴部で、多重渦巻沈線文が描かれている。567はキノコ形土製品の頭傘～柄部、568は石斧状土製品の基部である。569は三角形土製品で、上部に並列した穿孔を施している。570～575は円盤状土製品である。570・573・574はLR、571・572はRL斜縄文、575は櫛椀文が施されている。570～572・574は文様が描かれている。

(2) 石器・石製品

石鍬 (第216図694～708、第72表、図版76)

遺構外出土15点全てを図示した。694～699はAa類で、700・701はAb類、702～704はAc類、705・706はBa類、707はBb類、708はCc類である。また694・696はアスファルトが付着している。石材は珪質頁岩が大部分を占めるが、697は黒曜石(試料No.4)で、産地同定を行い北上折居I群産の結果が出た。また、696・702・703の石材は、それぞれ696・702は玉髄、703は安山岩である。

石鏃 (第216図709～716、第72表、図版77)

遺構外出土8点全てを図示した。709はAb類、710はAc類、711・712はBa類、713はBb類、714はBc類、715・716はCc類である。また石材は、珪質頁岩がほとんどであるが、710は赤色頁岩、713は玉髄である。

石匙 (第217～219図717～740、第72・73表、図版77・78)

遺構外出土26点中24点を図示した(未掲載はA類1点、不明1点)。717～720はAa類、721はAb類、722・723はAc類、724はAd類、725はBa類、726はBb類、727はBc類、728はB類であるが、先端が折れのため詳細は不明、729～733はCa類、734～737はCb類、738はCc類である。739は折れのため詳細は不明であるがCc類、740はつまみ部のみのため詳細は不明であるが、残存状況からA類かC類と考えられる。

石筥 (第219図741、第73表、図版79)

741は刃部が直刃状を呈し、最大幅は長軸中央である

異形石器 (第219図742、第73表、図版77)

742は両端を全面調整し、刃部を作出している。また中央部に括れ及び2か所の突起を設けている。

スクレイパー（第219～223図743～796、第73・74表、図版78・79）

遺構外出土93点中54点を図示した（未掲載遺物はⅠA a 2・ⅠA b 2・ⅠA c 2・ⅠA c 3・ⅠA d・ⅠB a・ⅡA b・ⅡB a・ⅡD b・ⅡE a・ⅡF b各1点、ⅠB b・ⅡB b・ⅡF a類各2点、ⅡA a類3点、不明・未製品19点）。743～747はⅠA a 1類、748～755はⅠA a 2類、756・757はⅠA a 3類、758・759はⅠA b 1類、760～763はⅠA b 2類、764～768はⅠA c 1類、769はⅠA c 3類、770・771はⅠA d類、772はⅠB a類、773はⅠB b類、774はⅡA a類、775～778はⅡB a類、778・779はⅡB b類、781はⅡC a類、782はⅡD a類、783・784はⅡD b類、785・786はⅡE b類、787～789はⅡF a類、790～793はⅡF b類、794～796は破片であるが、刃の加工が見られる。

楔形石器（第223～224図797～801、第74表、図版79）

797～801の4点を図示した。

打製石斧（第224・225図802～804、第74表、図版79）

3点を図示した。802・803はA類で、敲石としても使用された痕跡が残る。804はB類である。

磨製石斧（第225図805～807、第74表、図版79）

3点を図示した。805は刃部が使用により剥離している。また806・807は基部のみである。

石皿（第336図808・809、第74表、図版80）

遺構外出土41点中2点を図示した（未掲載は全てⅡ類）。808・809は石皿Ⅰ類で、脚部が見られる。

台石（第227図810・811、第74表、図版80）

2点を図示した。810は石皿からの転用で、さらに炉石への転用と思われる被熱が確認される。

敲石（第228図812、第74表、図版82）

812の1点を図示した。

凹石（第228図813・814、第74表、図版82）

813・814の2点を図示した。

石棒（第229図815・816、第74表、図版81）

2点を図示した。814は側面に窪みが、815は先端に敲打痕が確認される。

石核（第230・231図817～819、第74表）

3点を図示した。全て珪質頁岩で、それぞれ石肌が残る。

砥石（第231図820、第74表、図版82、）

1点を図示した。時期不明の頁岩製である。

(3) 陶磁器**中世陶磁**（第232図822～824、第75表、図版82）

土器・陶磁器分類Ⅴ群に当たる。掲載遺物は3点である。822は須恵器系中世陶器の壺肩部である。敲き成形により作られ、外面に二筋平行線文敲き痕、内面に円環当て痕が確認される。外面の二筋平行沈線文の特徴から、秋田県大仙市南外大畑楡山窯で生産されたものと想定され、時期は13世紀前半である。823は瀬戸美濃産陶器の梅瓶胴部である、また824は中国龍泉窯の青磁碗胴部で外面の連弁文の特徴から、時期は16世紀前半と推定される。

近世陶磁（第232図825～830、第75表、図版82）

土器・陶磁器分類Ⅵ群に当たる。掲載遺物は6点である。825・826は陶器で、825は火入れの口縁～胴部で、口縁部先端が直角に内湾し、さらに先端を折り曲げて成形している。826は鉢の底～高台部で、見込みには胎土目積み痕がある。また内面は薬灰釉、外面は鉄錆釉と掛け分けされている。827～830は磁器で全て肥前産である。827は碗蓋の擴～胴部である。他は皿で、それぞれ828は口縁～

胴部、829は胴～高台部で型打ち成形である。また830は底～高台部で見込みに蛇目釉剥ぎが確認されることから、波佐見（長崎県）で生産されたものである。

（4）金属製品

銭貨（第232図831～833、第76表）

掲載遺物は3点である。830は明銭の洪武通宝、832・833は「寶」の字の特徴から、古寛永通宝である。

参考文献

- 上田秀夫 1982「14～16世紀の青磁碗の分類について」日本貿易陶磁研究会『貿易陶磁研究2』
栗沢光男 1997「秋田県出土の珠洲系陶器資料集成（上）」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第12号
中野幸大 2008「大木7 a～8 b式土器」小林達雄編『総論 縄文土器』アム・プロモーション
森 幸彦 2008「大木9～10式土器」小林達雄編『総論 縄文土器』アム・プロモーション
菅原哲文 2006「山形県における複式埴の様相」（財）山形県埋蔵文化財センター『研究紀要』第4号
九州近世陶磁学会 2000『九州陶磁の福年—九州陶磁学会10周年記念—』
日本貨幣商協同編 2005『日本貨幣カタログ 2005』紀伊國屋書店
秋田県教育委員会 2011『漆下遺跡』秋田県埋蔵文化財調査報告書第464集
横浜市教育委員会 2015『神谷地遺跡・小出遺跡』横浜市文化財調査報告書第32集
米沢市教育委員会 2019『花沢A遺跡 第Ⅲ次』米沢市埋蔵文化財調査報告書第114集

第3表 柱穴様ビット一覧表(1)

柱穴番号	検出番号	所在グリッド	長軸×短軸 (a)	平面形状	深さ (a)	掘削深高 (a)	重数(初→終)	備考
33	第17-18区,付録1	MG54	0.50×0.52	円形	0.35	158.65	S 158→S 146→P33	縄文土器1点66g,土器
34	第17-18区,付録1	MG54	0.30×0.48	円形	0.10	158.91	S 158→P34	縄文土器20点677.9g,土器破片5.5g (第17750301,第638)
119	第21区,付録1	L T 48	0.62×0.52	楕円形	0.18	158.38		
161	第18区,付録1	M 151	0.52×0.46	円形	0.30	158.63	S K 227→P161	
170	第17-18区,付録1	MG53	0.52×0.48	円形	0.37	158.45		
184	第17-18区,付録1	MH54	0.54×0.53	円形	0.34	158.51	S 126→P184	
201	第17-18-31区,付録1	MH55	0.55×0.39	楕円形	0.50	158.36	S 126→P201	
209	付録1	M F 47	1.00×0.84	楕円形	0.34	158.40		縄文土器41点1101.1g(赤彩土器1点 131.9g含む)
213	付録1	M F 48	0.74×0.70	円形	0.55	158.17		
222	第17-18区,付録1	MH54	0.57×0.44	楕円形	0.27	158.40		
414	第10区,付録1・2, 図36	L L 96	0.91×0.55	不整形楕円形	0.26	159.12		
431	付録1・2	L O・L P50	0.66×0.64	不整形円形	0.27	158.69		
1001	第22区,付録1	L R 51	0.20×0.12	楕円形	0.06	158.08		縄文土器1点63.1g,
1002	第22区,付録1	L S 55	0.26×0.21	楕円形	0.07	158.73		
1004	第22区,付録1	L S 54	0.46×0.38	楕円形	0.14	158.70		
1007	第19区,付録1	M B 57	0.31×0.30	円形	0.27	158.30		縄文土器6点50.9g,土器破片2.1g, 刺片1点4.8g,
1009	第19区,付録1	M B 56	0.39×0.32	円形	0.50	158.36		縄文土器3点28g,
1011	付録1	L R 48	0.32×0.38	楕円形	0.25	158.92		
1012	付録1	L R 48	0.15×0.12	円形	0.13	158.53		
1013	付録1	L R 48	0.23×0.19	楕円形	0.22	158.31		
1014	付録1	L R 48	0.29×0.29	楕円形	0.24	158.89		
1015	付録1	L R 48-49	0.42×0.27	楕円形	0.24	158.89		
1016	付録1	L R 49	0.23×0.21	楕円形	0.30	158.90		
1017	付録1	L R 48	0.29×0.16	楕円形	0.24	158.89		
1018	付録1	L R 48	0.18×0.16	円形	0.23	158.91		
1019	付録1	L R 49	0.14×0.12	楕円形	0.23	-	P1020→P1019	
1020	付録1	L R 49	0.20×0.17	円形	0.21	158.91	P1020→P1019	
1021	付録1	L R 49	0.44×0.38	不整形円形	0.38	158.77		
1023	第19区,付録1	M C 56-57	0.29×0.27	楕円形	0.18	158.59		
1024	第19区,付録1	M B 56-57	0.24×0.22	円形	0.13	158.62		
1025	第17-19-116区,付録1	M E 55	0.30×0.21	楕円形	0.14	158.36	P1026→P1025	
1026	第17-19-116区,付録1	M E 55	0.20×0.22	円形	0.10	158.60	S N 29→P1026→P1025	縄文土器1点4.9g,
1027	第17-19-116区,付録1	M E 55	0.22×0.07	不整形楕円形	-	-	S N 29→P1027	
1033	第19区,付録1	M C 56	0.28×0.22	楕円形	0.14	158.66		
1034	第19区,付録1	M C 56	0.40×0.38	楕円形	0.53	158.38		
1036	第19区,付録1	M B 56	0.35×0.34	楕円形	0.51	158.28	P1037→P1036	
1037	第19区,付録1	M B 56	0.28×0.29	楕円形	0.15	158.63	P1037→P1036	
1041	第19-47区,付録1	MD54	0.34×0.18	円形	0.32	158.67	S 175→P1041	
1042	第19区,付録1	M B 56	0.31×0.21	楕円形	0.21	158.47	P1043→P1042	
1043	第19区,付録1	M B 56	0.44×0.22	楕円形	0.20	158.46	P1043→P1042	縄文土器8点181g,
1044	第19-108区,付録1	MA54	0.29×0.24	円形	0.29	158.80	S K 92→P1265→P1044	
1045	第19区,付録1	M B 54	0.37×0.27	不整形楕円形	0.35	158.49		
1046	第19区,付録1	M B 54	0.28×0.28	不整形円形	0.39	158.41		縄文土器2点41.8g,
1048	第23-110区,付録1	L S 45・L T 45	0.19×0.23	円形	0.18	158.28	P1048→S K 246	
1051	第21-61区,付録1	M B 46	0.45×0.44	楕円形	0.34	159.19		
1052	第21-61区,付録1	M B 46	0.39×0.36	円形	0.28	159.29	S 1120→P1052→S K 112	
1053	第19区,付録1	MD55	0.40×0.32	楕円形	0.31	158.47		
1054	第19区,付録1	M C 57	0.31×0.29	円形	0.24	158.43		
1055	第19区,付録1	M E 56	0.25×0.22	円形	-	-		
1059	第17-19-77-102区,付 録1	M F 53-54	0.41×0.34	円形	0.48	158.55	S K 1207→P1059	
1061	第19区-108区,付録1	MA54	0.35×0.42	楕円形	0.36	158.71	P1061→S K 92	
1071	第51区,付録1	M B 53	0.28×0.21	楕円形	0.24	158.79	S 106→P1071	
1072	第19-51区,付録1	M B 54	0.65×0.35	楕円形	0.40	158.80	S 106→P1072	
1081	付録1	MD52	0.19×0.15	楕円形	0.15	158.76		
1082	第20区,付録1	MD52	0.20×0.20	楕円形	0.16	158.89		
1083	第20区,付録1	MD52	0.17×0.16	楕円形	0.14	158.75		
1084	第20区,付録1	MD53	0.16×0.15	楕円形	0.09	158.83		
1085	第20区,付録1	MD53	0.21×0.17	不整形円形	0.12	158.79		
1086	第20区,付録1	MD53	0.18×0.12	楕円形	0.13	158.80		
1087	第20区,付録1	MD53	0.15×0.15	円形	0.08	158.85		
1088	第20区,付録1	MD53	0.22×0.16	楕円形	0.10	158.92		
1089	第20区,付録1	MD53	0.16×0.12	楕円形	0.10	158.84		
1093	第20区,付録1	MD53	0.21×0.09	楕円形	0.15	158.72		
1094	第20区,付録1	MD53	0.22×0.16	楕円形	0.11	158.75		
1095	第20区,付録1	MD53	0.21×0.09	楕円形	0.10	158.79		
1096	第20区,付録1	MD53	0.12×0.10	円形	0.15	158.74		
1097	第20区,付録1	MD53	0.18×0.14	不整形円形	0.09	158.87		
1098	第20区,付録1	MD53	0.12×0.11	楕円形	0.06	158.85		
1099	第20区,付録1	MD53	0.15×0.08	楕円形	0.14	158.79		
1101	第20区,付録1	MD53	0.14×0.12	楕円形	0.05	158.84		
1102	第20区,付録1	MD53	0.14×0.13	円形	0.03	158.87		
1103	第20区,付録1	MD53	0.17×0.16	楕円形	0.12	158.81		
1104	第20区,付録1	MD53	0.11×0.09	不整形楕円形	0.06	158.93		

※ [] 内の数値は推定値, < > 内の数値は現存数を示す。

第4表 柱穴様ビット一覧表(2)

柱穴番号	種類番号	所在グッド	長軸×短軸 (m)	平面形状	深さ (m)	底面径高 (m)	重積(回-前)	備考
1105	第20回,付録1	ME51	0.14×0.10	不整形円形	0.06	158.96		
1107	第20回,付録1	ME51	0.24×0.19	不整形円形	0.12	158.80		
1108	第20回,付録1	ME51	0.23×0.21	円形	0.14	158.78		
1109	第20回,付録1	ME51	0.23×0.18	不整形円形	0.08	158.84		
1110	第20回,付録1	ME51	0.27×0.18	不整形円形	0.10	158.81		
1111	第20回,付録1	ME51	0.25×0.21	略円形	0.20	158.69	P1425→P1111	縄文土層2点25g, 団石1点0.89kg。
1112	第20回,付録1	ME51	0.19×0.18	円形	0.07	158.85		
1113	第20回,付録1	ME51	0.20×0.14	楕円形	0.07	158.82		
1114	第20回,付録1	ME51	0.30×0.24	不整形円形	0.20	158.60		
1115	第20回,付録1	ME51	0.27×0.24	円形	0.12	158.79		
1116	第20回,付録1	ME51	0.23×0.13	楕円形	0.06	158.96		
1117	第20回,付録1	ME51	0.18×0.15	略円形	0.11	158.78		
1118	第20回,付録1	ME51	0.24×0.21	楕円形	0.12	158.78		
1119	第20回,付録1	ME51	0.16×0.14	円形	0.10	158.78		
1120	第20回,付録1	ME51	0.14×0.09	不整形円形	0.08	158.80		
1121	付録1	MB52	0.30×.26	略円形	0.29	158.75		
1122	付録1	MB52	0.30×.26	略円形	0.18	158.87		
1125	第20回,付録1	MB52	0.30×0.31	略円形	0.23	158.83		
1126	付録1	MB52	0.27×0.24	略円形	0.23	158.85		
1130	付録1	MA51+52	0.26×0.22	円形	0.28	158.74		
1131	第20回,付録1	MA52	0.22×0.22	円形	0.20	158.86		
1132	付録1	MA52	0.53×0.29	楕円形	0.17	157.88		
1135	第20回,付録1	MA51	0.20×0.18	円形	0.23	158.80		
1136	付録1	MA52	0.40×0.24	楕円形	0.29	158.75		縄文土層7点2411, 6g(第17858192+383), 表片1点16.3g。
1137	付録1	MA51+52	0.32×0.30	略円形	0.29	158.72		
1139	第20回,付録1	MA51	0.30×0.20	不整形円形	0.16	158.87		底面に小礎。
1140	付録1	MA51	0.49×0.30	円形	0.29	158.72		
1141	第20回,付録1	MA51	0.42×0.36	不整形円形	0.09	158.97		
1147	第20回,付録1	MB51	0.22×0.20	円形	0.11	158.94		
1148	第20回,付録1	MB51	0.28×0.27	円形	0.11	158.93		
1149	第19回,付録1	MA51	0.28×0.21	略円形	0.16	158.75		割片4点25.9g。
1160	第23回,付録1	LQ45	0.35×0.32	不整形円形	0.37	158.84	S1179→P1160	
1161	付録1	MA51	0.46×0.40	楕円形	0.31	159.32		2時期あり, 縄文土層1点33.2g。
1162	第20-21回,付録1	MA51	0.44×0.34	楕円形	0.25	158.80		礎
1163	第20回,付録1	MA51	0.28×0.25	略円形	0.12	158.93		
1164	第20回,付録1	MA51	0.50×0.40	楕円形	0.19	158.85		
1165	第19回,付録1	MA51	0.40×0.40	円形	0.11	158.81		縄文土層17点571, 5g(第17858394+396, 第613), スラッシュ(1-1)D a第1点28.1g, 割片1点3.8g。
1166	第20回,付録1	ME51	0.21×0.14	楕丸方形	0.05	158.81		
1167	第20回,付録1	MC51	0.12×0.09	楕丸方形	0.03	158.82		
1168	第20回,付録1	MC51	0.12×0.10	楕円形	0.05	158.82		
1176	第20回,付録1	MC-MD51	0.18×0.14	略円形	0.10	158.81		
1177	第20回,付録1	MD51	0.30×0.25	略円形	0.07	158.85		
1181	付録1	L.T.51	0.43×0.64	楕円形	-	-	P1182との新旧関係不明	
1182	付録1	L.T.51	0.48×0.31	円形	-	-	P1181との新旧関係不明	
1183	付録1	MA51	0.34×0.32	不整形円形	0.19	158.74		
1184	付録1	MA-MB51	0.36×0.31	略円形	0.32	158.52		
1185	付録1	MA51	0.28×0.29	楕円形	0.12	158.79	P1186との新旧不明	割片1点3.8g。
1186	付録1	MA51	0.30×0.25	楕円形	0.13	158.80	P1185との新旧不明	
1187	第20-21回,付録1	MB49-50	0.20×0.18	楕丸方形	0.02	158.81	S K178→P1187	
1188	第23回,付録1	LQ45-96	0.20×0.18	不整形円形	0.25	159.02	S N123→P1188	
1192	第20回,付録1	MC-MD51	0.19×0.14	楕円形	0.06	158.84		
1193	第20回,付録1	MD51-52	0.21×0.12	不整形円形	0.08	158.81		
1200	第17-18-19回,付録1	MB51	楕.02	-	0.32	158.60	S K144→S1200+P1200	縄文土層7点199.5g, 断面のみ。
1201	第19回,付録1	MA51	0.52×[0.41]	円形	0.59	158.34	S191→P1202+P1201	
1202	第19回,付録1	MA51	0.46×0.25	略円形	0.59	158.32	S191→P1202+P1201	
1203	第19回,付録1	MA54	0.33×0.31	円形	0.31	158.91		
1204	付録1	MA51	0.50×0.46	円形	0.20	158.81		
1206	第21回,付録1	MA51	0.34×0.28	略円形	0.29	158.52		
1207	第21回,付録1	MA51	0.29×0.34	楕円形	0.56	158.42		
1209	第21回,付録1	MA50	0.27×0.22	楕円形	0.13	158.94		
1210	第21回,付録1, 調査3	MA49	0.25×0.24	略円形	0.17	158.90		
1211	第21回,付録1, 調査3	MA50	0.52×0.44	円形	0.28	158.78		
1213	第21回,付録1, 調査3	MA50	0.46×0.45	略円形	0.31	158.78		
1214	第20-21回,付録1	MA49-50	0.45×0.35	略円形	0.32	158.73		
1215	第20-21回,付録1	MA-MB49-50	0.37×0.31	楕丸方形	0.15	158.93		
1216	第21回,付録1	MA49	[0.40]×[0.40]	円形	0.43	158.79		
1217	第20-21回,付録1	MA-MB50	0.42×0.32	不整形円形	0.13	158.85		
1218	第20-21回,付録1	MA-MB50	0.63×0.39	楕円形	0.23	158.85		
1219	第21回,付録1	MA49	0.33×0.32	円形	0.10	159.00		
1220	第21回,付録1	L.T.49	0.27×0.23	略円形	0.10	159.04		
1221	第21回,付録1	L.T.49	0.19×0.16	楕丸方形	0.12	159.01		
1223	第20回,付録1	ME48	0.36×0.34	円形	0.30	158.85		
1227	第21回,付録1	MC47	0.50×0.47	略円形	0.31	158.78		
1232	第20回,付録1	MB51	0.62×0.60	楕丸方形	0.24	158.75		
1251	第19回,付録1	MC53	0.30×0.28	不整形円形	0.21	158.59		

※〔〕内の数値は推定値、()内の数値は既存値を示す。

第5表 柱穴様ビット一覧表(3)

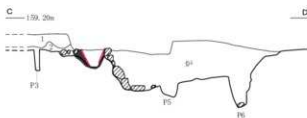
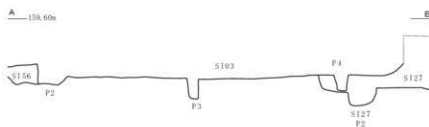
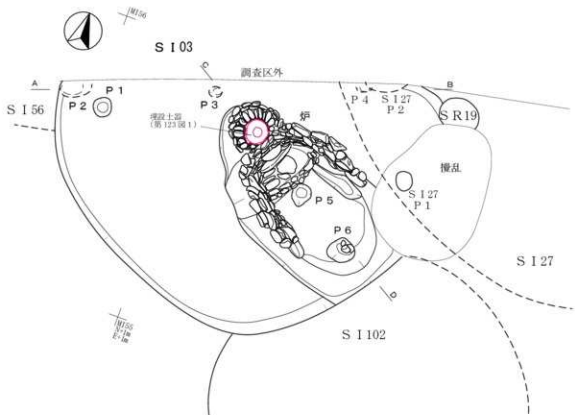
柱穴番号	検出番号	所在グリッド	長軸×短軸 (a)	平面形状	径差 (a)	底面径高 (h)	重積(旧→新)	備考
1252	第19号,付録1	M C 55	0.28×0.25	楕円形	0.52	158.00		
1253	第19号,付録1	M C 55	0.28×0.28	楕円形	0.21	158.35		
1254	第19号,付録1	M B 55	0.30×0.22	楕円形	0.18	158.40		縄文土層1点37.1g。
1255	第19号,付録1	M B 55	0.42×0.27	楕円形	0.25	158.34		縄文土層1点29.2g。
1256	第19号,付録1	M B 55	0.39×0.36	楕円形	0.24	158.35		表片1点35.4g。
1257	第19号,付録1	M B 55	0.30×0.24	不整形楕円形	-	-		
1258	第19号,付録1	M B 55	0.20×0.20	楕円形	0.15	158.42		
1262	第19号,付録1	M B 56-57	0.71×(0.34)	楕円形	0.26	158.53		
1264	付録1	M B 57	0.43×0.43	楕円方形	0.35	158.53		
1265	第19-19B号,付録1	M A 54	(0.35)×(0.13)	楕円形	0.20	158.89	S K 92→P1265→P1044	
1266	付録1	M B 53-54	0.24×0.14	楕円形	0.14	157.84	S 1 98→P1266	縄。
1267	第12号,付録1	M D 46	0.25×0.21	円形	0.30	158.74	S N 217→P1267	
1268	第17-19号,付録1	M F 54	0.52×0.52	楕円形	0.10	158.83		磨石1点0.1kg, 刮石1点0.2kg。
1269	付録1	M A-M B 57	1.21×0.96	不整形円形	0.27	158.54		
1270	第19号,付録1	M D 56	0.28×0.20	楕円形	0.40	158.31		
1271	第19号,付録1	M D 56	0.42×0.39	楕円形	0.42	158.34		
1272	第19-19B号,付録1	M D 56	(0.46)×(0.67)	円形	0.28	158.40	P1272→S K 28	
1273	第18-107号,付録1	M G-M H 51	0.60×0.55	不整形円形	0.22	158.73	S 1 96→S K 52→P1273	
1274	第23-125号,付録1	L R 46	0.11×(0.05)	円形	0.14	158.88	S N 173→P1274	
1275	第21号,付録1	M A 48	0.33×0.22	楕円形	0.23	158.97		
1276	第21号,付録1	M A 48	0.24×0.22	円形	0.28	158.72		
1277	第21号,付録1	M A-L T 48	0.38×0.34	楕円形	0.34	158.88		
1278	第21号,付録1	L T 48	0.30×0.30	円形	0.12	159.13		
1288	付録1	M D 48	0.58×0.38	楕円形	0.39	158.76		縄。
1498	第20-99号,付録1	M E 48	幅0.32	円形	0.35	158.86		断面のみ。
1499	第107号,付録1	M F 52	0.38×0.33	楕円形	0.19	158.42	S K 89→P1498	
1410	第107号,付録1	M F 52	0.26×0.18	楕円形	0.24	158.54	S K 89→P1499	
1411	第18-71号,付録1	M H 50	0.24×0.22	円形	0.34	158.56	S 1 88→P1411	
1413	第17-9-113号,付録1	M E 53	0.33×0.25	楕円形	0.15	158.77	S K 248→P1413	
1414	第20-21号,付録1	M A-M B 54	0.88×0.67	楕円形	0.22	158.81		
1415	第20号,付録1	M B 52	0.36×0.34	楕円形	0.10	158.98		
1416	第20号,付録1	M B 51	0.52×0.52	円形	0.41	158.61		
1417	付録1	M A 52	0.22×0.20	楕円形	0.45	158.66		
1418	第20-21号,付録1	M A 51	(0.28)×(0.24)	円形	0.13	158.96		
1420	第19号,付録1	M C 55-56	0.31×0.27	楕円方形	0.22	158.49	P1421上の新旧不明	
1421	第19号,付録1	M C 55	0.25×0.20	楕円形	0.14	158.56	P1420上の新旧不明	
1422	第19号,付録1	M C 56	0.28×0.26	楕円形	0.09	158.70		
1423	第19号,付録1	M C 56	0.28×0.15	楕円形	0.15	158.60		
1424	第19号,付録1	M C 57	0.35×0.33	楕円形	0.24	158.41	P1473上の新旧不明	
1425	第20号,付録1	M E 51	0.27×(0.16)	円形	0.29	158.63	P1425→P1111	
1426	第23号,付録1	L Q 46	0.31×0.31	円形	0.28	158.67		
1427	第23-121号,付録1	L R 46	0.22×0.20	円形	0.11	158.84	S N 173→P1427	
1428	第23号,付録1	L R 46	0.30×0.18	円形	0.05	158.89	S K 250→P1428	
1429	第8号	M F 48	幅0.12	-	0.16	159.06		基本土層±0層面の確認
1501	付録1	L S 57	0.42×0.28	楕円形	0.24	158.54		
1502	付録1	L S 57	0.44×0.40	円形	0.51	158.28		
1503	付録1	L R 57	0.47×0.40	楕円形	0.43	158.34		縄文土層4点47.2g。
1504	付録1	L R 57-58	0.22×0.18	円形	0.06	158.63		
1505	付録1	L R 58	0.33×0.26	円形	0.10	158.65		
1506	付録1	L R 58	0.26×0.25	円形	0.09	158.64		
1507	付録1	L R 98	(0.20)×(0.31)	円形	0.24	158.70		
1508	付録1	L R 57	0.32×0.29	円形	0.08	158.66		
1509	付録1	L R 58	0.24×0.22	円形	0.30	158.49		
1510	付録1	L Q 58	0.19×0.16	楕円形	0.12	158.64		
1511	付録1	L Q 57	0.29×0.25	円形	0.27	158.44		
1512	付録1	L Q 57	0.27×0.23	円形	0.27	158.49		刮片1点0.6g。
1513	第22号,付録1	L P 56	0.28×0.24	円形	0.16	158.69		
1514	付録1-2	L P 56	0.34×0.27	楕円形	0.12	158.74		
1515	付録1-2	L O 56-57	0.42×(0.36)	円形	0.17	158.80		
1516	付録1-2	L O 56	0.38×0.23	楕円形	0.08	158.70		縄文土層1点18.9g。
1517	付録1-2	L O 56	0.36×0.32	楕円形	0.07	158.83		
1518	付録1-2	L P 55	0.46×0.46	円形	0.23	158.66		縄文土層2点27.1g(第1795097, 5063)。
1519	付録1-2	L P 55	0.60×0.49	楕円形	0.28	158.53		
1521	付録1-2	L P 58	0.28×0.23	楕円形	0.32	158.48		
1522	付録1-2	L P 58	0.20×0.17	円形	0.60	158.58		縄文土層2点25g。
1523	付録1-2	L P 57	0.13×0.08	楕円形	0.12	158.49		
1524	付録1-2	L P 51	0.30×0.29	楕円方形	0.24	158.94		
1525	付録1	L Q 57	0.28×0.26	楕円方形	0.07	158.56		
1526	付録1-2	L O 57-58	0.73×0.59	不整形楕円形	0.23	158.64		放射性炭素年代測定(暦年齢±年代) 2297-2061cal BC(±2σ), 樹種同定: クワ(試料21, 部T-79共, 第234号)。
1527	付録1-2	L O 58	0.51×0.32	不整形楕円形	0.26	158.56		
1528	付録1-2	L O 58	0.28×0.26	円形	0.14	158.70		
1530	付録1-2	L N 53	0.24×0.18	楕円形	0.24	158.76	S 1 306→P1530	
1531	付録1-2	L N 52	0.38×0.38	円形	0.32	158.74		縄文土層2点13.7g。
1532	付録1-2	L O 52	0.30×0.19	円形	0.23	158.89	S 1 306→P1532	縄文土層1点112.1g。
1533	付録1-2	L O 52	0.34×0.29	楕円方形	0.15	158.96	S 1 306→P1533	縄文土層1点69.6g。

※〔〕内の数値は推定値、()内の数値は現在値を示す。

第6表 柱穴様ビット一覧表(4)

柱穴番号	種類番号	所在グリップ	長軸×短軸 (mm)	平面形状	深さ (mm)	底面径高 (mm)	重載(旧→新)	備考
1534	付図1・2	L.P52	0.52×0.40	楕円形	0.14	158.95		
1535	第22図,付図1	L.Q55	0.82×0.66	楕円形	0.16	158.90		縦文土部3点67.8g。
1536	第22図,付図1	L.Q56	0.24×0.20	円形	0.14	158.79		
1537	第22図,付図1	L.Q58	0.32×0.29	円形	0.14	158.11		
1538	付図1・2	L.M53	0.31×0.28	円形	0.12	158.90		
1539	付図1・2	L.M53	0.30×0.26	円形	0.18	158.91		
1540	付図1・2	L.M53	0.38×0.31	略円形	0.39	158.61		縦文土部4点37.7g。
1541	付図2	L.160	0.29×0.23	略円形	0.11	158.80		
1542	付図2	L.160	0.27×0.23	円形	0.39	157.97		
1543	付図2	L.160	0.24×0.22	円形	0.24	158.24		
1544	付図2	L.158	0.51×0.39	楕円形	0.23	158.52		
1545	付図2	L.K59	0.34×0.27	楕円形	0.30	158.21		
1546	第114図,付図2	L.159	[0.47]×[0.68]	楕丸方形	0.39	158.44		縦文土部4点90.6g。
1547	付図2	L.K59	0.14×0.12	不整形	0.21	158.38		P1566→S.K311
1548	付図1・2	L.Q51	0.58×0.44	略円形	0.32	158.68		縦文土部4点50.6g。
1549	第22図,付図1	L.P52	0.72×0.56	不整形楕円形	0.32	158.74		縦文土部1点32.5g。
1550	第22-92+122図,付図1	L.P52	[0.28]×[0.18]	円形	0.16	158.90		S.N304→P1550
1551	第22図,付図1	L.Q52	0.80×0.66	不整形楕円形	0.48	158.40		S.13065→P1551
1601	付図2	L.J48	0.22×0.21	略円形	0.12	159.07		
1602	付図2	L.147	0.24×0.20	円形	0.68	159.03		縦文土部1点31g,右蓋目1点14.8kg。
1603	付図2	L.146	0.38×0.28	楕円形	0.09	159.32		
1604	付図2	L.H47	0.24×0.18	円形	0.11	159.12		縦文土部2点23.9g。
1605	付図2	L.147	0.38×0.32	楕丸方形	0.39	158.87		縦文土部1点15.2g。
1608	第104図,付図2	L.K49	0.37×0.16)	円形	0.11	159.09		P1508→S.K406
1609	第103図,付図2,図版31	L.L46	0.51×0.40	不整形円形	0.65	158.76		
1615	付図1・2	L.N50	0.34×0.27	楕円形	0.16	158.99		
1616	付図1・2	L.N50	0.29×0.23	楕円形	0.06	159.12		縦文土部2点51.8g。
1617	付図1・2	L.N50	0.29×0.28	略円形	0.26	158.83		縦文土部1点27.5g。
1618	付図1・2	L.N50	[0.29]×[0.38]	円形	0.24	158.97		P1618→P1619
1619	付図1・2	L.N50	0.36×0.33	円形	0.28	158.91		P1618→P1619
1622	付図1・2	L.N50	0.46×0.37	円形	0.22	159.99		縦文土部2点19g+土器破片28.5g。
1623	付図1・2	L.N51	0.29×0.22	不整形円形	0.18	159.02		縦文土部3点62.9g+土器破片2.6g。
1624	付図1・2	L.N51	0.54×0.31	楕円形	0.14	159.05		縦文土部2点40.3g。
1626	付図1・2	L.M47	0.37×0.30	略円形	0.38	158.71		
1627	付図1・2	L.O49	0.31×0.27	円形	0.29	158.61		縦文土部3点17.5g,表片1点13.9g。
1630	付図1・2	L.O49	0.49×0.39	楕円形	0.29	158.76		
1631	付図1・2	L.P48	0.37×0.27	不整形楕円形	0.21	158.79		
1632	付図1・2	L.P50	[0.61]×[0.42]	円形	0.18	158.92		横・縦文土部2点15.8g(第178図297,第33図),表片1点7.1g。
1633	付図1・2	L.L.M47-88	0.49×0.39	楕円形	0.16	158.85		縦文土部6点52.8g。
1634	付図1・2	L.O48	0.36×0.34	楕丸方形	0.19	158.79		縦文土部1点26.8g。
1635	付図1・2	L.P49	[0.36]×[0.13]	楕円形	0.19	158.90		
1636	付図1・2	L.M53	0.37×0.23	円形	0.10	159.03		縦文土部1点62.9g(第178図308,第33図)。
1637	付図1・2	L.N51	0.42×0.28	円形	0.22	159.14		
1638	付図1・2	L.Q51	0.56×0.38	楕円形	0.23	158.91		表片1点4.8g。
1639	付図1・2	L.O→L.P51	0.32×0.31	円形	0.20	158.89		縦文土部9点84.1g+土器破片3.7g。
1640	付図1・2	L.O50	0.28×0.28	楕丸方形	0.14	158.96		
1641	付図1	L.P50	0.19×0.18	略円形	0.10	159.00		
1642	付図1・2	L.O→L.P50	0.35×0.26	楕円形	0.14	158.99		
1643	第22図,付図1	L.P51	0.24×0.24	円形	0.31	158.83		
1645	付図1・2	L.N50	0.30×0.22	楕円形	0.12	158.90		表片1点3.7g。
1646	付図1・2	L.P50	[0.28]×[0.11]	円形	0.26	158.87		縦文土部1点20.9g。
1647	付図1	L.P50	0.28×0.28	円形	0.16	158.92		
1649	付図2	L.L.J47	[0.46]×[0.23]	楕円形	0.28	158.85		
1650	付図2	L.147	[0.23]×[0.12]	円形	0.11	158.97		縦文土部1点13.7g。
1651	付図2	L.148	[0.26]×[0.32]	円形	0.26	158.90		P1655との新旧不明
1652	付図2	L.148	[0.26]×[0.21]	円形	0.29	158.83		縦文土部2点36g。
1653	付図2	L.148	0.41×0.33	楕円形	0.27	158.81		
1655	付図2	L.148	[0.32]×[0.22]	円形	0.29	158.83		P1652との新旧不明
1657	付図2	L.148	0.30×0.26	円形	0.42	158.73		S.L430→P1658→P1657
1658	付図2	L.148	0.21×[0.14]	円形	0.22	158.83		S.L430→P1658→P1657
1659	第22図,付図1	L.Q51	0.32×0.27	略円形	0.21	158.85		縦文土部1点15.2g。
1660	第22図,付図1	L.Q51	[0.32]×[0.38]	略円形	0.24	158.76		
1661	第22図,付図1	L.P→L.Q52	[0.20]×[0.24]	円形	0.20	158.83		縦文土部2点117.2g。
1663	第22図,付図1	L.Q51	0.45×0.42	円形	0.19	158.95		
1664	第22図,付図1	L.Q51	0.54×[0.37]	円形	0.35	158.75		
1667	第104図,付図2	L.J49	[0.58]	-	0.24	158.98		S.K406→P1667
1669	第10-114図,付図2,図版7	L.J46	幅0.3	-	0.19	159.21		S.K441→P1670→S.K419 断面のみ。
1670	第9図	L.H46	幅0.12	-	0.26	159.06		P1671との新旧不明 基本土層③断面の確認。
1671	第9図	L.H46	幅0.3	-	0.10	159.18		P1670→S.K444,P1670との 新旧不明
1672	第22-114図,付図1	L.Q51	0.12×[0.06]	円形	0.16	159.65		P1672→S.K440
1673	第19図,付図1	MC-MD57	0.48×0.36	不整形円形	0.17	158.36		P1424との新旧不明
1674	付図1	MH57	0.27×0.25	楕円形	0.29	158.53		

※〔〕内の数値は推定値、＜＞内の数値は残存値を示す。



- S I 03**
 1 黒褐色(10YR2/3)シルト しまり中～やや強 粘性やや弱～中 遺人物：浅黄褐色土粒・径 ϕ 1～20mm10%、耕作土粒・径 ϕ 1～20mm 5%
 2 褐色(10YR4/4)砂 しまり中～やや強 粘性やや弱 遺人物：炭化物粒 ϕ 1～2mm 1%。

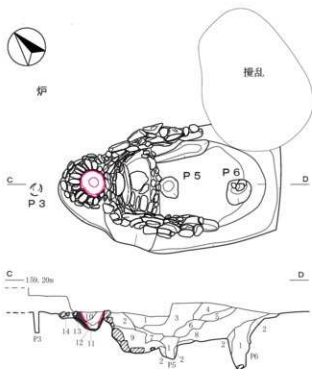


第24図 S I 03 竪穴建物跡 (1)

第7表 S103 柱穴一覽表

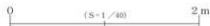
番号	長軸×短軸 (m)	平面形状	検出面からの深さ (m)	底面標高 (m)	重複(旧→新)	備考
P1	0.20×0.20	円形	0.34	158.46		
P2	幅 0.30)	—	0.09	158.80		
P3	幅 0.14)	—	0.25	158.41		
P4	幅 0.13)	—	0.17	158.73		
P5	0.25×0.22)	不定円形	0.24	158.57	P1→P5	長軸×短軸は複式が底面上での規模。
P6	0.29×0.25)	不定円形	0.90	158.25	P1→P6	長軸×短軸は複式が底面上での規模。

※ () 内の数字は残存値を示す。

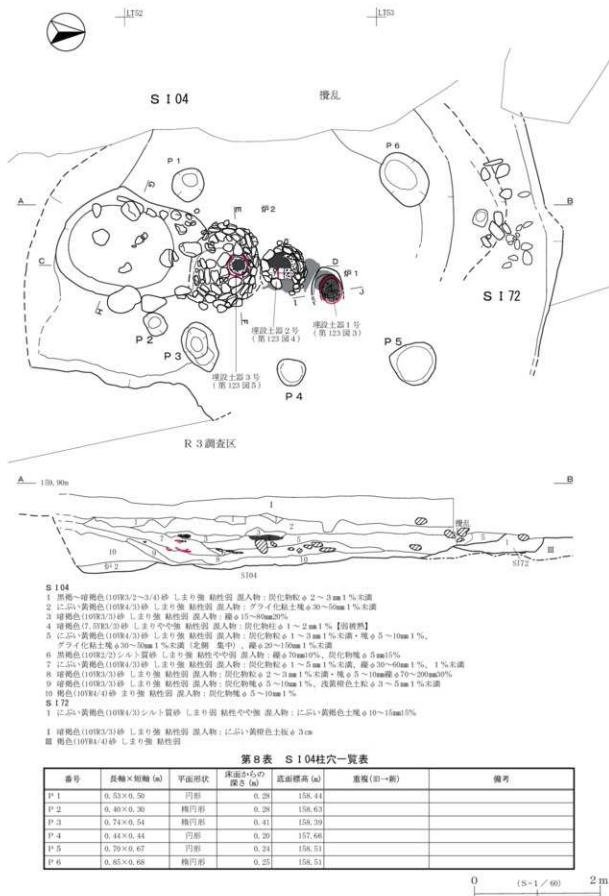


S103

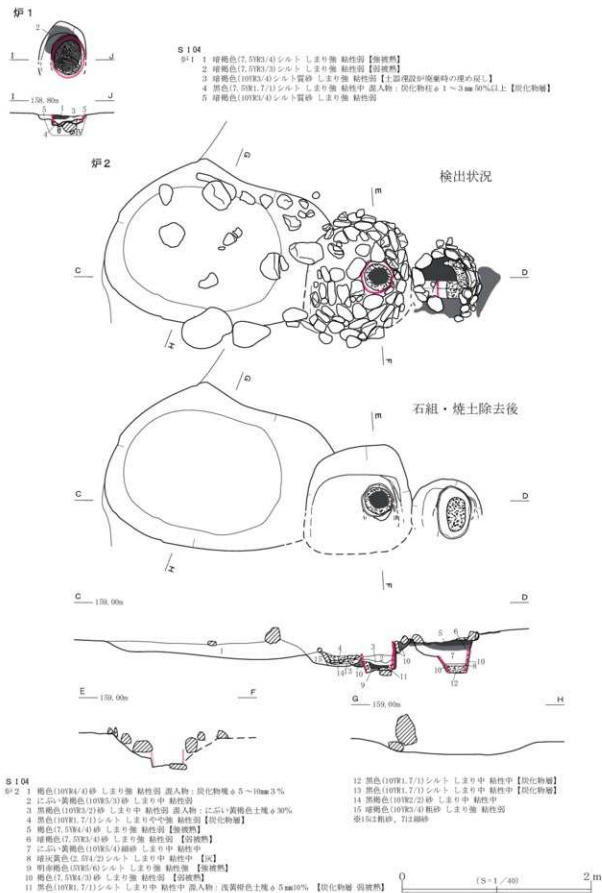
- 5¹ 黒色 (10YR2/1) シルト しまりややや弱～中 粘性中～やや強 炭人物；炭化物粒φ1～8mm3%、堆山土粒φ1～5mm1%
- 5² 黒褐色 (10YR4/4) 砂 まり中 粘性やや弱 炭人物；炭化物粒φ1～5mm1%
- 3 黒褐色 (10YR2/2) シルト しまりやや弱～中 粘性中～やや強 炭人物；炭化物粒φ1～8mm5%、堆山土粒φ1～10mm5%
- 4 褐色 (10YR4/4) 砂 しまり中～やや強 粘性やや弱 炭人物；炭化物粒φ1～5mm1%、黒褐色土10%
- 5 褐色 (10YR4/4) 砂 しまり中～やや強 粘性やや弱 炭人物；炭化物粒φ1～5mm10%、黒褐色土5%
- 6 緑褐色 (10YR3/4) 砂質シルト しまり中 粘性中 炭人物；炭化物粒φ1～5mm3%、浅黄褐色土15%
- 7 黒褐色 (10YR2/2) シルト しまりやや弱～中 粘性中 炭人物；炭化物粒φ1～5mm1%、浅黄褐色土10%
- 8 褐色 (10YR4/4) シルト しまり中 粘性中～やや強 炭人物；炭化物粒φ1～5mm1%、浅黄褐色土20%
- 9 褐色 (10YR4/4) 砂 しまり中 粘性中～やや強 炭人物；炭化物粒φ1～2mm1%
- 10 褐色 (10YR4/4) 砂 しまり中～やや強 粘性やや弱 炭人物；炭化物粒φ1～2mm1%
- 11 黒褐色 (10YR2/2) シルト しまりやや弱～中 粘性やや弱～中 炭人物；炭化物粒φ1～2mm3%、堆山土粒φ1～5mm2%
- 12 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘土質シルト しまり中 粘性やや強 炭人物；浅黄褐色土粒φ1～2mm1%
- 13 褐色 (7.5YR4/4) シルト しまり中 粘性中【雑土】
- 14 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘土質シルト しまり中 粘性やや強 炭人物；浅黄褐色土粒φ1～2mm1%
- P5 1 黒褐色 (10YR2/2) シルト しまりやや弱～中 粘性中 炭人物；炭化物粒φ1～5mm1%、浅黄褐色土10%
- 2 褐色 (10YR4/4) 砂 しまり中～やや強 粘性強 炭人物；灰黄褐色土粒φ10～30mm20%
- P6 1 褐色 (10YR4/4) 砂 しまり中 粘性やや弱
- 2 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘土質シルト しまりやや弱～中 粘性やや強 炭人物；浅黄褐色土粒φ1～2mm2%



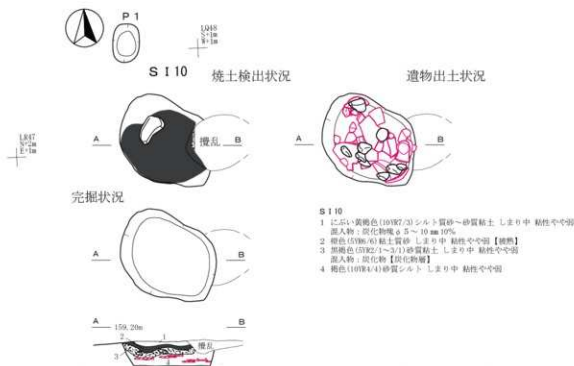
第25図 S103 竪穴建物跡 (2)



第26図 S 104 (1)・72 竪穴建物跡

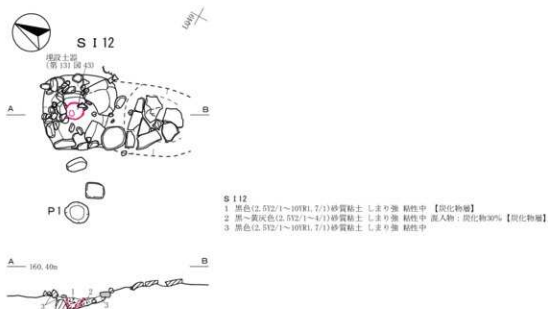


第27図 S104 竪穴建物跡(2)



第9表 S 110柱穴一覧表

番号	長軸×短軸 (m)	平面形状	検出面からの深さ (m)	底面標高 (m)	重複(旧→新)	備考
P 1	0.41×0.28	楕円形	-	-	-	-

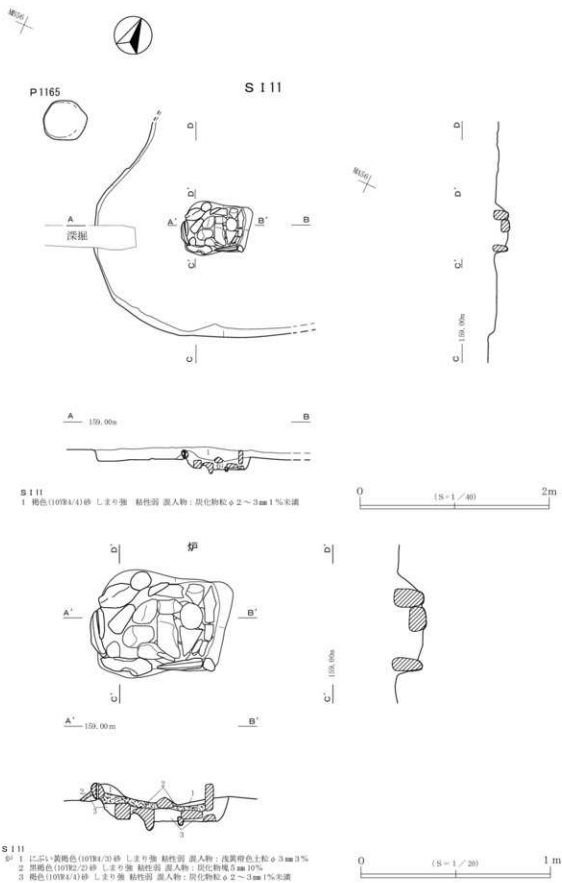


第10表 S 112柱穴一覧表

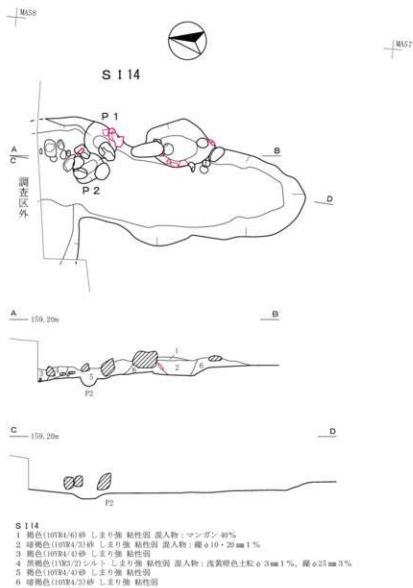
番号	長軸×短軸 (m)	平面形状	検出面からの深さ (m)	底面標高 (m)	重複(旧→新)	備考
P 1	0.26×0.22	円形	-	-	-	-

0 (S-1/40) 2 m

第28図 S 110・12 竪穴建物跡



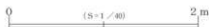
第 29 図 S 111 竪穴建物跡



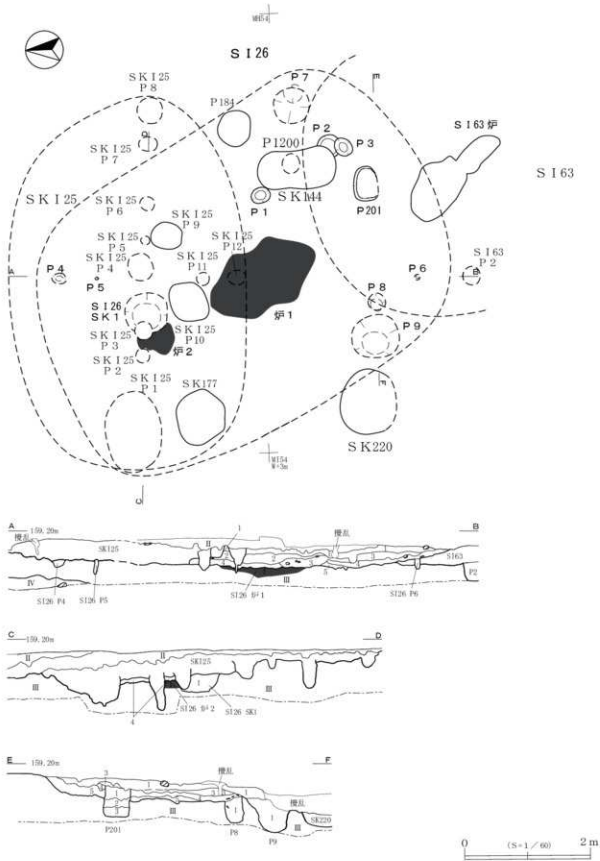
第11表 S 114柱穴一覧表

番号	長軸×短軸 (a)	平面形状	検出面からの 深さ (a)	底面標高 (a)	重層(旧→新)	備考
P 1	0.38×0.22	円形	0.09	156.55	P 1→P 3	
P 2	0.34×0.29	円形	0.05	156.54	P 1→P 3	

※()内の数値は残存層を示す。



第30図 S 114 竪穴建物跡



第31図 S I 26 竪穴建物跡 (1)、P201 柱穴様ピット (1)

S 126

- 1 にぶい・黄褐色(10YR4/3)砂 しまりやや強 粘性やや弱 混入物：炭化物粒 ϕ 1~10 μ m3%、浅黄褐色土10%
- 2 にぶい・黄褐色(10YR4/3)砂と褐色(10YR4/4)砂の互層 しまりやや強 粘性やや弱 混入物：炭化物粒 ϕ 1~10 μ m3%
- 3 にぶい・黄褐色(10YR4/3)砂 しまりやや強 粘性やや弱 混入物：炭化物粒 ϕ 1~10 μ m3%、浅黄褐色土塊20%
- 4 暗褐色(10YR3/3)シルト質砂 しまり中~やや強 粘性やや弱 混入物：炭化物粒 ϕ 1~10 μ m15%
- 5 にぶい・黄褐色(10YR4/3)砂質シルト しまり中~やや強 粘性やや弱 混入物：炭化物粒 ϕ 1~7 μ m5%
- 計1 1 明褐色(7.5YR5/6)砂 しまり強 粘性弱【焼物】
- 計2 2 明褐色(7.5YR5/6)砂 しまり強 粘性弱【焼物】
- S K 1 1 褐色(10YR4/4)砂 しまり強 粘性弱 混入物：炭化物粒 ϕ 2~3 μ m1%木炭
- P 1 1 にぶい・黄褐色(10YR4/3)砂 しまりやや弱~中 粘性やや弱~中 混入物：炭化物粒 ϕ 3 μ m3%
- P 4 1 にぶい・黄褐色(10YR4/3)シルト質砂 しまり中 粘性中 混入物：炭化物粒 ϕ 1~10 μ m5%、地山土粒・塊 ϕ 1~50 μ m30%
- 2 にぶい・黄褐色(10YR4/3)シルト質砂 しまり中 粘性中 混入物：浅黄褐色土粒・塊 ϕ 1~50 μ m40%
- P 5 1 にぶい・黄褐色(10YR4/3)砂 しまりやや弱~中 粘性やや弱~中 混入物：炭化物粒 ϕ 3 μ m3%
- P 6 1 にぶい・黄褐色(10YR4/3)砂 しまり中~やや強 粘性やや弱~中 混入物：炭化物粒 ϕ 1~3 μ m3%、浅黄褐色土7%
- P 8 1 褐色(10YR4/4)シルト質砂 しまり中 粘性やや弱~中 混入物：炭化物粒 ϕ 1~5 μ m1%
- P 9 1 褐色(10YR4/4)シルト質砂 しまり中 粘性やや弱~中 混入物：炭化物粒・塊 ϕ 1~5 μ m15%

P201

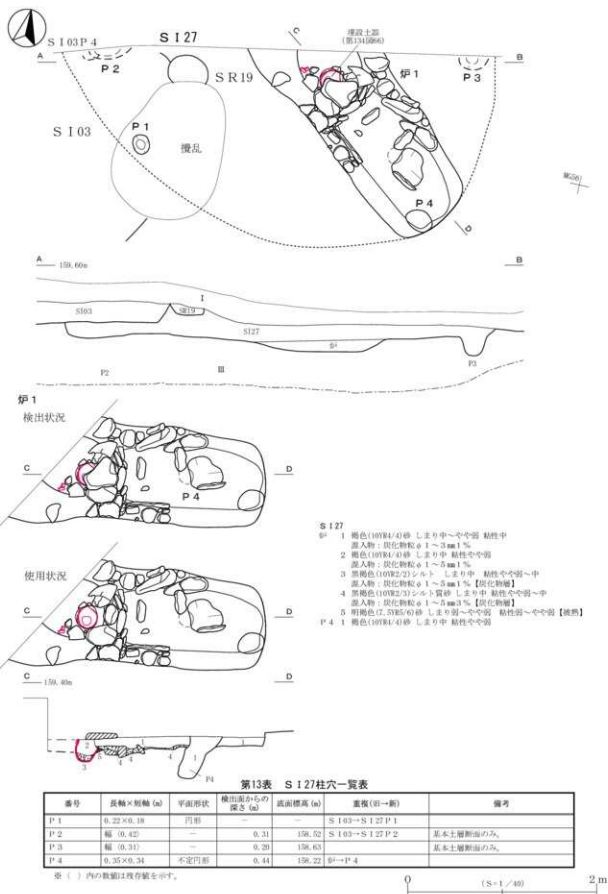
- 1 褐色(10YR4/4)砂 しまり中 粘性やや弱~中 混入物：炭化物粒 ϕ 1~10 μ m3%
- 2 暗褐色(10YR3/3)シルト質砂 しまり中 粘性中
- 3 にぶい・黄褐色(10YR4/3)シルト質砂 しまり中 粘性中 混入物：炭化物粒 ϕ 1~5 μ m3%

第12表 S I 26柱穴一覽表

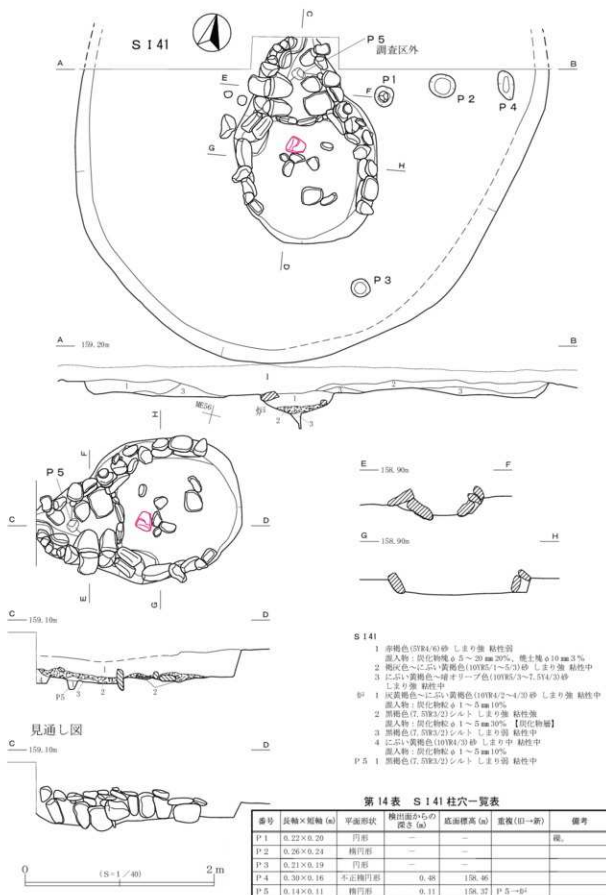
番号	長軸×短軸 (m)	平面形状	検出層からの深さ (m)		底面標高 (m)	重層(旧→新)	備考
			検出層	底面			
P 1	0.31×0.24	横円形	0.13	158.27			
P 2	0.38×0.42	円形	0.12	158.28	S K144→P 2→P 3→S 1 63		
P 3	0.32×0.26	円形	0.33	158.26	P 2→P 3→S 1 63		
P 4	幅0.21	—	0.13	158.63	P 2→P 3→S 1 63→S K 1 25		
P 5	幅0.07	—	0.25	158.51	P 5→S K 1 25		
P 6	幅0.09	—	0.17	158.60			
P 7	[0.56]×[0.56]	円形	—	—	P 7→S 1 63		
P 8	幅0.28	—	0.44	158.26	P 8→S 1 63		
P 9	幅0.69	—	0.54	158.11			

※ () 内の数値は残存値を示す。

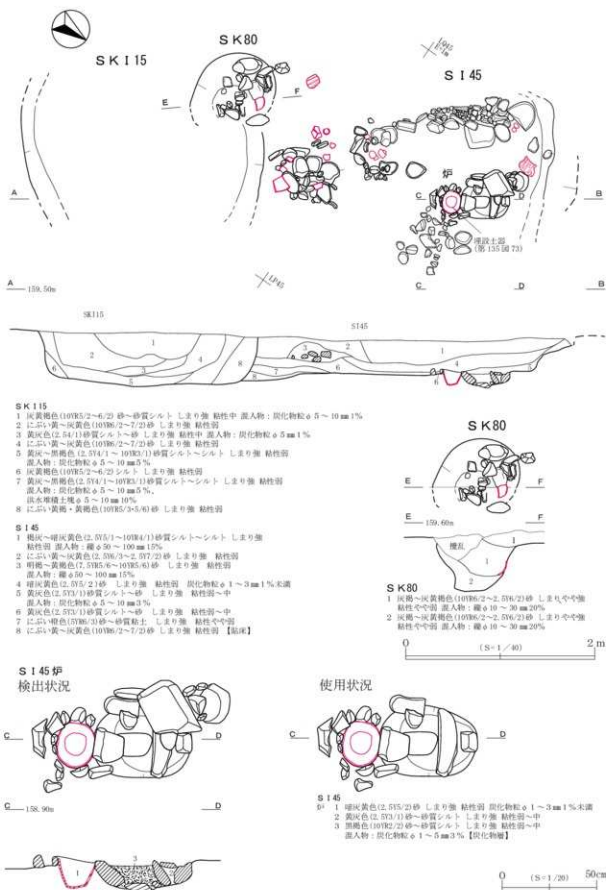
第 32 図 S I 26 竪穴建物跡 (2)、P201 柱穴樫ビット (2)



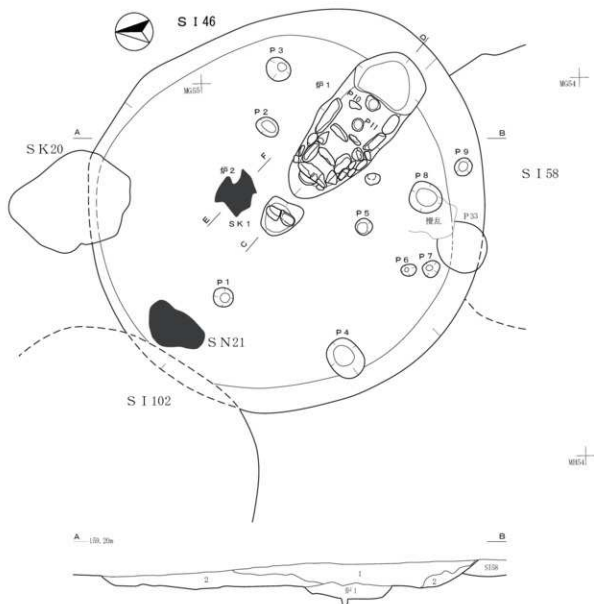
第33図 S127 竪穴建物跡



第34図 S141 竪穴建物跡



第35図 S145・SK115 竪穴建物跡、SK80 土坑



S 146

1 にごみ・黄褐色(10W4/3)シルト質砂 粘性や中弱～中しまり中 混入物：炭化物粒 ϕ 1～5mm1% 浅黄褐色土20～25%
 2 褐色(10YR4/4)砂 粘性や中弱～中しまり中 混入物：炭化物粒 ϕ 1～5mm1% 浅黄褐色土30%

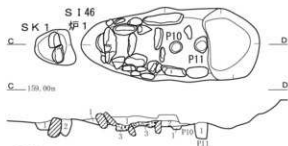
第15表 S 146柱穴一覽表

番号	長軸×短軸 (a)	平面形状	検出面からの深さ (a)	底面標高 (a)	重覆(旧→新)	備考
P 1	0.21×0.29	円形	0.21	158.46		
P 2	0.24×0.19	円形	0.23	158.46		
P 3	0.39×0.36	不整円形	0.17	158.50		
P 4	0.44×0.35	楕円形	0.08	158.56		
P 5	0.18×0.18	円形	0.13	158.52		
P 6	0.17×0.13	楕円形	0.11	158.54		
P 7	0.19×0.17	円形	0.09	158.58		
P 8	0.35×0.32	円形	0.10	158.52		
P 9	0.19×0.18	円形	—			
P 10	0.14×0.12	円形	0.04	158.57	P 11→P 1	
P 11	0.17×0.14	不整楕円形	0.17	158.47	P 1上の新旧関係不明	

0 (S-1/40) 2m

第36図 S 146 竪穴建物跡(1)

第3章 調査の方法と成果



S 146

SF 1

- 1 濃い黄褐色(10YR4/3)シルト質砂 粘性中 しまりやや弱～中 炭人物：炭化物粒φ 1～5mm3% 浅黄褐色土混状10%
 - 2 暗褐色(10YR3/4)砂質シルト 炭化物粒φ 1～5mm3%、浅黄褐色土10%
 - 3 黒色(10YR2/1)シルト しまり中 粘性中～やや強 炭人物：炭化物炭状3～5mm0%
- 横土壁φ 5mm3%、浅黄褐色土混φ 5～10mm3% 【炭化物類】
- SK 1 1 暗色(10YR4/6)砂 しまりやや弱～中 粘性中
2 黒色(黒褐色)シルト質砂 しまりやや弱～中 粘性中 炭人物：炭化物粒φ 1～3mm2% 浅黄褐色土25%
横土壁φ 5mm3%、浅黄褐色土混φ 5～10mm3%
- P10 1 黒色(10YR2/1)シルト しまり中 粘性中～やや強 炭人物：炭化物炭状3～5mm0%
横土壁φ 5mm3%、浅黄褐色土混φ 5～10mm3%
- P11 1 暗色(10YR4/4)砂質シルト しまり中 粘性やや弱～中 炭人物：炭化物粒φ 1～5mm3%

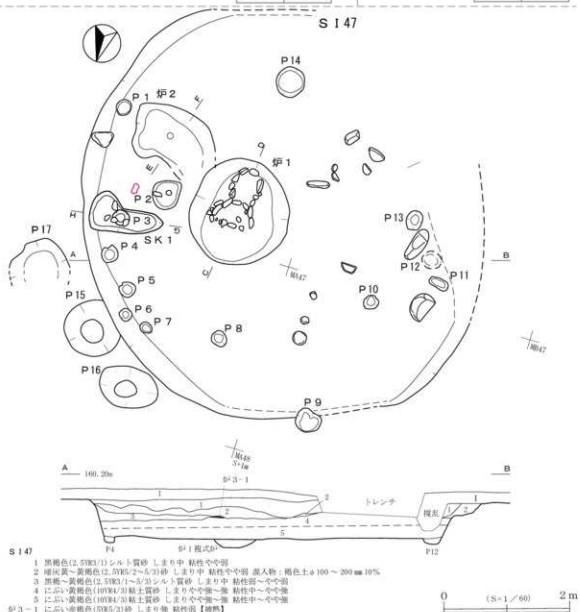
坪2



- SF 2 1 濃い赤褐色(5YR4/0)シルト しまり中～やや強 粘性中 炭人物：炭化物粒φ 1mm1% 【焼物】

0 (S=1/40) 1 m

0 (S=1/20) 50 cm



S 147

- 1 黒褐色(2.5YR3/1)シルト質砂 しまり中 粘性やや弱
 - 2 暗灰黄～黄褐色(2.0YR5.2～5.3)砂 しまり中 粘性やや弱 炭人物：褐色土φ 100～200mm10%
 - 3 暗褐～黄褐色(2.5YR3.1～4.3)シルト質砂 しまり中 粘性弱～やや強
 - 4 濃い黄褐色(10YR4/3)粘土質砂 しまりやや強～強 粘性中～やや強
 - 5 濃い黄褐色(10YR4/3)粘土質砂 しまりやや強～強 粘性中～やや強
- ※ S-1 に 濃い赤褐色(5YR5/3)砂 しまり強 粘性弱 【焼物】

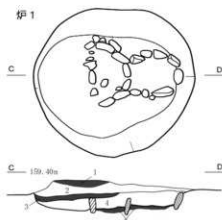
0 (S=1/60) 2 m

第37図 S 146 (2)・47 (1) 竪穴建物跡

第16表 S147柱穴一覧表

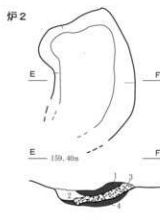
番号	長軸×短軸 (m)	平面形状	検出面からの深さ (m)	底面標高 (m)	重層(旧→新)	備考
P1	0.16×0.12	円形	0.12	159.02		
P2	0.46×0.43	略円形	0.11	158.07		
P3	0.27×0.24	円形	0.31	158.91	S147SK1→S147P3	
P4	0.27×0.23	略円形	0.19	159.03		
P5	0.24×0.22	円形	0.25	158.98		
P6	0.29×0.19	円形	0.17	159.07		
P7	0.29×0.18	円形	0.29	158.95		
P8	0.26×0.23	円形	0.25	159.00		
P9	0.49×0.34	略円形	0.26	159.11		
P10	0.23×0.22	円形	0.17	159.16		
P11	0.32×0.16	楕円形	0.27	159.09		
P12	幅0.25	—	0.12	159.09		S147平面で検出。
P13	0.30×0.25	略円形	—	—		
P14	0.48×0.46	円形	0.15	159.11		
P15	0.90×0.80	円形	0.31	159.14		
P16	0.95×0.66	楕円形	0.28	159.17		
P17	0.85×0.41	円形	0.26	159.53		

※() 内の数値は残存層を示す。



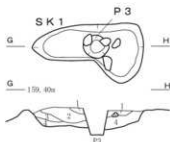
S147

- SP1 1 赤褐色(2.5)R4.6~5)R4.6)粘土質砂 しまり強 粘性中 【焼熟】
 2 にぶい黄褐色(10)R6.2)粘土質砂 しまりやや強 粘性中~やや強
 3 赤褐色(2.5)R4.6~5)R4.6)粘土質砂 しまり強 粘性中 【焼熟】
 4 にぶい黄褐色(10)R4.3)粘土質砂 しまりやや強~強 粘性中~やや強 炭人物：炭化物少量
 5 明褐色(7.5)R5.6)砂 しまり強 粘性中 【焼熟】



S147

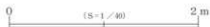
- SP2 1 赤褐色(2.5)R4.6~5)R4.6)粘土質砂 しまり強 粘性中 【焼熟】
 2 にぶい黄褐色(10)R6.3~6.4)砂質粘土 しまりやや強~強 粘性中~やや強
 3 赤褐色~弱赤褐色(3)R2.1~3.2)粘土質砂 しまり強 粘性中 【炭化物少量一部焼熟により変色】
 4 赤褐色(2.5)R4.6~5)R4.6)粘土質砂 しまり強 粘性中 炭人物：にぶい黄褐色土塊φ10~30mm 10% 【焼熟】



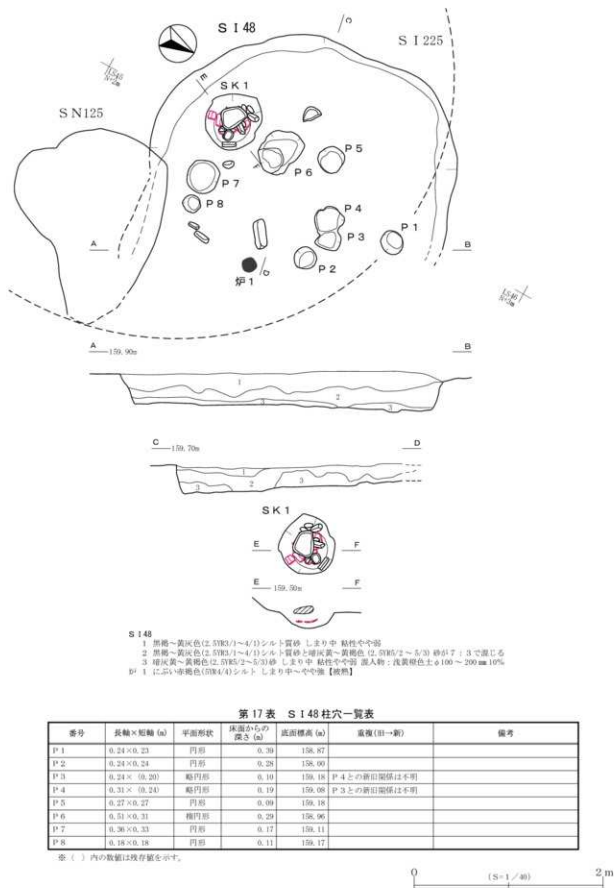
S147

SK1

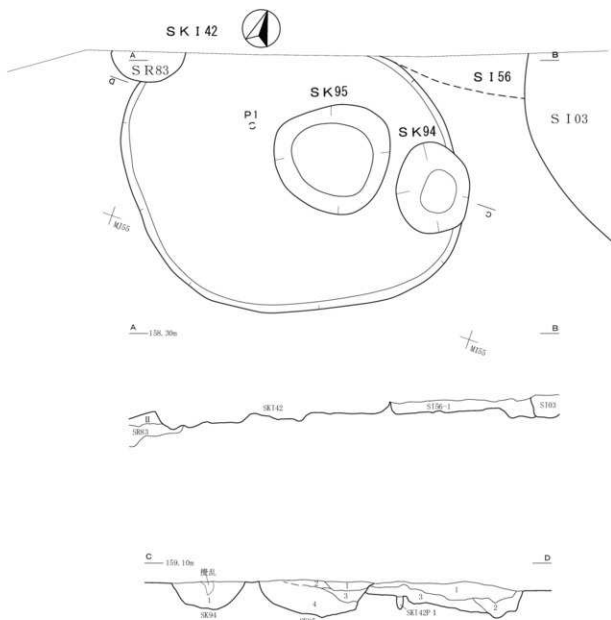
- 1 灰黄褐色(10)R4.2)とにぶい黄褐色(10)R6.4)の混 砂質粘土 しまりやや強 粘性中 炭人物：炭化物粒φ3~5mm 3%
 2 灰黄褐色(10)R4.2)砂質粘土 しまりやや強 粘性中 炭人物：焼土10%混状、礫φ50mm少量
 3 にぶい黄褐色(10)R6.3~6.4)砂質粘土 しまりやや強 粘性中
 4 灰黄褐色(10)R4.2)砂質粘土 しまりやや強 粘性中 炭人物：焼土10%混状、礫φ50mm少量



第38図 S147 竪穴建物跡(2)



第 39 図 S I 48 竪穴建物跡



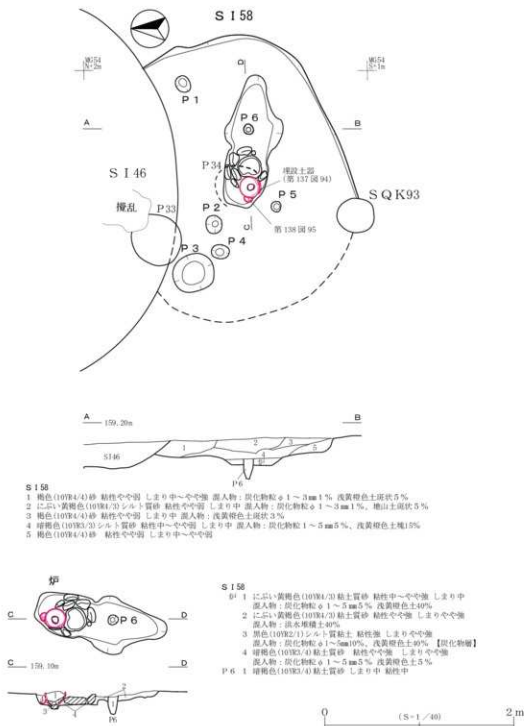
- SK I 42**
- 1 濃い黄褐色(10YR4/3~4)砂礫 しまり中 粘性弱 混人物；炭化物粒 ϕ 1~3mm 1%、浅黄褐色土 10%、西埋跡に鉄多量
 - 2 濃い黄褐色(10YR4/3)砂礫 しまり中 粘性中 混人物；炭化物粒 ϕ 1~2mm 1%、浅黄褐色土 13%
 - 3 濃い黄褐色(10YR4/3)シルト質砂 しまり中 粘性弱 混人物；炭化物粒 ϕ 1~2mm 1%、浅黄褐色土 15%
- P 1**
- 1 濃い黄褐色(10YR4/4)砂礫 しまり中 粘性弱 混人物；炭化物粒 ϕ 1~2mm 1%、浅黄褐色土 10%
- S I 56**
- 1 濃い黄褐色(10YR4/4)シルト質砂 しまり中 粘性弱 混人物；炭化物粒 ϕ 1~2mm 1%、地山土塊 15%
- SK 94**
- 1 濃い黄褐色(10YR4/3)シルト質砂 しまり中 粘性やや弱 混人物；炭化物粒 ϕ 1~8mm 3%、地山土塊 ϕ 1~20mm 15%
- SK 95**
- 1 濃い黄褐色(10YR4/3)砂(細~中粒) しまり中 粘性弱
 - 2 濃い黄褐色(10YR4/3)砂(細粒) しまり中 粘性弱
 - 3 濃い黄褐色(10YR4/3)砂(細粒) しまり中 粘性弱 混人物；炭化物粒 ϕ 1~5mm 1%、浅黄褐色土 20%
 - 4 濃い黄褐色(10YR4/3)砂 しまり中 粘性やや弱~中 混人物；炭化物1~5mm 3%、浅黄褐色土塊 ϕ 1~10mm 10%

第18表 SK I 42 柱穴一覧表

番号	直径×短軸 (m)	平面形状	床面からの深さ (m)	底面標高 (m)	重複(旧→新)	備考
P 1	幅0.06	—	0.13	136.61		

0 (S=1/40) 2m

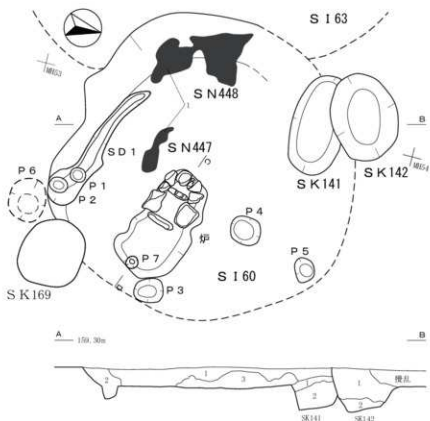
第40図 S I 56・SK I 42 竅穴建物跡、SK 94・95 土坑



第19表 S I 58柱穴一覧表

番号	長軸×短軸 (a)	平面形状	検出面からの深さ (a)	底面標高 (a)	重複(旧→新)	備考
P 1	0.18×0.14	円形	0.15	158.69		
P 2	0.19×0.17	円形	0.11	158.69		
P 3	0.44×0.40	円形	0.24	158.55		
P 4	0.19×0.13	楕円形	0.18	158.71		
P 5	0.11×0.11	円形	0.99	158.74		
P 6	0.11×0.10	円形	0.20	158.60	01→P 6	

第41図 S I 58 竪穴建物跡



S I 60

- 1 濃い黄褐色(10YR4/3)砂 しまり中 粘性や中弱～中 混入物；炭化物粒 ϕ 1～10mm5% 焼土炭 ϕ 1～10mm3%
- 2 褐色(10YR4/4)砂 しまり強 粘性や中弱～中 混入物；炭化物粒 ϕ 1～2mm1%【硬質に堆積】
- 3 褐色(10YR4/4)砂 しまり中 粘性や中弱～中 混入物；炭化物粒・塊 ϕ 1～25mm15%

S K 141

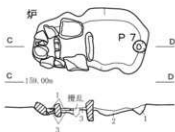
- 1 褐色(10YR4/4)砂 しまり中 粘性や中弱～中 混入物；炭化物粒 ϕ 1～5mm3%
- 2 褐色(10YR4/4)砂 しまり中～やや強 粘性中 混入物；炭化物粒 ϕ 1～10mm3%

S K 142

- 1 暗褐色(10YR3/4)砂 しまり中～やや強 粘性中 混入物；炭化物粒 ϕ 1～10mm3%
- 2 褐色(10YR4/4)シルト質砂 しまりやや強 粘性中～やや強 混入物；炭化物粒 ϕ 1mm1% 焼褐色土15%

S N 447・448

- 1 明赤褐色(5YR6/6)粘土 しまり中 粘性弱 混入物；炭化物塊 ϕ 5～10mm10%【炭状】



S I 60

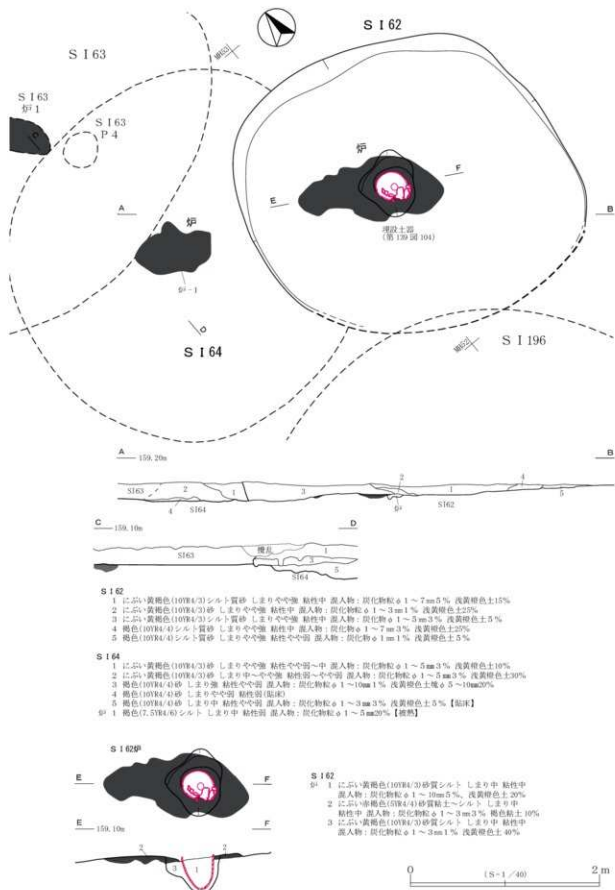
- 1 黒褐色(10YR2/2)シルト しまりやや弱～中 粘性中からやや強 混入物；炭化物粒 ϕ 1～5mm5%【炭化物層】
 - 1 層上の層には混入物；炭化物粒 ϕ 2～3mm3%
 - 3 濃い黄褐色(10YR4/3)粘土 しまりやや強 粘性や中強～強 混入物；焼土炭 ϕ 3 \times 5%
- P 7 1 濃い黄褐色(10YR5/4)シルト質砂 しまり中 粘性中 混入物；炭化物粒 ϕ 1～3mm3%

第20表 S I 60柱穴一覽表

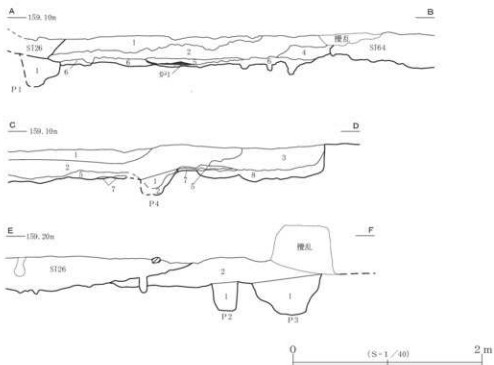
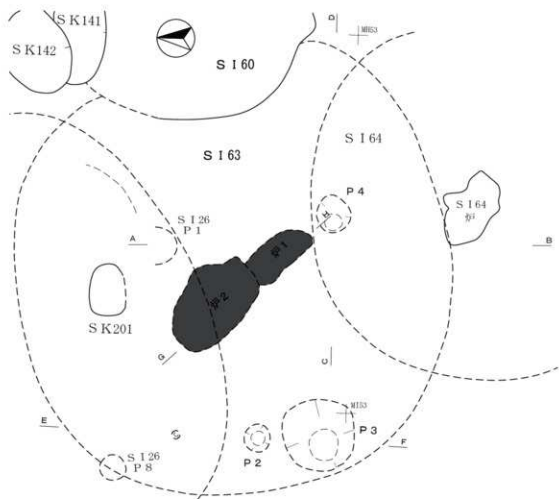
番号	長軸×短軸 (m)	平面形状	検出面からの深さ (m)	底面標高 (m)	重層(旧→新)	備考
P 1	0.16×0.14	円形	0.07	156.62		
P 2	0.20×0.14	円形	0.16	156.38		
P 3	0.22×0.25	不定円形	—	—		
P 4	0.22×0.29	楕円方形	0.09	156.63		
P 5	0.26×0.20	不定円形	0.19	156.51		
P 6	幅0.45	—	0.55	156.55		野外柱穴か。
P 7	0.13×0.13	円形	0.10	156.66	P6→P7	

0 (S=1/40) 2m

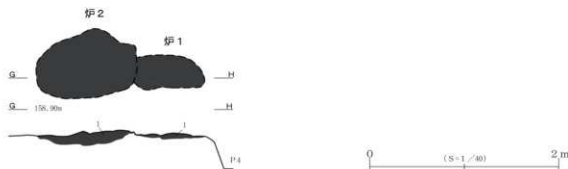
第42図 S I 60 竪穴建物跡、S K 141・142 土坑、S N 447・448 焼土遺構



第 43 図 S I 62・64 竪穴建物跡



第44図 S I 63 竪穴建物跡 (1)



S I 63

- 1 濃い黄褐色(10YR4/3)砂 しまりや中強 粘性やや弱 炭人物：炭化物粒φ1～10mm3% 浅黄褐色土10%
 - 2 濃い黄褐色(10YR4/3)シルト質砂 しまりや中強 粘性中 炭人物：炭化物粒φ1～10mm3%、浅黄褐色土30%
 - 3 濃い黄褐色(10YR4/3)シルト質砂 しまりや中強 粘性中 炭人物：炭化物粒φ1～5mm3%、浅黄褐色土30%
 - 4 濃い黄褐色(10YR4/3)シルト質砂 しまりや中強 粘性中 炭人物：炭化物粒φ1～10mm3%、浅黄褐色土40%
 - 5 濃い黄褐色(10YR4/3)シルト質砂 しまりや中強 粘性中～やや強 炭人物：炭化物粒φ1～10mm3%、浅黄褐色土40%
 - 6 濃い黄褐色(10YR4/3)シルト質砂 しまり中 粘性中～やや強 炭人物：炭化物粒φ1～10mm3%、浅黄褐色土40%
 - 7 濃い黄褐色(10YR4/3)砂 しまりや中弱 粘性やや弱～中 【粗粒】
 - 8 濃い黄褐色(10YR5/4)シルト質砂 しまり中 粘性中～やや強 炭人物：浅黄褐色土30% 【粗粒】
- ※ 1 明褐色(7.5YR5/8～6/8)粘土質砂 しまり強 粘性中 【微粒】

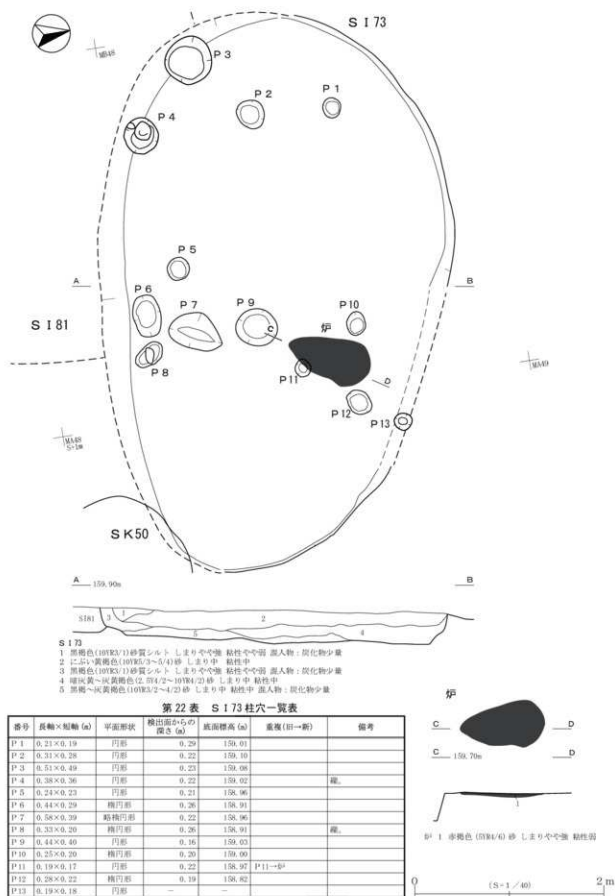
- P 1 褐色(10YR4/4)砂 しまり中 粘性やや弱
- P 2 1 濃い黄褐色(10YR4/3)シルト質砂 しまりや中強 粘性中 炭人物：炭化物粒φ1～10mm3%、浅黄褐色土30%
- P 3 1 濃い黄褐色(10YR4/3)シルト質砂 しまりや中強 粘性中 炭人物：炭化物粒φ1～10mm3%、浅黄褐色土30%
- P 4 1 濃い黄褐色(10YR4/3)シルト質砂 しまり中 粘性中～やや強 炭人物：浅黄褐色土40%
- 2 濃い黄褐色(10YR4/3)砂 しまりや中強 粘性やや弱 炭人物：炭化物粒φ1～10mm3%、浅黄褐色土10%

第21表 S I 63柱穴一覧表

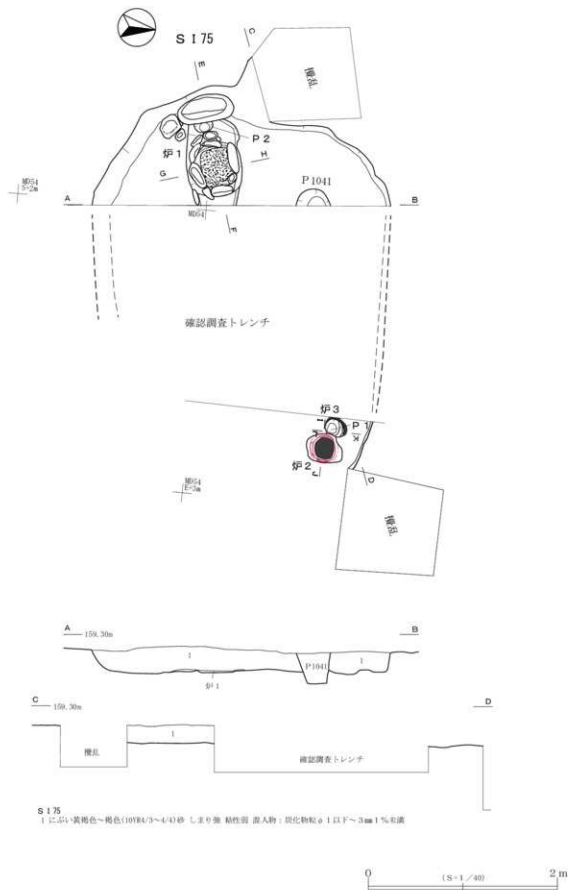
番号	長軸×短軸 (a)	平面形状	検出面からの深さ (a)	底面標高 (a)	重複(旧→新)	備考
P 1	幅 [0.43]	—	0.33	158.73		
P 2	幅 0.28	—	0.35	158.49		
P 3	幅 0.73	—	0.43	158.36		
P 4	幅 [0.36]	—	0.28	157.92		

※ [] 内の数値は推定値を示す。

第 45 図 S I 63 竪穴建物跡 (2)



第46図 S 173 竪穴建物跡



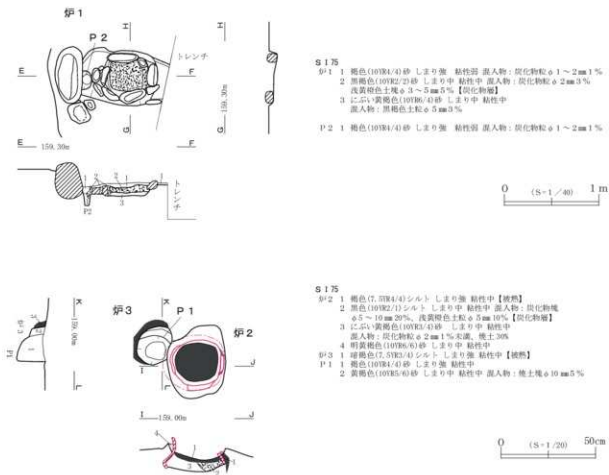
S 175
 1 に近い黄褐色～褐色(10YR4/3～4/0)砂 しまり強 粘性弱 混入物：炭化物粒 ϕ 1以下～3mm 1%未満

第47図 S 175 竪穴建物跡 (1)

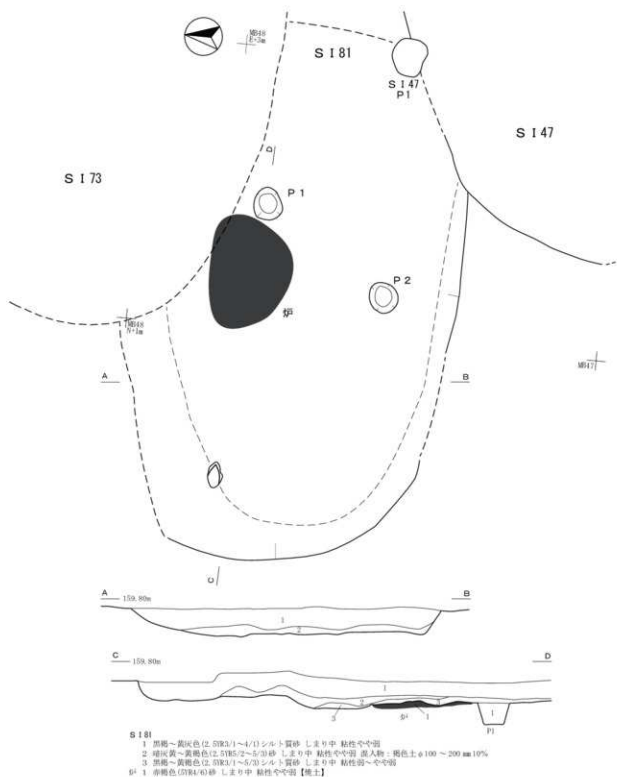
第23表 S I 75 柱穴一覧表

番号	長軸×短軸 (m)	平面形状	検出面からの深さ (m)	底面標高 (m)	重複(旧→新)	備考
					旧P1→P2	
P 1	0.22×0.140	楕円形	0.16	158.69	旧P3→P1→P2	
P 2	0.20×0.195	楕円形	0.20	158.68	P2→P1	

帯()内の数値は残存額を示す。



第48図 S I 75 竪穴建物跡(2)

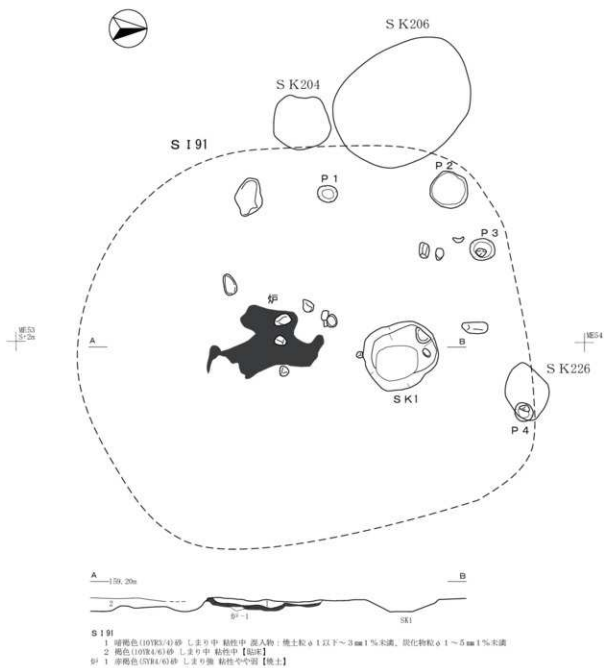


第24表 S 181 柱穴一覽表

番号	長軸×短軸 (m)	平面形状	横断面からの深さ (m)	底面標高 (m)	重複(旧→新)	備考
P 1	0.34×0.30	円形	0.21	159.15		
P 2	0.33×0.29	円形	0.23	159.10		

0 (S=1/40) 2 m

第49図 S 181 竪穴建物跡

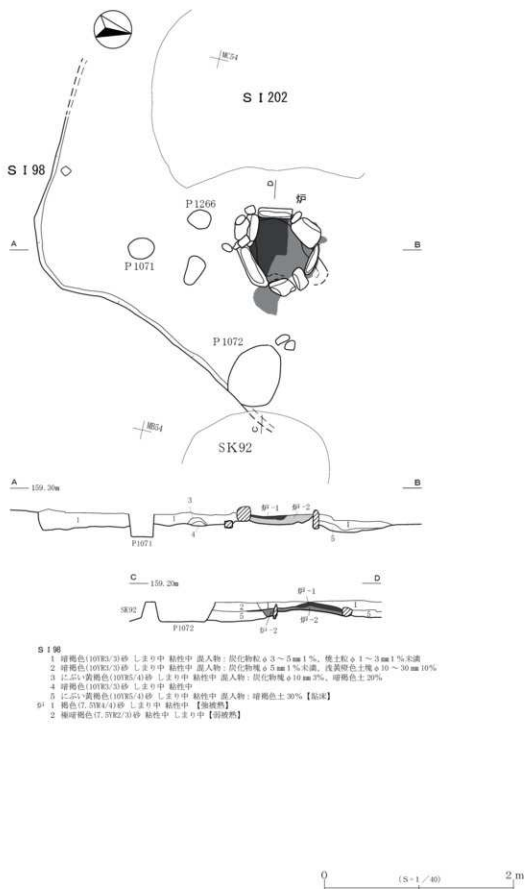


第25表 S 191 柱穴一覧表

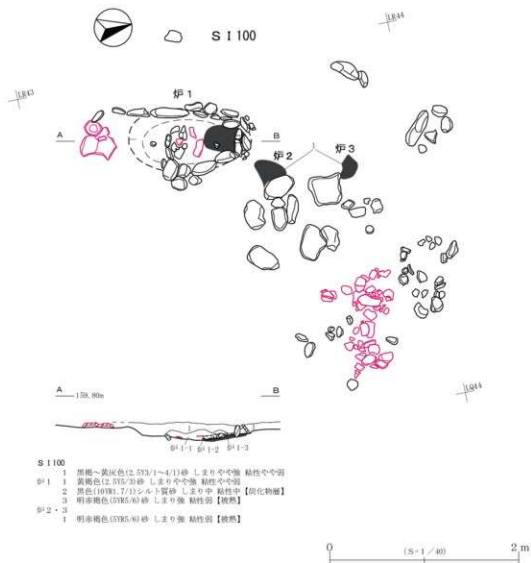
番号	長軸×短軸 (m)	平面形状	検出面からの深さ (m)	底面標高 (m)	重層(目一層)	備考
P 1	0.21×0.18	円形	0.17	158.88		
P 2	0.40×0.38	円形	—	—		
P 3	0.26×0.24	円形	—	—		礎。
P 4	0.20×0.19	円形	—	—		礎。

0 (S-1/40) 2m

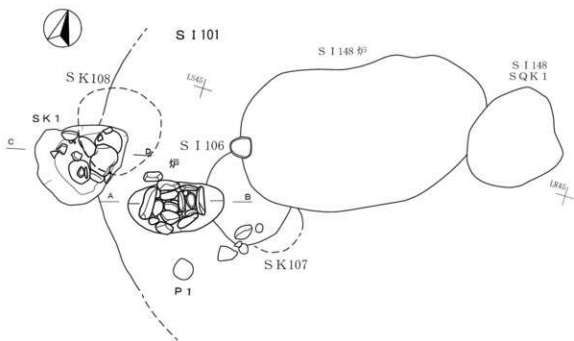
第50図 S 191 竪穴建物跡



第51図 S198 竪穴建物跡



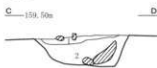
第52図 S 1100 竪穴建物跡



炉
検出状況



S K 1



完掘状況



S I 101

炉 1 黒色(10YR2/1~2.5Y2/1)砂 しまりやや強 粘性やや弱 遊人物：炭化物多量【炭化物層】
2 に赤い黄褐色(10YR6/3)砂 しまり中 粘性中 遊人物：粘土粒φ 3~5mm 5%

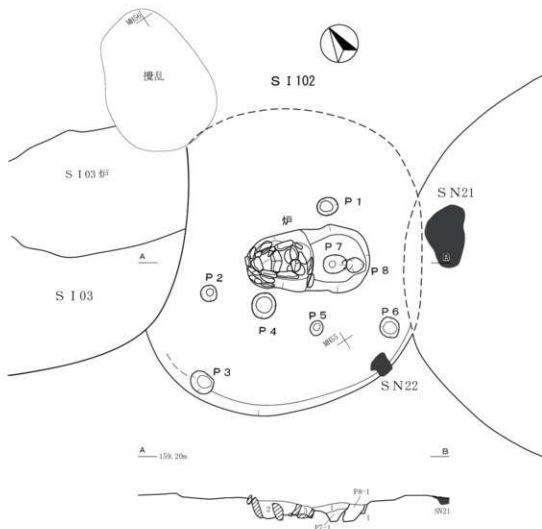
S K 1 1 黒~黄褐色(10YR2/1~3.2Y2/2)砂 しまりやや強 粘性やや弱 遊人物：炭化物層5~20mm 5%
2 灰黄褐色に赤い黄褐色(10YR5/2~5/3)砂 しまりやや強 粘性やや弱

第26表 S I 101柱穴一覧表

番号	長軸×短軸 (a)	平面形状	検出面からの深さ (a)	底面深さ (a)	重複(旧→新)	備考
P 1	0.21×0.21	圓形	0.12	109.05		



第53図 S I 101 竪穴建物跡

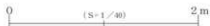


S I 102

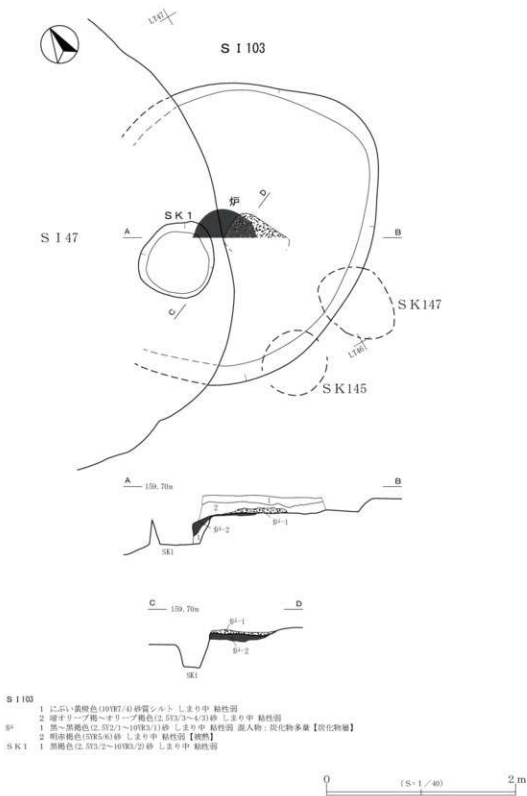
- ① 1 埴埴色(10R/2)砂質シルト しまり中 粘性やや弱～中 炭人物:炭化物粒φ1～7mm2%
 2 埴埴色(10R/3)シルト しまり中～やや強 粘性中～やや強 炭人物:炭化物粒φ1～5mm3%
 3 黒埴色(10R/2.3)シルト しまり中 粘性中～やや強 炭人物:炭化物粒φ1～5mm3%
 P 7 1 埴埴色(10R/2)砂質シルト しまり中 粘性やや弱～中 炭人物:炭化物粒φ1～7mm2%
 P 8 1 埴埴色(10R/2)砂質シルト しまり中 粘性やや弱～中 炭人物:炭化物粒φ1～7mm2%

第27表 S I 102柱穴一覧表

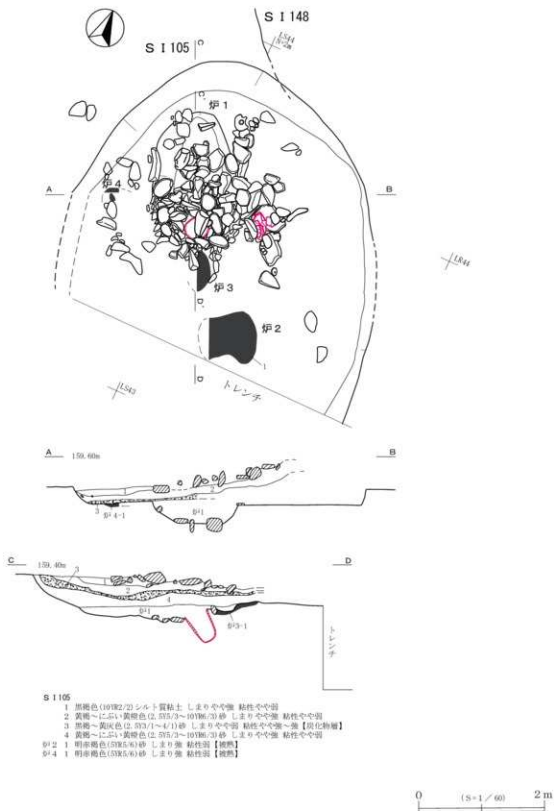
番号	長軸×短軸 (m)	平面形状	検出面からの深さ (m)	底面標高 (m)	重複(旧→新)	備考
P 1	0.22×0.28	円形	0.07	158.66		
P 2	0.17×0.17	円形	0.14	158.59		
P 3	0.26×0.22	楕円形	0.14	158.59		
P 4	0.28×0.26	円形	0.21	158.51		
P 5	0.16×0.13	円形	0.15	158.56		
P 6	0.21×0.20	楕円形	0.13	158.57		
P 7	0.24×0.19	楕円形	0.24	158.82	P 7-①→P 8	
P 8	0.18×0.16	円形	0.24	158.82	P 7-①→P 8	



第54図 S I 102 竪穴建物跡



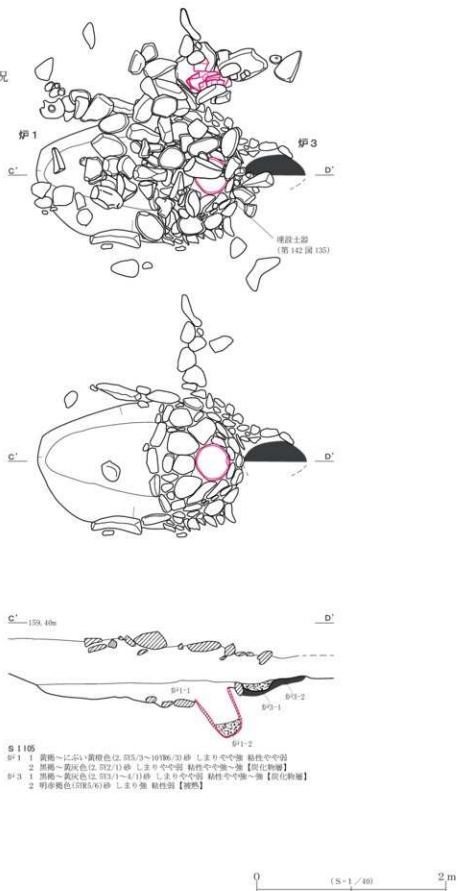
第 55 図 S I 103 竪穴建物跡



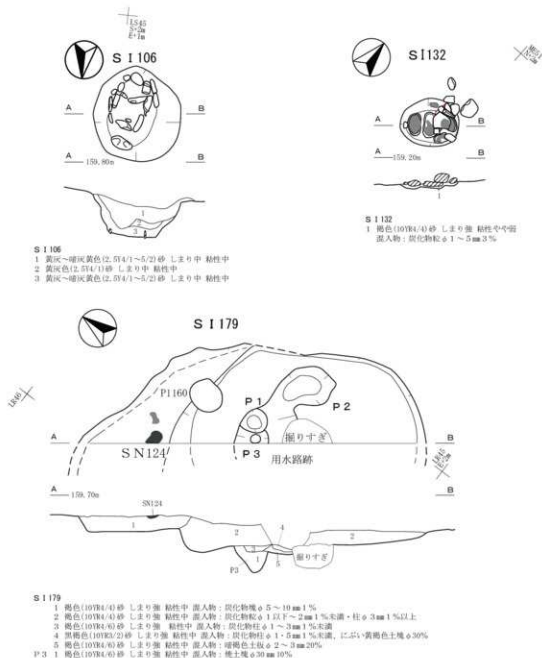
第56図 S I 105 竪穴建物跡(1)

炉1・3

検出状況



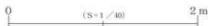
第57図 S1105 竪穴建物跡(2)



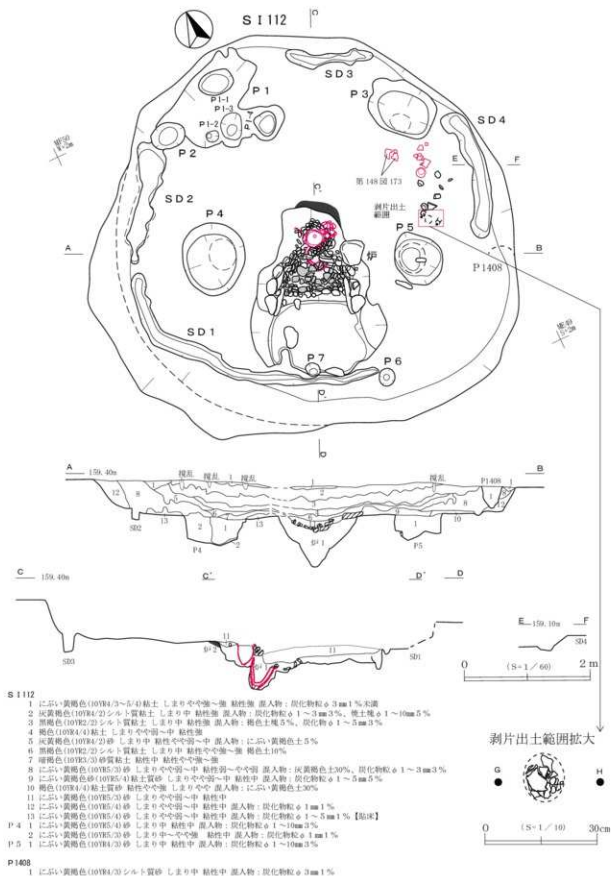
第28表 S 1179柱穴一覧表

番号	長軸×短軸 (m)	平面形状	床面からの深さ (m)	底面標高 (m)	重複(前→後)	備考
P 1	0.26×0.26	円形	0.31	156.76	P 3→P 1	
P 2	0.56×0.42	不整形円形	0.13	158.91		
P 3	0.33×0.12	楕円形	0.29	158.88	P 1→P 3	

※ () 内の数値は残存額を示す。



第58図 S 1106・132・179 竪穴建物跡



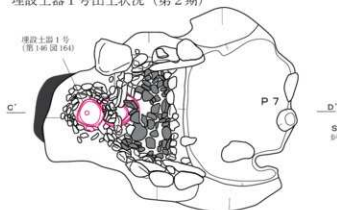
第 59 図 S 1112 竪穴建物跡 (1)

第29表 S1112柱穴一覧表

番号	長軸×短軸 (m)	平面形状	検出面からの深さ (m)	底面標高 (m)	重層(旧→新)	備考
P1-1	0.53×0.38	楕円形	0.21	156.28		平面形状及び検出面からの深さは、不整形崩り込み面底面での確認及び自照である。
P1-2	0.29×0.17	楕円方形	0.33	156.29		同上。
P1-3	0.42×0.34	楕円形	0.15	156.38		同上。
P1-4	0.35×0.33	不定形	0.32	156.41		同上。
P2	0.54×0.42	楕円形	—	—		
P3	1.07×0.81	不定楕円形	0.39	156.37		
P4	1.15×0.98	円形	0.42	156.29		
P5	0.90×0.64	不定形	0.34	156.40		
P6	0.28×0.25	円形	—	—		
P7	0.22×0.20	円形	0.20	156.28		複式が使用時に確認。

炉

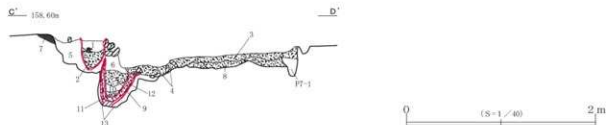
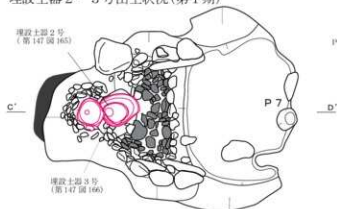
埋設土器1号出土状況(第2期)



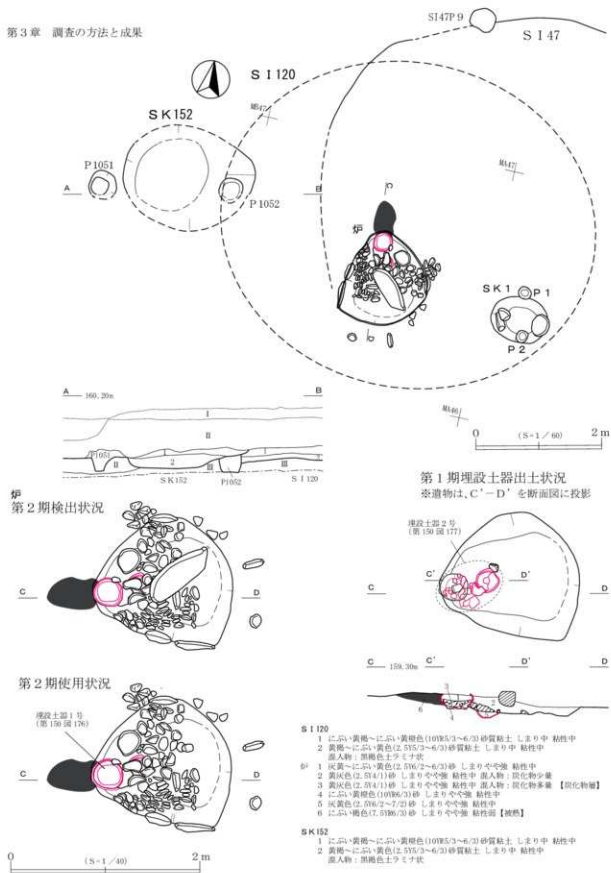
S1112

- 計 1 灰黄褐色(10YR4/2)粘土質砂 粘性中～強 しまり中～弱
 遺人物：炭化物粒φ1～5mm5%
- 2 黒色(10YR2/1)シルト しまり中～弱 粘性中～強 【炭化物層】
 3 灰オリーブ色(7.5Y6/2)砂 しまり中～強 粘性中
 遺人物：炭化物粒φ5～10mmで底部に堆積
- 4 黒色(10YR2/1)シルト しまり中～弱 粘性中～強 【炭化物層】
 5 暗褐色(10YR3/3)シルト質砂 しまり中 粘性中～弱
 遺人物：炭化物粒φ1～5mm10%
- 6 灰黄褐色(10YR4/2)粘土質砂 しまり中～弱 粘性中～強
 遺人物：炭化物粒φ1～5mm5%
- 7 にぶい赤褐色(5YR4/4)砂 しまり中 粘性中 【被褥】
 8 灰オリーブ色(7.5Y6/2)砂 しまり中～強 粘性中
 遺人物：炭化物粒φ5～10mmで底部に堆積
- 9 黒色(10YR2/1)シルト しまり中～弱 粘性中～強 【炭化物層】
 10 灰黄褐色(10YR4/2)粘土質砂 しまり中～弱 粘性中～強
 遺人物：炭化物粒φ1～5mm5%
- 11 黒色(10YR2/1)シルト しまり中～弱 粘性中～強 【炭化物層】
 12 黒色(10YR2/1)シルト しまり中～弱 粘性中～強 【炭化物層】
 13 褐色(7.5YR4/4)砂 しまり強 粘性弱
- P7 1 灰オリーブ色(7.5Y6/2)砂 しまり中～強 粘性中
 遺人物：炭化物粒φ5～10mm3%

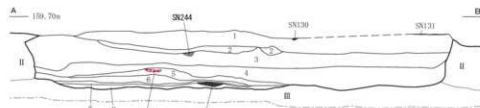
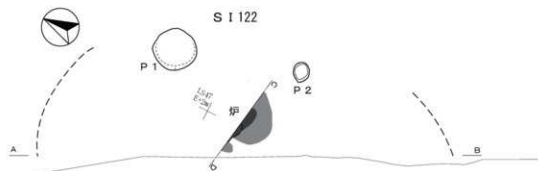
埋設土器2・3号出土状況(第1期)



第60図 S1112竪穴建物跡(2)



第61図 S I 120 竪穴建物跡、SK 152 土坑

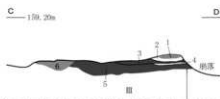
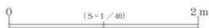


S I 122

- 1 緑褐色砂(10YR3/4)砂 しまり強 粘性弱 混人物：炭化物塊φ 5mm 1%未満、浅黄褐色土 10%
- 2 にぶい黄褐色(10YR5/4)砂 しまり強 粘性弱 混人物：炭化物塊φ 1~5mm 1%、焼土塊φ 5~20mm 1% 緑褐色砂 30%
- 3 緑褐色砂(10YR3/4)砂 しまり強 粘性弱 混人物：焼土塊φ 3mm 1%未満、炭化物塊φ 2~5mm 1%未満
- 4 にぶい黄褐色(10YR4/3)砂 しまり強 粘性弱 混人物：浅黄褐色土 20%
- 5 緑褐色砂(10YR3/4)砂 しまり強 粘性弱 混人物：炭化物塊φ 3mm 1%未満、浅黄褐色土 10%
- 6 にぶい黄褐色(10YR4/3)砂 しまり強 粘性弱 混人物：浅黄褐色土 20%
- 7 黒褐色(10YR2/3)砂 しまり強 粘性弱 混人物：炭化物塊φ 3mm 1%未満、浅黄褐色土塊φ 2~5mm 3%【炭化物塊】
- 8 にぶい黄褐色(2.5YR/3)シルト しまり強 粘性弱

S N 244

- 1 緑褐色(10YR3/3)砂 しまり強 粘性弱 混人物：炭化物塊 5~10mm 20%



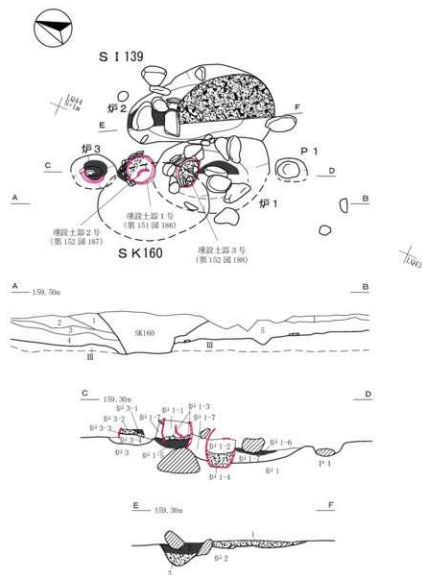
S I 122

- 1 緑褐色(7.5YR3/4)シルト しまり中 粘性中【弱被熱】
- 2 にぶい黄褐色(10YR4/3)砂 しまり強 粘性弱 混人物：炭化物塊φ 3~5mm 3%
- 3 赤褐色(5YR4/6)~緑褐色(7.5YR3/4)シルト しまり中 粘性中【強被熱】
- 4 にぶい黄褐色(10YR4/3)砂 しまり強 粘性弱 混人物：炭化物塊φ 3mm 10%
- 5 赤褐色(5YR4/6)シルト しまり中 粘性中【強被熱】
- 6 緑褐色(7.5YR3/4)シルト しまり中 粘性中 混人物：にぶい黄褐色土塊φ 10mm 20% 炭化物塊φ 10~15mm 3%【弱被熱】

第31表 S I 122 柱穴一覧表

番号	長軸×短軸 (a)	平面形状	検出面からの深さ (a)	底面径高 (a)	重厚(旧→新)	備考
P 1	0.54×0.43	円形	—	—		
P 2	0.21×0.16	楕円形	—	—		

第62図 S I 122 竪穴建物跡、S N 244 焼土遺構



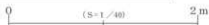
S I 139

- 1 褐色色(10YR4/7)砂～シルト質砂 しまりや中強 粘性や中弱 炭人物：炭化物粒φ 5mm 1%
 - 2 褐色(2.5Y5/3)砂と褐色色(10YR4/1)砂の混土 しまりや中強 粘性や中弱 炭人物：炭化物粒φ 5mm 3%
 - 3 黒褐色(10YR2/1～2/2)砂 しまりや中強 粘性や中弱 炭人物：堆土炭φ 30～50mm 5%
 - 4 にぶい黄褐色(10YR7/4)砂質シルト しまり中 粘性弱
- SP1
- 1 灰黄褐色にぶい黄褐色(10YR4/2～5/3)砂 しまりや中強 粘性や中弱 炭人物：炭化物粒φ 1～5mm 3%
 - 2 にぶい黄褐色(10YR5/3～2.5Y5/3)砂 しまりや中強 粘性や中弱
 - 3 黒褐色～黒色(5YR2/1～10YR1.7/3)砂 しまりや中強 粘性や中弱 【炭化物層】
 - 4 黒色(10YR2/1～2.5Y2/1)砂 しまりや中強 粘性や中弱 【炭化物層】
 - 5 にぶい赤褐色(5YR5/3)砂 しまり強 粘性弱 【炭質】
 - 6 にぶい赤褐色(5YR5/4)砂 しまり強 粘性弱 【炭質】
 - 7 にぶい黄褐色(10YR5/3～2.5Y5/3)砂 しまりや中強 粘性や中弱
- SP2
- 1 にぶい黄褐色(10YR7/4)砂質シルト しまりや中強 粘性や中弱 炭人物：炭化物粒φ 1～10mm 30% 【炭化物層】
 - 2 にぶい赤褐色～黒色(5YR5/4～7.5YR2/3)砂 しまり強 粘性弱 【炭土】
 - 3 にぶい黄褐色(10YR7/4)砂質シルト しまりや中強 粘性や中弱 炭人物：炭化物粒φ 1～10mm 5% 【炭化物層】
- SP3
- 1 にぶい赤褐色(5YR5/3)砂 しまり強 粘性弱 【炭質】
 - 2 黒褐色～黒色(5YR2/1～10YR1.7/3)砂 しまりや中強 粘性や中弱 【炭化物層】
 - 3 にぶい赤褐色(5YR5/3)砂 しまり強 粘性弱 【炭質】
 - 4 灰黄褐色(10YR5/2)砂 しまりや中強 粘性や中弱

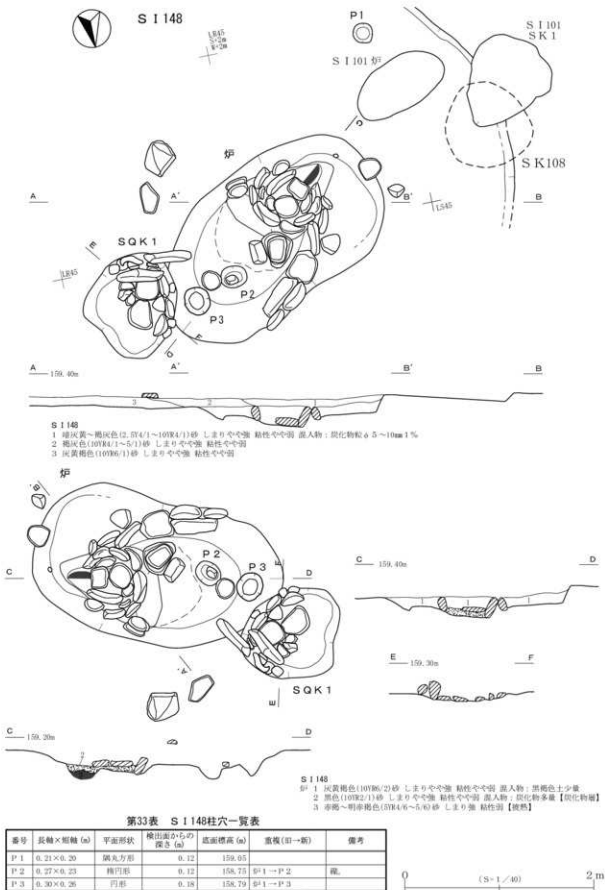
第32表 S I 139 柱穴一覽表

番号	長軸×短軸 (m)	平面形状	検出面からの深さ (m)	底面標高 (m)	重層(旧→新)	備考
P 1	0.34×(0.23)	楕円形	0.24	106.71		礎。

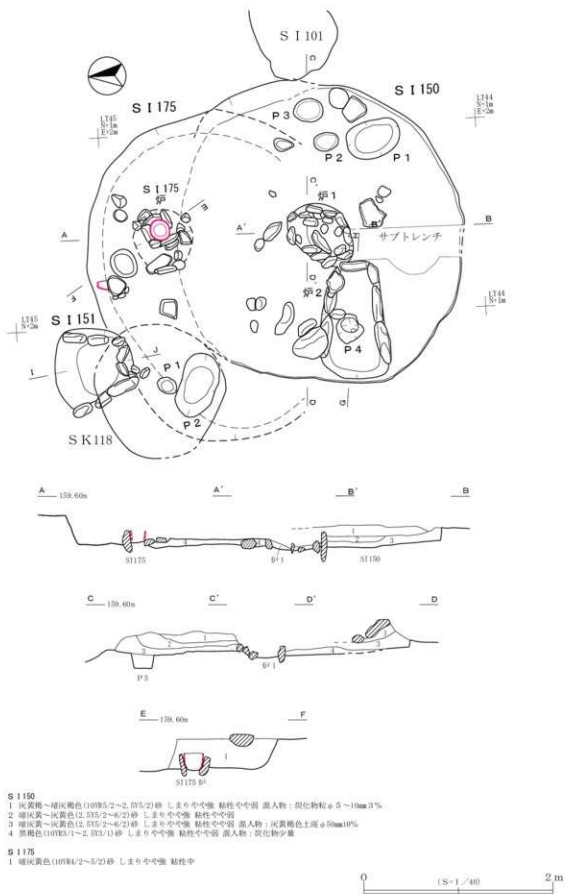
※ [] 内の数値は推定値を示す。



第63図 S I 139 竅穴建物跡



第64図 S I 148 竈穴建物跡



S 1150

- 1 灰黄褐色(10YR5/2~5, 3Y5/2)砂 しまりややぬ 粘性やや弱 混入物: 炭化物粒φ5~10mm3%
- 2 暗灰黄~灰黄色(2.5Y5/2~6/2)砂 しまりややぬ 粘性やや弱
- 3 暗灰黄~灰黄色(2.5Y5/2~6/2)砂 しまりややぬ 粘性やや弱 混入物: 灰黄褐色土塊φ50mm10%
- 4 黒褐色(10YR3/1~2, 3Y3/1)砂 しまりややぬ 粘性やや弱 混入物: 炭化物少量

S 1175

- 1 暗灰黄色(10YR4/2~5/2)砂 しまりややぬ 粘性中

第65図 S 1150・151・175 竪穴建物跡 (1)

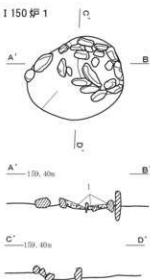
第34表 S I 150 柱穴一覽表

番号	長軸×短軸 (a)	平面形状	床面からの深さ (a)	底面標高 (a)	重複(旧→新)	備考
P 1	6.58×0.40	楕円形	6.16	158.87		
P 2	6.26×0.20	楕円形	6.14	158.87		
P 3	6.52×0.23	楕円形	6.16	158.97		
P 4	6.28×0.24	不定円形	6.40	158.55		

第35表 S I 151 柱穴一覽表

番号	長軸×短軸 (a)	平面形状	検出面からの深さ (a)	底面標高 (a)	重複(旧→新)	備考
P 1	0.22×0.16	楕円形	9.21	158.80		
P 2	0.79×0.38	楕円形	8.31	158.78		

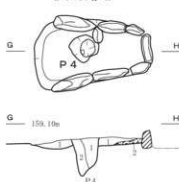
S I 150 炉 1



S I 150

炉 1 1 黒～黒褐色(10YR2/1～2.5Y3/1)砂・しまりやや強粘性やや弱 炭化物多量 【炭化物層】

S I 150 炉 2



S I 150

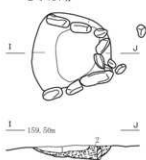
炉 2 1 黄褐色(2.5Y5/3～5/4)砂・しまりやや強粘性やや弱

2 黒色(2.5Y2/1～10YR2/1)シルト質砂・しまりやや強粘性やや弱 【炭化物層】

P 1 1 黒褐～黄灰色(2.5Y3/1～4/1)砂～シルト・しまりやや強粘性やや弱

2 黄褐色(2.5Y5/3)砂・しまりやや強粘性やや弱

S I 151 炉

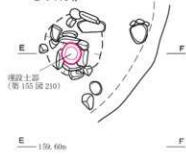


S I 151

炉 1 1 赤褐色(5YR4/6)検土上に近い黄褐色～近い黄褐色(10YR3/3～6/3)砂の混土・しまりやや強粘性やや弱

2 黒色(10YR2/1)と近い黄褐～灰黄褐色(10YR5/3～6/2)砂・しまりやや強粘性やや弱 炭化物30% 【炭化物層】

S I 175 炉



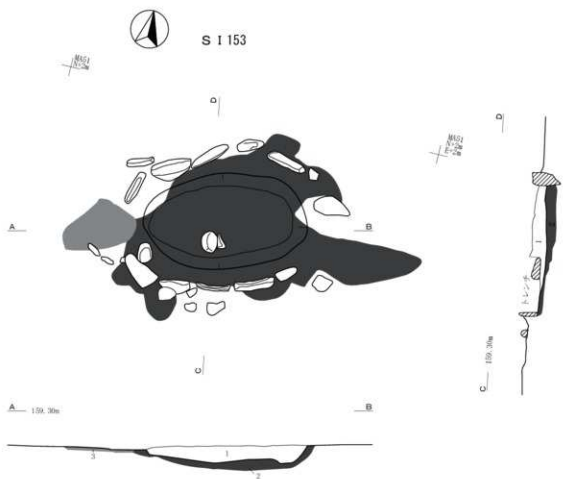
S I 175

炉 1 埋戻黄色(10YR5/2)砂・しまりやや強粘性中

2 黒褐～黄灰色(2.5Y3/1～4/1)砂・しまりやや強粘性中 炭化物：炭化物多量 【炭化物層】

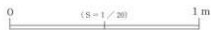


第66図 S I 150・151・175 竪穴建物跡(2)

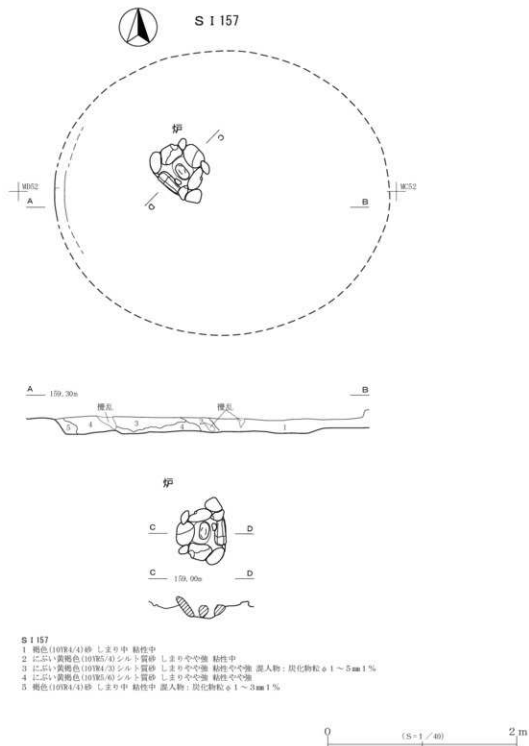


S I 153

- 1 にぶい黄褐色(10YR4/3)砂 しまり強 粘性中 炭人物：浅黄褐色土塊φ10～15mm3%、炭化物粒φ3mm1%未満、積土配φ1～5mm1%未満
- 2 にぶい赤褐色(5YR3/4)シルト しまり強 粘性弱 炭人物：炭化物塊φ5～8mm1%未満【強焼痕】
- 3 極硬砂～硬砂(7.5YR2/3～3/4)色シルト しまり強 粘性弱【弱焼痕】



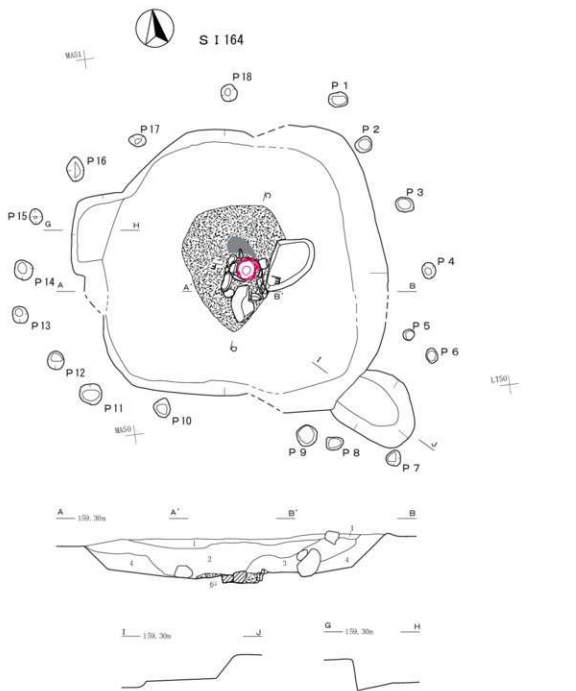
第 67 図 S I 153 竪穴建物跡



S I 157

- 1 褐色(10YR4/4)砂 しまり中 粘性中
- 2 にごい黄褐色(10YR5/4)シルト質砂 しまり中全強 粘性中
- 3 にごい黄褐色(10YR4/3)シルト質砂 しまり中全強 粘性中全強 炭人物；炭化物粒φ1～2mm 1%
- 4 にごい黄褐色(10YR5/6)シルト質砂 しまり中全強 粘性中全強
- 5 褐色(10YR4/4)砂 しまり中 粘性中 炭人物；炭化物粒φ1～3mm 1%

第 68 図 S I 157 竪穴建物跡



S I 164

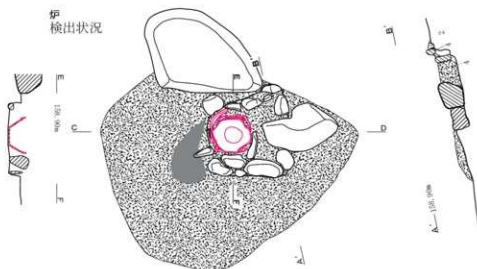
- 1 に濃い黄褐色(103R4/3)砂 しまり強 粘性弱 混人物：炭化物粒 ϕ 2~3mm 1%未満・塊 ϕ 5mm 1%未満、赤褐色土 20%
- 2 に濃い黄褐色(103R4/3)砂 しまり強 粘性弱 混人物：炭化物塊 ϕ 5~10mm 1%未満・粒 ϕ 1以下~3mm 1%未満、浅黄褐色土塊 ϕ 10~50mm 15%、礫 ϕ 30~100mm 3%
- 3 に濃い黄褐色(103R4/3)砂 しまり強 粘性弱 混人物：炭化物塊 ϕ 5~10mm 1%未満、浅黄褐色土 40%、礫 ϕ 150mm 20%
- 4 に濃い黄褐色(103R4/3)砂 しまり強 粘性弱 混人物：炭化物粒 ϕ 1以下~3mm 1%未満、浅黄褐色土塊 ϕ 10mm 5%



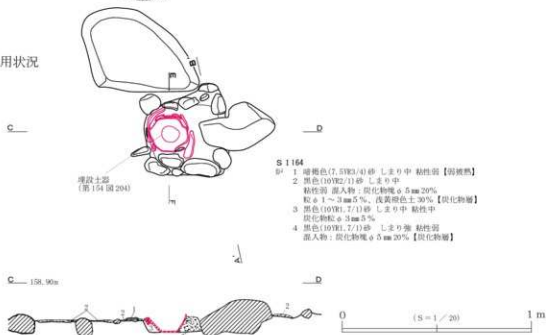
第 69 図 S I 164 竪穴建物跡 (1)

第36表 S I 164柱穴一覽表

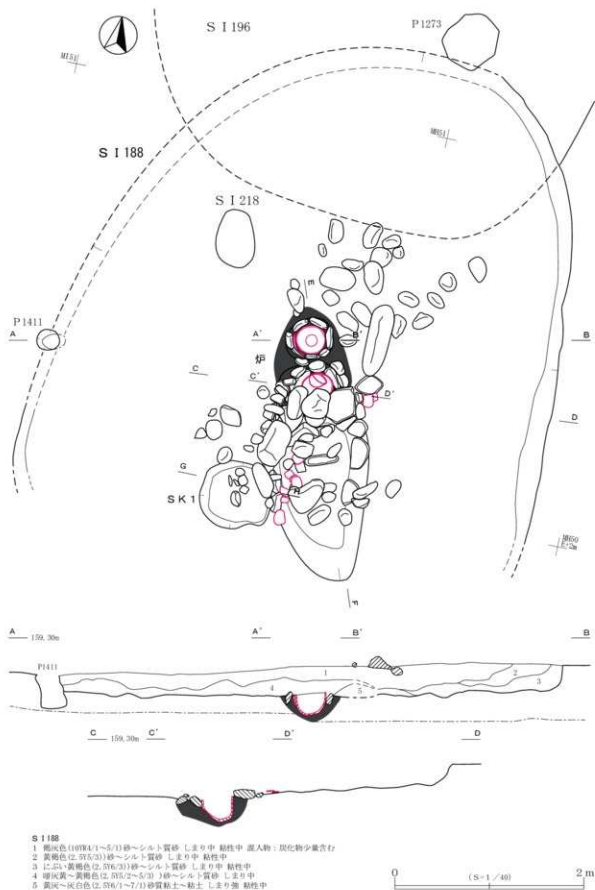
番号	長軸×短軸 (m)	平面形状	検出面からの深さ (m)	底面標高 (m)	重層(旧→新)	備考
P 1	0.20×0.16	楕円形	0.11	159.61		
P 2	0.18×0.18	円形	0.13	159.60		
P 3	0.18×0.16	楕円形	0.69	158.99		
P 4	0.18×0.14	楕円形	0.18	158.93		
P 5	0.12×0.11	円形	0.69	159.03		
P 6	0.11×0.12	楕円形	—	—		
P 7	0.16×0.16	楕円形	0.10	158.98		
P 8	0.18×0.14	楕円形	0.69	159.04		
P 9	0.22×0.22	円形	0.08	159.06		
P 10	0.18×0.16	楕円形	0.22	158.75		
P 11	0.24×0.22	円形	0.13	158.87		
P 12	0.20×0.17	円形	0.20	158.83		
P 13	0.18×0.16	円形	0.21	158.80		
P 14	0.22×0.19	円形	0.13	158.88		
P 15	0.16×0.14	円形	0.10	158.90		
P 16	0.26×0.18	楕円形	0.13	158.96		
P 17	0.18×0.13	楕円形	0.16	158.86		
P 18	0.18×0.17	円形	0.12	158.98		

伊
検出状況

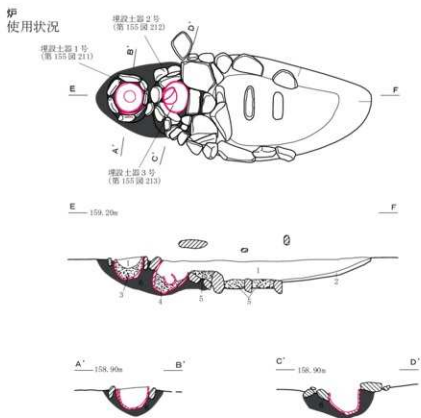
使用状況



第70図 S I 164 竪穴建物跡(2)



第71図 S I 188 竪穴建物跡(1)



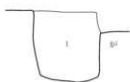
S I 188

- ※1 埋灰黄～黄褐色 (C. 0S5/2～5/3) 砂 しまり中 粘性中
 ※2 灰黄褐色 (0S04/2～5/2) 砂 しまり中 粘性中 混入物：炭化物少量
 ※3 黒色 (0S01/7/1) シルト しまり弱 粘性強 【炭化物多】
 ※4 黒色 (0S01/7/1) シルト しまり弱 粘性強 【炭化物多】
 ※5 黒色 (0S01/7/1) シルト しまり弱 粘性強 【炭化物多】
 ※6 明黄褐色～明褐色 (0S5/6～7, 5S5/6) 砂 しまり強 粘性弱 【焼熱】

SK 1



G — 158.90m — H

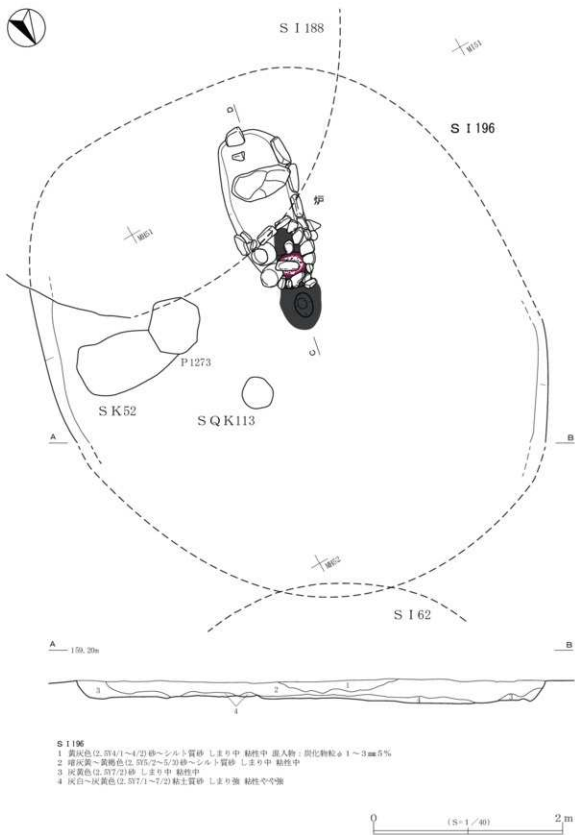


S I 188

S K 1 1 灰褐色 (C. 014/2～5/2) 砂 しまり中 粘性中 混入物：炭 6.50～100 μm 少量

0 ————— (S=1/40) ————— 2m

第72図 S I 188 竪穴建物跡(2)

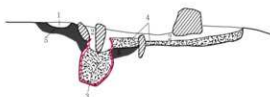
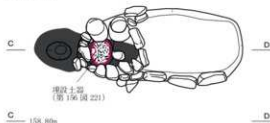


第73図 S I 196 竪穴建物跡(1)

S I 196 炉
検出状況

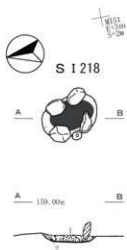


使用状況



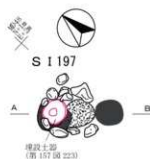
S I 196

- ① 黄灰色(2.5)4/1~4/2)砂~シルト質砂 しまり中
粘性中 富人物・炭化物②(1~3mm)5%
② 暗灰黄色(2.5)5/2~5/3)砂 しまり中 粘性中
③ 黒色(10)1.7/1)シルト しまり中 粘性弱【炭化物層】
④ 灰~黄褐色(10)3/3~2.5)5/3)砂 しまり中
粘性中 富人物・炭化物多量【炭化物層】
⑤ 明赤褐色(5)3/5)4)砂 しまり強 粘性弱【炭熟】



S I 218

- ① 黒褐色(7.5)3/3)2)シルト質砂 しまり中
粘性やや弱 炭人物・炭化物多量
② 明赤褐色(5)3/5)4)砂 しまり強 粘性弱【炭熟】



S I 197

- ① 暗灰黄~黄灰色(2.5)5/2~6/1)砂 しまり中 粘性中
② 明赤褐色(5)3/5)4)砂 しまり強 粘性弱【炭熟】
③ 黒~黒褐色(10)3/2/1~3/1)砂 しまり中 粘性やや弱
④ 明赤褐色(5)3/5)4)砂 しまり強 粘性弱【炭熟】

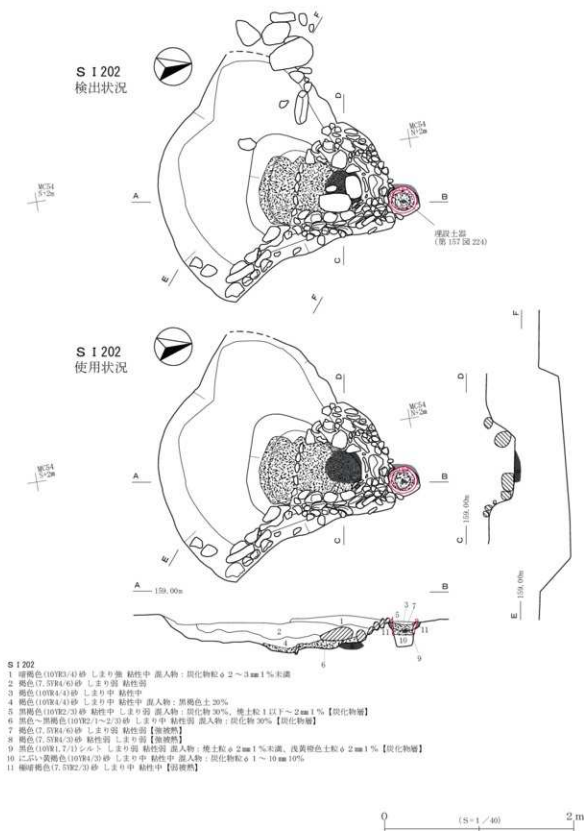


第2期

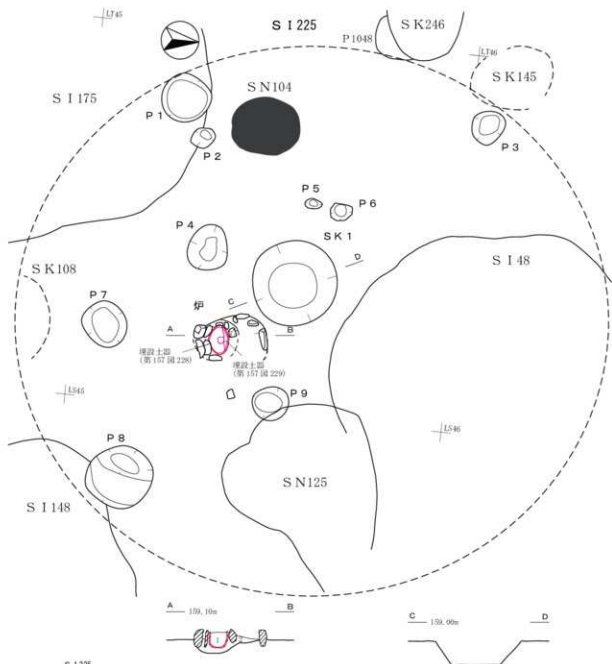
第1期



第74図 S I 196 (2)・197・212・218 竪穴建物跡



第75図 S I 202 竪穴建物跡



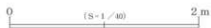
S I 225

1 黄灰~灰黄色(2.5/5/1~6/1)砂 しまり中 粘性中

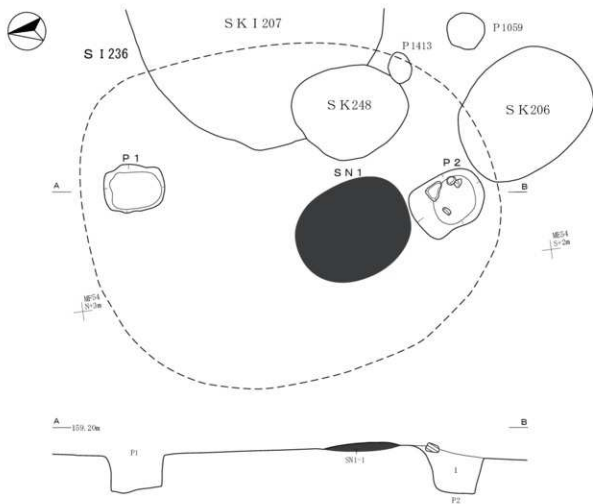
2 黑色(2.5/2/1)砂 しまり中 粘性中 炭人物: 浅黄褐色土塊φ5mm3%, 炭化物粒φ1~5mm1%未満, 【検出面に微細な植筋】

第37表 S I 225 柱穴一覧表

番号	長軸×短軸 (m)	平面形状	床面からの深さ (m)	底面標高 (m)	重複(旧→新)	備考
P 1	0.52×0.51	円形	0.14	158.69		
P 2	0.26×0.22	不整形円形	0.37	158.46		
P 3	0.37×0.34	楕円形	0.24	158.75		
P 4	0.50×0.43	楕円形	0.36	158.46		
P 5	0.19×0.10	楕円形	0.18	158.88		
P 6	0.23×0.18	不整形円形	0.06	158.80		
P 7	0.50×0.44	円形	0.34	158.43		
P 8	0.68×0.65	円形	0.29	158.48		
P 9	0.38×0.36	円形	0.21	158.57		



第76図 S I 225 竪穴建物跡



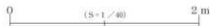
S I 236

SN 1 1 に近い赤褐色(10YR/4)シルト しまり強 粘性中【成熱】

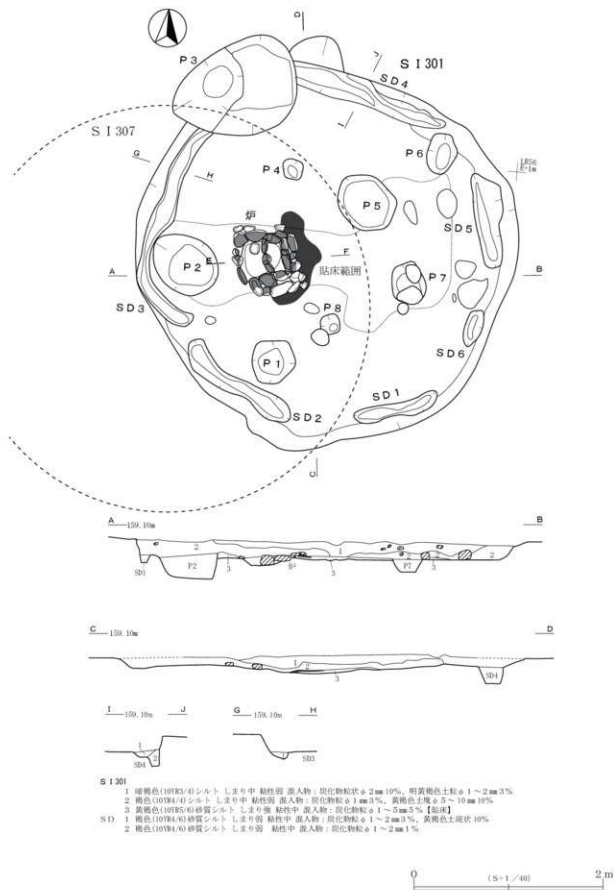
P 2 1 灰黄緑~に近しい黄褐色(10YR/2~4.5)砂 しまり中 粘性やや弱

第38表 S I 236 柱穴一覽表

番号	長軸×短軸 (m)	平面形状	表面からの深さ (m)	底面標高 (m)	重機(目→新)	備考
P-1	0.65×0.50	楕円形	0.40	158.50		
P-2	0.90×0.63	楕円形	0.70	158.50		磨製石斧1点(177.9g(第21058642))



第77図 S I 236 竪穴建物跡



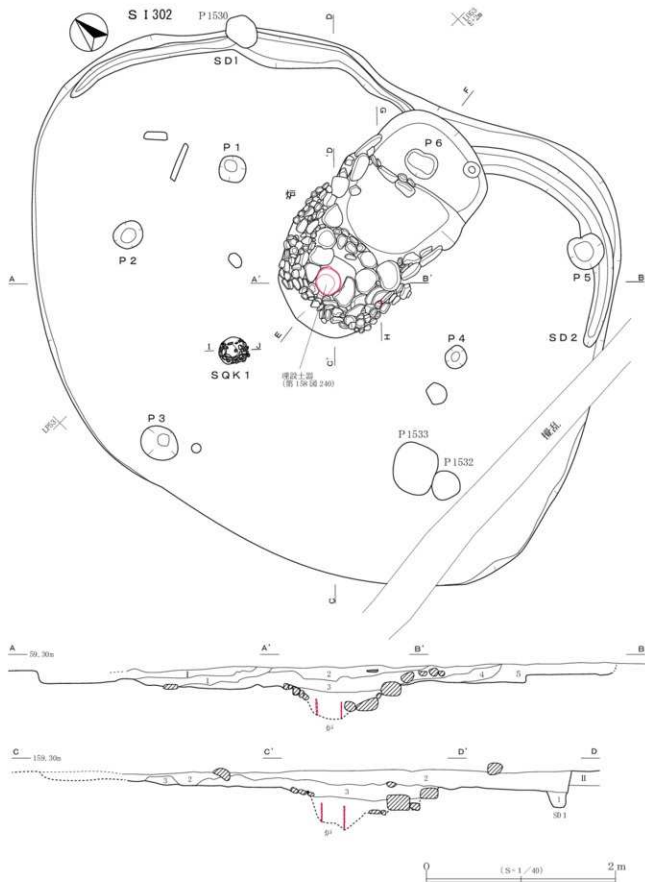
第78図 S I 301 竪穴建物跡(1)

第39表 S I 301 柱穴一覧表

番号	長軸×短軸 (a)	平面形状	床面からの深さ (a)	底面標高 (a)	重複 (旧→新)	備考
P 1	0.49×0.46	不整形円形	0.30	158.51		
P 2	0.76×0.60	楕円形	0.18	158.52		
P 3	1.36×0.98	楕円形	0.48	158.33		
P 4	0.22×0.39	楕円方形	0.36	158.62		
P 5	0.68×0.53	楕円形	0.06	158.62		
P 6	0.42×0.30	不整形楕円形	0.20	158.48		
P 7	0.42×0.34	楕円形	0.06	158.62		
P 8	0.21×0.20	楕円方形	0.22	158.46		



第79図 S I 301 竪穴建物跡(2)



第80図 S I 302 竪穴建物跡 (1)

第3章 調査の方法と成果

S 1302

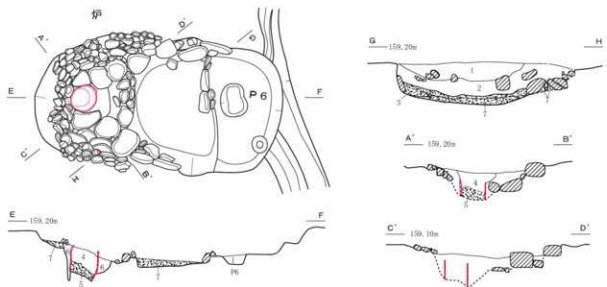
- 1 褐色(101R1/4)砂質シルト・しまり中・粘性中 産人物：炭化物粒 ϕ 1~3mm5%
- 2 黒褐色(101R2/3)砂質シルト・しまり強・粘性弱 産人物：炭化物粒 ϕ 2~5mm5%、にぶい黄褐色土20%
- 3 褐色(101R1/4)砂質シルト・しまり中・粘性中 産人物：炭化物粒 ϕ 1~5mm5%
- 4 明黄褐色(101R7/6)砂質シルト・しまり中・粘性中 産人物：炭化物粒 ϕ 1~5mm3%
- 5 褐色(101R1/4)砂質シルト・しまり中・粘性中 産人物：炭化物粒 ϕ 1~5mm5%

- S D 1 黄褐色(101R5/6)砂質シルト・しまり中・粘性弱 産人物：炭化物粒 ϕ 1~2mm5%、褐色土20%

第40表 S 1302柱穴一覧表

番号	長軸×短軸 (m)	平面形状	検出面からの深さ (m)	底面標高 (m)	重複(旧→新)	備考
P 1	0.29×0.29	円形	0.20	158.90		
P 2	0.29×0.18	円形	0.20	158.74		
P 3	0.41×0.33	楕円形	0.30	158.70		
P 4	0.24×0.24	円形	0.10	158.86		
P 5	0.39×0.33	楕円形	0.16	158.78	重複→P 5	
P 6	0.22×0.18	楕円形	0.12	158.92	掘式P→P 6	

※ [] 内の数値は推定値。() 内の数値は残存値を示す。



S 1302

- G 1 黒褐色(101R2/3)砂質シルト・しまり強・粘性弱 産人物：炭化物粒 ϕ 2~5mm5%、にぶい黄褐色土20%
- 2 にぶい黄褐色(101R5/4)砂質シルト・しまり中・粘性中 産人物：炭化物粒 ϕ 1~2mm3%
- 3 褐色(101R1/4)粘土質シルト・しまり中・粘性中 産人物：にぶい黄褐色土塊 ϕ 5~10mm5%、炭化物粒 ϕ 1~2mm3%
- 4 明黄褐色(101R7/6)シルト・しまり中・粘性中 産人物：炭化物粒1mm以下90%【炭化物層】
- 5 灰色(101R1, 7/1)シルト・しまり弱・粘性中 産人物：褐色土塊 ϕ 10~50mm10%、炭化物粒 ϕ 1mm以下50%【炭化物層】
- 6 暗褐色(101R3/4)砂質シルト・しまり弱・粘性弱 産人物：礫 ϕ 10~30mm90%
- 7 褐色(101R1, 7/1)砂質シルト・しまり弱・粘性中 産人物：炭化物多量【炭化物層】
- P 6 1 にぶい黄褐色(2, 10R/4)シルト・しまり中・粘性中 産人物：炭化物粒 ϕ 1~5mm3%

0 (S=1/40) 2 m

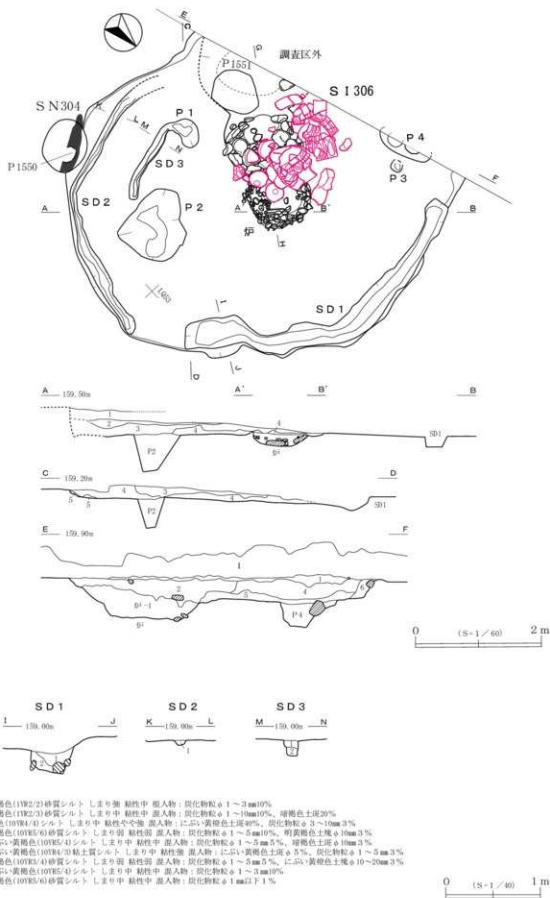


S 1302

- S Q K 1 1 褐色(101R1/4)砂質シルト・しまり弱・粘性弱 産人物：炭化物粒 ϕ 1~2mm3%

0 (S=1/20) 50 cm

第81図 S 1302 竪穴建物跡(2)



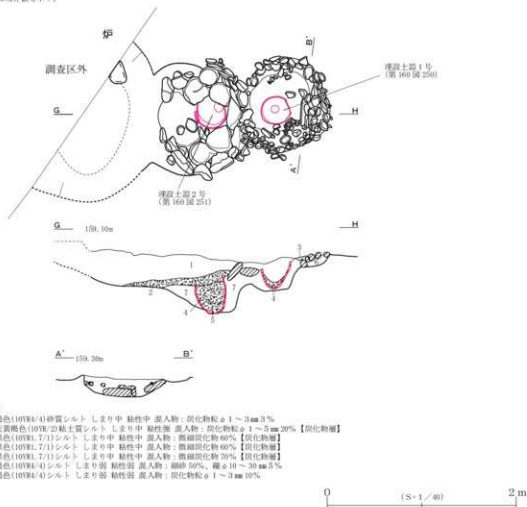
第 82 図 S I 306 竪穴建物跡 (1)

第41表 S I 306 柱穴一覽表

番号	長軸×短軸 (a)	平面形状	床面からの深さ (a)	底辺標高 (a)	重複(旧一節)	備考
P 1	0.44×0.32	不整形円形	0.40	158.38	S I 306 S D 3との新旧不明	
P 2	1.13×1.13	不整形	0.46	158.40		
P 3	0.18×0.10	楕円方形	0.52	158.76		
P 4	0.90×0.17	楕円形	0.38	158.46		礎。

※ () 内の数値は残存量を示す。

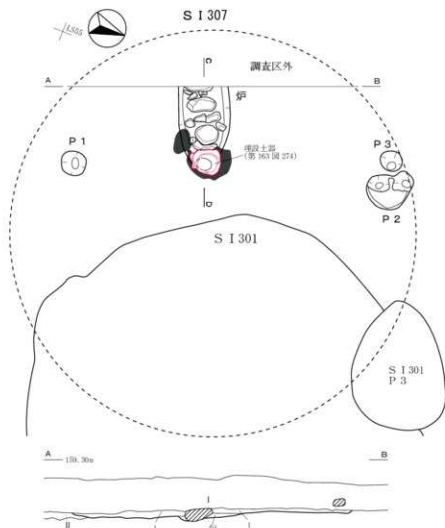
※ () 内の数値は残存量を示す。



S I 306

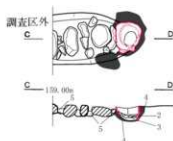
- 0¹ 1 褐色(10YR/4)砂質シルト しまり中 粘性中 炭人物：炭化物粒φ1～3mm 3%
- 2 灰黄褐色(10YR/2)粘土質シルト しまり中 粘性強 炭人物：炭化物粒φ1～5mm 20% 【炭化物層】
- 3 黒色(10YR/7.1)シルト しまり中 粘性中 炭人物：微細炭化物 60% 【炭化物層】
- 4 黒色(10YR/7.1)シルト しまり中 粘性中 炭人物：微細炭化物 60% 【炭化物層】
- 5 黒色(10YR/7.1)シルト しまり中 粘性中 炭人物：微細炭化物 70% 【炭化物層】
- 6 褐色(10YR/4)シルト しまり弱 粘性弱 炭人物：細砂 50%、礫φ10～30mm 5%
- 7 褐色(10YR/4)シルト しまり弱 粘性弱 炭人物：炭化物粒φ1～3mm 10%

第 83 図 S I 306 竪穴建物跡 (2)



S I 307

1 暗褐色(10YR3/4)砂質シルト しまり中 粘性弱 炭化物粒φ1~2mm3%, 黄褐色土粒φ1~2mm5%

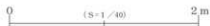


S I 307

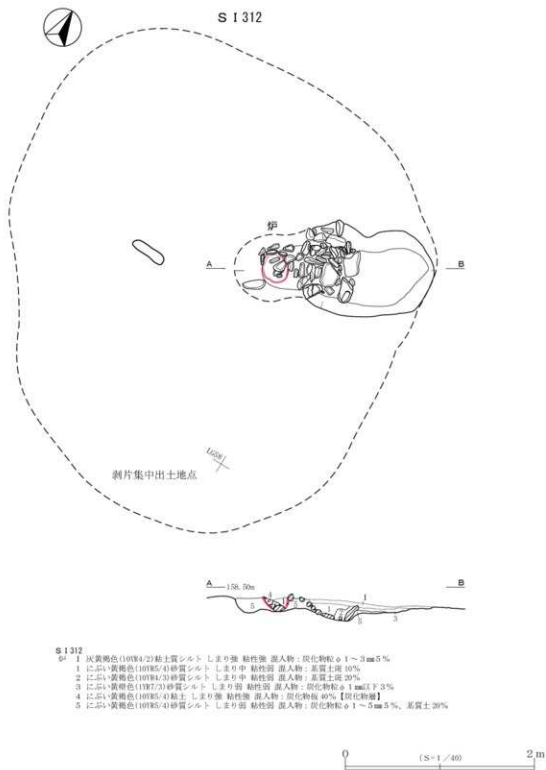
- 竈 1 暗褐色(10YR3/4)砂質シルト しまり中 粘性中 炭化物粒φ1~3mm3%, 黄褐色土塊状5%
 2 暗褐色(10YR3/4)砂質シルト しまり中 粘性中 炭化物粒φ1~3mm3%, 黄褐色土塊状5%
 3 暗褐色(10YR3/4)砂質シルト しまり中 粘性中 炭化物粒φ1~3mm3%, 黄褐色土塊状5%
 4 褐色(7.5YR4/6)砂質シルト しまり中 粘性弱【埋設】
 5 黄褐色(10YR5/6)砂質シルト しまり中 粘性中 炭化物粒φ1~3mm10%

第42表 S I 307柱穴一覽表

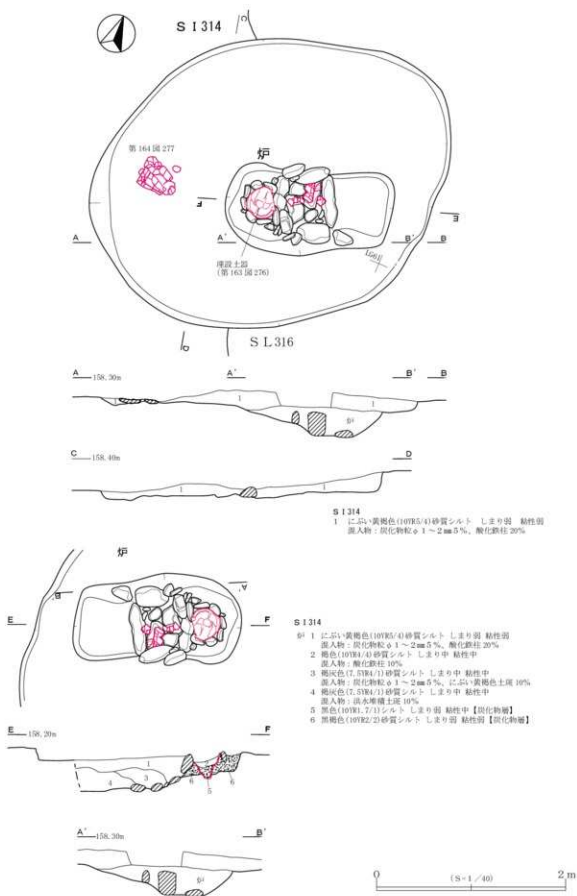
番号	長軸×短軸 (m)	平面形状	坑底からの深さ (m)	底面標高 (m)	重層(旧一新)	備考
P 1	0.26×0.25	楕円方形	0.16	158.64		
P 2	0.50×0.38	不定形	0.08	158.74		
P 3	0.24×0.22	円形	0.20	158.62		



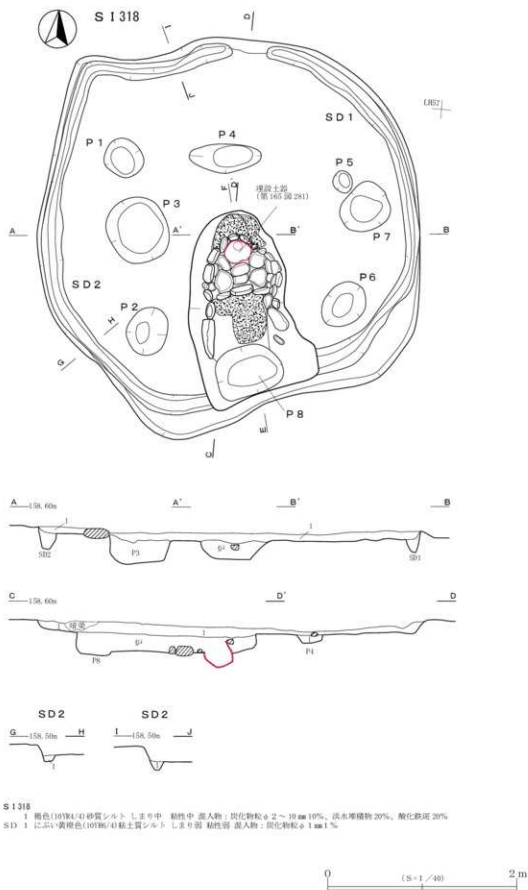
第 84 図 S I 307 竈穴建物跡



第 85 図 S 1312 竪穴建物跡



第86図 S I 314 竪穴建物跡



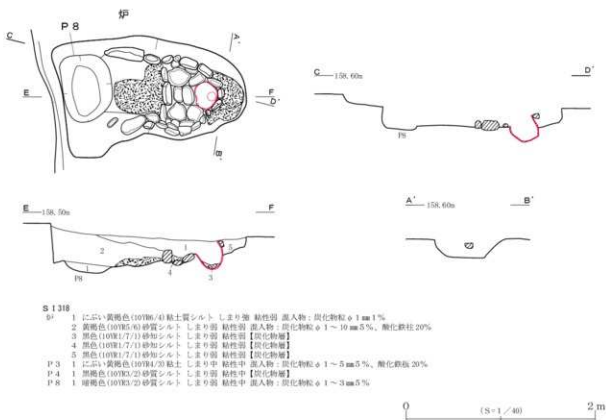
S 1318

1 褐色(10YR4/0)砂質シルト しまり中 粘性中 混入物：炭化物粒 ϕ 2~10mm 10%、洪水堆積物 20%、酸化鉄皮 20%
 SD 1 に近い黄褐色(10YR6/4)粘土質シルト しまり弱 粘性弱 混入物：炭化物粒 ϕ 1mm 1%

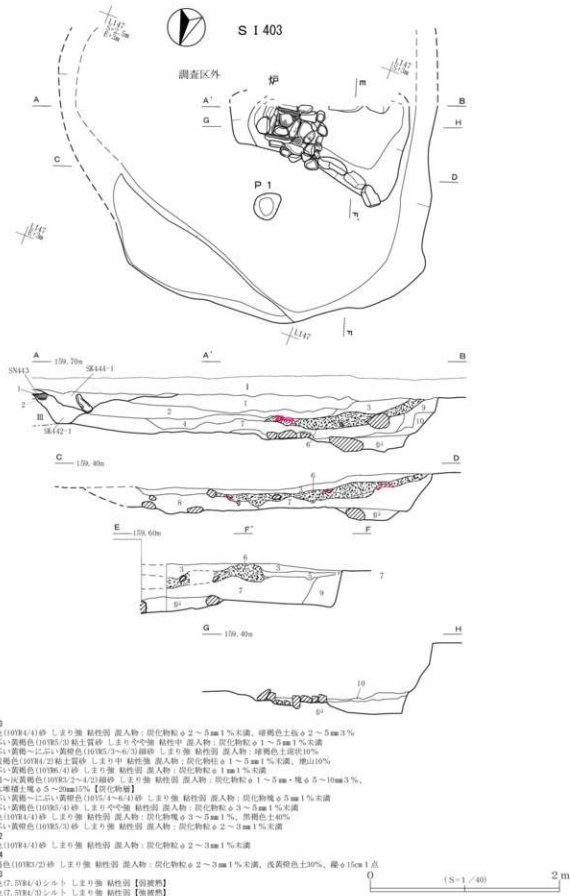
第 87 図 S 1318 竪穴建物跡 (1)

第43表 S1318柱六一覽表

番号	長軸×短軸 (a)	平面形状	検出面からの深さ (a)	底面標高 (a)	遺覆(旧→新)	備考
P 1	0.52×0.42	楕円形	0.23	158.05		
P 2	0.75×0.62	楕円形	0.30	157.99		
P 3	0.42×0.40	楕円形	0.15	158.10		
P 4	0.76×0.31	楕円形	0.14	158.09		
P 5	0.22×0.21	円形	0.32	158.08		
P 6	0.53×0.46	楕円形	0.10	158.10		
P 7	0.54×0.42	楕円形	0.22	158.04		
P 8	0.70×0.42	不整形楕円形	0.40	157.86	②との新旧不明	



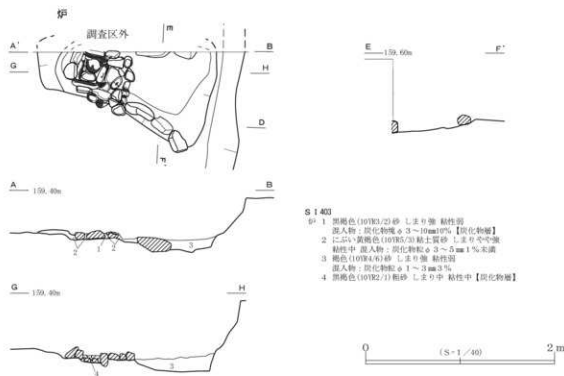
第88図 S1317・318(2) 竪穴建物跡



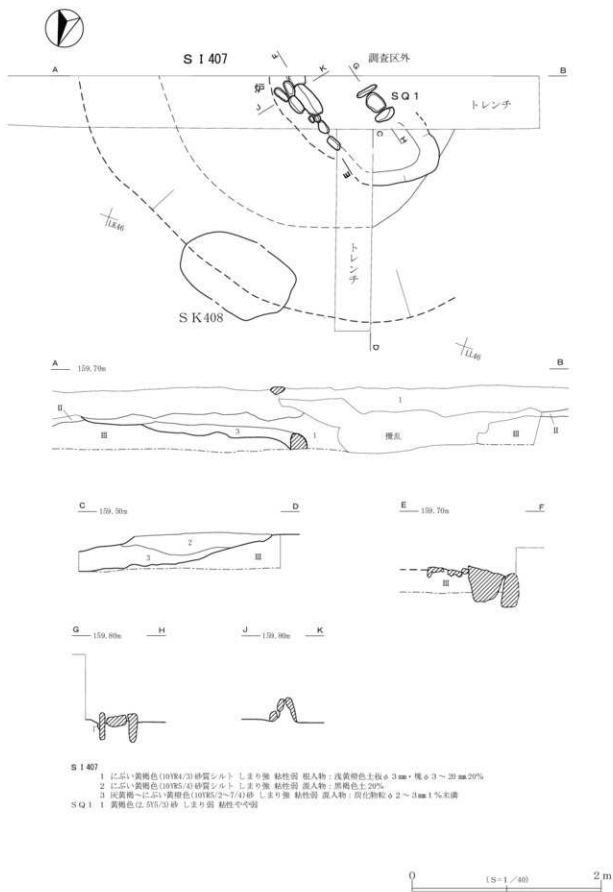
第 89 図 S I 403 竪穴建物跡 (1)、SK442・444 土坑、SN443 焼土遺構

第44表 S I 403 柱穴一覧表

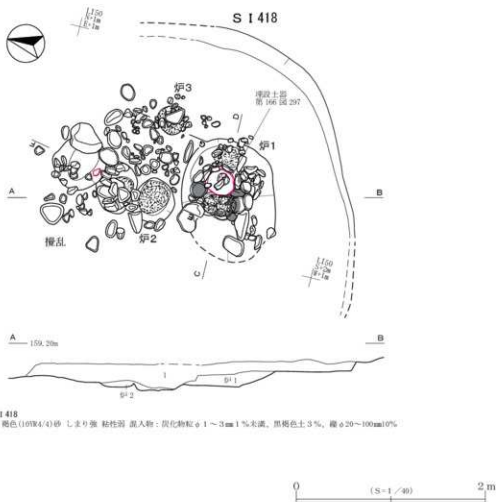
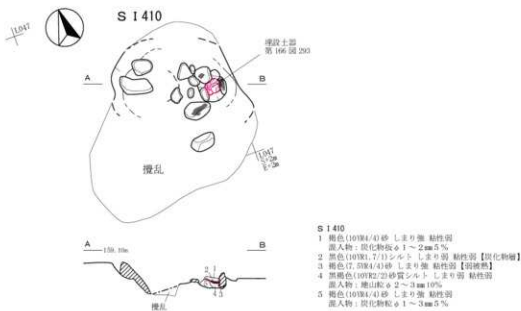
番号	長軸×短軸 (m)	平面形状	床面からの深さ (m)	底面標高 (m)	重層(旧→新)	備考
P 1	0.31×0.28	不整形円形	0.22	158.69		



第90図 S I 403 竪穴建物跡(2)



第91図 S I 407 竪穴建物跡



第92図 S 1410・418 (1) 竪穴建物跡

炉1
検出状況



使用状況



炉2
確認状況



使用状況



S 1418

- 炉2 1 に濃い黄褐色(10YR6/4)細砂 しまり強 粘性弱 混入物：炭化物粒φ 2～3mm 5%
 2 黒色土(10YR1.7/1)砂 しまり中 粘性弱 【炭化物層】
 3 に濃い黄褐色(10YR4/3)砂 しまり強 粘性弱
 混入物：炭化物粒φ 2～5mm 5%、浅黄褐色土粒φ 1～2mm 3%
 4 黒色土(10YR1.7/1)砂 しまり中 粘性弱 【炭化物層】

炉3
確認状況

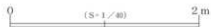


使用状況

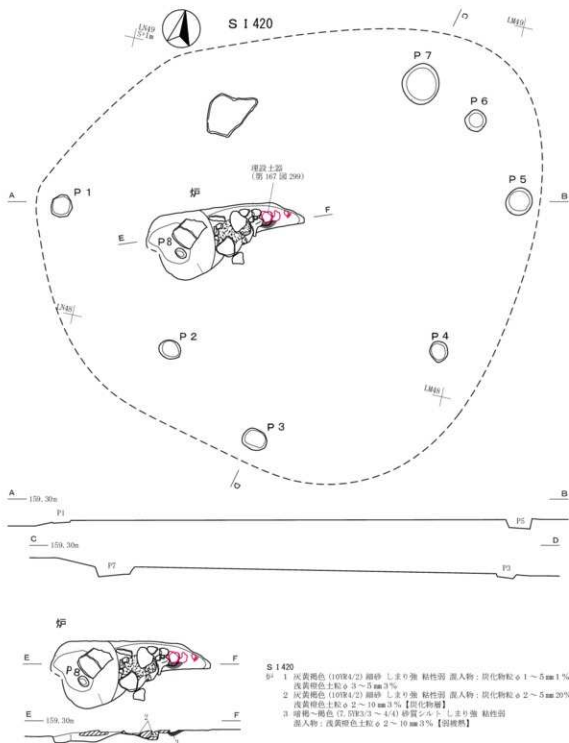


S 1418

- 炉3 1 黒色土(10YR1.7/1)砂 しまり中 粘性弱
 混入物：浅黄褐色土粒φ 1～5mm 5% 【炭化物層】



第93図 S 1418 竪穴建物跡(2)

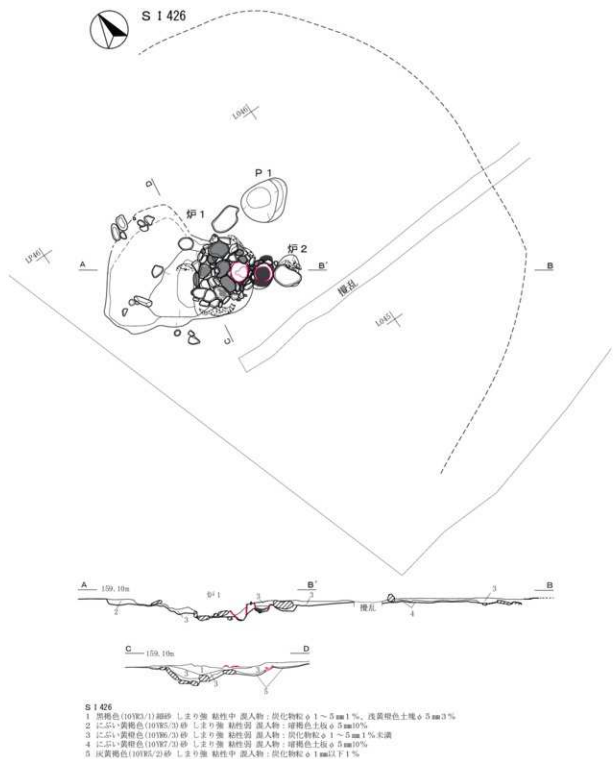


第45表 S 1420 柱穴一覽表

番号	長軸×短軸 (m)	平面形状	検出面からの深さ (m)	底面標高 (m)	遺構 (図一割)	備考
P 1	0.14×0.12	円形	0.06	159.05		
P 2	0.14×0.10	円形	0.08	159.00		
P 3	0.16×0.12	楕円形	0.06	158.95		
P 4	0.12×0.09	円形	0.05	159.04		
P 5	0.30×0.26	円形	0.01	158.98		
P 6	0.22×0.20	円形	0.11	159.06		
P 7	0.42×0.38	円形	0.12	158.97		
P 8	0.12×0.10	楕円形	0.07	158.95	①→P 8	

0 (S=1/40) 2m

第94図 S 1420 竪穴建物跡

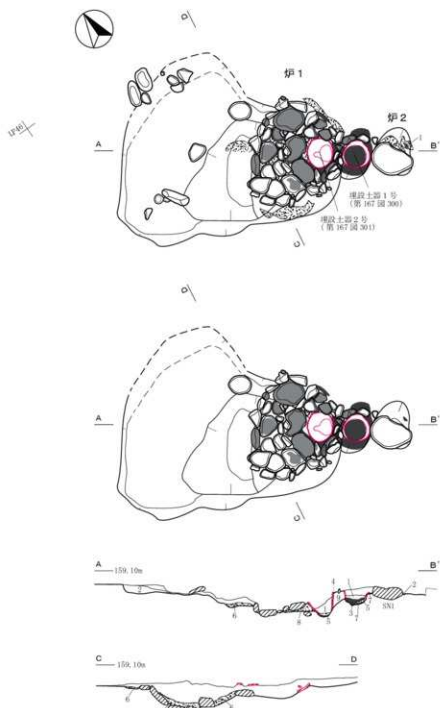


第46表 S 1426 柱穴一覧表

番号	長軸×短軸 (m)	平面形状	検出面からの深さ (m)	底面標高 (m)	重複(目→筋)	備考
P-1	0.80 × 0.64	不整形円形	0.24	158.44		

0 (S=1/60) 2 m

第95図 S 1426 竪穴建物跡 (1)

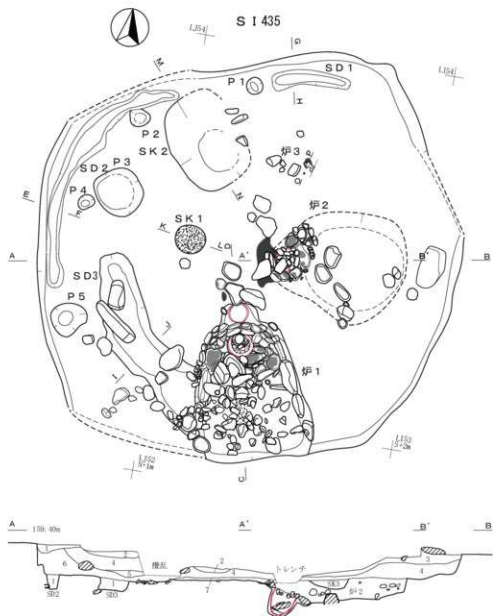


S1426

- 竈1
- 1 土赤・黄褐色(10YR6/3~7)砂・しまり強 粘性弱
 - 2 土赤・黄褐色(10YR7/3)砂・しまり強 粘性弱 炭人物・炭化物 ϕ 2~3mm1%
 - 3 褐色(7.5YR4/4)砂・しまり強 粘性弱【炭被燃】
 - 4 褐色(7.5YR4/4)砂・しまり強 粘性弱【炭被燃】
 - 5 黒色(10YR1/7)シルト質砂・しまり中 粘性中【炭化物層】
 - 6 黒色(10YR2/1)シルト質砂・しまり中 粘性中 炭人物・炭化物 ϕ 1~5mm30%、浅黄褐色土 ϕ 2~3mm1%【炭化物層】
 - 7 黒褐色(10YR3/2)緑・しまり強 粘性弱【炭被燃】
 - 8 黒褐色(10YR2/2)シルト質砂・しまり中 粘性中 炭人物・炭化物50%【炭化物層】
 - 9 土赤・黄褐色(10YR7/3)砂・しまり強 粘性弱 炭人物・炭化物 ϕ 2~3mm1%、暗褐色土10%
- 竈2
- 1 褐色(7.5YR4/4)砂・しまり強 粘性弱【炭被燃】
 - 2 黒色(10YR2/1)シルト質砂・しまり中 粘性中 炭人物・炭化物 ϕ 1~5mm30%、浅黄褐色土 ϕ 2~3mm1%

0 (S=1/40) 2m

第96図 S1426 竈穴建物跡(2)



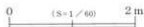
S 1435

- 1 褐色(10YR/4)砂 しまり強 粘性弱 混入物:炭化物粒φ2~3mm1%未満、浅黄褐色土粒φ5~10mm10%、縦φ20~30mm1%未満
- 2 に灰~黄褐色(10YR/7)砂 しまり強 粘性弱 混入物:炭化物粒φ2~3mm1%未満、暗褐色土20%
- 3 に灰~黄褐色(10YR/7)砂 しまり強 粘性弱 混入物:黒褐色土20%、縦φ30~250mm20%
- 4 褐~に灰~黄褐色(10YR/4~7.4)砂 しまり強 粘性弱 混入物:灰白色土粒・塊φ3~30mm20%、縦φ10~50mm10%
- 5 に灰~黄褐色(10YR/7)砂 しまり強 粘性弱 混入物:縦φ20~30mm10%
- 6 褐~黄褐色(10YR/4~5.6)砂 しまり強 粘性中 混入物:灰白色土塊φ10~30mm15%
- 7 に灰~黄褐色(10YR/3~4.4)砂 しまり強 粘性弱 混入物:縦φ30~50mm30%、炭化物粒φ3~5mm1%

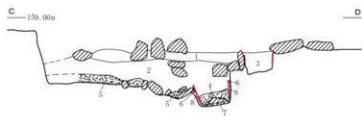
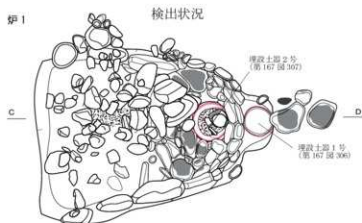
- SD 2 1 褐色(10YR/4)砂 しまり強 粘性中 混入物:炭化物粒φ1mm1%未満
- SD 3 1 に灰~黄褐色(10YR/6)砂 しまり強 粘性弱 混入物:縦10mm1%

第47表 S 1435 柱穴一覧表

番号	長軸×短軸 (a)	平面形状	検出面からの深さ (a)	底面標高 (a)	重層(旧→新)	備考
P 1	0.26×0.26	円形	0.14	158.49		
P 2	0.34×0.29	楕円形	0.08	158.57	P 2→SD 2	
P 3	0.76×0.72	楕円方形	0.24	158.43		
P 4	0.26×0.21	円形	0.27	158.39		
P 5	0.56×0.48	不正円形	0.37	158.23		



第97図 S 1435 竪穴建物跡 (1)



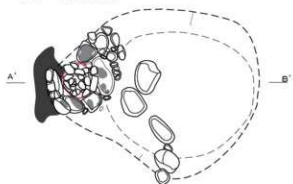
S 1435

- 炉1
- 1 濃い黄褐色(10YR5/4)粘土質砂 しまり強 粘性弱～中 混人物：炭化物粒φ5mm1%、燻褐色土10%
 - 2 濃い黄褐色(10YR5/4)砂 しまり強 粘性弱 混人物：炭化物粒φ5mm1%
 - 3 燻褐色(10YR3/3～4/4)砂 しまり強 粘性弱 混人物：炭化物粒φ3～5mm1%未満、礫φ10mm3%
 - 4 黒色(10YR1.7/1)シルト しまり中 粘性弱 混人物：浅黄褐色土塊φ5～10mm5%【炭化物層】
 - 5 黒褐色(10YR2/3)シルト質砂 しまり中 粘性弱 混人物：炭化物粒φ3mm1%未満、黒色土塊φ5～10mm20%【炭化物層】
 - 6 褐色(7.5YR4/4)砂 しまり強 粘性弱【被照】
 - 7 黒色(10YR1.7/1)シルト しまり中 粘性弱 混人物：浅黄褐色土塊φ5～10mm5%【炭化物層】
 - 8 燻褐色(10YR3/3)シルト しまり強 粘性弱

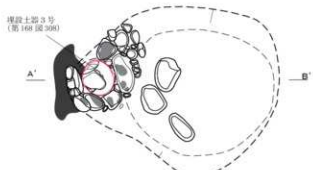
0 (S=1/40) 2m

第98図 S 1435 竪穴建物跡(2)

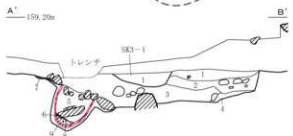
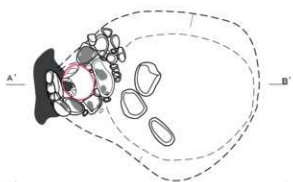
図2 検出状況



埋設土器内小礫群除去後の状況1



埋設土器内小礫群除去後の状況2

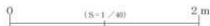


S 1435

- S 2
- 1 褐色(10YR4/4)砂 しまり強 粘性弱 混入物：礫φ20~30mm5%
 - 2 褐色(10YR4/4)砂 しまり強 粘性弱 混入物：礫φ40~50mm20%、炭化物粒φ1~3mm1%未満
 - 3 灰色(5YR4/4)砂~褐色(10YR4/2~4)砂 しまり強 粘性弱 混入物：礫φ20~50mm30%、炭化物粒φ3~5mm1%
 - 4 褐色(10YR4/4)砂 しまり強 粘性弱 混入物：炭化物粒φ1~3mm3%
 - 5 暗褐色(10YR3/2)粗砂 しまり強 粘性弱 混入物：礫φ10~30mm30%、焼土粒φ1~3mm3%
 - 6 褐色(7.5YR4/4)砂 しまり強 粘性弱 【混然】
 - 7 褐色(7.5YR4/4)砂 しまり強 粘性弱 【混然】
 - 8 黒色(10YR1.7/1)粗砂 しまり強 粘性弱 【炭化物層】
 - 9 暗褐色(10YR3/2)粗砂 しまり強 粘性弱 混入物：炭化物粒φ2~3mm3%、礫φ10~20mm20%

SK3

- 1 灰色~黄褐色(10YR7/4)砂 しまり強 粘性弱 混入物：灰白色土粒・礫φ3~30mm



第99図 S 1435 竪穴建物跡(3)

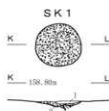
SD 2



SD 1

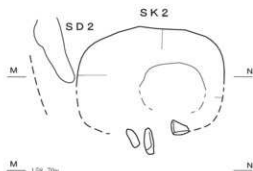


SD 3

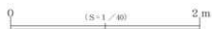


S 1435

- SK 1 1 灰黄褐色 (10YR4/2) シルト質砂 しまりや中強 粘性中
 混入物：炭化物粒φ2~3mm 15%
 2 黒色 (10YR1, 7/1) シルト しまり中 粘性弱
 混入物：灰黄褐色土粒φ3~5mm 1% 【炭化物層】



M 156.70m

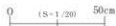


伊3

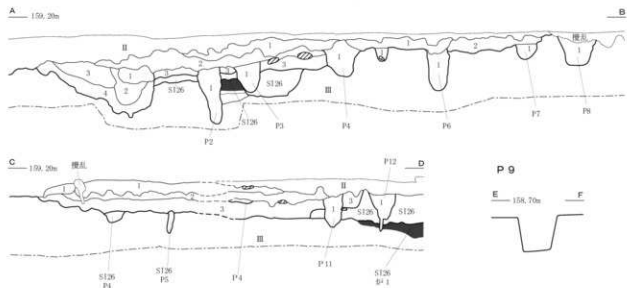
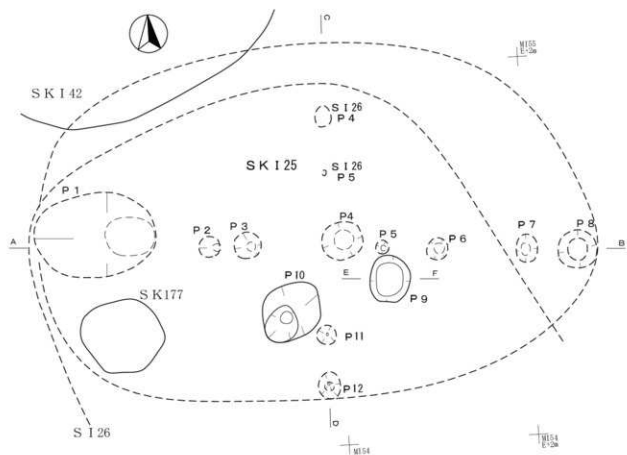


S 1435

- 伊3 1 赤褐~褐色 (5YR4/8~7, 5YR4/4) 粗砂 しまり強 粘性弱 【炭粉】
 2 濃い黄褐色 (10YR5/3) 砂 しまり強 粘性弱 混入物：炭化物粒φ5mm 30% 【炭化物層】

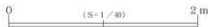


第100図 S 1435 竪穴建物跡 (4)



SK I 25

- 1 埋褐色(10R3/4)砂・しまりやや強～強 粘性やや弱～中 炭人物：炭化物比 ϕ 1～10mm10%、浅黄褐色土塊 ϕ 50%
- 2 埋褐色(10R3/4)砂と褐色(10R4/4)シルト質砂の混土 塵土取 ϕ 1～10mm1%、黒褐色土塊 ϕ 50%
- 3 褐色(10R4/4)シルト質砂・しまりやや強～強 粘性やや弱～中 炭人物：炭化物比 ϕ 1～10mm10%【取土】



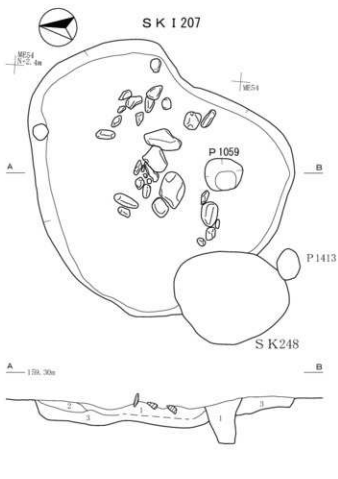
第101図 SK I 25 竪穴建物跡(1)

SK I 25

- P 1 1 に濃い黄褐色(10R4/4)砂 しまりや中強 粘性や中弱 炭人物 炭化物粒径φ 3mm 3%
 2 に濃い黄褐色(10R4/3)砂 しまりや中弱～中 粘性や中弱～中 炭人物 炭化物粒径φ 3mm 3%
 3 に濃い黄褐色(10R4/4)砂 しまりや中強 粘性や中弱 炭人物 炭化物粒径φ 3mm 3%
 4 に濃い黄褐色(10R4/4)砂 しまりや中強 粘性や中弱
 P 2 1 褐色(10R4/4)シルト質砂 しまりや中強～強 粘性や中弱～中 炭人物 炭化物粒径φ 1～10mm 10%
 P 3 1 褐色(10R4/4)シルト質砂 しまりや中強～強 粘性や中弱～中 炭人物 炭化物粒径φ 1～10mm 5%、焼土粒φ 1～10mm 10%
 P 4 1 褐色(10R4/4)シルト質砂 しまりや中強 粘性や中弱～中 炭人物 炭化物粒径φ 1～10mm 5%、焼土粒φ 1～10mm 7%
 P 5 1 に濃い黄褐色(10R4/3)砂 しまりや中弱～中 粘性や中弱～中 炭人物 炭化物粒径φ 3mm 3%
 P 6 1 に濃い黄褐色(10R4/3)砂 しまりや中弱～中 粘性や中弱～中 炭人物 炭化物粒径φ 3mm 3%、焼50～200mm 3%
 P 7 1 に濃い黄褐色(10R4/3)砂 しまりや中弱～中 粘性や中弱～中 炭人物 炭化物粒径φ 3mm 3%
 P 8 1 に濃い黄褐色(10R5/4)シルト質砂 しまりや中強 粘性中 炭人物 炭化物粒径φ 1～5mm 3%
 P 9 1 に濃い黄褐色(10R4/3)シルト質砂 しまり中～や中強 粘性中 炭人物 炭化物粒径φ 1～5mm 15%

第48表 SK I 25 柱穴一覽表

番号	長軸×短軸 (m)	平面形状	検出箇からの深さ (m)	底面標高 (m)	重量(目→斤)	備考
P 1	幅1.24	—	0.60	158.14	S 1 26→S 1 25 P 1	
P 2	幅0.22	—	0.60	158.16	S 1 26→S 1 25 P 2	
P 3	幅0.29	—	0.32	158.41	S 1 26→S 1 25 P 3	
P 4	幅0.80	—	0.38	158.54		
P 5	幅0.14	—	0.14	158.73		
P 6	幅0.22	—	0.44	158.82		
P 7	幅0.22	—	0.16	158.76		
P 8	幅0.41	—	0.30	158.70		
P 9	0.49×0.23	楕円形状	0.38	158.60		
P 10	0.64×0.59	不整形	0.38	158.66		
P 11	幅0.21	—	0.34	158.58		
P 12	幅0.29	—	0.48	157.54		



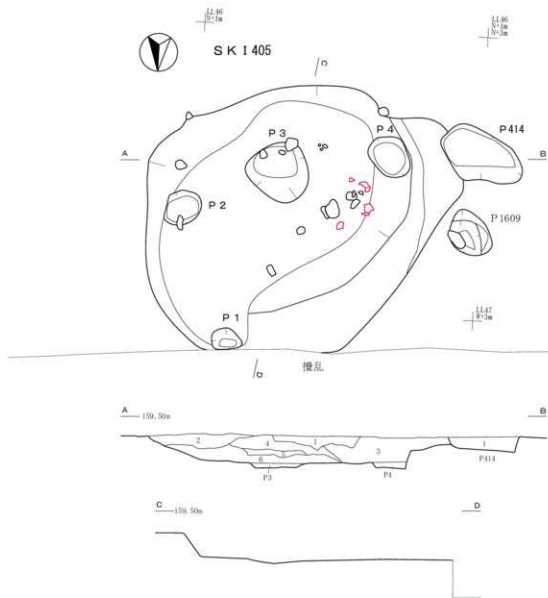
SK I 207

- 1 に濃い黄褐色～灰黄褐色(10R4/3～5/2)砂 しまり中
 粘性や中弱 炭人物 焼φ 50～300mm 10%
 2 黒褐色(10R2/2～3/2)砂 しまり中 粘性や中弱
 炭人物 焼土塊φ 16～20mm 少量
 3 埋灰黄～灰黄褐色(2.5R5/2～6/2)砂 しまり中 粘性や中弱

P 1059

- 1 黒褐色(10R2/2～3/2)砂 しまり中 粘性や中弱

第102図 SK I 25 (2)・207 壁穴建物跡、P 1059 柱穴様ビット



SK I 405

- 1 にぶい黄褐色(10YR5/3)砂 しまり強 粘性弱 混人物：炭化物粒φ1~2mm 1%未満、黒褐色土 10%
- 2 にぶい黄褐色(10YR4/3)砂 しまり強 粘性弱 混人物：炭化物粒φ1~5mm 3%、焼土塊φ5mm 1%未満、浅黄褐色土粒・塊φ1~10mm 10%、縦φ20mm 1%未満
- 3 にぶい黄褐色(10YR4/3)砂 しまり強 粘性弱 混人物：炭化物粒φ3~10mm 1%、浅黄褐色土塊φ5~15mm 5%
- 4 黒褐色(10YR2/2)砂 しまり強 粘性弱 混人物：炭化物粒・塊φ1~5mm 3%、浅黄褐色土塊状5~20mm 30%、縦φ20~100mm 10%、土器少量
- 5 にぶい黄褐色(10YR4/3)砂 しまり強 粘性弱 混人物：炭化物粒φ2~3mm 1%
- 6 灰黄褐色にぶい黄褐色(10YR5/2~6/3)砂 しまり強 粘性弱 混人物：炭化物粒φ2~3mm 1%未満、浅黄褐色土粒φ5mm 3%

P414

- 1 灰黄褐色(10YR4/2)砂 しまり強 粘性弱 混人物：炭化物粒φ1~2mm 1%未満、洪水堆積土塊φ5~20mm 5%

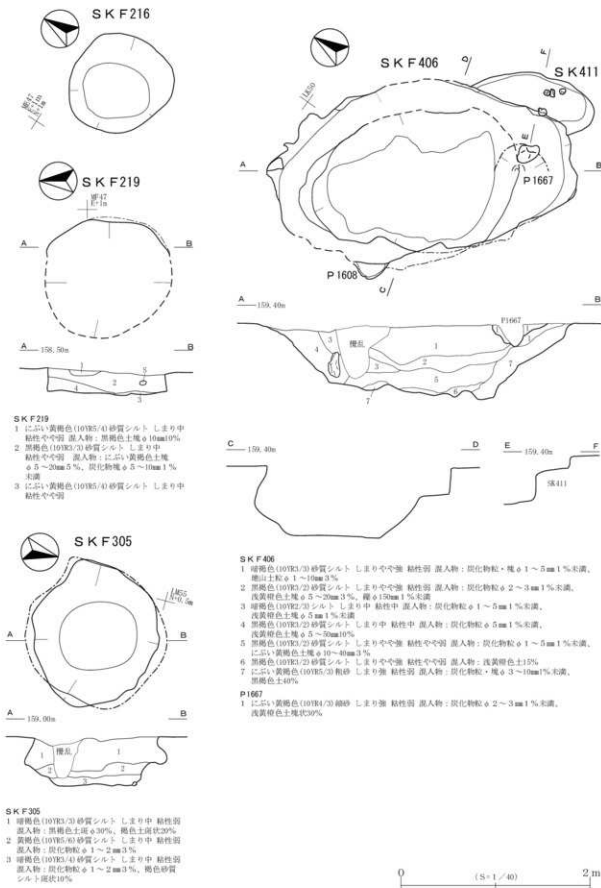
第49表 SK I 405 柱穴一覧表

番号	長軸×短軸 (m)	平面形状	発出部からの深さ (m)	底面標高 (m)	重複(旧→新)	備考
P-1	0.32×0.24	小楕円形	0.16	158.878		
P-2	0.40×0.36	略円形	0.10	158.924		縦。
P-3	0.64×0.56	略円形	0.15	158.940		縦。
P-4	0.49×0.38	楕円形	0.29	158.845		

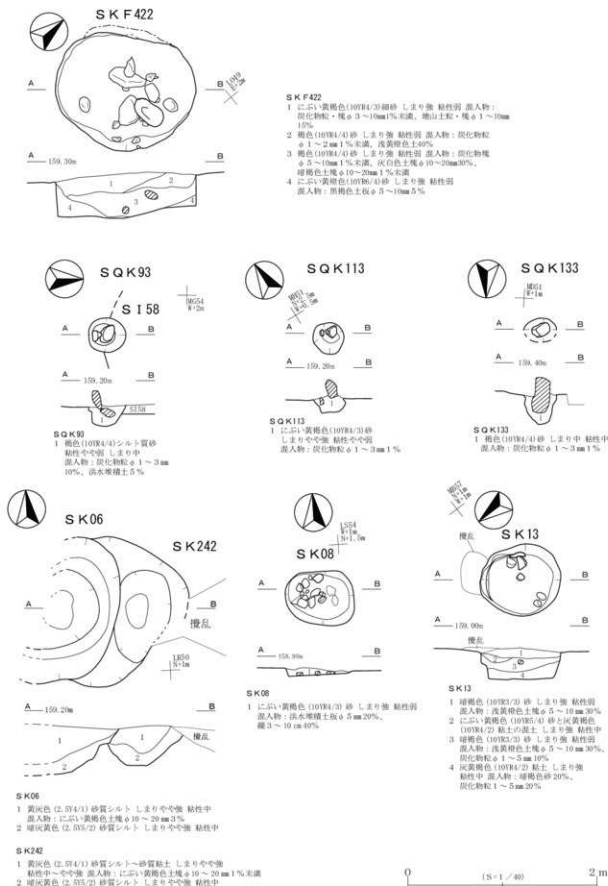
※ [] 内の数字は推定値、() 内の数字は残存値を示す。



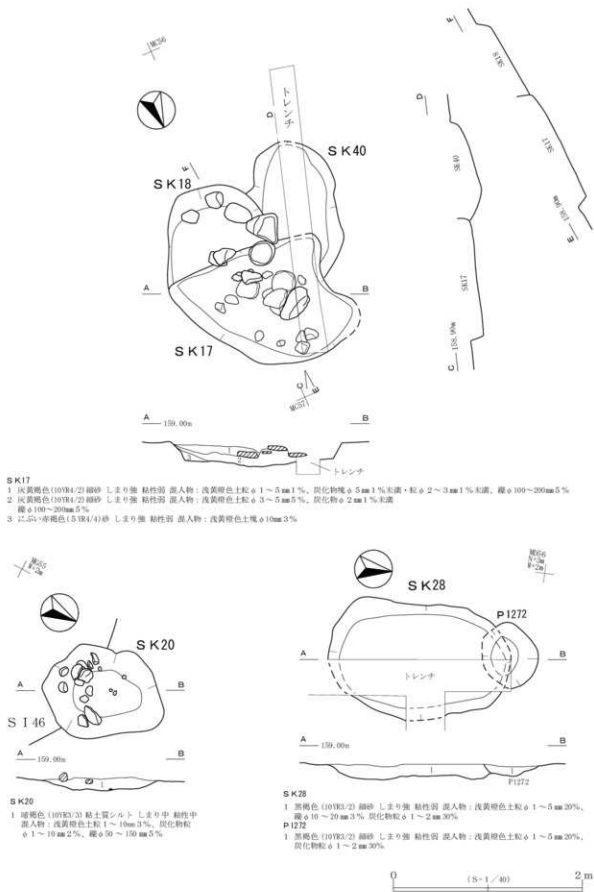
第103図 SK I 405 竪穴建物跡、P414 柱穴樫ビット



第 104 図 SK F216・219・305・406 フラスコ状土坑、SK 411 土坑、P 1667 柱穴樫ビット

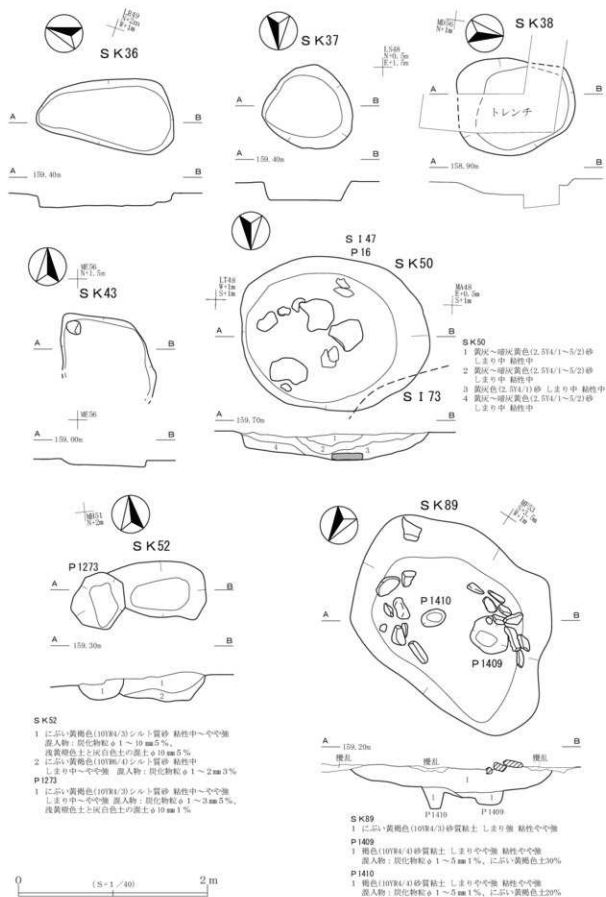


第 105 図 SK F 422 フラスコ状土坑、SQ K 93・113・133 配石土坑、SK 06・08・13・242 土坑

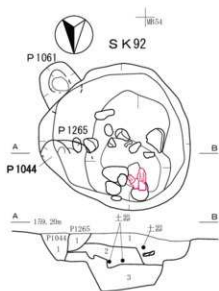


第 106 図 SK17・18・20・28・40 土坑、P1272 柱穴横ビット

第3章 調査の方法と成果



第 107 図 SK36・37・38・43・50・52・89 土坑、P1273・P1409・P1410 柱六横ビット

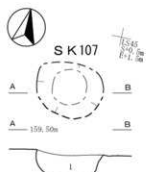


SK92

- 1 褐～暗褐色(10YR4/4~3/4)砂 しまり強 粘性中 混人物：礫 ϕ 20mm 1%、炭化物粒 ϕ 2mm・塊 ϕ 5mm 1%、土部少量
- 2 黒褐色(10YR3/2)砂 しまり強 粘性中 混人物：浅黄褐色土20%
- 3 にぶい黄褐色(10YR5/4)砂 しまり強 粘性中 混人物：土部少量

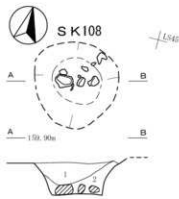
P1044・1265

- 1 暗褐色(10YR3/4)砂 しまり強 粘性弱 混人物：炭化物粒 ϕ 3mm 1%未満



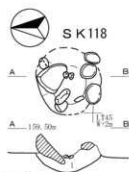
SK107

- 1 暗褐色・にぶい黄褐色(10YR3/3・4/3)砂 しまり中 粘性やや弱



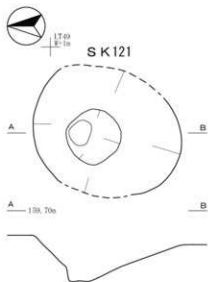
SK108

- 1 灰褐～灰褐色(10YR6/2~2.5Y6/2)砂 しまりやや強 粘性やや弱
- 2 黒褐・灰褐色(10YR3/1・6/2)砂～砂質シルト しまりやや強 粘性やや弱



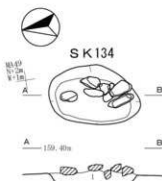
SK118

- 1 黒褐色(10YR3/1~2.5Y3/2)砂 しまり中 粘性中



SK121

A 1.99, 70m

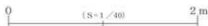


SK134

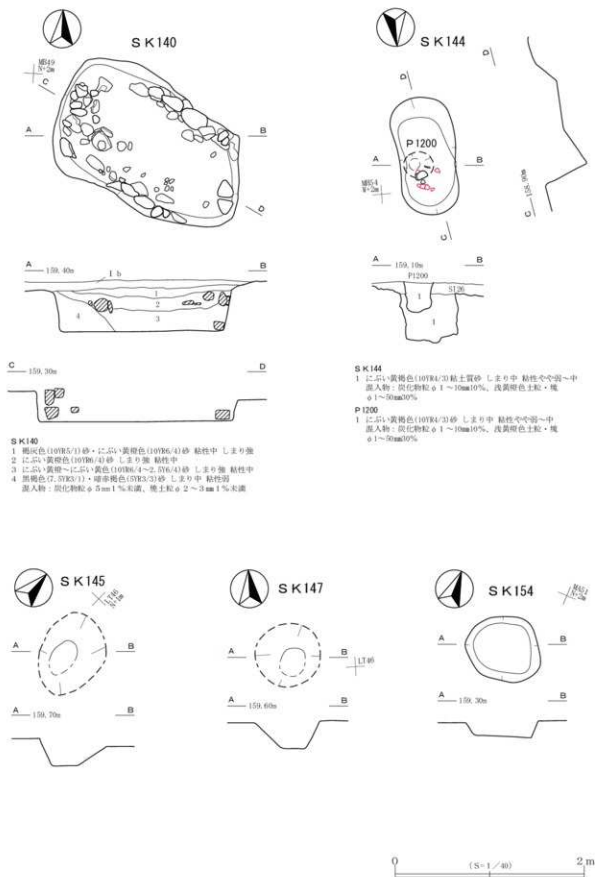
A 1.59, 40m

SK134

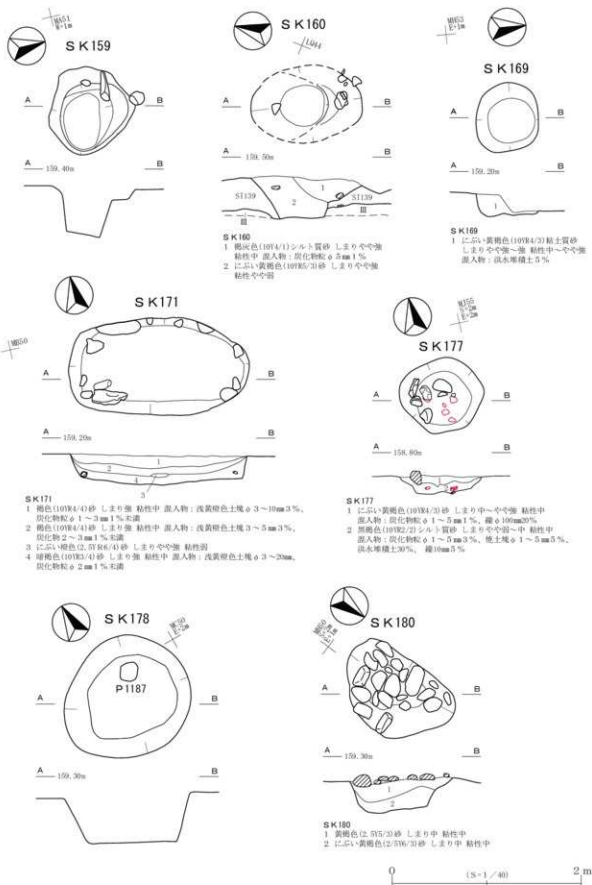
- 1 暗灰色(10YR4/1~5/1)砂質シルト 粘性やや弱 しまり中



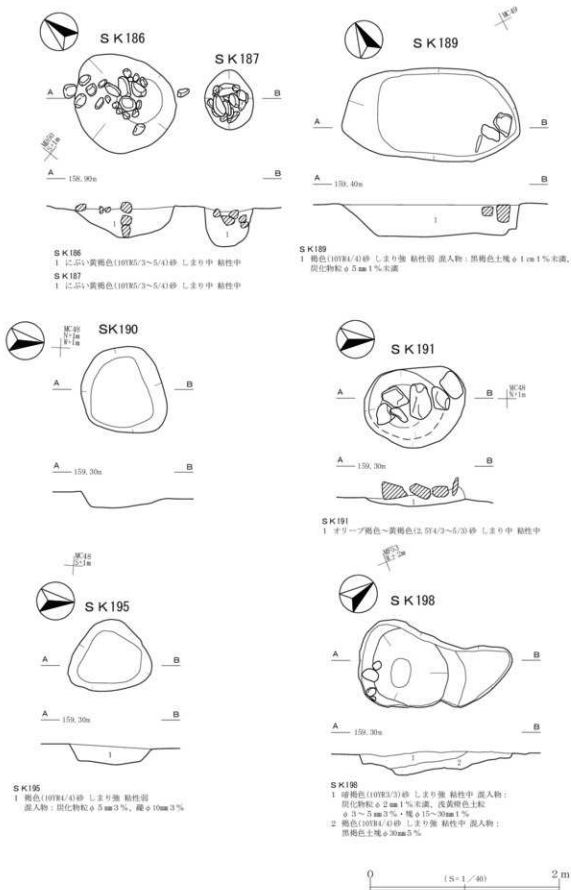
第108図 SK92・107・108・118・121・134土坑、P1044・P1061・1265柱穴様ビット



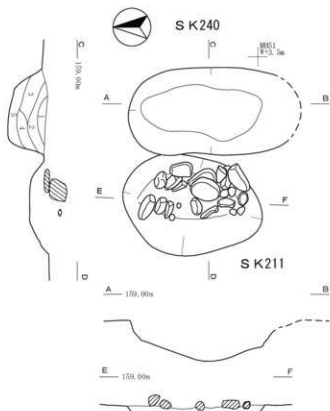
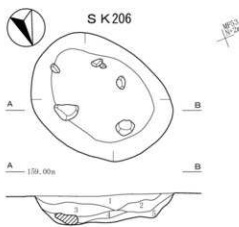
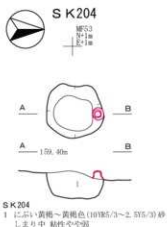
第 109 図 SK140・144・145・147・154 土坑、P1200 柱穴様ビット



第 110 図 SK 159・160・169・171・177・178・180 土坑



第111図 SK186・187・189・190・191・195・198土坑

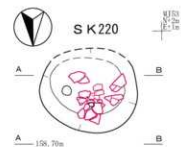


SK211
 1 黄灰～黄褐色(2.5Y4/3～5/3)シルト質砂 しまり強 粘性中

- SK240**
 1 灰黄褐色(10YR5/2)砂～シルト質砂 しまり強 粘性中
 混入物：炭化物粒φ3～5mm1%未満
 2 暗灰黄～灰黄色(2.5Y5/2～6/2)砂～シルト質砂
 3 灰黄褐色(10YR5/2)砂～シルト質砂 しまり強 粘性中
 4 灰黄褐色(10YR5/2)砂～シルト質砂 しまり強 粘性中
 混入物：炭化物粒φ3～10mm15%、褐色粘土塊φ10mm1%
 5 黒褐色(2.5Y2/1)砂～シルト質砂 しまり強 粘性中
 混入物：炭化物粒φ3～5mm5%



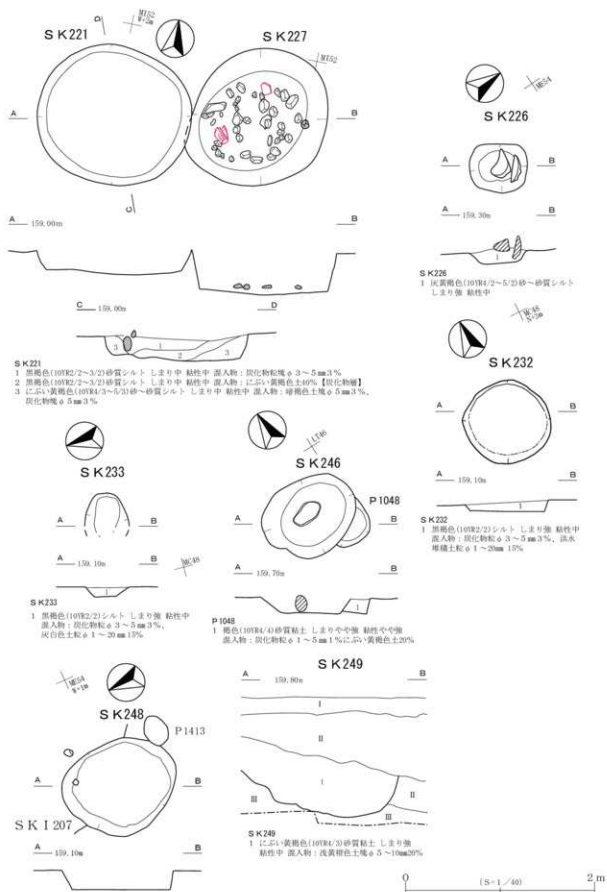
- SK214**
 1 にふい・黄褐色(2.5Y6/3～6/4)砂 しまり中 粘性やや弱
 2 暗灰黄～にふい・黄褐色(2.5Y5/2～6/3)砂～砂質シルト
 しまり中 粘性中



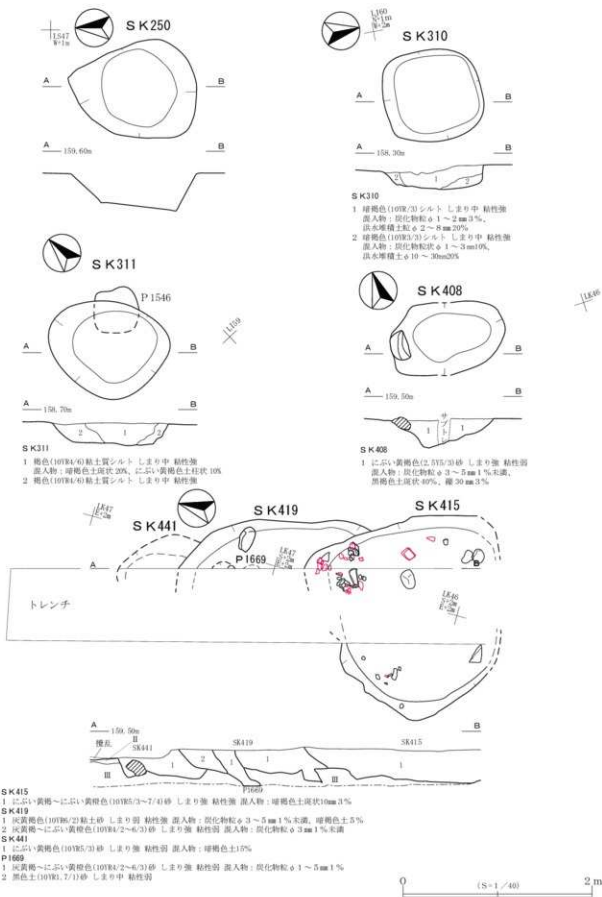
- SK220**
 1 にふい・黄褐色(10YR4/3)砂 しまりやや弱 粘性やや弱
 混入物：炭化物粒φ1～10mm3%、浅黄褐色土10%
 2 褐色(10YR4/4)砂 しまり中 粘性やや弱



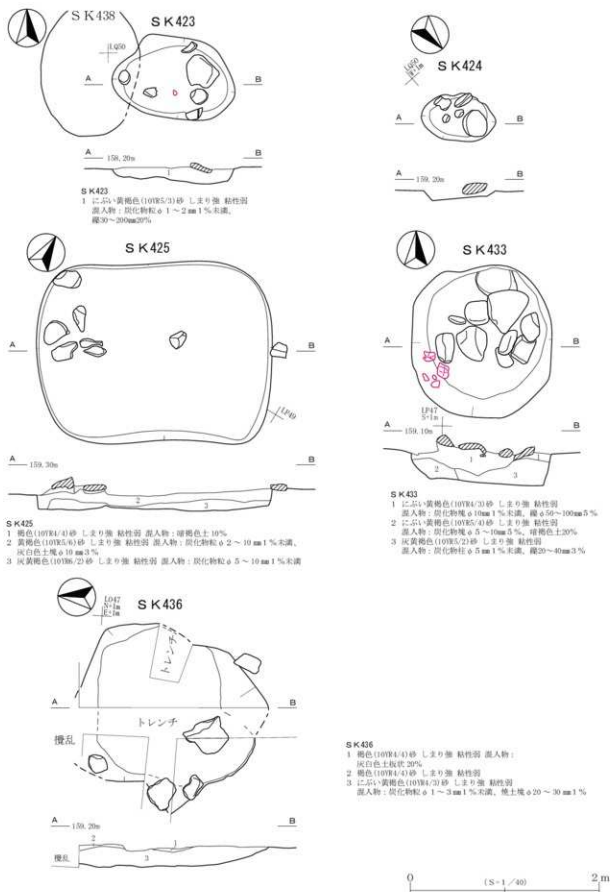
第 112 図 S K 204・206・211・214・220・240 土坑



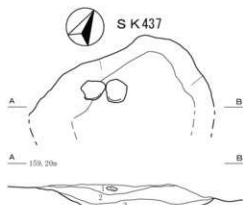
第 113 図 S K 221・226・227・232・233・246・248・249 土坑、P 1048 柱穴横ビット



第114図 SK250・310・311・408・415・419・441土坑、P1669柱穴様ビット

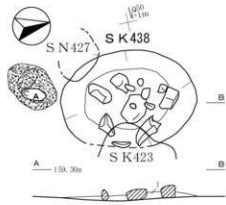


第 115 図 SK423・424・425・433・436 土坑



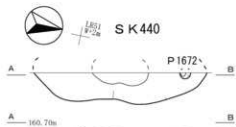
S K 437

- 1 黒色(10YR4/4)砂 しまり強 粘性弱 混人物：炭化物粒φ3~5mm 1%未満、浅黄褐色土塊φ3~5mm 1%未満、礫φ30~50mm 10%
- 2 に近い黄褐色(10YR6/4)砂 しまり強 粘性弱 混人物：炭化物粒φ2~3mm 1%未満
- 3 に近い黄褐色(10YR7/4)砂 しまり強 粘性弱 混人物：炭化物粒φ3~5mm 1%未満、塊土塊φ5mm 1%、埴褐色土塊10%



S K 438

- 1 褐色(10YR4/4)砂 しまり強 粘性弱 混人物：炭化物粒φ2~3mm 1%、埴褐色土塊φ10mm 20%

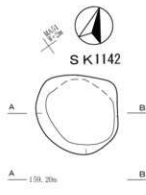


S K 440

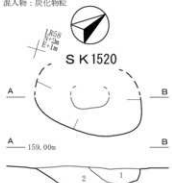
- 1 黒褐色(10YR2/2)シルト しまりやや強 粘性中 混人物：炭化物粒φ3~5mm 1%未満、浅黄褐色土塊φ3~5mm 5%
- 2 暗褐色(10YR2/2)シルト しまりやや強 粘性中 混人物：炭化物粒φ3mm 1%未満、塊土塊φ5mm 1%未満、浅黄褐色土塊φ5~10mm 10%
- 3 黒褐色(10YR2/2)シルト しまりやや強 粘性中 混人物：炭化物粒φ3~5mm 1%未満
- 4 黒褐色(10YR3/2)シルト質砂 しまり強 粘性弱 混人物：炭化物塊φ10mm 1%未満、浅黄褐色土塊φ5~10mm 5%

P1672

- 1 黒褐色(10YR2/2)シルト しまりやや強 粘性中 混人物：炭化物粒φ3~5mm 1%未満

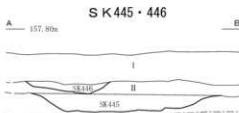


S K 1142



S K 1520

- 1 埴褐色(10YR3/2)粘土質シルト しまり中 粘性中 混人物：炭化物粒φ1~2mm 5%、浅黄褐色土塊φ10~30mm 10%
- 2 黒褐色(10YR2/2)粘土質シルト しまり中 粘性強 混人物：炭化物粒φ1~3mm 5%



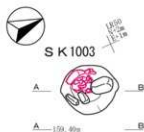
S K 445・446

S K 445

- 1 に近い黄褐色(10YR7/4)砂質シルト しまりやや強 粘性やや弱 混人物：炭化物粒φ2~3mm 1%未満

S K 446

- 1 に近い黄褐色(10YR4/3)粘土質砂 しまり強 粘性中 混人物：砂40%、浅黄褐色土塊φ10mm 1%未満、炭化物粒φ1mm 1%未満



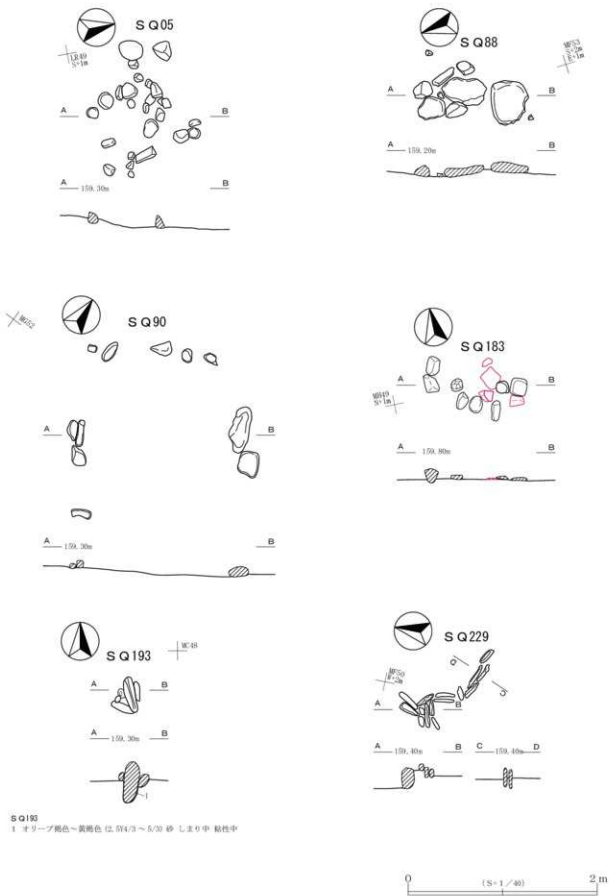
S K 1003

S K 1003

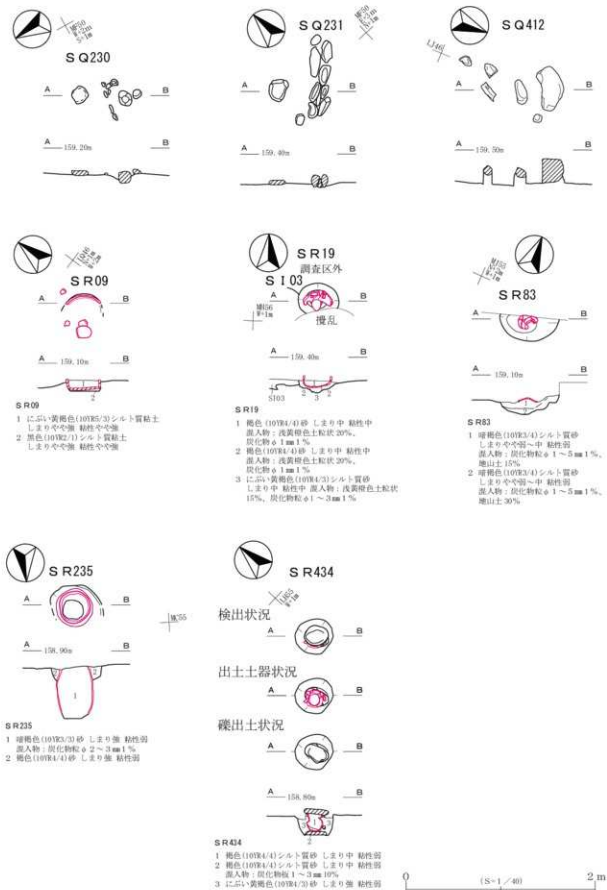
- 1 黄灰色(2.5Y4/1)砂質シルト しまりやや強 粘性中 混人物：浅黄褐色土塊φ10~20mm 3%
- 2 黄灰色(2.5Y4/1)砂質シルト~砂質粘土 しまりやや強 粘性中~やや強 混人物：浅黄褐色土塊φ10~20mm 1%未満



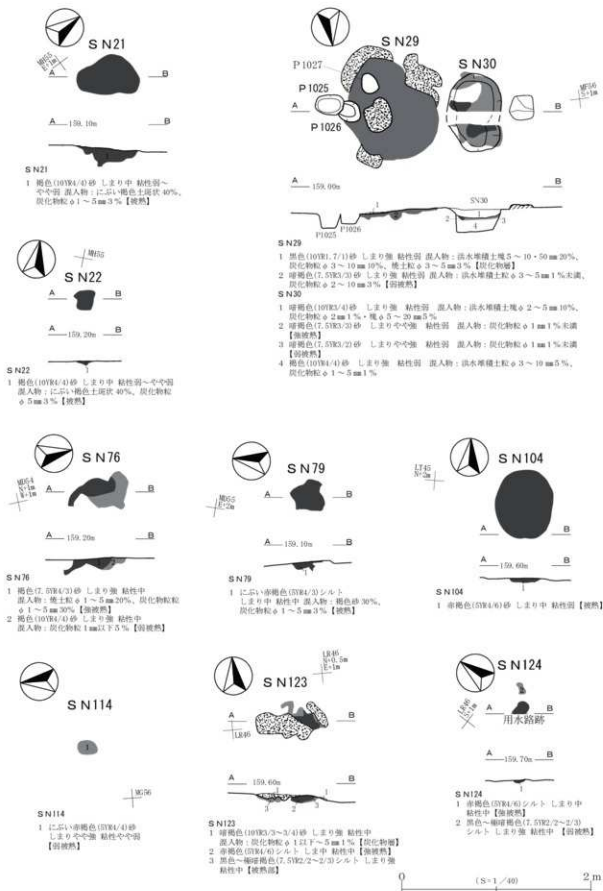
第116図 S K437・438・440・1003・1142・1520土坑、P1672柱穴様ビット



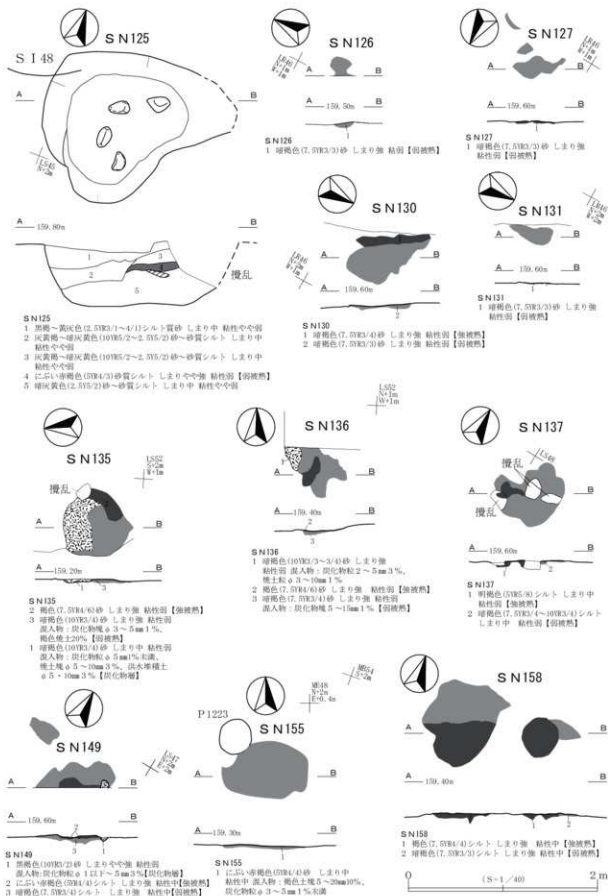
第117図 SQ05・88・90・183・193・229 配石遺構



第118図 S Q230・231・412 配石遺構、S R09・19・83・235・434 土器埋設遺構



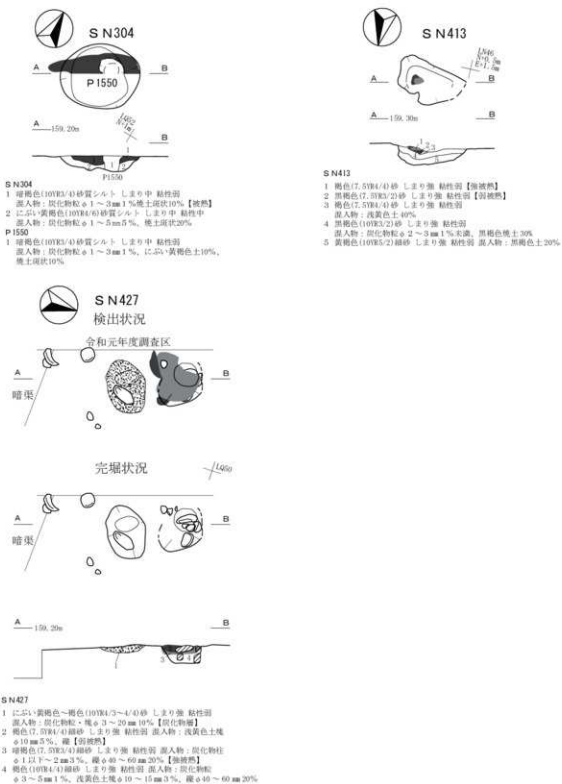
第119図 SN21・22・29・30・76・79・104・114・123・124 焼土遺構、P1025・1026 柱穴様ピット



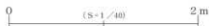
第120図 SN125・126・127・130・131・135・136・137・149・155・158 焼土遺構

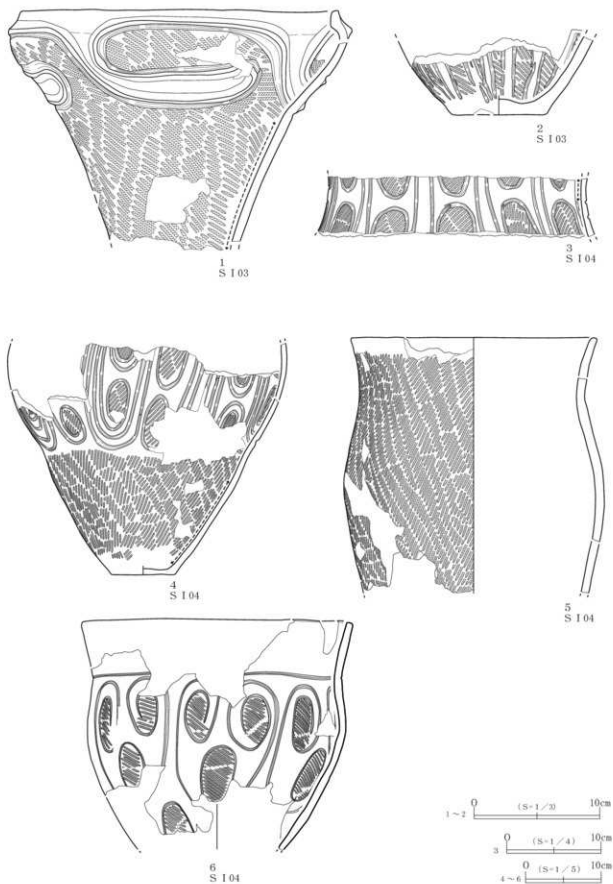


第121図 SN162・167・173・174・181・208・217 焼土遺構、P1267、P1274 柱穴様ピット

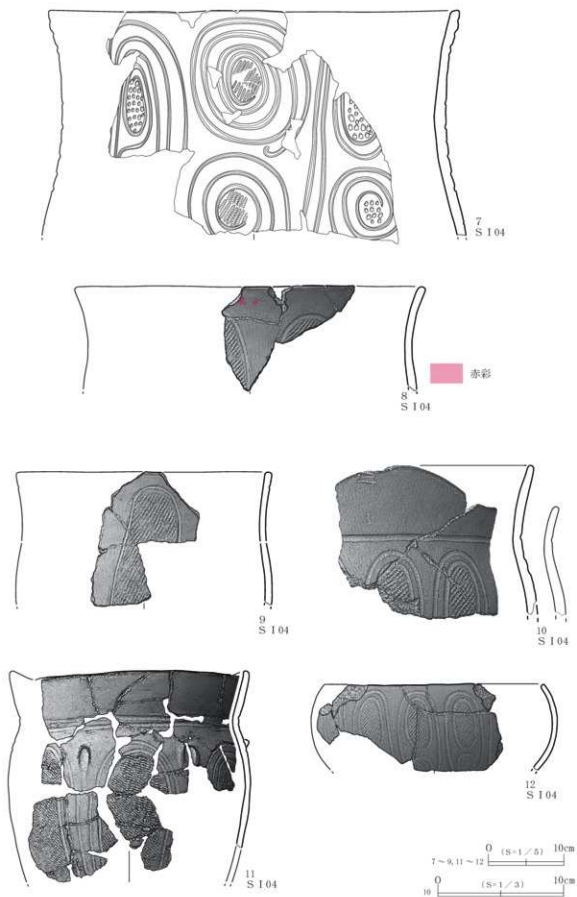


第122図 S N304・413・427 焼土遺構、P1550 柱穴様ビット

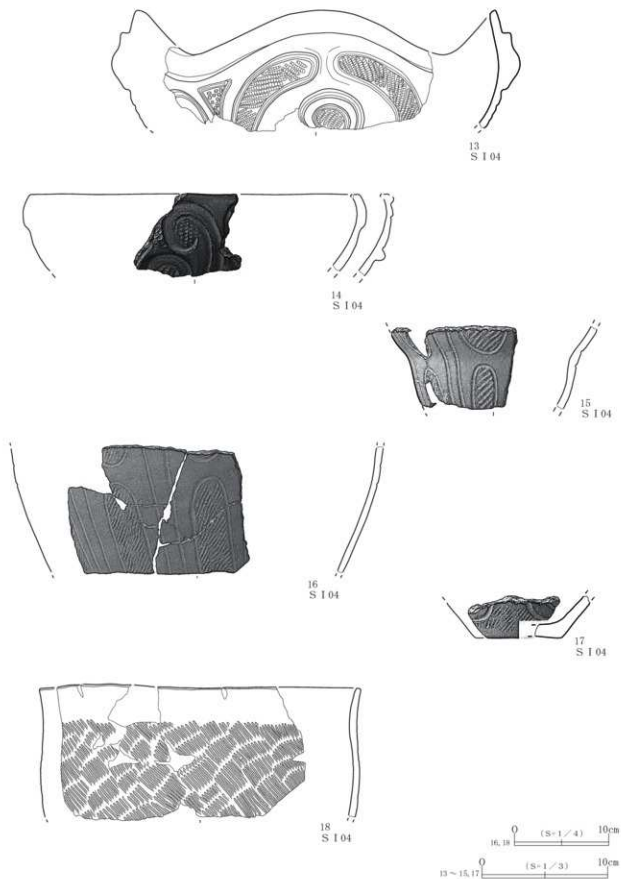




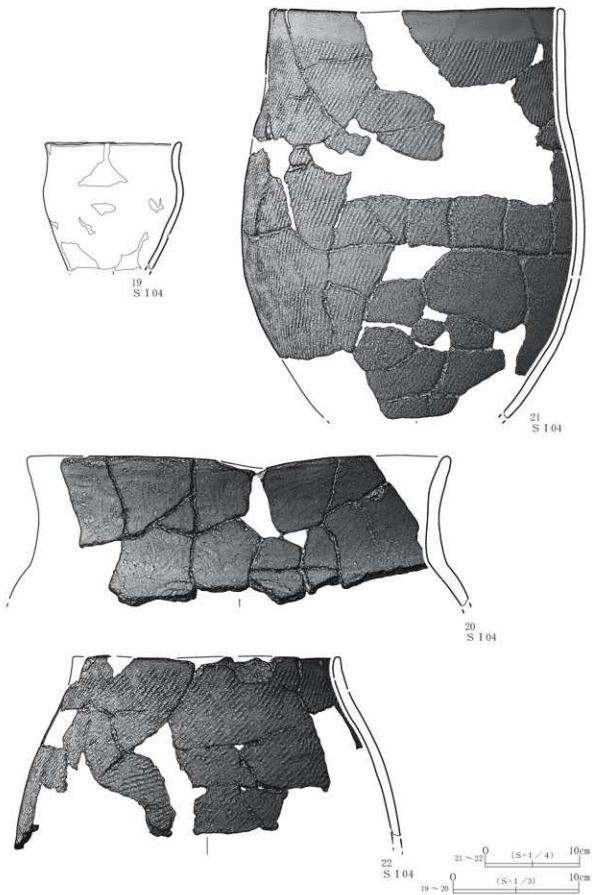
第123図 遺構内出土土器(1)



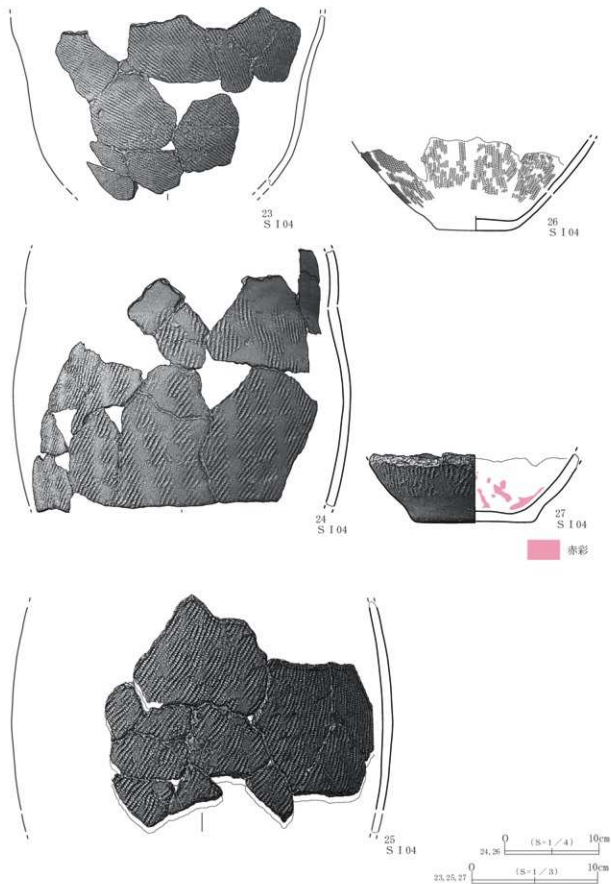
第124図 遺構内出土土器(2)



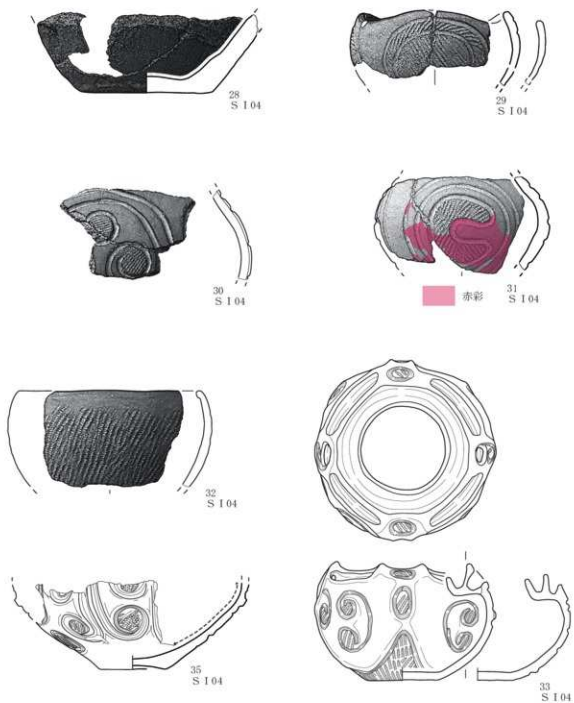
第 125 図 遺構内出土土器 (3)



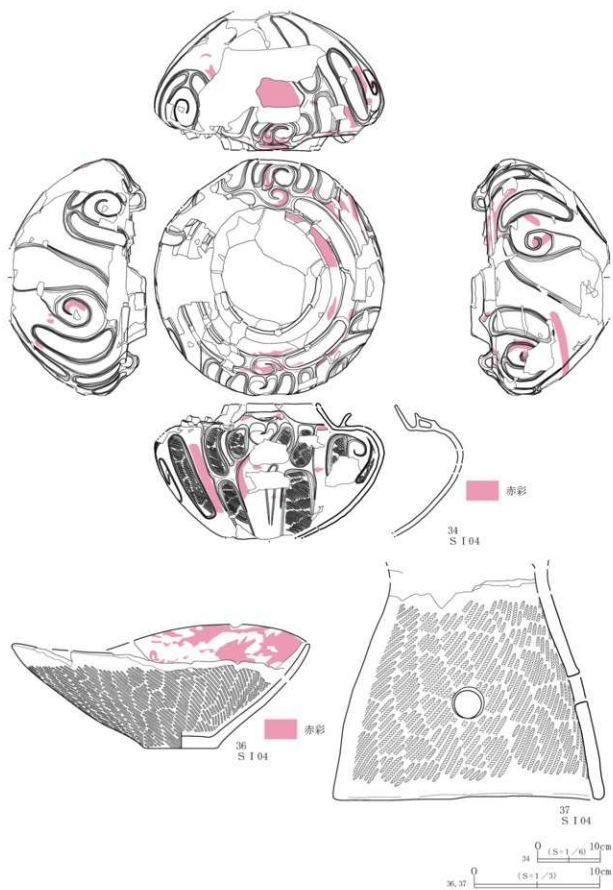
第 126 図 遺構内出土土器 (4)



第 127 図 遺構内出土土器 (5)



第128図 遺構内出土土器(6)



第 129 図 遺構内出土土器 (7)